恋姫世界で二人旅

ものぐさ兄さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋姫世界で二人旅

【Ｎコード】
Ｎ５６９７Ｘ

【作者名】
ものぐさ兄さん

【あらすじ】
大谷　保と上尾（おおたにたもつ）　司二人（あげおつかさ）が自称神に叩き起こされると見知らぬ空間、自称神は俺達の腐った精神を叩きなおす為過酷な異世界で修業して反省しろと。三国志世界いけるならラッキーと修行ではなくバカンス気分な二人、普段から悪ふざけしかしない二人は恋姫世界に転生したが、そこでも悪ふざけをし生きながらえる事が出来るのか？

プロローグ（前書き）

はじめましてものぐさ兄さんと申します、思い付きで真・恋姫†無双の二次創作をはじめてしまいました。処女作だからとはいえ、どうしようもない駄文です。読まれる方は生温かい目で見守ってください。

プロローグ

老人『起きなさい』

グースカ寝ている二人組の男を起こそうと声をかけるいかにも仙人という恰好な老人。

男性A、B「「グースカピー」」

老人の呼び掛け等何処吹く風というように寝ている二人

老『起きなさい二人共』

先程より大きい声で、念のため耳元で声掛ける老人

「「ウウーン・・・・、グースカ」」

怒鳴り声の五月蠅さに一瞬魘されるがすぐに熟睡し続ける二人

『先程から何度も呼びかけているが起きないならやむを得ないな。』

ポトッ、老人が懐から取り出したスポイトで水を一人の男の耳に垂らす

寝耳に水という諺が出来る位であり驚きで簡単に目が覚める男

「うひゃぁあっっ！」

『やっと起きたな、それにしても大袈裟な。』

「おい、このクソジジイ、寝ている人間の耳に水垂らして人を起こしやがって！」

今にも掴みかからんとばかりに鼻息荒く怒っている男、それにたいし老人は慌てるでもなくゆっくりと話をする。

『寝起きなのに何されたかよく分かったな。』

「今までさんざん人にやってきたから。」

『何でそんな強気に話すんだ恥じるべきで自慢することでないのに、まあいい、そんな駄目なお前さんを起こしたのは話があってな。』

「俺が駄目なのは自分の事だから分かる、だが他人に言われたくないぞ、あんた誰だよ！？」

最悪な起こされ方にイラつき全身から殺気を放ちながら話をする男

『私は世間一般で言う神で、君達は今朝死んだんだよ、大谷　保君、横で寝ている上尾　司君を起こして、そして教えてあげなさい。』

「はいっ・・・！？」

自称神、更に自分が死んでいるという発言に固まる大谷　保であった。

―大谷―

大谷が固まってから数秒が経過、とりあえず周りを見渡し、先程まで怒っていた思考に対し、
落ちつけ今どんな状態だ?と脳を動かし始めようとする。

“此処は何処だ?あとなんで司と俺はこんな所で寝ているんだ?それと誰だ俺が死んだ、とか、
神だとかいう危ないジジイは?”

周りを見渡すと真っ白な部屋、壁が見当たらず真っ白な天井と床が地の果てまで続いている、
たぶん自分がいるのはそんな部屋の真ん中であるとなんとなくわかる。

『危ないジジイとは失礼な、先程も言ったが私は神だぞ、あと此処はあの世とこの世の境とでも言えばいいかな。』

目の前のジジイに思考を読まれている、自分の理解を超えている事態に頭が混乱する、
とりあえずは横で寝ている友人の肩を激しくゆすりながら声をかける。

「司、起きろ、司、なんか変な事が起きているぞ。」

司と呼ばれる男の肩をゆすり声をかける、起こし方にコツがあるのか神が声掛けたときと違い目を覚ます。

司「むわあ、・・・おはよう」

大口を開けてあくびをしながら司が挨拶をする、自分みたいに驚かされて起きたわけでないからハッキリ目を覚ましてもらうまで時間

が少しかかるなと思い、その間考え事をする。

自分の姿を見てみると、いつものダブルのスーツにネクタイ、足元には愛用のブランドのスーツケースが転がっている、息が酒臭い。

自分の恰好を見て、少しずつだがいろいろ思い出してくる。

“誕生日に出張が入り一人地方のホテルで寝泊まりは寂しいから、と、司に電話で愚痴ったら、
明日東京に帰ってきたら野郎二人と絵面は良くないが飲みに行こうと誘われた。”

“そうだ、司が人気の焼鳥屋をわざわざ抑えてくれてそこで飲んで、明日は休みだし二次会、三次会と吐くまで行くぞとなって。”

少しずつだが前日までの記憶を思い出していく、思い出すため頭をひねる自分の姿を見て、
よしよし思い出してるなとでも言いたいのかうんうんとうなずいている自称神

“ただ、そこから先が思い出せない、それで寝ていたら見知らぬ自称神という、
危ないジジイに驚かされ、しかも、俺らは死んだと言われた。”

二日酔いでガンガンする状態なのに、怒鳴ったり考え事したりと脳を必死に動かしたため、
頭痛が悪化、気分が悪くなってくる、ならばと今は考えるよりも吐くことにした。

『若造に危ないジジイ呼ばわりされるのも癪だし、二日酔いでは話

にならないし、
目の前で吐かれるのは嫌だから二日酔いを治してやる。』

ひとり言のように俺に向かって何かつぶやいた後、神の右手が俺の肩を触れた瞬間に、
溜まっていた気分の悪さとか一気に無くなる、ちょうどその時寝ぼけていた司も意識を覚ました模様。

―司―

友人であり先輩な保さんが誕生日が出張先で孤独、と電話で愚痴っていたので、
昨晩二人で飯を食いに行って何件もはしご酒してからの記憶がない。

「そして自分が保さんに起こされ目の前には仙人姿の変なじいさん、保さんはじいさんを神様だという、わけわからん・・・???」

とりあえず保さんが自分を担ごうとしているのでは?と思う。

「保さんの悪戯でしょ、昔、自分が目を覚ましたら車のトランクに閉じ込められていた、
なんて事がありましたし、この変な場所に自分がいるのも悪戯でしょ。」

「司さんよぉ。俺はあまり面倒なことはやらないぞ、だいたいトランクの時は、
お前さんはお返しに俺を騙してアーーっな人専用のサウナに連れて行ったろ、
危うく尻に惨劇が?と、無事だったがあの時は生きた心地がしなか

ったぞ。」

「３０過ぎの保さんが怯えて泣き入っていたのは笑わせていただきましたよ、まあ本物の人に「貴方転向したらモテるのに」と上目遣いで言われたら怯えますか普通は。」

昔の事を思い出しニヤリと笑う、「保の悪戯は洒落にならないが司のはそれどころでない」と友人達によく言われているそうで、大袈裟な。

とりあえず保さんが言うには目の前の爺さんは神様ということらしい、昔ＪＲ上野駅周辺にいた「俺は暗殺拳の使い手だ」と言っていたおっさんと同じタイプだ！という結論に行きつく自分は。

とりあえず、そういうタイプの人は話を否定すると危ないから優しく話を聞いてあげよう。

―神―

『上尾　司、君もなかなかいい根性しているねえ。』

見知らぬ人間が自分の名前を知っている、それと思考を読まれた事に驚いているようだな、

ただ、まだまだわしが神だと納得はしていないようだが。

『そちらの男と違って二日酔いではないから治してやれないが、神

だと証明してやろう。』

そういってワシは右手をパチンと鳴らした。

その瞬間、辺りは真っ暗になり彼らの目の前に立体映像が流れはじめる。

何店回ったのだろうが太陽が昇りはじめる早朝の東京、そこに酔ってフラフラな二人が歩いている。

酔っ払い二人は大通りの向かいに止まっている空車のタクシーを見つけ、
フラフラな酔っ払いのくせに妙に機敏な動きで道路に飛び出す、
運悪くそこにトラックがきて、そして二人は跳ねられたあとピクリともしていない。

二人とも下を向いて肩が震えている、いくら事実とはいえ、
自分が死んだ映像を見させられたら流石に落ち込むのも仕方無いかと。

「「なんでこんな中途半端な死に方なんだ！もっと面白く死ねよ俺！」」

ワシはあまりに今までのワシが知っている人間達と考えが違うことにポカンとしてしまった。

―保―

「驚いているようだが何を驚いている、どうせ人間は死ぬのだから、ならばダーウィンアワードで表彰されるような間抜けな人の記憶に残る死に方をしないと。」

ただまあ、この映像を見て司も爺さんが神だという事には納得したようだ、とりあえず話を進める。

「俺ら二人に用があって忙しい神である貴方がわざわざ俺らの前に現れたのは何の用だ？
偶然はないだろう地球には６６億人以上いて毎日阿呆みたいに人が死んでいるのだから、
用もなければ確率的に俺らの前には現れないだろ？」

『少しはキレる頭はあるようだな、簡単な事だお前さん達に説教をしようと思ってな。』

「「説教？」」

見事にハモる二人

自分達二人の家は先祖代々問題児が多いらしく特に酷いのが現れると、
その度に神が呼び出して反省の為異世界に送り更生するように修行させると。

まあ俺も司の実家も家柄というか歴史的には大変由緒正しいのだが、家柄と反比例するかのように先祖にろくな人間がいないのが特徴で。

だが、そんなろくでもない人間が急に真人間になったという伝説が何個もあった。

母方のひい爺さんなんか、とある地方の寺全てをまとめる大物だったのだが、
生臭坊主で数え切れないほどの愛人と隠し子が日本中にいた糞坊主だったり。

父方の先祖ならば水戸黄門の悪役商人のように、お偉方と結託して相当荒稼ぎした豪商とか、
とか最盛期の頃は世間的に自慢出来ないような後ろ暗い素敵な人間が大層多いのが。

司の先祖にしても、趣味が辻斬りなんて大変愉快で素敵な趣味を持つ武士がいたり、と。

たしかにろくでもない先祖、しかも、ある日を境に急に真人間になったなんて
普通ではありえない言い伝えが何個も伝えられているのだから。

神が言うには俺ら二人は歴代の先祖のように目に見えて方に触れる悪い事はしないが、
己の人生や才能の無駄遣い、悪ふざけが酷いから精神を叩き直そうと修行の旅に。

正直余計なお世話である、だいたい悪ふざけが酷いとか大袈裟である。

ハロウィーンでコスプレする際に悪魔のいけにえのレザーフェイスのコスプレを頑張ってやったら、
チェーンソー片手に持った不審者がいると近隣から通報されたりしたくらいで私ならば。

司にしても、高校時代に一学期はオール5、二学期はオール1、三学期はオール5とかやって、
担任の胃に何度も穴を開けかけたりしただけである。

とりあえず、私的にはやましい事をしていないので素直に神に、

「悪い点があれば反省したい所存でございます、ただ当方としましては説教されるような謂れは一切御座いません。」

証人喚問中の国会議員のようにコメントをする。

そんな私の発言をたしなめたるつもりか司は罪を認める、ただ・・・。

「恥の多い人生を歩んできました反省したいのですが心当たりがありすぎまして、
今回は一体どの件についてでしょうか?」

どうやらこれらの発言が神に止めを刺したらしい、神の両肩がプルプルして、そして噴火。

『それら全てだ〜〜!!』

男塾の江田島平八ばりの大音量に気絶しかける二人。

ー神ー

“駄目だ、こいつ等は既に手遅れだ、だが、こちらも神として意地

がある更生させる。”

とりあえず二人には反省の旅に出てもらうしかないな！

『お前ら二人は生きる事を舐めすぎている、命の無駄遣いをしている、神への尊敬もない、
だから今から罰としてお前ら二人を過酷な異世界へ送りつけてやる。』

『お前らがその世界で更生し更に偉業を成し遂げるなどといった結果を出したなら、
お前達の死は無かった事にして世界に戻してやる、もし嫌だと言うならば、
あの世送りにしてやるぞ、そうなるといつ人間に輪廻転生出来るか分からないぞ。』

此処まで脅せばいいだろう、神の怖さを認識したなこの二人でも、
まあ更生したら偉業は達成しなくても元の世界に蘇らせてやろう、
懐の広さを見せつけてやるか。

まだワシは二人が予想を覆す人間であることを認識出来ていなかったのであった・・・・。

―司―

「あの世送りにしてもらえますか特に現世に未練ないですし、あの世はあの世で楽しそうですし。」

自分の発言に対し、保先輩も考え始め、そして口を開く

「そうだなあの世送りもいいな、落語の地獄八景であったが冷静に考えたらあの世いいかも、
好きな音楽家や落語家、司の好きな歌舞伎とか歴代の名人天才は皆いるんだから、
辛い異世界で修行するよりもあの世ライフを満喫した方が楽しいな。」

神と言っていた爺さんが口をあんぐりと開けて固まっている。

「自分達二人が生に執着すると思っていたのだろうか？神を名乗るくせに頭が悪い。」

吐き捨てるように神に言うことにした。

神が震えだす、人間よりもはるかに偉いはずなのに、万物の主なはずなのに遂に泣きつき始めた。

『お願いだから異世界に行ってください、異世界は異世界で大変な事になっていて、
そのための手段で君達を送るつもりだったの、助けてください！！！』

土下座からの足に縋りつき、そして泣き落とし、神にプライドは無いのだろうか？

『お願いします、助けてください色々と力を上げたりとか優遇しますから。』

“神大丈夫なのか、そんな事をして世界のバランスは崩れないのだろうか？
大体それでは修行にならないのではないか？”

とはいえ、さすがに宇宙で一番偉いはずの神が私たちの足元で、
涙と鼻水で顔をグシャグシャにして泣きついている姿を見るのは忍びない気持ちになる。

保さんの顔を見ると仕方ないなという感じの顔つきになっている、
保さんも自分と同じ意見なのがわかる。

「顔をあげてください、そして泣きやんでくださいよ、そこまで頼まれましたら、
幾らふざけてばかりいる自分達とはいえわかりましたから。」

顔をあげた神が笑顔になる、二人は口をそろえて神に思いを伝える。

「「だが断る！」」

時が止まる、どうやらトドメを刺してしまったようである・・・・。

－保－

”だが断る、効果のある一撃として使いたいと思ったがここまで威力があるとは”

神がエグエグと泣きながら体育座りで左の人差し指で地面にのの字を書いている。

“ぶっちゃけ気持ち悪い絵面だ、女の子ならまだしもいじけているジジイなど絵にならない。”

このままでは日が暮れると思う、真っ白い空間で日が昇るも暮れるもへったくれもないんだが。

「俺も司も悪ふざけや悪戯はひどいが弱い者虐めは嫌いだから、暇つぶしも兼ねて行ってやるよその異世界へ修業に。」

『嘘だ！！！！！！』

神が壊れた、まさかジジイが鉈女みたいになるとは、完全に人間不信になっている、
誰だ！？とても偉い神様をこんな風にしたのは。

とりあえず説得をする、散々宥めすかしたらなんとか落ち着いた模様、
ヤクザの交渉術である7殴って3抱きしめる、この比率でいくやり方がまさか神にも通じるとは。

どうやら俺達が修行に行く世界は色々あるようで本来は神が勝手に行き先を決め、
神の代理として戦争の鎮圧だとかさせられるのだが、今回は俺達に選ばせてくれるとおかしな成行きに。

トロイアやら三国志、戦国時代、３０年戦争とか色々ある、面白そうな戦国時代か三国志で悩んだが、

日本の戦国時代だと殺した人間が自分の先祖とかだと後の自分に影響があったら怖いので三国志に。

三国志に行けるなんて楽しみだけでもうお腹一杯という状況なのに、なんか気を良くした神が俺達に更に能力とか望む物をくれると言いだすしまつ。

最初から最強は面白くないので自分の努力次第でもしかしたら最強になるかも?という事で限界突破。

あと病気とかつまらない死に方したくないからとにかく健康、
あとは三国志の時代ならば空気を読んで銃や車はやめて時代に合った武器とか馬が欲しいと。

『努力しないでも望めば最初からフリーザくらいの戦闘力にはなれますよ、
それなら異世界修行の旅もあっという間に終わりますよ。』

俺らの精神を叩きなおす修行で行かされるはずなんだが、神がおかしなことを言っている、
なんで神がこんな壊れてしまったのだろうか・・・・。

『成長限界突破でも鍛え抜けば武なら範馬勇次郎、知ならヤン・ウェンリーを超えます、
健康はヘルシングのアンデルセン神父くらい再生すればいいか?』

『武器と馬は使える体力がついたら頃に届くようにす、武器はその時に欲しい物をオーダーで、
ロンギヌスでもなんでもいいからな、馬は原哲夫作品の馬程度でいいかな?』

名目は俺と司の修行であり、神の代理で紛争の鎮圧に行くとかなんだが、
いくらなんでもアンデルセンの回復力やら聖槍とか貰うのは駄目だろ。

運が良くて俺達が神の代理ではなく神になり替わり、最悪悪魔の使いだと処刑されかねん、
だから、武器でも馬でも健康でもほどほどにしてくれと頼む。

とりあえず、なんか妙にこちらを優遇する神との打ち合わせも終わり、
神が指を鳴らすと突如どこでもドアらしき物体が現れる。

扉の前に立つと色々な思いがわき出る。

“この扉をくぐると遂に三国志か、任務達成まで戻れないどころか途中で死ぬかもしれない、
だが面白さを求めて行きますか。”

横を見ると無二の親友である司も笑顔でこちらを向いている、覚悟はできている模様、
深呼吸をして息を整え心を落ち着け扉をくぐる二人。

扉をくぐり二人がいなくなってから、肝心な事を伝え忘れていたことがあるのを思い出す、
ふざけた、耄碌したやくたたず神だったとは・・・・。。

プロローグ（後書き）

プロローグが長くなりすぎた、そうでなくても駄文なのに、さてどうなりますかこの小説は、作者のくせに何も考えていなく不安であります、どうしましょう。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第一話、転生したはいいけれど（前書き）

とりあえずプロローグに続いて第一話を書いてみました。

どうしようもない作品ですが、もしお暇なら生温かい目で読んでみてください。

第一話、転生したはいいけれど

―保―

「話が違う、いや、話が違うんではない、もっと考慮しろと言うべきか・・・」

いきなり何がと思われるだろうが、今の俺の心情としてはこうとしか言えない。

申し遅れた、俺の名前は大谷　保（たもつ）３３歳、会社役員だった。

東京近郊のとあるベットタウンで数百年前から先祖代々商売をする金持ちの息子で、
まあ変わり者の両親の元で人並みではない体験をしながら元気に育った。

変わり者ではあるが優秀な両親の血を引いたのもあり努力らしい努力をすることもなく、
苦労せず良い大学に行き卒業後は父の会社に入社。

入社当初は親の七光と言われたりもしたが仕事も順調にこなし続け、後継ぎという点もあるが今や最年少取締役、次期社長として働いている。

「まあ親族からは会社を背負ってたつのだから三十過ぎて結婚していないのはいかん」
と小言を言われるのは不満ではあったが、それ以外とくに主だった不満はなかった。

不平等な世界だが私は運良く皆と違って人生イージーモードでお気楽ライフを堪能していたと。

そんな順風満帆な生活だったはずが・・・。

無二の親友とご機嫌に飲み歩いていたはずが変な場所で目覚めて、現れた神にお前達は死んだと言われ三國志の世界に行く羽目に。

まあ、ここまではいい。

普通の人ならば「死んでるのにいいのか!?」とか言いそうだが、人生イージーモードは面白みがない、ならば波乱万丈な方がいいと。

あっ、今さら言うのもなんだが、誰に対して説明している文章なんだって突っ込みは無しで。

転生とか喜んでいるはずなのに何で戸惑っているのかといったら、まあ切実な問題が。

過去に行ける扉をくぐったら意識を失い、目を覚ましてまず最初に視界に入ったのは、
サッカー中継時の川平慈英並みにハイテンションな見知らぬ男の笑顔がドアップ。

目を覚ましたら、いきなり川平慈英はびびるぞ。

川平もとい、男のテンションの上がり方と「董家の跡取りが」「君

に似て可愛い顔立ちだ」
などの会話の内容で、この男は父親なんだなと理解した。
転生させた神に問題として言いたかったのは、何故赤ん坊からなんだ！と。

まあ前世である３０歳過ぎたおっさんが異世界で修行だといって鍛えはじめても、
年齢的に脳細胞も体も衰えていく一方、ならば若い頃からやりなおした方がいいのはわかる。

だが、生まれた直後から私の自我があるのはなんとかならなかったのかと、鼻水垂らすまで説教したい。

赤ん坊ですよ、自分でトイレに行けるわけなくオムツにお漏らしをするしかない、
赤ん坊なら当たり前ですがこの前までおっさんな私としては常識でおもらしはできない。

あと母親だけでなく侍女達にオムツをかえられる羞恥プレイも精神的ダメージが。

しかも、恥ずかしいというだけでなく、オムツを人にかえられる恥辱が、
何か新しいものに目覚めてしまいそう、堕ちてしまいそうな自分が、
その恐怖に耐えるのが・・・。

せめて３歳位になって自我が確立するころに前世の記憶とかが目覚めてくれればよかったのだが。

あと、もう一つ問題が、神が転生させる際に記憶や能力引き継ぎしてもらったことで。

私は赤ん坊らしく起きて寝てを繰り返す、そんな私が父親と初対面した時に事件が。

ハイテンションな父親の話し声に目を覚まし、前世での生活のように起きてしまう、
問題は私が生まれたばかりの赤ん坊であるというのが。

寝台から上半身を起こし背伸びしながら「とおしゃん、かあしゃんおはよう」と、
舌足らずながらも普通に挨拶してしまった。

自分で、あっ、と気づいた段階で手遅れでしたよ。

赤ん坊ではあり得ない姿を見て両親はわなわなと震えだしたと思ったら、
父はいきなり窓から「うちの子は神の子だーーー！！！！！！」などと、
近隣住民から頭を疑われるような事を叫びだし、
母親はあまりの出来事にフリーズし、侍女達は俺の姿を見るなんて畏れ多いと皆ひれ伏しているのが。

これはまずい、と既に手遅れだが、そのあとは普通の赤ん坊の振りをして過ごす、
まさか転生した初日に既に普通の赤ん坊の振りする生活に気疲れするとは。

どうしてこうなったと赤ん坊ながらため息をつく生活を送るように

なるとは。

―???―

妻が妊娠したと知ってからいつ生まれるのだと毎日仕事が手に付かず、一日千秋の思いでいたが、
ある日執務室で政務に励んでいると我が子が遂に産まれたと待ち望んでいた報告が。

仕事を投げ出し、従者を振りきろうが構わんと走って我が子に会いに行く。

出産に疲れ寝台に休んでいる妻、産婆や侍女達には悪いが我が子と喜びの対面をさせてもらう。

妻と一緒に寝台で寝ている我が子のなんと可愛らしい事か。

「お前に似た可愛らしい顔立ちだ、将来はモテるぞ」と妻に向かって話しかけると、
妻は微笑みながら「私よりも貴方に似ていますよ、賢い顔つきなところとか」と。

侍女達は「旦那様の聡明さ、奥様の美しさを兼ね備えた将来が楽しみな若様で。」
と大変嬉しい事を言ってくる。

照れ臭いのをごまかすためではないが産まれたばかりの我が子に、
「お前は父である私に似て賢く母に似て美しいとの事だぞ。」と語

りかける。

妻は「あらあら」と言いながら微笑んでいる、なんと幸せな光景だろうか。

まさか、寝台でスヤスヤと寝ていた我が子が目をパチリと開いたと思ったら、
上半身を起こし背伸びをして「とうしゃん、かあしゃんおひゃよう」と。

首が座っていないどころか数刻前に生まれたばかりなのに、起き上がって喋った・・・。

我が国の遥か西にあった国で、釈迦という王子が生まれた直後に歩いて
「天上天下唯我独尊」と傲岸不遜な言葉をしゃべった逸話があるのを聞いたことあるが。

我が董家の跡取り息子も釈迦ではないが選ばれし子供なのだろう。

自分の息子の持つ神々しさについ興奮して窓から
「うちの子は神の子だーーー！！！！！！！」と叫んでしまった。

近所から生暖かい目で見られるだろうが私は気にしないぞ！！

―保―

転生してから二週間たちました、そんな故大谷　保（享年３３）ですが

「・・・暇だ、とにかく暇だ」

体は赤ん坊なんだが体力や意識とかは大人ですよ、周りを驚かせないようにするため、
連日赤ん坊のふりをしている生活にかなり疲れる。

おっぱいを飲む、おむつの中に漏らす、泣く、寝るしかない。

両親や侍女の会話を盗み聞きすることで我が家がどんな家か自分の名前や現状を推測したりしたが。

とにかく暇だ。

話し相手がいればいいが話し相手がいない、まあ話をするわけにいかないんだが、
侍女に話かけたらまたパニック起こされ土下座してきそうで。

とはいえ、読書やゲーム、仕事とか暇潰しが出来ないのだから、せめて気分転換で会話がしたい。

『じゃあワシが話し相手になろう。』

聞き覚えのある老人特有のしゃがれた声が脳内に響く。

「この声は私の頭痛の原因を作った自称神、こと、クソジジイ！」

『自称ではないクソジジイでもない本物の神だ！まあ声出さないで

いいぞ思念で会話しているから。』

助かった、自分以外誰もいない部屋で喋れないはずの赤ん坊が一人で会話していたら、
そんな姿をもし侍女達に見られたら神童どころか悪魔憑き扱いだ。
悪魔憑きなんてなった日には、老いた神父と若い神父が家にやって来るよ、
私が緑色のゲロ吐いて、ブリッジしながら階段を降りたわけでもないのに、
悪魔祓いされたりしたくない。

『懐かしの映画の話はどうでもいい、どうだ転生してからの新しい人生を楽しんでいるか?』

私の転生してからのストレスを知らないのかと舌打ちしてしまう、
大体生まれて1年もたっていないのに何を楽しむんだ!と言いたい。
あと、この前散々私達にへこまされたばかりなのに、
なんで今日はまた上から目線なんだと突っ込みたい。

とりあえずはいろいろ突っ込みたい事があるので一気に突っ込む。

「三国志の時代に転生といったが此処は何なんだ!?変な世界に送り込みやがって!
両親が董君雅と池陽君だから俺が董卓の親族はわかる、なんで両親の性別がひっくり返っているんだ!!!!」

「それと董擢ってなんでこんなマニアックな武将に董卓の兄貴で早世したしか情報が無いような、

知っている俺も俺だが、普通三国志なら魏呉蜀とか王道な所に所属する武将が沢山いるのに何で非主流な。」

「一番の問題は、一緒にこっちの世界に来た司ちゃんがなんでいないんだよ、転生なら双子とかじゃないのか？」

私がまくしたてるように一気に疑問をぶつけると、神はゆっくりと答えだす。

『君達が知っている三国志は正史と呼ばれるもので、今、君がいるのが外史なんだ、
外史とは一言で言うならＩＦの世界じゃ、もしかしたらこんな世界があるのでは？という。』

『何故、外史にしたのかは君達が戦国時代を選ばなかった理由と同じじゃ。』

「過去の正史だと正史の歴史を変えてしまう事で未来の俺達に影響する可能性が、
ならばそれがない外史にしたということか？」

『そういうことじゃ、だからお前さんの認識している三国志とは性別や性格とか、
色々と違う点がある世界なんじゃよ。』

「それはまあわかった。」

『董擢にしたのはたまたま空いていたからだ、先程も言ったがここは外史ＩＦの世界であり、
外史ならば正史にいるはずの人間がいないなんて事もある、それで

空きがあった人物だからじゃ。』

「そんな理由なのか。」

『あと、お前さんが曹操とかに転生したとして正史での曹操の行動をしっているから行動しづらいだろ、
これだけ資料がない人間ならば好き勝手やれるだろうと気を使ったんじゃぞ・・・。』

・・・の部分に何か別の意思が隠れていそうだ、面白そうだからとか、この前の意趣返しだ、とか。

「どうも騙されている気がしてならないんだが。」

『疑り深いのう、あともう一つの質問の答えだが、お前の相方である上尾司は、
お前と同じ日に転生はしている、この外史でちょうどいい双子に空きがなくて、
やむなく別々になったんだ、まあ、お前さん達ならばすぐに会えそうじゃが。』

「無事ならばよかった、あいつと俺は前世で義兄弟の杯交わしたんだから、
“生まれは別々でも死ぬ時は別々だ”と誓い合った仲なんだから。」

『それを言うなら“生まれは別でも死ぬときは一緒だろ”じゃろ。』

「落語の粗忽長屋だ！元ネタは知らないのか神のくせに、まあ俺達は一緒に死んだが、
普通一緒に死ぬなんてないだろ義兄弟でも、何寝ぼけた事を言って

いるんだ。」

まあ、色々言ってはいるが司が無事だと聞いてとりあえずは安心する、が、釘は刺しておこう。

「こっちに二人まとめて来たんだから司と会えないで、会おうと思ったら、
既にどちらかが死んでいたとかなんてなったら神だろうが許さないからな。」

『まあ平気じゃよ、そんな心配しないでもあいつは色々と赤子生活を楽しんでいるぞ。』

「嫌な予感がするからあまり聞かない方が良さそうだが、一応聞いておくか。」

聞かない方が良さそうだが好奇心に負けてつい聞いてしまった。

『ブッダの真似して生まれた直後に三歩歩いて天上天下唯我独尊と言ったり、
侍女にオムツを変えられるたびに「はあはあ、抵抗することもできず他人にオムツをかえられ、
恥ずかしい姿を見られる自分の無力さが、背徳感が堪らない、なんで今まで赤ちゃんプレイに興味なかったんだ！」ワシに力説していたぞ。』

て、手遅れだったか・・・・・・。

とりあえずまあ疑問は解消されたかと思っていたら、また話をしようといって神の声が聞こえなくなる。

赤ん坊であるおかげと最近の気疲れのせいか?あと親友の司の無事がわかった安心感、
彼が誰になっているのか?いつ会えるか?考えていたら俺こと董擢は眠気に襲われたのだった。

第一話、転生したはいいけれど（後書き）

読みづらい文章ですいません、感想とかありましたらよろしくお願いします。

皆さんのご意見ご感想お待ちください。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（前書き）

恋姫のはずなのに、時代設定が少し古いからとはいえ劉備も曹操も誰もまだ出ません、ごめんなさい。

というかもう一人の主役を出せていない大丈夫なのか・・・。あと、今回も無駄に長くてごめんなさい。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？

―保―

どうも、この三国志の世界に転生して3年たちました姓は【董】名は【擢】字を【孟高】
そして真名は前世での名前と同じ【保】になりました、故大谷　保こと、
董卓の兄貴で早死に以外は売りがなく、三国志で劉備や曹操といったスーパースターと異なり、
刺身でいうならツマ以上に需要がない董擢です。

いきなりキンクリして三年たっているのはまあ色々とお察しください。

話を本筋に戻しましょう、三国志の世界でなどと言いましたが、神の説明を受けた時に知りました、
此処は私や皆が知っている正史というものではなくＩＦの世界である外史という物だそうで。

三国志では姓名以外に字があるのは常識として知っていますが、
今の私ならば【保】という、姓名や字とは別に真名という物がありました。

この世界を知らない私からしたら真名があると知ったところで最初は“面白いもんだＩＦの世界は”程度の認識でしたが、そんな生易しい物ではなかった。

真名は命よりも重い扱いでたとえ相手の真名を知っていても呼ぶ事

は許されず、
当人の許諾無しで真名を勝手に呼ぶと首をはねられても仕方がない注意が必要なものだなんて。

実際これで一度痛い目にあっておりまして、真名の価値をまだ知らない私は気楽に、
いつも身の回りの世話してくれている侍女の方達に真名を預けたんですよ。

問題は私が太守の息子で、しかも生まれたその日に「父さん、母さんおはよう」なんて、
言葉を習ってもいないのに、普通に背伸びしながら言ってしまう神童扱いの子ですから。

侍女の方々からしたら天上人から真名を許されたというような状態で驚きと感動で皆卒倒しまして。

私は何が起きたんだ?とパニックを起こしながらも侍女達を助けようと必死で呼びかけている、
そのような事態になっていると知らないで太守としての政務を終えた母上が私の部屋の扉を開ける。

「キャアアアアアーーーーーーー!!!!!」

私をいつも温かい目で見つめていて常に落ち着いている母上がこのような悲鳴を上げるとは。

ドラえもんがネズミを見つけてしまった時並みのパニックです、地球破壊爆弾を使いかねません。

まあ私は腐っても太守の息子ＶＩＰですから、部屋がそんな風になっていたら事件か？
暗殺者にでも襲われたか？と思って母上がパニックになっても仕方ないかと。

３０分後、侍女達も復活、私と侍女達から事情を聴いた母上がこちらを向いたと思ったら、
「孟高そこに座りなさい」と普段の母上の姿から想像つかない怒りのオーラが。

これは洒落どころではすまないなと本能で察しましたが、察した段階で既に手遅れ。

床の上に正座させられ説教ですよ、しかも、母の背中には怒りのオーラが見えるが、
一番きつい怒鳴るのではなく静かに淡々と理を持って目を見据えながらの説教なのが。

「貴方は三歳とは思えないほど聡明であり、誰とも分け隔てなく接する優しい自慢の息子ですが、
董家の長男として、いえ、人として真名の重みを理解していない事に私は情けなく思います。
貴方の【保】という真名は、大陸の平和を保つ偉大な人物になってほしいから・・・以下略」

どれくらい時間がたったでしょうか、青っ洟垂らしてしまうどころではなかったですよ、

こちらの世界では三歳ですが、精神年齢三十六歳であるおっさんな私が泣きそうになるくらいで。

家族での夕食時に父はその事件を知り「さすがの神童も形無しか真名に関しては次から気をつけろよ」
と笑って、私を慰めるため頭をクシャクシャとなでてくれました。

ただ、その父上の行動が甘やかしているように見えたようで、父上は母上の逆鱗に触れてしまったらしく。

「貴方少しお話があります」と一言、無表情ながら凄まじい怒気を漂わせた母上、
耳を引っ張られ連れだされる震えあがった父親。

連れ出される父はたぶんドナドナで売られる牛よりも悲しい顔をしていたのが・・・合掌。

母上は部屋に戻ってきたが父上が戻ってこないので部屋に見に行くと、
うつろな目をして部屋の隅で体育座りして涙ぐんでいる父上が。

この件があってから私は両親だけでなく侍従達とも真名を交しなさいと母上が許可をされました。

ただ侍従の方達は真名で呼んでくる事なく「孟高様」「坊ちゃま」としか呼んでくれず、
また私も皆さんにおしめを替えてもらったりしたりと育ての親でもあるので、
真名で呼ぶよりも字にさん付となってしまってますが。

決して、真名の件での母上の説教がトラウマになってしまい、
真名の取り扱いに悩んでいるわけではないですよ・・・たぶん。

前世では怖いもの知らずと言われた私が説教くらいでトラウマなんてなるわけが・・・。

ちなみに母上の真名は【和(なごみ)】と、私の保と同じく平和を願ってつけられたそうで、
五胡との争いで亡くなった祖父が、いずれは五胡とも手を取り合い平和を築こうとした事からだそうで。

その事を知ってから自分の【保】という真名の重みが三歳児ながらずしりと両肩にかかるのが分かりました。

父上の真名は【空(そら)】無限の広さを持ち一面に広がる空のような広い心を持つ人になれと、
祖母に名付けられたようです、ただ父上はお酒を飲んだ際にごくたまに悪酔いするのですが、
その際「世間で私の存在が空気みたいなものだから真名が空なんだよ」とうつろな目で呟く事が。

私の精神年齢より若いはずの父上ですが、たまに妙に黄昏ているのは何か嫌な事があったんでしょう。

―和―

私の自慢の息子である保君が可愛くて可愛くて仕方がない。

保君は生まれてすぐに「父さん、母さんおはよう」なんて言ってしまう天才児だ、
あの時あの人が窓から「うちの子は神の子だあああ」と叫んでいたがその気持ちがよくわかる。

昔馴染みの友人達が遊びに来た時にも気付くとついつい何刻も息子自慢をしている私が、
最初は皆「親馬鹿にも程がある、まあ自分の子供に対してはどうしても親馬鹿になるがね。」と。

皆実に失礼で、保君の凄さを知らないで親馬鹿という言葉で片付けるなんて、
彼らの愚かさが嫌になり、少しＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしないといけないと思うが、
さすがに太守とかを壊してしまうわけにはいかないので、保君と話をさせてみる事に。

「まさに神童」「麒麟児とはこの子の事か」「天は二物も三物も与えたか」と話をする。

私や夫の私塾時代の同級生であり私などとは身分が違うのだが分け隔てなく接してくれ、
私達を可愛がってくれていた劉表様なんか、

「この国を支える人材を育てるための私塾をつくる予定なのだが是非孟高君を入学させたい」
「いや、私塾の有無など関係無く、私の元で徹底的に学ばせてみたい、是非私に預けてくれ」と言いだす程に。

大事な大事な愛しい保君と離れ離れになるなんて出来るわけがない

のに、
あまりにもしつこいので、最近愛刀が血に飢えているので愛刀の錆にしようか？と。

ふと気づいたら横にいたあの人が必死の形相で私を羽交い絞めに。

ただ、人を育てる事が好きで優秀な学者でもある劉表様に、まだまだ幼子である保君が、
ここまで惚れ込まれたのは親として嬉しくもある。

いくら褒めても褒め足りないが、保君が神がこの世に遣わした者であると何度思ったことか。

普通ならまだ立つこともおぼつかないような歳である保君に、軍師でもあるあの人が、
「生まれてすぐに喋ったくらいの天才なんだから保君には早くから勉強を教える」
と言い出した時はさすがにまだ早過ぎると思ったのだが私の予想は見事に覆された。

保君は三歳にして読み書き、四則計算が出来るなんて。

だがこれで驚くのはまだ早く、保君の勉強についてあの人の言葉を聞いて更に驚かされた、
あの人が用意した教材が論語、五経、管子、孟子、荀子、戦国策、呉子、孫子というのは。

読み書きの時ほどのあり得ない速度ではないが、とはいえ保君は少しずつだが、
噛み締めていくように少しずつだが本を読み着実に理解していって

るとは。

軍師という物は知識がただあればいいのではなく、大事なのは実戦でいかにそれを生かすかだが、
知識だけならば保君はあと数年もすれば大陸で並ぶ者はいない偉大なる知者となるであろうと。

ただ、最近は保君を見る度に親として寂しくなってしまう自分がいる、
三歳なんて世間の子供はもっと親が恋しいはずなのに、保君は平気なのがとても悲しい。

一昨日も大好きな保君に一緒にお風呂に入ろうと言ったら「母上恥ずかしいです」と断られてしまった、
たぶんこれが反抗期というものなのだろう保君の言葉に衝撃を受けた私はその晩枕を涙で濡らした。

あの人はそんな私を抱きしめの頭を撫でながら「保もお前が大好きだから平気だよ」
と慰めてくれた、大好きなあの人に撫でられ少しだけ安心したが何故だか怒りがわいてきた。

そう、私は太守の仕事で忙しく、あの人も軍師として忙しく夫婦共に忙しい、
あの人がそれでも保君の勉強のため時間を作っているのは分かる、
でも
保君に勉強を教えたりと一緒にいる時間が夫婦で私より多いのが許せない。

気付いた時には「貴方なんか大っきらい」と叫んで本気の正拳突きでぶっ飛ばしていた。

ーとある場内警備兵ー

真夜中の城内警備していた時の出来事です。

最近の街の治安の良さ、しかも、この警備厳重な城に忍び込む不審者なんていないだろうと思い、
董君雅様に見つかったら気が緩み過ぎと大目玉でしょうが欠伸をして、
早く交代の時間にならないかと見張りをしていた時に事件が起きました。

「貴方なんか大っきらい」という董君雅様の叫び声が聞こえたと思ったら、
庭園から雷でも落ちたのかと思われるようなドカーーーンという大音量が。

何事かと城内の警備兵が庭園に走ると、壁には大穴がそして庭園には謎のボロ雑巾が。

まさかボロ雑巾が筆頭軍師である池陽君様だとは。

翌日から城の機能が止まりました、全身打撲で池陽君様は絶対安静、
執務室では董君雅様が
「保君が反抗期だなんて、保君に嫌われたらもう生きていけない」
と涙するお姿を。

このままでは政務が進まないどころではないと侍従、家臣一同で董曜様の部屋に。

ため息をつかれ「両親が迷惑をかけてすいません」と深々と頭を下げ執務室に向かわれる董曜様、
ため息のつき方といい謝り慣れしていることといい、この方は本当に子供なのだろうか？と思う。

とはいえ董曜様はやはり三歳児、執務室で泣き続ける可愛らしく董君雅様に抱きついて、
「母上大好きですから泣かないでください」と董君雅様の頬に口づけされました。

この後まさか冷静沈着で有名な董君雅様が飛び上がり叫ばれるとは、

「ヒャッホオオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これで私はあと１００年は戦える！！」

と叫んで机の上に山と積まれた竹簡をあり得ない速度で処理していく姿が、
更に「来年からこの記念すべき日は保君記念日として休日に」と言い出し始めるとは。

あと董曜様が母親である董君雅様の変わりように引いていらっしゃったのが印象的でした。

少し転職を考えてしまう一日でした。

第二話、沈着冷静の母親董君雅様？（後書き）

主人公の両親や祖父の設定はオリジナル設定です。
それにしても董君雅何故ここまで壊れてしまった。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（前書き）

両親が、というか、和がどんどんおかしくなっていく、どうしてこうなった・・・。
書いている私が何故こうなってしまったんだと悩むのは既に手遅れか？
とりあえずこんな作品ですが読んで笑っていただけたなら幸いです。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた

―保―

どうも、最近の母上が怖い保です。

こちらの世界で両親が私を愛してくれているのは分かります、
ただ、愛が溺愛と言いますか、ヤンでいるのが。

この前、両親共に仕事中だったので、一人で鍛錬の為に城内を駆け回ったりして、
全身汗と泥まみれになって帰ってきた私を見つけた母上が、
太守の仕事で忙しいのに私とお風呂に入ろうと誘ってきましたよ。

前世でそれなりに女性経験があるわたしです、董君雅はこの世界での私の生みの親です、
とはいえ、やはり妙齢な母上にお風呂で全身洗われたりするのは恥ずかしいです。

あと私とお風呂に入るため明らかに太守の仕事を途中で放り投げているのが。

だから「母上恥ずかしいです」と断ったのだが、まさかあんな風になるとは。

羌族が攻めてきたと報告が上がり城内は騒然というような事態になっても、
常に冷静沈着、将とはかくあるべきという姿を見せつける母上が。

皆さん見た事ありますか妙齢の女性が「うわーーーん」と、
漫画みたいな声あげて泣いてダッシュしていなくなるのが。

しかも、その日の夜中にも事件が、父上の方が私と一緒にいる時間
が多いという理由で、
まさか母上が嫉妬でギャラクティカマグナムを父上に決めお空のお
星様にしそうになるなんて。

危うく私はててなしごになるところでしたよ。

翌日も「保ちゃんに嫌われたらもう生きていけない」と死んだ魚の
ような目をして呟き続けていて、
あまりにもなので「母上大好きですから泣かないでください」と頬
にキスしたら復活ですよ。

ただ、

「ヒャッホオウウ、保君の愛があれば！愛の為に戦います、これ
で私はあと１００年は戦える！！」

なんだろうこの差というか寒暖の激しさは、
これが熱帯魚の水槽だったら中にいた魚は一瞬で全滅しますよ。

しかも、この日を記念して保君記念日成立させるとか言い出すしま
つ、どうすれば。

三歳児ながらまさか胃がキリキリと痛くなるとは。

将来旅に出るつもりですが、伝えたら私を座敷牢に閉じ込めるくらいはするでしょう。

例えば私が結婚するとかなったならばどうなるんでしょうか？

太守の息子ですし普通ならばお見合いとかでしょうが、嫁さん候補が現れたら・・・。

「お前にうちの息子はやらん」「お前にお義母さんと呼ばれる筋合いはない」

なんてドラマのようなセリフが出てきそうなのが。

いや母上の事だから刃傷沙汰になるか、将来一体どうすればいいのか・・・・？

後に「保君のお嫁さんは私だ」と斜め上どころではない回答が飛び出すのをまだ知らない私だった・・・。

―和―

「・・・・ふぅ」

ため息が止まらない、保君と一緒にいたいのに仕事が多すぎる、

いっそ太守を辞めようかという考えが頭の中をちらつく。

こうして私が頭を悩ませながら必死で竹簡の山を片づけている間にあの人は。

保君に勉強を教えるという大義名分は分かるが、でも保君を独占出来るなんてうらやましい。

なんとか太守として忙しい私が保君と一緒にいられないかと考えるが解決の糸口が見えないのが。

例えば保君成分を補充する為私の仕事中は保君を膝の上に置いて仕事する。

実に素晴らしい案だ！と思ったが、これは駄目だ仕事にならないのがわかる、

保君を抱き締めてクンカクンカして仕事しないで一日が終わる、そんな様子が想像出来てしまう。

どうすればいいのか頭を悩ませながら竹簡の処理をしている、とある竹簡に目がとまる。

軍に関する物で、新兵の錬度が低く訓練の相談に関する物が。

これだ！！！！！閃きました。

君主自ら新兵の訓練をすれば、兵達も気を引き締め訓練に力が入る。

保君は体を動かすのが大好きらしく毎日自己鍛錬ですと言っては、

空いている時間城内を走り回っていたりしている。

それならば少々早いが保君を予備役軍人という事にすればいいんだ、太守である私が保君に付きっきりで訓練指導を出来る、保君は鍛錬が出来る、一石二鳥、完璧な計画だ。

それに予備役ならば、新兵の錬度の問題はあるが現在兵数に問題がないから予備役招集はない。

よし善は急げ、今日は時間も遅いから無理だが明日から私自ら新兵訓練をしよう。

完璧な計画だったはずなのに・・・・。

まさか計画初日にして「君雅様は擢様に付きっきりで新兵の訓練を一切見ていない」
と陳情書が来るとは、しかも「三歳の子を予備役にするなんて何考えている」と空に怒られた。

ううう、保君と私を引き離そうと皆が意地悪をする・・・・・。

一空一

最近、妻である和の暴走が怖い

保が可愛いからすこしでもいいから一緒にいたいという和の気持ちは良く分かる、
私だってこんな竹簡全て投げ捨て、和と私で保と手をつないで家族三人で出掛けたりしたい。

だからとはいえ、三歳の保を予備役軍人とするなんて非常識にも程がある、
しかも太守自らの新兵訓練と言いながら保と二人っきりでいるなんて羨まし、もとい情けない。

太守の職をなんと心得るのか、まあ和のそんなところも可愛いんだが。

和と結婚することが決まったあとなんかも「空と一緒でないと仕事しません」
なんて泣きながら言い出して、あの時の和の泣き顔が可愛くて可愛くて。

和を抱き締めて泣きやませてあげたんだが、あまりに和が可愛くて、お姫様抱っこして部屋に連れて行って、ふと気づいたら翌日になっていて。

義母様と顔合わせたら「若いっていいわねえ」とニヤニヤされていて照れ臭かったのが。

うーん可愛い妻の願いも叶えてあげたい、でも、妻の泣き顔もちょっと見てみたい、
軍師として頭を悩ますばかりである。

第三話、人は皆悩んで大きくなる、董家もまた（後書き）

もう一人の主人公である司を早く出したいのだが、今のままではいつになるのやらと頭を悩ませています。皆さんからしたら作者である私が何を言っているんだということでしょうが。
司ですらいつ出せるかならば、恋姫キャラとなった日には、不安です。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第四話、運命の出会いしちゃった？（前書き）

話の展開が強引すぎるかなと、まあ常に悪ふざけだからいいやといっちゃいました。四話目にしてやっともう一人の主役を出せたとは。

第四話、運命の出会いしちゃった？

―保―

たぶん、今世界で一番の大根役者である董擢こと皆の保君です。

いきなり大根役者って何があったのかと言いますと、

本日、母上と父上が若かりし頃に学んだ洛陽の私塾時代の仲間の李さんという親子が、
洛陽のエリート文官だったのに涼州くんだりまで仕官しにやって来たんです。

実は今この李さんの後ろに立っている息子さんが、遂にやって来ました転生仲間！
マイソウルブラザーである前世名でいう故上尾　司君ですよ。

3年以上ぶりの感動のご対面、かというと、意外とあっさり丸鶏塩ラーメンという感じでした。

だって、三日前に神との念波での雑談で教えられていたので。

「三日後に司がそっちに行くから、お前さんの親の友達の子として、見た目は違うがお前さん達ならばお互いに一目で分かるよ、
まして良くも悪くも董卓に馴染み深い名前じゃからのう。」

董卓に馴染み深いという言葉に一抹の不安を感じますが、
遂に司ちゃんに会えるのが、離ればなれになっていた大親友に会える。

あまりの嬉しさに毎日まだかなまだかな学研のおばちゃんまだかな状態です、
まあ、学研の奴やったこと無いのでまだかななんて思ったこと前世で一度もないのですが。

前日の家族揃っての夕食の際に母上から伝えられた際も知らないふりの演技しましたが、

「明日、私達夫婦の私塾時代の友達の親子が仕官しにやってくるのですが、
保君は良い子ですから平気でしょうが同い年の子供だからえばったりしないで仲良くしてあげるんですよ。」

はい、平気ですよ、生まれ変わり仲間で前世からの飲み仲間ですので、なんて言えませんが。

で、当日

私も呼ばれて玉座の間で董家ファミリーや家臣一団と御対面ですよ。
やってきた司ちゃんのお母さんが色々と突っ込みがいのある格好で。

何故この三国志の時代にタキシードがあるのでしょうか?

なんで李さんは女性なのにオールバックで光り輝く真っ黒なタキシードなんですか、
宝塚の男役なのでしょうか?今から歌いだすのですか?

あと神のヒントである董卓に馴染み深い者で李という姓に大変嫌な予感がして仕方ないです。

「この子は私の自慢の息子で、ほら自己紹介しなさい。」

前に出てきた司ちゃん

「僕は李儒文優と言います、これから母様共々宜しくお願いします。」

久しぶりの司ちゃんの声と普段と違う喋りについニヤッとする。

まあ私も昔は「俺」司ちゃんなら「自分」と読んでいたがお互い親に強制されたなと。

それにしてもあの【李儒】ですよ、弘農王を毒殺しようとしたり三国志のいぶし銀な悪役、

神にこの大陸の戦乱をおさめろ言われたが董家に李儒、うん、弟で董卓が産まれたら司ちゃんと二人で洗脳・・・、教育するしかないか。

とりあえず司ちゃんと話がしたいので、なんとかしますか。

私専用の巨大な椅子にちょこんと座っていたが椅子から降りて、司ちゃんの前に立ち右手を差し出し、「私は董擢、君と友達になりたい。」

うん、大根役者にも程がある演技だ、まあ一応、三歳児だから平気だろう。

「はい、僕なんかで良ければ友達になって下さい。」と手を握ってくる司ちゃん

互いの親達は子供どうし仲良くなれそうで良かったという顔していたが、
私と司ちゃんの二人はお互いの演技の酷さに吹き出しそうだったな。

―司―

チャッチャチャー♪チャチャッチャー♪チャチャチャーチャチャチャラーラ♪

BY特攻野郎Aチームのテーマ曲

「李儒文優　真名は司　陰謀の天才だ、弘農王だって毒殺してみせらあ、でも献帝だけは簡便な！」

「司ちゃんいきなりどうした？その言い方なら俺がフェイスマンか。とりあえず言ってみるか」

「いや電波を受け取って言っただけで保さんがわざわざやらないでも。」

「俺は董擢孟高、真名は保、自慢の可愛さに涼州の民はイチコロさ、ハッタリかまして
オヤツから涼州馬まで何でも揃えてみせるぜ！三国志に合わせるとこんな感じか？」

「いいと思いますよ、いや、保さんがハンニバルでしょ、なんでフェイスマンなの!?」

「リーダーには似合わないから董卓が生まれたらあいつ偉くなったんだからハンニバルにするか、
問題はモンキーを誰にするか?頭がぶっ飛んでいるメカの天才だから・・・。」

とりあえず特攻野郎Aチーム談義はいいや話を戻そう。

“もう一人の主人公なのに四話目にしてやっと出番が来るってふざけるな!作者出てこい”

と誰にだか分からないがとにかく叫びだしたいこと故上尾　司です。

話はほんの30分前、玉座の間でのご対面に戻りまして。

転生から別れて3年8ヶ月と14日ぶりに、ついに保さんと会えましたよ、
周りから何処のノインだ!と突っ込まれそうですが気にしません。

それにしてもあの保さんが愛らしい顔していて目の前にやって来て、
「君と友達になりたい」って、どんな冗談かと思いましたよ。

前世での自分と保さんがサングラス姿で街を歩くと、渋谷や歌舞伎町でも、
混んでいる道でも何もしていないのにモーゼみたいに人が避けていったくらいなのに。

まあ向こうも前世での見た目の欠片もない可愛くなった私が、
「僕なんかで良ければ友達になって下さい。」発言に笑いそうだったのが。

懐かしい、早く保さんに突っ込みたいし積もる話もしたいがどうすればいいか。

「知りあってすぐに友達になれてよかったは、子供達だけで話がしたいでしょうから、
孟高、文優君を貴方の部屋に案内してあげなさい、あとで部屋にお茶と菓子を持っていかせますから。」

“おお、ナイスアシストよく分かっているぜ保さんのおばさん”

ギロッ

一瞬だが今にも射殺さんとばかりに睨まれたぞ、心を読まれたのか!?

保さんに手を引かれて玉座の間を後にし保さんの部屋へ。

「今時、劇団ひまわりでもあんな大根役者なガキはいないでしょう。
あと、おばさん怖すぎ、保さんのおばさんと思ったら視線だけで殺されそうだった。」

保さんの部屋について周りに人がいないからいつもの喋りにする。

十年以上の付き合いであり笑いながら気楽な口調で喋る。

「女性に対しておばさんはあかんだろ、実際若いんだし、それにしても
自衛隊員が僕って!?“自分は”でなくて?あとおかんは宝塚か?」

「現役自衛官でなくあくまで元防医卒で今は医官ではなく親の跡継いだ、
単なるしがない開業医ですよ、間違えないでくださいよ。
あと宝塚言うな~!まあ、いつ歌って踊り出すんだと何度も思ったが。」

そんな私の発言に対しニヤニヤしながら保さんが口を開く

「うわ~、なんて厭味、あんなでかい総合病院の後継ぎがしがない開業医って、
それ以前に今はって、死んだのもう3年以上前なんだから前世と言うべきでは。」

「保さん突っ込みが細かい。嫌味というが金持ちなら保さんの家の方がすごいじゃないですか。」

前世トークと特攻野郎Aチームで盛り上がるが、冷静に考えたら生産性がなさすぎる。

「保さん、とりあえずお互いの知っている知識やら現状確認しませんか?
時代がいつなのか、世界がどうなっているか話をしましょう。」

つい先ほどまでケラケラと笑っていた保さんも僕の言葉に真面目な顔になり

「そうだな、まずは現状確認をしよう、だがその前にだ。」

「・・・？？？？？」

私が頭上に巨大な？を浮かべていると。

「姓は董、名は擢、字は孟高、真名は保、涼州へようこそ、そして久しぶりだ義弟」

「姓は李、名は儒、字は文優、真名は司、今までも、そしてこれからよろしくお願いします義兄」

「ああ、前世ではありがとうな、そしてこの三国志の時代でもよろしくな、会いたかったよ。」

前世で義兄弟の杯交したが、いつも笑顔な保さんが少し涙ぐみながら抱き締めてくれた。

自分もちょっと涙ぐみながら抱き締めて「会いたかったです。」

感動的なシーンですよ、普通ならば。

私の「会いたかった」の所で侍女の方がお茶とお菓子を持って部屋に来たのが、

男の子同士で涙ぐみながら抱きしめい「会いたかった」発言。

城内の侍女間で僕と保さんの関係が間違って広まっただけでなく、

まさか、
大陸全土で売れに売れまくった伝説の大人気８０１本になるとは知る由もなかった。
そんな未来を知っていたならこのシーンをやり直せたんだが・・・・。

第四話、運命の出会いしちゃった？（後書き）

とりあえずこの話の主役である保と司がそろいました。

とりあえず司とかの設定は近いうちにいろいろ公表しようかと思います。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（前書き）

仕事中になんでこんな物を書いているのだろうか、明らかに仕事で悩んでいるんでしょうねえ。

みうらじゅん言うところのＤＳ（どうかしている）ですよ、とりあえずそんなＤＳな作者によるＤＳなお話が始まります。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？

―保―

地獄絵図です、ただいま隴西郡の城の玉座の間が地獄絵図ですよ。

あっ、どうも、やっと親友と合流出来たはいいが嫌な予感しかしなかった董擢こと保です。

玉座の間が地獄絵図とは？何があったか説明をしますと。

原因は先日、侍女に見られた私の部屋での出来事についてですよ。

私としてはやっと会えた友人で、つい感激して抱き締め「会いたかった」と。

ただ、侍女の方々に前世での親友であり義兄弟であり一緒に転生したが、

離れ離れになっていてやっと会う事が出来たなんて事を知っているわけがなく。

今日初めて会ったのに泣きながら抱き締めあい会いたかったよ発言する私達

侍女達が皆鼻血を流しながら「ここはなんて桃源郷」と遠い目をして呟く独り言に殺意が。

どうやら私と司ちゃんは４歳目前にしてショタＢＬ野郎と侍女達に認定されたようで。

私としましてはこの問題を早く解決したい、あと侍女達のリストラを検討したいのですが。

私だからリストラで済みますがこれが正史の董卓だったらどうなっていたでしょう。

侍女達の解雇とか話がそれているので話を本筋に戻しましょう。

ショタＢＬ野郎扱いと既にこの段階でかなり死にたい要素満載ですが、
侍女達だけならまだしもお互いの親に知られてしまったのが問題で。

これが私達がもし本当にショタＢＬ野郎同士なら当人達の性癖の問題でありますが、
あくまでも侍女達の勘違い妄想、困った事に親達はエキサイト＆エスカレートで罵りあいですよ。

「純粋だったうちの保君を返せ～、この呪われたクソガキめぇ～！」

ついには冷静沈着不動の董君雅様と世間で言われている母上が斬馬刀で司に斬りかかろうと。

“駄目えええ、勘違いで私の義兄弟を殺しちゃ、って、間に合わないーーーー”

母上の攻撃から司を守ろうとするが明らかに間に合わない、これではと思ったら。

ガギィィイイーーン

凄まじい金属音が玉座の間に鳴り響く。

母上の斬馬刀が弾かれている、斬馬刀の横っ面を司の母親である李粛さんが、
右斜め下から切り上げるように振り抜いたモルゲンステルンの打撃によって。

突っ込みたい、何処から取り出したんだモルゲンステルンなんか！？

大体あれは１３世紀以降のヨーロッパだろう武器として誕生したのは！？

『兄ちゃん野暮な事は言いなさんな』

神の声ではないが、なんか謎の警告が来た。

警告を無視して突っ込もうとすると。

『その突っ込みをすると貴様は苦しむぞ！李儒の母親役で何故李粛なんだ！！と、
李粛も董卓とは縁深いが何でもありの世界でもやるならば李儒の兄弟だろ、と言われたら。』

うん、この警告は素直に聞いた方がいい、警告を無視するとこの話が破綻という惨劇が待っている。

『安心せい、既に最初から破綻している。』

うるさい！！！とりあえず、この天の声の言う事は聞いておこう、変な声だが。

“言葉でなく心で理解できた！”

母親達の戦いに戻そう、うん、ほんの数行程何も無かった事にしよう。

母上の攻撃をはじいた李粛さんが吠える。

「それは私の台詞だあ～、和が私の空を奪っただけでなく、お前の息子は私の大事な司を奪おうとするなんて、この薄汚い泥棒猫親子め～！！！」

“何を・・・何を言っているのか分からないよ、カヲル君”

自分の理解の範疇を越える李粛さんのあまりにもな発言に何処かの１４歳の霊が降りてきたよ。

こうなったら取る手段は一つ、現実逃避だ。

“母上いけーー私の心が悲鳴をあげているから、とにかく母上が勝って話を無理矢理まとめてくれえ～。”

「貴様が勝手にうちの旦那に色目を使っているだけだ～。泥棒猫は貴様の方だ！！」

母上の斬馬刀が今度は右から左への横薙ぎ、それを李粛さんが伏せて回避する、
そして、立ち上がるのと併せて母上に向かって突進、斬馬刀の弱点である懐に飛び込もうと。

母上危うし！？と思ったらこの動きを読んでいて、横薙ぎ中に握っていた柄から手を離す、
手から離れた斬馬刀は一直線に飛び、轟音をたて壁に突き刺さる。

問題は斬馬刀が父上の顔面ギリギリ数ｃｍ脇に突き刺さっていたのが。

泡吹いて失神する父上。

戦いに目を戻すと母上は斬馬刀を振り回した際の遠心力を使って回転し、
懐に飛び込んでからの一撃とした李粛さんの攻撃を避けるだけでなく、
最盛期のフランシスコ・フィリォ以上の鮮やかな上段回し蹴りを決めた。

見事に決まった、蹴り決まって李粛さん吹き飛んでいったし。

「やったか！？」

母上その発言はいくらなんでもフラグです。

母上の見事なK・O劇を見ていた私、ここでふと私の横にいる司を見るとニヤリと黒い笑顔を。

これはヤバい、本能が伝えているこの馬鹿場を更にかき回すつもりだ。

―司―

私が黒い笑みを浮かべた事を保さんは気づいたようで、ただ、もう遅い。

「お母さんも董君雅様もやめて下さい、僕は保お兄様のことが・・・フガモガ」

「冗談でもヤメローー！」

久しぶりに会ったんだ、少しくらいは保さんを振り回してあげないといけない。

保さんが僕の口を塞ぐが時既に遅し、途中までだがバッチリと母さんの耳に届いたな。

危険な賭けではあった、実際母さんを倒した董君雅様が振り向きこ

ちらをロックオンしているし。

「排除、排除、排除、保君に近づく悪い虫は排除する」

怖いドス黒いオーラが漂っている、だが、母さんと僕の絆を舐めてもらっては困る。

「た、た、ターミネーターじゃないんだから、なんで立ち上がれるんだよぉおお。」

保さんの声に震えが混じっている、董君雅様が後ろを振り返るとそこには。

ペッと血の混じった唾を吐きフラフラになりながらも立ち上がる母さんの姿が。

「なんや今のが攻撃なんか、気合いの入った社交ダンスか、涼州者に洛陽で磨きぬいたほんまもんの暴力ちゅうもんを教えちゃる」

母さんが立ち上がったはのは嬉しいが、何処の地域の人間だか分からない口調になっている、
あと気になったのはこの時代の人間である母さんが社交ダンスを何故知っている、まあいい。

「母さん、たとえ上司でも負けてはいけません。」

母さんが一瞬だけだがニヤリと笑ったのが見えた。

立ち上がったばかりの母さんに対し董君雅様が間合いを一気に詰めトドメだと、
右ストレートを母さんのボディーにねじ込んだ・・・はずだった。
母さんは右ストレートをギリギリで避けてわき腹と左腕で挟んで抑えていた。

「捕まえた」

母さんは空いている右腕で董君雅様のうなじの辺りをつかみ避けれなくしてから、
いったん上半身を背中側に思いっきりそらしてからの頭突きを。
渾身の一撃が相手の顔面にめり込む、さらに一撃で終わりなく、更にもう一発、もう一発と。
何発入ったのだろうか落ちているであろう董君雅様、それにたいし血まみれだが母さんは笑顔で

「司が応援してくれる限り母さんは無敵だ」

そう言って母さんは倒れた。

―保―

お互いの母親の戦いがダブルK．O．勝者も敗者もいない今回では一番優れた答えが出た。

普段ならこれだけでよかったのだろうが、私も決着をつけないといけない。

「司くーん、此処まで問題を大きくしたんだから覚悟は出来ているよね。」

逃げられないように右肩をがっしり掴む。

「争いは何も生まない、復讐なんて達成してもむなしくなるだけだ」

司君が復讐を諫めようとする、言いたい事はよく分かる、でもね。

久しぶりに会えたから司ちゃんもテンション上がり過ぎてしまって、ついなんだろうね。

だから私も、つい、復讐をしようと。

とりあえずこれだけは言っておかないと。

「今からブッ殺しに行くぜ、小便すませたか？神様にお祈りは？部屋のスミでガタガタふるえて命乞いをする心の準備はＯＫ？」

まあ、とりあえずは死刑宣告したし、いきますか。

「アリアリアリア

実に空しい戦いだった、そして、この後どうすればいいのだろう、
父上は気絶、母上はノックダウン、司はアリーヴェデルチ、玉座の
間は廃墟と化している。

仕方がないからこういうときは“そのうち私は考えるのをやめた”
と。

ちなみに、この司の悪ふざけからはじまった戦いは保と司のショタ
BL評価どころか、
お互いの家族を混ぜた壮絶な愛憎劇と侍女達の噂話で面白おかしく
脚色され、
瓦版で、本で、お芝居で千年たっても語り継がれる名作になるとは
この時の保は知る由もなかった。

第五話、結局一番の犯人は誰だろうか？（後書き）

書いていて思った、酷過ぎるそうでなくても酷いが、
思い付きを文章にしてはいけないと反省するばかりであります。

まあ、笑ってくれる人が一人でもいてくれたら幸いであります、
皆さんのご意見、感想お待ちしております。

第六話、鐙誕生秘話（前書き）

今回はいつもよりは少しだけ真面目要素のある回です、とはいえ相変わらずふざけた内容ですが。読んで笑ってもらえたら幸いです。

第六話、鐙誕生秘話

―司―

今現在執務室ではこの涼州を統治する最高幹部が集まって会議をしております、
口調がなんで説明口調なんだって？それは言わないお約束です。

「前に話をしていた兵募集についての件はどうなりましたか？」

まずは太守として董君雅様が、筆頭軍師である池陽君様に。

「雇用対策も兼ねての兵募集ですが予算との兼ね合いもあり、
希望人員の三分の一の千名の採用が適当かと。」

「軍を率いる人間としては各部隊の希望人数を出した故の三千人だが、
兵が多くても練度の問題も、１００万とかで力押しするのでないから少数採用もやむを得ない。」

「財政面としましては、千人程度で宜しいかと、たしかに理想は三千名ですが。
現在は羌族との関係も良好で、他州とのいざこざもなく兵数がさほど必要ないかと。」

「警備部は今の意見に反対です、兵の数が今は足りていても明日は？ならば明後日は？と将来は分かりません、実際州内でも治安悪化の報告が。

警備部が募集するのは、今回の兵はただ戦争で戦うだけの兵ではなく、
街の区画整理案とあわせて治安維持での警邏要員として役割が。」
警備部責任者は一旦話を止め、一口だけ茶をすすり話を続けていく
「また兵の維持費ですが当初の負担よりかなり減るかと、
試験的に運用しております軍の演習を兼ねての隊商の護衛任務ですが、
隊商には護衛の対価として兵糧の一部負担をしてもらうことで、
部隊は演習出来、隊商及び軍どちらにも利益があります。」
「軍師として疑問が、今までの兵より費用をかけないですむというが、
今回がたまたま上手くいき負担をおさえられた可能性は?」
「軍師が言われたように最悪を想定していくべきなのではないかな?と。」
各々の担当する職務に誇りがあり熱い議論が続くなか、ここで和様が
「色々な意見がありますし議論無き所に発展はないですから、
とりあえず議論は別として、保ちゃん司ちゃん子供らしく話なさい。」
「和の言うとおり、貴方達は自分達の可愛さが分かっていないの?」
「母上、なにも今言わないでも、ねえ父上からも言ってください。」
「ほら保も言っ「貴方は黙って下さい!!」・・・はい。」

真面目な議論が延々と続いているなかで途中から変な発言が。

あっ、どうも挨拶が遅れました李儒文優こと司です、
この間まで3歳でしたが、少しだけキンクリして5歳になりました。

『とりあえず歳をとらせたのは今のままでは話が進まないからだ。』

変な声が聞こえてきました、前に保さんから教えていただいた天の声でしょう、
これを聞いたらその件については触れてはいけないとのことですので、話をかえましょう。

なんで5歳児である私が執務室での政務を知っているかというと、
はい、私も保さんも文官として参加しているからです。

これだけでも常識的に考えたならあり得ない事態なのですが、
和様が保さんを膝上に座らせ抱き締めていながらで、
私が母さんの膝上に座らされ抱き締められているというのが。

保さんは会議の時に「どうしてこんなことになったんだ」とよく呟いてます。

まあ、原因は前回のアレがきっかけですね。

私からしたら子供の可愛らしいイタズラだったんですが。

あれ以来僕は和様に、保さんは母さんに目をつけられたと言いまし

ょうか。

監視の目がつき二人っきりになるのが許されなくなりまして、
冗談ですよと言っても一切話が通じない事態になりまして。

「保君に近づく悪い虫は」と和様に殺気発しながら言われると怖くて。

保さんとこの時代についてや未来技術の発明についてこっそり話し合えなくなりまして、
ならば仕方ないと当初の予定では成人してからですがカミングアウトしましたよ。

小学校にも行っていないような年齢の子供が真剣な顔で話をしても、
よくて子供の作り話と一笑にふされ、悪ければ頭がおかしいと。

最悪牢屋送りなり斬首の可能性があるかもと気が気でなかったですが、

「貴方は私がお腹を痛めて産んだ子供に違いないのですから安心なさい、
今まで誰にも言えなくて辛かったでしょうね、でもお母さんに秘密を話してくれてありがとう。」

言われて母さんに抱き締められた時は母の胸でワンワン泣きましたよ、
保さんも空様、和様に抱き締められて泣いていました。

それだけならば良い話でしょうがそのあと二人に説教が待ち構えていましたよ。

「お母さんになんで話さなかったんですがそんなに信用有りませんか？」

一番辛いのは、お母さんに正直に言わず嘘をついていた罰として、こちらでは子供なのだからお母さんに甘えなさいと言われたのは。

ダメージでかいです、四捨五入すると四十になるおっさんが、可愛い子供を一生懸命にやって媚を売るような仕草をするのは。

おでんと日本酒がしっくりくる年齢のおっさんがですよ、目をうるうるさせて上目遣いしたり甘えるんですよ。

どんな羞恥プレイですかまったく。

この姿をビデオカメラで撮影されて披露宴で流されたら会場で即自殺ですよ、まあ三国志の時代でビデオカメラが存在しないので助かりましたが。

―保―

この世界に転生してから私の考えでは話すつもりがなかった秘密だが、司の悪ふざけをきっかけにまさかお互い親に話す羽目になるとは。

“母への隠し事が相当後ろめたく、いずれは話したい”と言っていたが。

司は前世で家族という感じがしない家庭に育ったから、
今の生活が嬉しくて仕方無い、本当の親子になれたと笑顔で語っていたのが。

こういう話をするといい話だが、やはり司には色々とお返しをしてあげないと。

羞恥プレイが、とか言っているが、それはこちらの台詞だと、
だいたいアイツは性に関しての器のでかさが半端でないのだから。

羞恥プレイなんて言っているが、それで喜んでいる変態に違いない、
何故ならば私は奴について神から聞いているのだから。

転生直後に司がオムツかえられる事に喜びをみいだしていたのを、
オムツプレイＯＫな人間が子供演じる羞恥プレイくらいいくだろと。

転生、未来の知識はお互いの家族しか知らない秘密としましたが、
それにしても技術を伝えるのがこれほど難しいとは。

私達が知恵を出して政務を執り行うにはいささか若すぎるのが、
おかげで、私達が仕事をする時は家族しかいない時なのですが。

未来の技術を伝えるときなんか大変ですよ。

今日まで思い付かなかったものを発明するわけですから、

鐙の時とかやりましたよ、外で私が子供演技して鐙を作るまで。

「お母さ～ん、お馬さんに乗れないよ～。」泣きつく演技

←

「涼州の人間が恥ずかしいぞ」厳しく怒った演技

←

「お母さんごめんなさい、でもお馬さんに乗れなくて、
足かける道具があれば簡単にお馬さんに乗れるのに。」甘えた口調で

←

「仕方ないな保は甘えん坊で、仕方ない望む物を作ってあげよう」
優しい口調で

←

「お母さ～ん、お馬さんに乗れたよー、お母さんありがとう、大好き」抱きつきながら

←

「これは馬を取り扱うのに便利ではないか、では軍で採用だ、保偉いぞ。」

この一連の流れが必要だそうで・・・。

「鐙の詳細な図面とかだけでいいのに、昼に描くからそれを夜に渡せば」と伝えたが。

私何も間違えたことも変なことも言っていなく常識的発言ですよね。

まさか母上が絵コンテまで用意し更に演技指導まであるなんて。

嫌だと言ったら泣きだし始めた、仕方ないからやると伝える。

直前になってやはり嫌になってゴネたら「鐙なんかいらない」と言い出した。

父上がさすがにそれはと注意しに行ったら、どこで覚えたのかマッハ突きでぶっ飛ばされていた。

頭と胃が痛い、助けてくれ・・・・。

あと司が陰からこちらを見ていてニヤニヤしていやがった殴りたい。

―和―

保ちゃんから聞いた鐙を作る為に保と打ち合わせをする。

鐙を発明までに不自然な流れがないか、完璧にする為一連の流れを教える。

私の考えた完璧な鐙が出来るまで物語を保ちゃんは要らないと言ってきた。

「保ちゃんが反抗期だなんてお母さん生きていけない」と泣いたふりをしたら保ちゃんが「やりますから泣かないでください」と。

本当に保ちゃんは何が不満なのだろうか、この完璧な脚本が。

保ちゃんの可愛さを皆が知って、私は厳しくも優しい母親になって、鐙が出来て騎馬軍団は強くなるし、保ちゃんが私に“大好き”と言ってくれる。

当日になって保ちゃんがやはりやりたくないと言い出した。

「保ちゃんがやらないならば鐙なんか要らない」と言ったら空に怒られた。

保ちゃんに大好きと言ってもらえない辛さが空には分からないのだろうか、

意地悪をする空、頭にきたから保ちゃんが名付けてくれたマッハ突きでぶっ飛ばす。

保ちゃんは良い子だから喜んで脚本通りやってくれた。

保ちゃんに抱きつかれて「お母さん大好き」と言われて鐙も出来た。

幸せな一日だったと布団に入る。

夜寝ていたら警備兵に起こされた、錬兵場でボロボロになった空が

見つかったと、
族が侵入したのだろうか城内の警備を厳重にするように指示する。

第六話、鎧誕生秘話（後書き）

相変わらずどうしようもない内容ですが読んで笑っていただけたら幸いです、ご意見感想お待ちしております。

それにしても、和を出すと話が勝手に出来上がるのは何故だ・・・。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第七話、発明するのはいいけれど（前書き）

今回は前回に続いて発明に関する話を。

とりあえず恋姫原作キャラをそろそろ出したいんですが。

第七話、発明するのはいいけれど

―保―

とにかく司にギャフンと言わせたい、まあ今時ギャフンはないだろうが。

そういえば何故ギャフンという擬音が誕生がしたのだろうか？

ボインという単語を大橋巨泉が発見した時のように、

もう、これはギャフンとしか表現出来ないような何かがあったのか？

どうも、くだらない事に必死で悩む董家長男の保君です。

まあ、なんでいきなりこんな話なのかと言いますと前回の件ですよ。

単なる未来知識保有というイカサマチートで鐙作りましたが、

鐙が出来るまでにさんざん母上に振り回され続け泣かされましたよ。

それに対し親友である司はさすが転生先が“あの李儒”ですよ、

一連の流れに困惑する私を見て助けずニヤニヤするんですから。

伊達に弘農王毒殺しようとする人間ではありません。

まあ、司に嫌味を言ってもニヤリと嫌な笑顔を見せて、

「親子の触れ合いを邪魔したくなかっただけですよ」と言われておしまいか。

私の鐙の時みたいにクソ恥ずかしい寸劇やって色々発明しろよ、なんて思ってやらせても司は動じなかった、普通にこなされた。

司はこの世界で絶賛マザコンだから母親が喜ぶならば平気なんだろう、変態め。

乗馬後に馬の脚を見て「お馬さんも靴が無いと蹄が痛そう」と目をうるうるさせて親の前で心優しき子供の演技を普通にしやがって。

それにしても寸劇やって可愛らしさアピールからの発明って、訳のわからん流れ作った奴出てこい説教してやると叫びたい！

まあ、母上が出てくるだけなんだが。

説教したいがどうせ泣かれて私が悪くないが謝っておしまいと。

「理不尽だぁぁあーーー！」

分かっている母上の涙はテレビでの上島竜兵の技と同じで、こちらが見ていない隙に涙ぐむという、見せるならぬ魅せる技なのが。

分かっちゃいるが男はやはり女の涙には弱いという生き物で。
うん、女で失敗する人間だな、こんな発言しているようだと。

「保さんは女で失敗しませんよ、だってそれ以前に。」

いつのまにか親子寸劇から戻ってきた司がいた。

「心を読むなよ。」

「こういう時のお約束、口に出ていましたよ。」

そんな馬鹿な!?、これが“そんなバカラ!!”ならば、
バカラ賭博中に警察に踏み込まれて捕まった芸人だったな。

「なんか下らない事考えていますね、顔に出てますよ。」

「そっか、まあいいや、ハマらない理由は?」

「私も保さんの家も親が息子依存症と言っていいくらいの溺愛」

だろうなあ、連れていくのが才色兼備家柄性格完璧な女でも、
「うちの子は渡さない」の一言でおしまいだな、しかも運が良くて。
悪ければあの斬馬刀の出番だろうな、しかも、母上のことだから、
ゼンガー・ゾンボルトみたいな名乗りをして一刀両断にと。

「我が名は君雅！董君雅！！保ちゃんに近づく悪を断つ剣なり！！、
こんな感じですかね？」

あり得る、普通なら絶対にあり得ないが母上なら殺りかねない。
やりかねない、ではなく“殺り”かねない、此処ポイント、次のテストに出ます。

「なんであんな悪い意味で個性的なんだ。」

「そりゃ作者の都合でしょ？」

「いや作者も気付くと母上パートが勝手に出来上がっていると。」

「「はぁっっっ・・・」」

お互い困った母親だなと子供らしくないため息をつくのだった、
とりあえずメタな発言は無かった事として。

―空―

お久しぶりです皆さん、同じ夫婦なのに全く出番が無い空です。

うん、真名の読みが空（そら）ではなく、やはり空（くう）だね、
家庭の中で話の中で存在感がない空気並みの扱いと。

こんな未来を予想して今は天国の両親は真名をつけてくれたんです

ね、
なんて先見の明があったんでしょうか、未来予知にも程があります。
グスッ、泣いてなんかいません。

私の涙は置いておいて、あと、やはり泣いてたという突っ込みはなしで。

今現在の涼州の状況とか開発具合について話をしますか。

まずは軍事から、

保達に教えられた鐙で涼州馬を活かした軽装弓騎兵の強化。

例えば軽装騎兵に必要な技術として一撃離脱戦法として、
騎乗しながらの後方射撃のパルティアンショットを教えられましたよ。

訓練に教わった流鏑馬、笠懸を採用、騎上射撃の練度が上がりました。

司君が言うには「この時代最強の騎馬軍団が出来た」と、
軍師としては大袈裟と思ったが、保達の知る世界の歴史では、
約千年後に五胡達の子孫が短期間で世界の大半を支配したと。

まさか五胡の軍団が漢だけでなく大秦近くまで支配したなんて、

だとしたら、この騎馬軍団が世界最強というのもあり得ると。

さらにこれらに関する事で、流鏑馬、笠懸といった射撃練習で、保が、

「本当は犬追物もあった方がいいが殺さないとはいえ犬好きとしてやりたくない、
必要な訓練は分かるが犬を飼っていたから愛犬でなくても抵抗が。」

こんな発言をしていました、そんな保に対して司君が、
「犬好きな女性とのフラグが今の発言でたったね」と謎な言葉を。

一方、和は保に「犬に優しい保ちゃん、なんて可愛いの。」と、
これだけならばまだしも「犬が駄目なら虎がいるじゃない！」

「「何処のマリー・アントワネットの発言だよ！」」
と口を揃え保と司君が謎な突っ込みを叫んでいました。

まあ保大好きな和にかかれば、保の為ならなんだってと、
今から騎乗練習よと、弓片手に虎を狩りに一人で行くとは。

この後、うちの騎兵は虎退治出来ないと一人前と言われない、
あり得ない強さの軍団になるとは思いもしませんでしたよ。

まあ、飾りや服の材料として使えるからと虎の毛皮、
漢方の精力剤として性器が高値で売れ経理としては助かりましたが。

あっ、軍事に関する雑談で保が言うには司君は天才との事で、
私からしたら保の頭の回転の良さや知識だって恐るべきだと。

司君の凄さという点で、弓もだが女子供でも簡単に撃てる弩があった方が楽だと言い出し、
元戎という連射出来る弩を発明したことが保には驚きだったようで。

保が言うには「存在したというが構造不明な物なのに、
どうやって作ったんだよ！だから本物の天才は嫌になる。」

“ごめんなさい保、お父さんは泣いていいですか・・・？”

二人には未来知識があるとはいえ凄い発明を息するようにされると。
それなのに保が卑下するとそれ以下なお父さんの立場は・・・。

―保―

なんか父上が涙ぐんでいる、何かあったのだろうか？

父上に軍師として知的好奇心が刺激されるだろうと、釣り野伏せ、
車懸かりの陣、
ハンニバルなど歴史的な戦術やら武将やら教えてあげることにした。

まさか父上が「保がいれば僕は要らない子なんだーーー！！」と泣きながら叫んで母上の元に辞表を出しにいくなんて。

まあ筆頭軍師が子供に凹まされ辞表は洒落にならないと、説得されていましたよ、母上の肉体言語でですが。

―司―

「足りない、足りない、とにかく足りない！！！」

ついつい叫んでしまった。

保さんと私が中心となって進めている涼州最強化計画が進まない、時間が足りない、人手が足りない、予算が足りない、ナイナイ尽くし。

軍事技術とならば黒色火薬、鉄砲、大砲、方位磁石、大陸全土の詳細な地図作成、細作網を大陸中に広げたり、バリスタやら投石器といった攻城兵器。

いくら予算と時間があっても足りないのが、予算が。

保さんが進める、商工業で莫大な利益をあげているが、
うん、普通ならば十分すぎるどころではない利益なんだが。

とはいえ軍事、政治、商業、工業と至る部門で出ていく額がでかいのが。

しかも、困った事に涼州は偏狭なのに他の州より治安が良く景気が良い、
商売人だけならまだしも他の州から野盗とか流入するのが。

そうでなくても忙しいのに、子供が過労死しそうなほど忙しいってどういうこと。

とりあえず捕まえた野盗は取り調べ、経済難や悪政の被害からやむを得ず盗人になったなら、
勿論殺人、強姦等の重犯罪していないが条件ですが死刑ではなく懲役刑を。

そして牢獄内で建築など技術を教え出所後の働き口の問題を無くすようにしたりと。

それでも野盗が流入してきたり治安が悪化した時は皆叫びましたね。

そして、保さんが遂に壊れました。

「こうなったら見せしめにヴラド・ツェペシュ方式だ！！！

犯罪者は生きたまま串刺しで州境にそれを並べるんだ！！」

流入する犯罪者は減るが商売しにくる商人も減るよ・・・。

本来は私と同じくボケなんだが今この作品では貴重な突っ込み役なのに、

まして、ボケである僕が突っ込みというかストッパーになるとは。

「保さん帰ってきてくれーーー！！！！！！！！！」

第七話、発明するのはいいけれど（後書き）

前書きにも書いたがそろそろ恋姫キャラを出したいなと思ったはいいんです、
ただ問題は今現在黄巾党すらまだまだ先なので出てきても赤ん坊とかになるのが。

それでは駄目だな、ならばどうするかと頭を悩ますばかりです。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第八話、天水からの刺客（前書き）

やっと恋姫のキャラを出せましたよ、いや、これを出したと言っていいのだろうか。

詐欺だと言われても仕方がないレベルですいません。

第八話、天水からの刺客

―保―

三国志の世界に転生したはいいが涼州隴西郡から出た事がない為、狭い世界での生に慣れ過ぎて正史ではなく外史なんだという事を忘れていましたよ。

まあ、両親の性別が入れ替わっているとか、私の存在や、李粛、李儒親子とかも酷いが、
でも、そんなのが当たり前の狭い世界での生活ですよ。

あっ、名乗り遅れました董家長男の保です。

前置きでうだうだ言っていたのは今東屋にいて驚かされていたもので。

涼州に被害を出す?や羌への対策の報告で母上の友達がやって来たのですが、
ちっこくて凄い可愛い現代だったらアイドルに余裕でなれそうなルックスの娘さんが。

こんな可愛らしい人があの馬騰寿成だとは。

しかも、この人が馬謄と驚いていると、いきなり
「私は和お姉様の親友だから、真名は琅(ろうかん)？っていうんだけど真名交換しよう」
といきなり言われたのに更に驚かされた。
会って１０分もたたずにフランクに真名預けて来るとか、なんだこの自由さ。

自分のどころか娘の馬超さんの真名も預けると言いだして、
母上が真名をなんだと思っているんだと怒ったら謝っていたが。

どうやら母上と同い年という事だが、そうなると２９歳でこの見た目に喋りとかって反則だろ。

背は１５０ｃｍ未満？の小さな体で、栗色の長い髪をポニーテールにして、
背だけでなくちっちゃな可愛らしい顔に不釣り合いな太い眉、
年齢的にはアウトだが柔らかい言い方で成長途上という感じな胸、
ギロッ

“怖っ！！！！！！”この世界の人間は心が読めるのか、めっちゃ睨まれた、ちびりそう。

ちびりそうな恥ずかしい事態を無かった事にして話を元に戻しましょう。

鮮やかなスカイブルーの上着に胸元にはオレンジのスカーフ、真っ

白なショートパンツ、
そして足元はスニーカー、うん突っ込まないぞ突っ込んだら負けだ。
この中学生と言っても通じるような可愛い見た目でピョンピョン跳ねるような動き。
何、この合法ロリな生き物は!?これで三十路直前の子持ちって。
「ええい連邦のモビルスーツは化け物か!」
あまりの驚きに大佐になってしまったよ。
AVとかで「女子校生~~」なんてタイトルので女優のセーラー服に無理なのがあるが、
うん、ガチでいけてしまうな、年齢上問題ないがビデ倫審査通るかな?
体は子供、頭脳は大人のコナン君と同じですよ、
『お前と司なんか精神は大人とおり越しておっさんだろ!』
うん?今だれかに突っ込まれた、天の声か?
そういえばコナンで思い出したが昔AVのタイトルで「チン探偵ポ○ン」ってあったらしく、
キャッチコピーが「見た目は子供、アソコは大人!」というのが、
誉め言葉としてどうしようもないな!と笑ってしまったな。
「何か今そっちの方向でどうしようもない不快な思考を感じたよ~。

」

私の方を見ながら可愛らしく言っているが殺気だだ漏れなんですが、こっち見ないで。

ついつい母上と見比べてしまう、琅?さんが若すぎるだけで母上は年相応ですが、
まあ、最近母上は太守の仕事が大変で疲れて老けて見えると愚痴っていたが。

「保ちゃん、何か言いましたか?」

はい、先程の琅?さんよりも濃密な殺気が飛んできましたよ、ちびっと漏れちゃったよ。

「な、な、何もないです母上」

よし!ちびったことは無かった事にしよう。

母上は若干ウェーブのかかった薄紫色の腰まで届く長い髪に、
丸い輪郭に少しつり上がったキツイ感じの目付きに細い縁無し眼鏡、
琅?さんの可愛いとは対照的なクールビューティーという見た目が。

知的眼鏡いいねえ、って、実の母親に対して何を思っているのでしょうか私は。

「保ちゃん、あとで一緒にお風呂に入りましょうね。」

急にニコニコした母上、母上の背景が一瞬お花畑になっていたね、
とはいえ、
何を言っているんですか！？今、言う事ではないよな、あとお風呂
一緒は恥ずかしいです。

母上がシュンと落ち込んでいる。

琅？さんが何があった？と言う風に首をかしげて、父上は何となく
わかったのか苦笑している。

それにしても琅？さんなんでまた馬超を抱えているの、あの錦馬超
がまだ赤ん坊ですよ、
産まれてまだ一年たっていないよね、なんで乳飲み子を連れてきて
いるの？この人は。

うちや司の親みたいに親馬鹿ならぬ馬鹿親で子供自慢なのだろうか？

自慢したくなるのも分かるかも赤ちゃんだが琅？さんの子供らしく
凄く可愛いい顔してる。

ただ琅？さんの遺伝子をしっかり継いだ為か赤ちゃんとは思えない
立派な眉毛が。

琅？さんが馬鹿親として子供自慢で来たのならば良かったんだった
がなあ・・・・・。

―琅？―

？がまた軍団で州境の村を襲ってきたけど派手にやり返してあげたから、
当分の間は襲撃は起きないですと報告しに隴西のお城までやってきたの。

本当は普段天水にいて会う事がないから報告という形で久しぶりに和お姉様に会いに来たの。

和お姉様も私が隴西まで報告しに来ただけとは思っていないみたいだけど、
普段冷静沈着なお姉様や空お兄様が私の考えている事分かっているかなあ・・・ニシシ。

？の件の報告は名目だからと分かってくれているから城の東屋で会ったんだけど、
私が翠を連れて来ているから気を使ってくれて玉座の間ではなく、気楽に出来る東屋にしてくれて、お姉様優しいんだから。

東屋に着く既に和お姉様に旦那さんの空お兄様、それにお姉様の自慢の保ちゃんがいたの。

今日は保ちゃんに要があって来たきたから、会っていきなりだけど、お姉様とは親友だから保ちゃん真名を交換しようと言ったら驚いていて可愛いの。

あっ、それでなんだけど、和お姉様ったら酷いの

「私と琅?は親友ですが、いくら私の子供であるとはいえ、初対面の保にいきなり真名を預けようとするなんて真名の重要性を理解していないの。」

むー、和お姉様は頭が固いの、それだけならまだしも。

「まだ孟起ちゃんが産まれて間も無いのに天水から連れて来るなんて何考えているの。」

用件を話していないから仕方ないけど、翠連れてきたのは意味があるからなのに。

「あっ、説明する前にお姉様とお姉様の家族ならば、孟起でなくて真名の翠って呼んであげて。」

ゴチーーーン

痛〜〜〜いお姉様が本気の拳骨をしてくるなんて、あまりの痛さに涙がちょっと出ちゃった。

「琅?いい加減にしなさい、いくら貴女の娘とはいえ勝手に真名を預けるなんて。」

和お姉様が凄く怒っている、こういう時は謝らないと大変な事に。

「お姉様ごめんなさーーい」

お姉様が仕方無いという感じでため息ついて真名の件でのお説教は

終わって助かった。

それにしても隴西にきた目的である保ちゃんを見てみるけど面白そうな子供なの。

初対面だからとはいえ、人見知りなのかこっちを値踏みするかのように観察していたり、
何か私を見ながらすごく失礼な事を考えているみたいだったりしているようで。

でも、私が保ちゃんをじっと見つめてみると急に照れて目線そらして可愛かったり、
6歳なはずなのに行動に子供っぽさが無くてやけに大人染みていたり変な子供なの。

保ちゃんは3歳までに読み書きとか学び終えていて、今は孫子とかを勉強しているなんて、
孫子なんてお姉様に読みなさいと言われても面白くないから嫌になっちゃう本なのに、凄いの。

「ゴホン」

私が考え事しているから和お姉様がわざと咳払いして注意してくる。

「今日はわざわざ天水から隴西まで？の件で報告しに来たのですか、既に無事鎮圧も終わり報告の書簡も届いているのにわざわざですか

？」

和お姉様が直球で聞いてきた、私としてはもっと溜めて溜めて溜まりきったところで、
ドカーーーンと爆発するように驚かせたかったのに。

仕方がないから今日ここまでやってきた理由を告げる。

春の日差しを浴びながらと心地よい気温の東屋が一瞬で北風吹きすさぶ真冬になっちゃうなんて。

お姉様が保ちゃんを大事にしているのは聞いているが、まさかこんなだなんて。

―空―

数日前仕事をしていると、天水からわざわざ琅？が？の件で報告しにくる、
という報告の書簡が届いた時から猛烈に嫌な予感がしていたのだが。

見た目だと年齢は全く違うが、実際は和と同い年であり、三カ月しか誕生日が変わらないのに、
琅？は「和お姉様」と呼ぶのが、和がお姉様と呼ばれる度に不機嫌

になるのが、
和もまだまだ若いのに歳を気にするなんて。
まあ和に言わないが、言ったら怒られるのは嫌なので、君子危うきに近寄らず。

琅？が来るといつも何かしらの騒動が起きているから、当日は朝から胃が痛くなる。
産まれたばかりの孟起ちゃんを連れて報告しにやってくるというから、
確実に？の件で来たのではないのが分かるので堅苦しい玉座の間ではなく東屋でお茶しながらと。

琅？が涼州の軍事の責任者の一人であり、責任者とはいえ琅？は知らないので、
軍師である私の補佐職にあたる保を立ち会わせたが、なんでそんな判断をしたのかと。
結果論にしか過ぎないんだがあの時の判断をした私の馬鹿さ加減に嫌になる。

まさかあんな問題発言があるとは・・・・・。

「和お姉様、保ちゃんと翠を将来結婚させたいの。」

ピシッと音がして東屋周辺が凍りついてしまうとは。

第八話、天水からの刺客（後書き）

馬謄さんのキャラや口調をどうすればいいか分からなかった、喋りや性格は蒲公英、戦いに関しては翠というイメージが。

分かりやすいベタな展開の話ですいませんでした。

皆さまのご意見ご感想お待ちしております。

第九話、保君頑張って考えてみる（前書き）

ギャグにもシリアスにもなりきれない中途半端な文章になってしまった。

相変わらずな駄文ですが、もしよろしければ読んでみてください。

第九話、保君頑張って考えてみる

―保―

皆さんは子供の頃夏休みとかで楽しい思い出はありましたか？

私は夏休みとか長期休みになるのがいつも憂鬱でしたよ。

大抵、休みになった初日の夕食の際の母親にいきなり言われるんです。

「馬乗りに行く旅行に申し込んであるから、“明日”から“三週間”行きなさい！」

事前にそんな旅行の話無し、いきなりですよ、こちらの予定関係なしですよ。

家族全員と旅行ならいいじゃない？いいえ、私一人だけで行かされるんです、

そういえば家族旅行の記憶ないですよ我が家、いつもみんなバラバラで。

ホテルや旅館に泊まって乗馬でしょ優雅なものでしょ？

自分達が世話する馬のいる厩舎の二階に毛布でくるまって寝る生活です。

当日朝集合地点に着くと日本中から私と同じく死んだ目をした子供達がいて。

着いた先は、テレビもねえラジオもねえ車もそれほど走ってねえ♪
あの歌が笑えない、ほぼそんな場所なんだ、そんな牧場で生活スタート

朝5時前に起きて馬の世話して、一日中馬に乗って、飯喰って、寝るの繰り返し。

辛いのは厩舎掃除、尿と糞の臭いがね、まあ人間みたいにトイレ行けないからしかたないが。

あと馬の世話している時によく蹄で足を踏まれたがあれも痛くて辛いんだ。

人間より重たい体重で踏まれるから挟まれた足を引きぬく事が出来ない、
馬の足をどかそうとしてもどかしてくれない、足を持ち上げようとしても子供の力では無理。

馬は臆病だから大声出してはいけないと注意されているから、怒鳴らないように
必死で我慢しながら馬の首筋撫でたり機嫌とって足をどかすようにしたりするのが。

馬にずっと乗っているから尻と太ももの皮がべろんべろんに剥けて痛いし。

落馬なんか最悪でしたよ、砂まみれになるは落馬の痛みで動けないは、
だからロデオとか見る度に馬鹿じゃないか、と思ったりしますよ。

あと痛いでないが精神的に疲れたのが、全国から集まった子供達の歳が違うから、
歳上で威張ろうとするのがいると嫌な序列が出来ていて、気疲れ。

実に苦い思い出だね、長期休みに地元の友達と遊んだ記憶が全くないし。

そういえば他にも山でテント生活二週間なんてのもやらされたりしましたよ、
今日は川で魚を捕まえられないと食料無しになるとか、
ライター、マッチ何それ?どうにかして火をつけないと生の川魚だよ、とか。

冬だとスキー、苗場とかあんなおしゃれなゲレンデではなくて、
荷物背負って山岳スキー、冬の雪山を攻める一員なの子供なのに。

ただこれらのおかげで大抵の事が辛いと思えなくなりましたよ。

乗馬やらサバイバルとかさんざんやらされたせいで三国志の世界に来てもあまり苦労しないのが。

三国志の時代なんて不便だろうと思ったら意外と平気と。

そう考えると偶然なんでしょうが、私の幼少期って英才教育?、三国志の時代に送り込まれてもやっていけるようにするための。

どうも作者・・・もとい、主人公の設定である子供時代の記憶に現実逃避していた保です。

なんでこんな現実逃避かって言わせないでくださいよ。

馬膽様が娘の馬超ちゃんを連れて城に来たと思ったら、母上に“私を馬超の将来の婿に”と言い出して場が凍りついたからですよ。

馬超ちゃんはまだ1歳にもなっていないのに早すぎ、まして私は体は6歳ですが、

転生してますから心は39歳ですよ。

もし馬超ちゃんと結婚することになったとして式あげる頃には私の心は還暦間近ですよ、

子供が成人した頃には下手すれば、ではなく確実に心はジジイですよ。

いきなりなんでまたこんな話になったんだ。

―空―

誰か助けてください！！

保を取られるという妻の怒りの殺気が凄すぎて気絶しそうです、今にも琅？に切りつけかねなさそうなのが。

妻の暴走も怖いが、理由もなくこんな話がくるわけはない、何故なのか考えろ私。

今回の話が来たのは何故だ？

やはり羌側からなのか？

漢王朝が異民族対策をしろと漠然とした指示してきたのを利用し、殺しあうのではなく異民族も取り込み融和しようとやってきたが。

こちらには羌族との混血である琅？がいるので交渉役になってもらい、

食料や家畜飼料の支援することで羌族とは良好な関係が築けている。

ただ、今は良好な関係を築けているとはいえ羌族も次の世代になっても融和政策が続くのか？

それに対する手段で羌の人間でもあり漢の人間でもある琅？の子供である孟起ちゃんと、
融和政策の指導者である董君雅の息子である保を結婚させようとした？

羌族と保で婚姻だと漢王朝は反意有りか？と難癖をつける可能性があるから。

実際、王朝の目の届きにくい遠方である涼州で異民族対策でと募兵し続ける、
それを好ましく思わない人間が洛陽に多いのが。

しかも、兵を集めながら異民族打倒ではなく融和なんてやっている、
それで羌とうちの家族が縁組みとなると漢に対し反意有りなんて騒がれかねないのが。

ならば、これが羌にとっての次善の策として提案されたのか？

琅？の策だろうか？天水郡も琅？みたいな漢王朝寄りもいれば韓遂のような反漢王朝もいる、
表立ってはまとまっているが一皮むけば一枚岩でないという状態にある。

太守一族と縁組みすることで威光を利用して天水をまとめるつもりなのか？

うむ、提案された理由が分からない、では、この話を受けたらこちらの利益は何か考えよう。

羌族との安定した関係の維持、涼州に歯向かう匈奴・？対策に集中出来るというのが。

精強で名高い馬謄率いる軍団を再編して取り込めるというのも大きい。

お互いに利益は大きいが計画としては荒い計画だ。

琅？は羌族との混血で羌の協力者だがやはり漢の人間である、どちらか一方にたてるのか？

和や私がいなくなった後に保が涼州を継ぐ保証はない点、保が方針転換する可能性。

だが、一番の甘さは、和の保好きを甘く見すぎたなと。

和の保大好き度は、いざとなったら一人で五胡全軍を相手するとか言いかねないくらいなのに。

和を見てみる相変わらず怒りで殺気が凄いが私のように何故この話がと考えているようだ。

そんな状況で肝心要の保を見ると、子供らしくないため息をついていた。

―保―

母上は今にも怒鳴りだしそうだが必死でこらえている、
父上も母上もどちらもなんでこの話が出たか悩んでいるのかな？

うーん、こういう時は一旦検討するといって翌日以降持ち越しにして、
お互いの考えや今後の対策をじっくり話すべきだが、母上がその前に限界迎えそう。

私の正体を隠したいから出しゃばりたくないが早く終わらすために仕方ないやりますか。

「はあっ」

ため息をついてしまった、ため息をつくと幸せが逃げるとよく言うが。

私のため息に両親が反応する、アイコンタクトでここは任せてと伝える。

伝わったか不安だったが、両親共に頷いてＯＫしてくれた。

「本命の案は羌への支援拡大ですか？」

馬謄さんが明らかに驚いた顔をしている、やはりそっちが本命か。

囮の提案である婚姻が成立すれば万々歳、だがあくまでも最初に無理難題を出して、
断られていいようにして本命の対案として支援拡大案を出して了承させると。

まあ、よくある手段ですね、単純だが効果がある、囮を使う事で、
答えは何個もあるはずなのにこれしかないと思えてしまうんだよなあ。

うーん、私をだしにされたのは面白くないので少し苛めてみましょう。

今までたんなる子供だと思っていた子が腹の底読んでいたなんて不気味でしょうねえ。

親達も驚いている、まあ、私の正体を隠す為黙っていると思ったら私が話し始めるんですから。

ここでまたわざと可愛らしい言い方してみますか。

「お腹がすいた羌に涼州がご飯を上げたら他の子供達は羨ましがらないのかな?」

こっちに支援拡大要請するのはいいが、五胡は一つにまとまった民族ではなく、
あくまでも漢王朝に認められなかった異民族の団体ですが、羌がこちらに近づきすぎたらどうなるか。

馬謄さんは羌出身だが今は馬謄さん個人があくまでも涼州の軍人として戦っているだけ、
だが羌がこちらに近づいてきたら他はどう思うか、涼州の前にまずは裏切り者から血祭りになんて事も。

「お腹すいたら涼州のご飯食べて遊んだら仲良し、でも今までのお友達と仲良くできるの?。」

あと他の民族がどう思うかではなく、羌の部族の人間が涼州と組んで他の部族と戦えるのか?

馬謄さんの表情がどんどん変わって言っている明らかに動揺している。

うちからの支援が拡大するとなるとどれだけのリスクが増えるか計算しているだろうが、
これくらいで動揺するなんて、見積もりが甘くないかなと、こちらにはまだまだ手段がある。

いざとなった時の涼州の提案は今の政策と相反するが強烈なのも。
羌が?を売る事で漢王朝に服従したとか情報を流したり、優遇することで、
こちらではなく彼ら自身潰し合わせ弱ったところを一呑みするとか。

「白い猫でも黒い猫でも鼠を捕る猫は良い猫ですよね。」

涼州に従ってくれるならば何処の部族だって、邪魔なら切ればいいだけ
無邪気な感じで言ってみる不気味に感じるだろう。

単なる子供がこんな事言う、ただその子は太守の息子、まさか太守達も同じ意見なのか?
子供が考えているのではなく太守達の本音だろと普通なら思うな。

会った直後の軽い感じではなくなっている馬謄さんのまとっている空気が。

私が一方的に殴り続けているだけですが、そろそろ助け船を出しますか。

「馬謄様言葉が過ぎましたことをお詫び申し上げます。」

急に私が謝るから、どうすればいいんだと一瞬ポカンとしている。

「謀に対しては謀をと、つい、からかってしまいました、お詫び申し上げます。」

こちらの本意ではない事を伝える、まあ、こうなるとそう簡単に信用できないだろうが。

「羌への支援拡大検討させていただきます。」

一旦言葉を区切り馬謄さんの顔を見てみる、どういう腹積もりか？と判断しているのか。

「馬謄殿はまだしも羌の方の中には仲間と戦うのは辛い方も多いでしょう、ですので、対価は？など他の部族への不可侵および貿易の交渉説得、および牽制の協力をお願いしたいのですが。」

正直協力など無くても？などは食いつくでしょう。

今回も追い返され涼州には敵わないというのが分かっている所に、涼州だけでなく羌が説得に来れば、まして隷属ではなく不可侵と貿易という形ですから。

まあ協力してくれている羌の顔がたつようにしないと。

とはいえこちらは交渉の場に軍を連れていく砲艦外交をやるつもりではあるんですが、

争って全滅よりかは手を取って飯を食う、の方が選び安いでしょうし。

馬謄さんが急に私の前に立ったかと思うと跪いて

「董擢殿への数々の無礼深くお詫びします、我が姓は馬、名は謄、字は寿成、
私の真名琅?を董擢殿にお預けします」

ふう、どうやら今回の騒動の解決の目処がついたようです、今後の異民族対策の方針もつきましたし。

問題は涼州の最高責任者である両親の目の前で、私が相談することなく、
勝手に異民族対策という大問題で話を進めているのが。

こんな独断専行したらどうなるかな、うん下手すりゃ、下手しなくても処刑されかねないね。

さてどうなるのかなあと思ったら、別の問題が起きた。

「異民族問題は目処付いたから良いけど、結婚しないの?董家も馬家も安泰するよ。」

「何故今日はいないはずのお前さんがいて、話に混ざろうとしているんだ司くーーん」

「休日だった母親と買い物していたが面白そうな事ありそうだから

きたの、
そしたらこんな楽しい事が、ちなみに最初から見ていたから、そこの茂みから二人で。」

李粛さんまでいたよ、オイオイ大丈夫なのかこの城と思っていると怒声が。

「やはり我慢出来ない、どんな理由であろうと保ちゃんに近づく悪い虫は取り除かないと、
保ちゃんのお嫁さんは私なんだあああああああ。」

うん、聞こえてはいけないような発言が聞こえたような・・・・。

とりあえず、遂に母上が斬馬刀を引きぬき琅?さんに襲い掛かった、
あっ、止めに入った父上が一撃の元に吹き飛ばされた。

どうするんだよこれ、とりあえずは原因である司をぶっ飛ばすか。

「司君すこしＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＨＩしないとね。」

いろいろあったが、今日も涼州は良くも悪くも平和です。

第九話、保君頑張って考えてみる（後書き）

うん、本当にシリアスもギャグも中途半端な話になってしまった、うん、馬謄の理由も覚悟も無しだな、ご都合主義にも程がある反省と。

ちなみに幼少期の思い出は誇張無しです、普通とは無縁だったなあ・・・しみじみ。

みなさん今回の話もお付き合いいただきありがとうございました、皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。（前書き）

うーん、今回もギャグが少なめ、シリアスな文章を書けず、ギャグも半端なんですが読んで楽しんでいただけたなら作者冥利につきます。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。

ザッザッザッ、砂地を速いテンポで元気良く駆け抜けていく二人の足音が響く

「まだまだ先は長いから飛ばしすぎないでね、吸って吸って吐いて吐いてだよ～。」

ドタドタドタ、先程走り抜けた二人とは対照的な重たい足音が。

「おらっ、とっとと走れ走れノロマ共が！いつも馬に乗れると思ったか！」

「「「「「はいっ！！！！！」」」」」

更に走り続ける

ザッザッザッ

「二人共若いんだからもっと足を上げて元気良くいくよ～」

「「はいっ」」

ドタドタドタ

「遅いんだよ、早く走れ騎馬隊にケツを槍で刺されたいか！」

「「「「「ヒーーー」」」」」

ザッザッザッ

「二人はあと五周だから、ここから更に飛ばしていいですよ。」

「「はい！！」」

ドタドタドタ

「二人に抜かされた奴は罰でもう五周と昼飯抜きだからな！」

「「「「「「ウギャーーー」」」」」」

城壁の周りを元気良く競争するちびっこ二人、それに対し、
バテバテになりながら走る大人達、その後ろで追いたてる少女？

ー司ー

「第三者視点で見ると凄い絵面だな。」

「どうした司？急に独り言なんて」

独り言が聞こえたらしく競争していた保さんが速度を緩め話しかけてくる。

「たいしたことじゃないんですが、訓練風景を端から見たら異常だなと。」

「たしかにガキが元気に大人が悲鳴、見た目少女が怒声って。」

こ〜んにちは僕司君です！！

ドラ〇もんっぽく名乗ってみました。

勿論ドラ〇もんはのぶ代ですよ、わさびは認めません、
ちなみにサ〇エさんは日曜日だけでなく火曜日にもやっていましたよ。

火曜の方はお隣が浜さんでしたが、たしか浜さん家は画家でしたっけ？

周りを見ると日曜日のサ〇エさんしか知らない人ばかりって僕も年老いたなと、
知らない人に説明するならば火曜日が外史、日曜日が正史？

多分正史は新聞連載なんでしょうが。

サ〇エさんトークは置いておいて状況説明をしましょうか。

只今琅?さんの部隊に混ぜてもらっての訓練中でございます。

もうすぐ8歳になりますが少しずつですが人外に近づいてきております、
兵隊さん達軽装にたいして子供が重装備で更に重り背負って圧勝ですから。

まあ圧勝も当然なんですが転生引き継ぎしてますから生まれた直後から大人の体力、
それに鍛えた分強くなれる成長限界突破これだけでも反則。

あと異常な健康ですよ、これがチート具合を加速させていますよ。
普通ならば運動→筋肉痛→二、三日間休憩して超回復→筋肉太くこうなるはずなのですが

激しい運動→筋肉痛になる前に回復→筋肉ついている。

成長限界突破ですから、このままいくとオーガどころか、
８０歳とか普通ならジイサンだがフリーザ様並みになりそうで。

『久しぶりです神様です、フリーザは無理、ただし江田島は余裕』

おい、いきなり念波で語りかけないでくれ。

『たまには出番をと思ってな、そんな話は置いておいて、
転生前に話をしていた武器をいい加減に取りに来い。』

どうやら私達二人の鍛練の成果が出てきたようで、
神が用意する武器を取り扱えるようになったようです。

『あっ、神具はさすがに今程度ではほとんど無理だから。』

むう、ままならないものです、ならば何故呼んだと。

出番が欲しいなんていったらファラリスの牡牛でこんがり焼いてやる。

『それは怖いぞ、私は死なない分永遠と焼かれるのは。』

やはり出番欲しさか、いつか殺ってやる。

とりあえず武器を手に入れるにはどうすればいいか尋ねると、
城下町の武器屋、鍛冶屋が並ぶエリアに来れば分かると。

保さんに神と会話したことを伝え、午前の訓練が終わったら街に行こうと。

この後の訓練で組手となり保さんと二人一組で琅?さんに挑んだが、
ボコボコにされ過ぎでしたよ、あまりにやられ過ぎて途中の記憶が

ない。

琅?さんは得意の槍を使わず無手で、私と保さんが馬上で使うのに便利だと習っている槍で。

普通は刃を潰した槍なんだが真剣ですよ、危ないと思ったが。

そんな心配まったく要らなかったですよ、かすりのかの字も無かった。

私達の実力としては、琅?さんに毎日鍛えられている兵隊に余裕で勝てるんですよ、
小隊長クラスでも余裕で勝てますよ、いやまあ、調子にのっていたわけでないが。

でも、これだけボコボコにされるとは。

多段突きを全て紙一重で避けられ槍の柄を掴まれたと思ったら投げられた保さん。

私は今がチャンスだと保さんを投げた瞬間を狙い背中から切り上げるが、
振り向きざまに裏拳で槍頭をぶっ叩かれはじかれ「残念」と言われ懐に飛び込まれ鳩尾に一撃。

避けられ、捌かれ、白刃取りされ、小突かれ、蹴られ、投げられ

本当にここまでやられているのにこれでオーガ以上になれるんでしょうかねえ。

ハッと気付いたころには全身ズタボロですよ、普通なら余裕で全治一ヶ月とかでしょうが、
このふざけた回復力のおかげでなんとかなるのが、明日には完全回復しているでしょうし。

それにしても七歳児がここまでボロボロになりながらも向かい続けている姿に、
琅?さんに率いられていた百戦錬磨の兵達がビビってしまうとは。

うーむ、体力だけは凄くても技術がまだまだですよ、回復はするが痛い物は痛い、
手っ取り早く強くなれませんかねえ、とか無理な事を考えてしまう。

とりあえず午前の訓練が終わり、昼食を済ませて午後から街に出て武器をもらいにいきましょう。

一空一

保と司君が琅?の訓練を終えて戻ってきた、まだ小さい体なのに強くなりたいと頑張る、
親馬鹿な意見だろうが二人とも恰好いいじゃないかと思ったが、姿

を見てさすがに引いた。

食堂でご飯を食べるのは良い、せめて顔を洗い治療して着替えてから来てほしい。

顔は青あざだらけ、鼻血を流したのにふき取っていないから血が乾いてこびりついているは、
服は破れ、ご飯を持ってきた侍女達があまりの姿に卒倒しているのは。

保も司君も私なんかより頭がいいのだが、常識がいささか不足しているというか。

どうしてこうなったのだろうか。

あと、今の保を和が見たらどうなるだろうか、不安で仕方がない。

噂をすれば影がさす

「保ちゃん、司君せめて顔洗って、着替えるくらいしなさい。」

「「「「「えっ！？」」」」」

食堂内にいる皆が驚いている、訓練だとはいえこんな姿になっているのに。

絶対に何処からか取り出した斬馬刀を片手に握りしめて、
「琅？いますぐ出て来い、保ちゃんの敵は叩っ斬る」位言うはずなのに。

「あなた・・・・」

まさか私が斬られるとは・・・・。

―保―

昼ご飯食べたのですが何を食べてもレアステーキを食べているのか血の味しかしないです。

あと父上が母上の斬馬刀でまさに叩き斬られていました、あれはいくらなんでも。

アンデルセン神父並みの回復力の私でもあれは無理かも、なんで父上は無事なのだろうか。

とりあえず父上への疑問は置いておこう、司連れて武器をもらいに行きましょう。

武器屋鍛冶屋が集まっている所にいけば分かると聞いたがどんな店なんでしょうか。

区画整理を行い業種毎に固めた為、この一角に来ると鉄を打つ槌の

音が至る所で聞こえる。

そんな一角に明らかに不釣り合いな建物が、

明らかに違うねえ、武器屋だよねえ、なんでコンビニっぽいの？

自動ドアだよ、何これ？

テンテンテンテンテテテンテレレレレってあの曲が流れたらファミマだよ。

でも、武器屋だね什器に並ぶ物が一番くじでなくて青龍刀とか飾ってあるよ。

秋葉原にはエロのコンビニがあったが、涼州には武器のコンビニがあるとは世界は広い。

そんなくだらない事を考えていると見た事ある人間がやってくる。

『おっ、来たか』

おいっ、神、自称でなくて神なんだろ、なんでお前がいる。

『久しぶりに会いたいと思ってな』

「出番欲しいとか言ったら八つ裂きにするからな。」

明らかに司が不機嫌だ、もうすこし友好的にいかないと。

「お前なんかの出番があるのに、なぜ母さんの出番が無いんだ。」

うん、不機嫌になるね、このマザコンは。

拠点話で司親子の休日とかやりたいとか言っているが何が面白いんだとかいうくらい平凡だったし。

あまり変な話をしていると話が進まなくなるので武器を見せてくれと。

じゃあ、奥の部屋に来てくれと、どう見ても冷蔵庫裏に向かう扉だよな、ついたら真っ白な部屋だ。

俺と司が転生前に呼ばれた部屋だ、何処までもどこまでも真っ白な床と天井しか見えない部屋。

『この携帯に望む物を言えば武器が出てくるぞ』

まさかあれかなと思い、神から渡された携帯らしき物体に「武器を」と伝える。

やはり見た事ある奴だった、マトリックスで武器出て来るところだ。

端からものすごい勢いで武器満載の棚の列がやってくる、ギャグな作品だから、

その棚に吹っ飛ばされるくらいありえるのだが無事だった。

とりあえず感想としては武器の準備やり過ぎだ。

こっちは未来知識を総動員してこの時代に無い武器を作ってやろうと黒色火薬を作って、
火縄銃を作れないか研究してるのに普通にＸＭ１０９ペイロードやＭ１３４とかあるよ。

歴史がひっくり返るよ、まあ既に自分達が思いっきりひっくり返しているか。

でもＭ１３４には夢があるね、バッテリーと弾丸背負ってこれで戦う、
プレデターでもターミネーター２でも使われたし、格好良かったのが。

フル装備で１００ｋｇ超えて反動もあるから現実では無理なんだが、
子供ですらあり得ない体力というこの世界なら使えてしまうのが。

憧れを取るか？チートをある程度抑えるか？

やはりこの時代で使えそうな武器を捜すか。

そうおもって三国志的な武器を捜していると見つけた三国志の世界ならばやはりこれか、

実際にはまだこの時代には無いはずだが、まあ演義で存在する方天画戟を手に取る。

あとはこれは私の趣味だが流鏑馬やったりするので重藤弓を。

武器はこの二点でいいやと思い、暇だから部屋中の武器を見てみる、黒漆五枚胴具足、メルカバ、グルカナイフ、潜水艦やらなんだってあるよ。

ピアノ線まであるよ、本来はキャタピラ潰すくらいしか使えなさそうだが、
一応もらっておこ、ピアノ線使っていざとなったらピアノでも作るか。

『ここは武器ならば何だってあるからこそ、そのコンセプトからコンビニにしたんだ。』

“絶対に嘘だ!!”後付けの理由に違いない、目立つ為とかそんな程度の理由に違いない。

神に対し内心突っ込んでいると「これがあったんだった!」

司の声が広大な空間に響く、少し離れた所にいた司が何かを手に持ち呟いている、
「三国志の世界ならばやはりこれか」なんか方天画戟見つけた私と同じような事言っている。

司が手に取っている本をこちらに見せてくるまさかあの“太平要術の書”とは。

「三国志でも演義でだがこれと張角の身柄をこちらが事前に抑えていたら黄巾党の乱起きるかな？」

黒い笑みを浮かべながらの発言である、だが、正直実に面白そうなたくらみではある、
こっちが黄巾党を立ち上げないようにしたら発生するのか気にはなる。

三国志のＩＦの世界であるならば楽しまないともったいないなと二人で意見が一致する。

こんな風にして武器を手に入れるのだった神の『ロンギヌスや草薙の剣はいいのか？』
あまりに物騒な単語が聞こえてきたので聞こえないふりをしてコンビニを後にするのだった。

司は鉄扇と太平要術の書と二点だけ、意外と二人とも欲が少ないんだなと改めて思った、
とはいえ、伝説の物体である太平要術の書とか手に入れている段階で欲深いか。

自分達の事なんだが、はてさてこの三国志の世界をどういじれるの

かな、楽しみではある。

第十話、なんでこんな場所にこんな建物が。（後書き）

とりあえず太平要術の書を出してみました、いくらご都合主義だとはいえ
ちょっとこれはという感じになりましたが。

この話を読んで笑っていただけたならば幸いです、ご意見ご感想お待ちしております。

第十一話、絶対に負けられない戦いがある（前書き）

とりあえず恋姫キャラを更にどんどん出していこうという事で更に話を進めてみました。

相変わらず壊れたメンバーばかりで収拾つくのかと作者ながら悩むばかりであります。

第十一話、絶対に負けられない戦いがある

―司―

こんな保さんを見たくなかった、なんでこんなことになったんだよ・・・。

保さんの色々な姿を見ていると面白いですよ。

前にも話しましたが、アーーーな人たちが集まるサウナに騙して連れて行き、

“自分の貞操の危機が！？”と怯える姿を見てついニヤニヤしてしまった事も。

普段ふざけているが急に真剣になって事業について話す姿も良いですよ、

皆でこっそり準備して誕生日祝いやった時の照れ臭そうにする保さんも良いですし。

保さんのいろんな姿を見る事が好きなんですよ、私のライフワークの一環として、

楽しいですよ、この人はいろんな面を持っていて観察していて感心してしまう。

でも、こんな姿の保さんは見たくなかったよ。

「妹がこんなに可愛いなんて、生きていてよかったーーーー！！」

どうも、李儒文優こと腹黒軍師な司です。

保さんの叫びから分かりますように保さんに妹が出来ました。

三国志史上最大の悪役、あの董卓仲穎が遂に誕生しましたよ。

悪役とは言いますが、それは敗者だからこそ悪役になっただけで、
歴史の勝利者だったならば悪くは言われなかったでしょう。

実際羌族とは良好な関係を築いたり、部下に恩賞を配ったり、
かなりの親分肌だったみたいですし、死んだあと惜しまれたりとか
もありますし。

劉備の方が遥かに胡散臭いですよ、あんな乗っ取り屋が仁君って。

まあ、劉備だろうが曹操だろうがどんな三国志の英雄でも、
我々涼州の邪魔をするならば早々にご退場していただきましょう。

大陸全土に広がっているうちの会社によってね・・・ニヤリ。

おっ、といけません、つい楽しい想像して現実逃避してしまいました。

今は保さんを現実に引き戻しましょう。

「保さん、保さん仲穎ちゃんが可愛いのは私もよく知っていますが、
仲穎ちゃんを愛でるのはとりあえず仕事終えてからにしましょうよ。

」

ギロッ

怖っ、保さんだけでなく空さんまで睨んできましたよ。

睨まれただけで人が死にかねませんよあの視線は。

メドゥーサじゃないんだから、あれは石ですけども。

ちなみに太平要術の書を手に入れたあの日から2年がたち、
私達も9歳になりましたよ、キンクリしたのは許してください。

仲穎ちゃんが産まれて半年以上たっていて毎日会っているのに、
いまだに毎日これなのだから兄馬鹿にも程がありますよ。

やるべき事は幾らでもあるんですよ太平要術の書を手に入れた事で。

便利な物です、便利で済ませてはいけませんね反則です、
子供達がやる草サッカーにバルセロナを送り込むくらい卑怯です。

此方が望む知識がどんな物でも幾らでも手にはいるのですから。

保さんとの意見で歴史だけは見ないようにしました、
さすがにそこまで分かってしまうのは興醒めですから。

とりあえず我が国の為、色々な物の作り更に名産品が増えましたよ。
食料ならば砂糖、養蜂、麦芽糖、ビール、日本酒、ワイン、焼酎、
医療ならばペニシリン、阿片といった薬品も出来ました、
安価な紙や鉛筆の製造、活版印刷とか金になりそうな物は片っ端から。

それらは三国志の中で商売人として有名な張世平蘇双と協力関係を持ち、
商品の委託販売、または製造販売させパテント収入を得たりしています。

商売人は我々と組み利益を出す限りは裏切らないですから。

あと信用出来る部下を徐々にですが各地に散らばらせ、
涼州のアンテナショップ兼地域の情報を得るスパイの拠点としたり。

やることは幾らでもあるんです、１日が４８時間になっても足りません。

この大陸の外れであり疎まれてきた辺境の涼州が、
食料、衣料、医療、軍事、文化といった至る物で、
大陸をけん引しようとしているのに大丈夫なのでしょうか？

漢王朝に疎まれ厄介者扱いにされてきた涼州の怖さを漢に見せつけてやるんだ！

ロックフェラーや三菱のようになるんだ、奴らを手の平の上で踊らせてやるんだ！

馬鹿共はそれに気づかないでいる、その間抜けな姿を見て笑い飛ばしてやるんだ！

と言っていた、あの時の保さん帰ってきてくれえーーー！！！！！

―保―

司がまた怒っているようだ、むう、残念で仕方ない。

仕事に熱心なのは良い事だ、いや私も仕事はきちんとやっていますよ。

何故司は私の内からあふれる月への愛を理解してくれない！？

司は前世で妹がいたから、妹に夢を見ていないんだろうが、
私は前世で妹がいませんでしたが、妹に夢見るなんて無かったですが。

“おれのいもうとがこんなに可愛いわけがない”なんて作品がありましたが、
あれをみて司の言った言葉がよかったなあ。

「あんな妹がいたら、とりあえずアックスボンバー食らわしているね。」

それを聞いて大笑いした後、私は

「私ならば木村健悟ばりに稲妻レッグラリアートを食らわせるが。」

そんな私の発言を聞いて大笑いする司だったな。

やはり似た者である司と私は、でも、月への愛を叫ぶと司がため息をつくのが何故だろうか。

寝台ですやすや寝ている月の寝姿だけで丼飯5杯はいけるくらい可愛いのに。

お母様に似た紫色のウェイブのかかった髪、まあるく光輝く特徴的なおでこ、
赤ちゃんだからというだけではなく小さな体を見ると私が命かけて守ってやらないと覚悟を決める。

私が三国志の世界に転生したのは月の兄になる為に違いない。

そうだそうに違いない！！

ああ、この嬉しさを、この喜びが、情熱が、体内からあふれて来る。

「妹の月が可愛過ぎて生きているのが辛い、なんでこんなに可愛いんだーーーー！！！！！！」

つい部屋の窓を開けて外に叫んでしまった。

ふと視線を感じたので振り返ったら、父上がサムズアップしていた。

“今日、私は父上と本当に親子になれたんだと思いました、ありがとう父上。”

だがこの後、母上に「月が寝ているんだから静かにしなさい」と父上共々ぶっ飛ばされるとは。

でも、月への愛があるからそれくらい余裕で耐えられるんですが。

とはいえ、これ以上怒られないように仕事を早く終わらせますか。

とりあえず父上に相談して月誕生記念で祝日を作るかなと。

―空―

娘が産まれたがこれが実に可愛くて可愛くてしょうがない、
和が言うには目元は僕そっくりだと、全体的に和そっくりだが。

お互いの良い所を全て取った可愛い自慢の娘になってくれるであろう。

息子の保だって自慢出来る息子だ、ただ、可愛らしいではなく、聡明さ、あと最近は成長してきて逞しさが出てきた。

逞しく賢い兄に可愛らしい娘、董家自慢の兄弟である。

今や私は、知性では保や司には及ばず、武では和や琅?には届かず、そういう点では父親としては大変情けないかぎりだが。

あの子達が笑顔でいられるように私は露払い役として頑張ろう、子供達の笑顔を守る為ならば私は鬼にも悪魔にもなってやろう。

少しは父親の格好良い姿を見せてやらないと親として情けないから。

それにそうすれば、いずれ大きくなった月が私を見て言ってくれるだろう。

「お父さん格好良い！そんなお父さんが月は大好き！
月は将来大きくなったらお父さんのお嫁さんになる！」

と言ってくれるに違いない。

ドゴッグチャ、鈍い音が室内に響く

い、痛い和と保に殴られた、司君が汚い物を見る目で此方を見ている。

「貴方思うのは自由ですが声に出ていましたよ。」

なんと・・・！！声に出ていたとは。

保が和に続いて注意してくるかと思ったら、意外な言葉が。

「思うのは自由だが月は僕のお嫁さんになるんだーーーーー！！！！」

よろしい息子よ、私は今、父として男としてお前の前に立ちふさがる壁となってやろう。

和には勝てなくても私もそれなりには武を嗜んだ、その力を見せつけてやろう。

絶対に負けられない戦いがある！！

保ともども和にぶっ飛ばされるなんて、怒れる和に勝てる者はいなかったか。

だが、私がやられても、すぐに第二第三の月を愛する私が現れるであろう・・・グフッ。

第十一話、絶対に負けられない戦いがある（後書き）

常識人だったはずのお父さんまでこんな事になってしまった、本当に大丈夫なのかこの話は？

とりあえずこんな駄文ですが笑っていただけたら幸いです、皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？（前書き）

この悪ふざけ作品で珍しい真面目な展開、まあ見事なご都合主義です。

とりあえずどうしようもない駄文ですが、今回も皆さん生温かい目でよろしくお願いします。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？

―保―

天水にておかしな動きあり謀反の兆し有りか？

執務室で私と両親、司親子、琅？さん６名が揃っている時に伝令が来る、
涼州に散らばった商人、となっている細作達からの早馬がくる。
むう、遂に涼州の武闘派韓遂が動き出しましたか。

とりあえず集めておいた天水に関する資料を並べそれを見ながら６名で議論。

あくまでも謀反の兆しか？

理由を聞くと少し前から米、麦、鉄といった物の価格が上がり買主は豪族達、
兵隊の動きがやけに活発、城内が慌ただしい、最近平和だったのに連日の実戦に即した演習。

もし本当の反乱ならどれくらいの規模になるか見積もることに。
、
どうやら蠢いている連中の筆頭は宋揚だが、首謀者は韓遂で間違い

ないか。

大将の宋揚だけなら多くて三千、韓遂が周辺豪族巻き込むから一万越えるのは確実。

話が変わるが、涼州の武闘派って変な言葉だな、今はおとなしいが母上、
琅?さんとか、よくよく考えたら主力将軍が武闘派な人しかいないんだから。

話を元に戻しましょう。

韓遂ですよ、演義だと琅?さんの義兄弟、実際は涼州を３０年以上支配した実力者、
反乱を起こすが常に大将ではないキングメーカーで居続ける実力者。

それにしても何故今なんでしょうかねえ?

母上が行っている異民族への融和政策が甘いと判断されたからか?
羌は取り込み、匈奴、?とは羌の仲介もあり良い感じになってきているからか。

異民族とは闘争あるべきなんていう奴等からしたら甘いと思われたか?

あとはなんだ？やはり嫉妬か、ここ数年の涼州の好景気、ただまあどうしてもなのだが、
やはり拠点である隴西郡が他の地域に比べて一人勝ちの様相を呈しているのが。

隣家が金持ちで経済格差を感じた時に努力の差と言われて、“はいそうですか”と、
簡単に納得はいかないだろうな、せめて異民族にやる金があるならこちらにもっとよこせか？

異民族対策の為、琅？さんが天水ではなく此方に常駐も響いたな、
監視の目が届かな過ぎたか。

とりあえず反乱か？と思わせる牽制程度で、もし、このままいけそうならそのまま反乱か。

参ったねえ、反乱なんか起きたら母上は統治能力無しと洛陽の連中に解任されるか？
いや、涼州治められる人間がいないし、口を挟んでくるくらいか。

仕方がないですね、指導者は舐められたらおしまいですし恐いところを見せますか。

宋揚は調べた情報を見る限り臆病な馬鹿だから、視察だなんだと軍

引き連れていけば良いとして、
ただ時期が良くない、常備軍だけでは規模が小さい、徴兵はもうすぐ収穫期だから避けたい。

大規模なのは費用の問題もあるし、うーん、ケチりたいしどうすればいいか・・・・。

董卓が洛陽でやったあれをやりますかねえ。

思い立ったが吉日、提案してみましょう。

「父上がすぐに出陣できる兵五千を率いて視察兼演習で来たと城に入る際に簡単な策を、
馬鹿で臆病な宋揚ならばすぐに機嫌伺いに来ますよ、そこで脅せば終わりでしょう。」

とりあえず策の説明をする、簡単なトリックだが臆病者には効果的なのを。

「彼は臆病なくせに細作を放つなどの情報収拾をするような人間ではないから効果的でしょう。」

「答えを知ると単純だけど、戦うかも?と考えている時なら引っかかってしまうかも。」

「追い込まれたならば打って出る事も出来ない人間で、安全性も高いから良い策かなと。」

宋揚の人となりを私以上に知る人達には有効と判断された模様。

ただ、こんな提案をするのだから私も責任を取って同行しないといけないな、
う～～ん、策を考えるよりも母上を説得する方が骨折れそうで。

母上の説得は置いておいて、肝心要の韓遂をどうするかだなあ？

ふと、司ならばどんな悪辣な手が思い付くかな？と思い司を見てみる。

心がオッサンだとはいえ肉体年齢９歳とは思えない悪い顔している、これは期待出来そうだ。

―司―

保さんが此方を見ている、面白い策を教えろという事か。

「韓遂からしたら今回は隴西郡への威力偵察ではないでしょうか？皆さんはご存じだと思いますが細作や住民の情報、実績などから判断して宋揚は無能です。」

とりあえず皆の表情など反応を見ながら話を続ける。

「韓遂が勝つ気ならば馬鹿を神輿になんかしません、威力偵察に使うのに丁度良い捨て駒と。」

保さんの策は宋揚には利くが韓遂にはすぐに見破られるでしょう。

「宋揚達を押さえても韓遂は次の機会までと一瞬だけおとなしくなるだけでしょう。」

ここで一旦話を区切り周りを見渡す、韓遂の厄介さを知る面々が頷いている。

「馬謄様、韓遂は馬を大事にされてますか?」

いきなり話をふられ、しかも脈絡のないような質問に何の話だ?と首を曲げてから答える琅?さん。

「調べてある事の再確認?涼州の人間だから馬がないと生活大変だから、
大事にしている馬がいるよー、その馬の自慢をはじめて会った人にするくらいだから。」

初対面に自慢って、資料見て性格分析もしましたがかなり良い性格で、
それほどの名馬ならば余程大事にしているんでしょうねえ・・・。

此方を舐めてきたのですから統治者としてはそれ相応の罰を与えましょう、
撃っていいのは撃たれる覚悟のある奴だけ、なんてセリフがありますしねえ。

今回の方法は策というほどではないですが、単純だからこそ効果があるかと、
向こうさん此方の怖さにビビるでしょう。

「宋揚の時とは違って韓遂には下手に出るようにして会いに行くと良いかと思われます。」

向こうの方が悪いのに何故こちらが下手に出るんだ?と考えているのが表情で分かる琅?さん。

「池陽君様と董擢様が隴西郡の新たな名物のお酒でも土産に持って挨拶すれば、
翌朝、韓遂さんも素敵な目覚めを迎え、今回はやり過ぎたと反省してくれますよ。」

話が漠然としすぎているからほとんどの人が頭に?マークを出している、
ただ皆ろくでもない策なんだろうという事だけは気付いていたようで。

保さんは僕が何を考えているのか分かったらしく苦笑していた、あの映画みたいに。

韓遂も見た目１０歳にもならない私や保さんにこけにされるとは想定していないでしょうねえ。

嫌がらせやドッキリは昔から得意なんですよ・・・フフフ。

およそ一ヶ月後、玉座の間にて董君雅様の前に跪き全面降伏をする韓遂や宋揚達反乱軍が。

―韓遂―

参った、参ったどころではないか、まさかワシが子供に手玉に取られるとは。

ここ最近、董君雅の奴に知恵を貸している新しい軍師はどれ程なのかと思い、
いずれ反乱を起こす準備の為に起こした威力偵察だが此処まで一方的にやられるとは。

宋揚の馬鹿をおだて、反乱の準備をするふりだけで有利になるぞと焚き付けたのはよいが、
予想よりもはるかに早い展開だった、池陽君が五千の兵を連れてくるのは。

こっちが反乱の可能性ありと情報をわざと伝える事で驚かすつもりが。

読まれていたのか?と一瞬不安が、ただ当初の予定よりかなり早いが、
馬鹿には予定通りだと伝える、と簡単に信じ安心していた。

この後、馬鹿から頻繁に連絡が、連日三千近い兵が入城していると。
“ここ一週間で城内に待機する兵は一万を越えている、このままでは数の優位が”と連絡が。
元から自分の兵が三千しかいなく人頼みの数の優位という段階で数の優位など無いのだから、
当たり前の事が分からないお前なんかと共に死ぬ気のある人間がいるか、と苦笑いする。

ただこの報告にワシはどういう事態なのか必死で考える、いくらあの隴西郡でも、
わずか数日で万単位の兵をすぐに用意できるはずはないのにと焦る。

翌日ふと気付く、夜半に兵をひっそりと城外に出し隠し、翌朝わざと派手に入城し、
これを繰り返し行う事で勘違いさせた、と。

小癪な真似をしてくれる、と策に気付いた時には遅かった、馬鹿から手紙が。

“話が違う、だから、私は反乱の意思など無いことを伝えに行く”と。

奴の無能ぶりに頭にくる、いくら捨て駒とはいえここまで無能だとは。

細作から報告があったがこの後城に行った宋揚達はさらに震え上がったそうだ。

「いろんなところから寝返りを伝える手紙ばかり送られて困る視察に来ただけなのに」

と池陽君に苦笑されながら言われ手紙の束を投げつけられたそうで。

助言してくれるような者もいないあの馬鹿には、偽手紙だとは分からず、

誰が味方か？敵か？命の保証は？などいろいろ気が気でなかったろう。

細作にわざとこれらの情報を流してくるという池陽君のやり方に苦笑する。

それにしても馬鹿が行動開始してから二週間で戦わずに頭を下げさせるとは。

その三日後に天水に池陽君がわずかな兵を連れ酒を土産に悠々と現れたのは驚かされた。

奴は余裕を見せているが演技で、本当に戦を起こすかワシの真意を汲みに来ただけだろう、

今の奴らはワシらと全面戦争をする根性はないと判断したが、これが間違いだった。

何故、奴は私に会いに来る際に自分の子供を連れて来たのかが分か

らなかった、
子連れはこっちを侮辱する為か？子供もいるし我々は最初から争う気はないと伝える為か？

ワシは己の読みの逆ばかりいっておる状況に驚き、冷静さを失っていた。

慇懃無礼とかではないが妙に下手に出る空の態度、わざわざ土産まで持ってくる、
池陽君は軍師だが毒殺だとか手段を選ばないような人間ではないから酒は安心して飲めるなと。

結果論だがこの酒と董擢という役者にやられたんだったなと、見た目は１０歳くらいか？
話をしてみた感じは顔は両親に似たが単なる甘ったれの馬鹿餓鬼だなと思った。

産まれてすぐ「涼州の神童」という二つ名を持つ事を忘れていたのが痛恨の失策だった。

池陽君は涼州の今後や異民族問題を相談してきた、今回の騒動について糾弾したいが、
そんな真似をしてワシがへそを曲げ実際挙兵したら？と怯え回りくどく話すんだなと判断した。

筆頭軍師とはいえ所詮は単なる頭でっかち空がワシを攻めあぐねている姿に内心大笑いする、
そして勝者の余裕を見せてやろうと奴の馬鹿餓鬼とも遊んでやるか

と。

董擢様も甘え上手で可愛らしく思え城内を案内し愛馬に乗せてやったりと遊んでやる。

夜になり私が勝者だとはいえ池陽君は仮初めにも涼州の筆頭軍師で太守婿、主賓として宴席に招待する。

宴席が始まると酒に酔ったか主賓であるはずの空が親子そろって酌をしにきたりと、
ワシは日本酒の美味さ、口当たりの良さとは対照的によく利く酒だったらしく、
場にも酔ったのか、いつにも無いほど眠けにおそわれる。

夜も遅くなり、気にしないと言うので自分の部屋に戻り寝る事に。

朝、目を覚ますいつにも無く頭の動きが鈍い嫌な目覚め、なにか布団に違和感がある。

部屋中に強烈な血の匂いがする、よく見ると自分の腕や体が血まみれになっている、
違和感のあった布団をめくると、そこには血にまみれた愛馬の切断された首が転がっていた。

叫びたいが叫ぶ事など出来ない、必死で自分に落ち着けと言い聞かせる。

何故、誰が、どうやって、必死で頭を働かせるが、あまりの事態に脳が全く動かない。

そしてはじめて気づく、部屋の隅に池陽君と董擢様がいた事を。

ワシに向かって董擢様は昨日の甘えた喋りではなく淡々と悪魔の笑みを浮かべながら

「良い夢は見れましたか?気に入っていただけましたか私の特製枕と薬入りの酒は。」

この後は急に口調を変え、明るく子供らしい喋りで、内容は真逆だったが

「殺しに来たければいつでもきてね、おじさん、寝ている時でもご飯の時でもいいよー、
でも、殺しに来るからには殺される覚悟はしておいてね韓遂君」

こんな子供に勝てるわけがないと思い知らされた、武人としての誇りとか関係なかった、
愛馬を殺され侮辱された怒りとかどうでもよかった、とにかく涙を流し許しを請うだけだった。

どれくらい泣いたか、許しを請うたか分からないが、董擢様が耳元で囁かれた。

「韓遂文役、あんたが漢王朝に敵意を持ち反乱を企ててようが私は一向に構わない、
私と友達になりたいのならば喜んで迎えてあげましょう、ただし、
刃向うならば、
次は大事な馬どころか、こちらはいつでも、どんなふうにだって出来る事を・・・。」

それだけ言って董擢様は天水城から帰られました。

―保―

うん、今回の件は我ながらやり過ぎたね、ちょっと調子に乗り過ぎたどころでないのが、
思い返してみると恥ずかしさで布団の中でジタバタしてしまいますよ。

ただ今回の騒動で韓遂さんまで、琅?さんに続いて母上でも父上でもなく私に忠誠を誓ってくるって。
精神年齢でははるかに年上だが、年上に服従されるのはやり辛い、だって僕は子供だもん。

「ワシの名は韓遂、字は文役、真名は雷(らい)、ワシの命と真名を董擢様に。」

なんて風に涼州のボスに服従されるのですから嬉しいなんてもんじゃないですよ、
董家が涼州を完全に支配に置けたのですから。

ここから余談ですが、雷さんがどうやら気になっていたのか執務室で仕事中に質問してくる、

「董擢様、もし私が馬を大事にしていなかったらどうされましたか?」と聞いてきた。

司が満面の笑顔で「その時は朝起きたら寝台の横に切り落とされた玉を並べていた」と。

雷さんが、というか皆引いているよ、それにしても私も同類と思われたのは心外なんですが。

第十二話、保のターンに司のターンで涼州統一？（後書き）

うーん、保の怖さ、不気味さを上手く表現出来なくてすいません、話の展開も強引で見事なご都合主義、上手くいきませんねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない（前書き）

このご都合主義三国志で出演者を新たに増やそうと頑張りましたよ。

問題は一気に増えすぎたのと、恋姫原作キャラで無いまたオリジナル。

大丈夫なのか、話がまとまるのか、全員のキャラ設定できるのか？

作者でありながら頭を抱えるばかりです、こんな駄文ですが生温かい目でよろしくお願いします。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない

―保―

「前々から言っていますがいくらなんでも人手が足りなすぎます！！」

分かっちゃいるけどやめられない～♪だとスーダラ節ですが、やめるやめないではないね、むしろ辞められたら人材不足で大ピンチ無駄話はやめましょう、話を真面目に進めましょう。

「薊（あざみ）さんが言うように人手が足りないのはわかっています、ただ、人材不足は一朝一夕で解決するわけなく、キツいが今の状態で。」

流石、父上常識人です、このメンバーの突っ込み役です、言っていることが此処までザ・普通なのが、頑張れ父上。

そして、第十三話にして、遂に司のお母さんである李粛さんの真名が。

作者が親馬鹿なら和がいるしキャラかぶりで特徴が出し辛い、だから必然と出番がなくなる、真名を決めてすらいない。

まさかこんなふざけた理由で涼州の最高幹部の出番がなくなるとは。

頑張れ薊さん、私は応援していますから。

「短期的な物と、長期的な物がありますが。」

司が口を開く

「短期的な物から説明を。」

母上が司に説明するよう促す。

「一番早いのは和様や母さんの私塾時代の知り合いとかを登用ですかね。」

まあ、一番早い解決方法ですな、ある程度知力なり武力なりある人間が手に入ります。

「問題は今疎まれ干されている人ならばうちに来やすいでしょうが、母上の知人ならば実力ある人でしょうしそれなりに地位を持っているでしょう、
本人が乗り気でも此方に来れるかどうかが。」

母上のように太守とかしていたら登用なんて絶対に無理ですし、
優秀ならば今の上司達が手放したがるか？という問題が。

私がとりあえず案に対する問題点をあげてみる。

個人的には母上の知り合いである劉表さんが普通に来たら笑うんだが、
それにたいし私や父上が「お前は荊州太守だろ！」と突っ込めるかどうか。

「ねーよ！」

うん、心の中で思った事が口に出ていたね、父上突っ込みが荒いです。

「真面目に話すならば景気は良いがこんな遠方に来るか？と。」

荒い突っ込みに文句を言うのはやめて、一番の問題点を口にする。

「「「「「たしかに」」」」」

私と司以外の全員が同意する。

「私みたいに涼州出身とかでないとなかなか此処には来たがらないでしょう。」

母上がいう、確かに父上も母上と結婚したから涼州にいるわけで。

「洛陽にいられない、とか、追放されたとかでないと来難いですね。」

歯に衣着せぬ発言などで洛陽の宦官に睨まれ島流しみたいな感じで来た薊さんが続く。

「ただ、今の漢王朝に不満がある洛陽にいる不満分子を引っこ抜くのはいい案かと、
実力あるが玉無しや馬鹿将軍に気に入られないために干されているなんて、
不遇な時代を迎えている者は幾らでもいるでしょうから。」

父上、口が悪いです洛陽に恨みあるんでしょうが、多分あるんでしょう。

「たしか裏切り敵国の細作になる者の理由は主に三つしかなく、
地位などで評価されないことへの怒り、自分の実力に対し貰える少ない報酬、
国の仕事が己の信じる正義と反するという正義感、まずこのどれからですからねえ。」

ＦＢＩだったか、ＣＩＡであった人がスパイになる理由を思い出し口にする。

「話を持ちかけられた人間も細作としてその国に残り同僚を裏切り続けるのと違い、
今の評価されない職場に早々に見切りをつけ転職ならば彼らも抵抗が少ないでしょう、
給与という点や見合った地位という物ならば洛陽よりは得やすくなるでしょうし。」

子供らしくない発言の私と司に対し雷さんが驚いている、前回それ

で痛い目にあったのに。

まあ精神年齢が４０過ぎで雷さんより実は年上なんて思ってもいないだろうから仕方ないか。

「では、近いうちに洛陽に父上なり薊さんに行っていただきたいのですが、
大谷商会洛陽支店建設の下見を兼ねて向かわれるのがよろしいかと。」

涼州のアンテナショップを洛陽に作る計画が進行中なので、
そこは将来、洛陽でクーデター起こす際の拠点にするつもりなので。
流石にクーデター起こすなんて司以外誰も知りませんが。

「保さん、クーデターとはなんですか？」

薊さんが口を開く、おおう、また心の声が口に出ていたか。

「ここより遥か西の国の言葉で極秘裏に進めて開催し皆を驚かす祭の事です。」

とっさに答える。

「保さんお祭りなんか計画しているんだお祭り楽しいから大好き、
それにしても保様は相変わらず博識なのー、異国語も知ってるなんて。」

琅?さんが感心しているようで、まあ、嘘はついていませんし、極秘裏に進め馬鹿な指導者達を血祭りにあげるだけなんですから。

司が苦笑している。

「この案はいいとして、人材確保の他の手段はなんですか?」

話が逸れてきていたので元に戻そうと母上が。

「各地に散らばる大谷商会で涼州で人材募集の為の試験をすると告知を、
遠方で費用などで来難い参加希望者は、涼州に荷物を送る荷馬車に同乗させれば。」

これなら涼州までの移動費用やらなんやらで躊躇している人間でも、負担軽減やら移動の安全確保されやすいという点から参加しやすくなるでしょう。

「問題はどの程度の質の人間が来るのか予想がつかないのでは。」

たしかに父上が言う通りで、告知範囲は広いが誰でもとなると。

「ならば、読み書き出来るかとか、告知の際にこの問題が解けたらとか、
そこで最低限のふるいわけをすればよいかと思います。」

かなりハードル低いなと思ったが識字率が段違いに低い時代だったんだ、
私達が小学生の時にやったようなテストより簡単でもかなり人が絞れそうな。

「長期的計画という点ではどのような案がありますか。」

母上が最後の案を聞いてくる。

「国で孤児院を開く事です。」

やはりそれか、司の発言に一人納得する私。

「口減らしに捨てられる、または殺される子供や戦争で親がいなくなった子供、
また教育を受けさせたいが家が貧しく私塾に通わせられない家庭の子供に対し、
国が食事と寝る場所だけでなく教育を受けさせるという事です。」

ほお、という感じで案の内容に反応する雷さんと琅?さん。

「必ず優秀な役人になるとは保証できませんが、そういった子供たちが野盗になったとか、
路上で餓死したなどという事を防ぐことができる治安維持の観点からも進めたいと思います。」

司の発言に対し、父上が問題点をあげる。

「涼州の教育を受けたが他州に仕官とかならないか、それだと税金の無駄使いにならないか？」

その件に対し私が

「それに対しては、やり過ぎは良くないですが教えの中に愛国教育とでもいいましょうか、涼州のおかげで生きていると思えるような事を教える事で流出し辛くするのは？」

愛国教育をやり過ぎるは良くないが、大抵の国でやってますし少しくらいなら許されるでしょう。

「子供達も友達が身近にいてくれるのならば一緒にいたいと思えるでしょう、僕は保さんがいたから楽しく、保さんだけでなく孤児達とか皆と友達になりたいですから。」

照れながら可愛らしい事を言う司、演技ではなく素で言っているな、ちょっと可愛いぞ。

薊さんが鼻血を流しながら司の姿に興奮しているのは見なかった事にしよう。

全体的に今回の提案の評価はよく、あっさり可決される。

「とりあえず洛陽への視察は人員の調整やらしないと人を送れないので、大谷商会経由で
各地に涼州が人を募集しているという通達を出しましょう、孤児院の件は予算を見ながら。」

方針が決まり、母上が結論を出す。

ー司ー

全国に広げた涼州アンテナショップである大谷商会、これを効率よく使って人材募集しましたが、
実は通達を出す時に保さんには話しましたが他の人には内緒でやった事が。

チートなので普段は使いませんがあまりに人手不足なので使いましたよ太平要術の書を。

将来に不安を抱えているそこそこ有能で仕官先探している人は何処か？と読むと、
まあ出るは出るは、色々な名前が多く出たエリアに優先的に人材募集の広告を出しましたよ。

数ヵ月後、

登用試験が終わりましたがやり過ぎたという感じになり、話進めた僕ですがなんか頭を抱えました。

いくらご都合主義なこの話にしても、何でしょうかこの応募してきたメンバーの優秀さは。
といいましょうか、歴史上こんな所にいてはいけない人間が大半なのが。

軍人部門では、まずは普通に使える淳于瓊さんが加入されましたよ、いいのかこの人いて？

演義だと単なる飲んだくれで官渡の戦いでは無能で鳥巣落とされ最後処刑されましたが、
西園八校尉に選ばれたりしたくらいの人間で、官渡では奇襲に必死で耐えたり結構堅実な戦いが。

堅実な戦いが出来る淳于瓊さんには、突撃が得意な琅?さんの副官として頑張ってもらう事に。

私李儒に並んで董家らしい軍人がきました、郭?さんに李?さんが、ぴったり過ぎる二人。

二人とも軍事ではそれなりに活躍したが長安ぼろぼろにしたり、邪教にはまったりと、
なんと言いましょうか、母親のお腹の中におつむのネジを忘れたの

でしょう脳味噌が。

二人は保さんへ絶対の忠誠を誓う雷さんの元で老獪さというか頭を使う戦いを学んでいただきましょう。

まあ、ふざけたことするようならば僕と保さんで洗脳、もとい教育すれば大人しく出来るでしょう。

それに保さんが普段と違う黒い笑顔をしながら、「可愛い可愛い月に被害が出るような馬鹿なら、生きたまま鼠の餌やら産まれた事を後悔する地獄を延々と味あわせてやる。」とボソッと。

月さんが絡むと保さんが怖いです、保さんの黒いオーラで背景が完全に歪んでいます。

軍人は良いんです、問題は文官といいますか軍師が冀州から大物ばかり来ました。

田豊、沮授、審配の三人が、私は二日酔いでもしているのでしょうか？これ何て袁家ですか？

これであと郭図がもしいたのならば袁家の軍師勢揃いですよ、大丈夫なのか袁家は？
人手足りるのかと他人ごとながら心配をしてしまいました。

演義とかで彼女達は意見対立激しく袁家がボロボロになった原因の一つで、

逆にもめごとの種が無くなってこれのおかげで強くなるのか？無いな。

それにしましても何でもありの世界とは言いましても、全員年齢は１７、８くらいで、ブレザーにタータンチェックのスカートごめん、それ何処の女子高生という感じの。

気づいてはいけないのは彼女達が途中で衣装チェンジしないと、ずっと女子高生姿、黄巾党が始まろうが、官渡の戦いだろうが、赤壁の戦いだろうが女子高生姿、どんな熟女マニア向けＡＶ何だという感じになりそうで不安で仕方がないです。

仕事の話に戻しましょう、史実では袁家の軍師だったわけで、採用試験パスするなど、三人とも真面目に仕事したならば相当に優秀ですから、そういう点では安心できます。

この三国志は正史ではなく外史だから何でもありとはいえ演義やらなんやらと真逆で、三人が幼馴染の仲良しで、しかも仲良し通り過ぎてなんか百合百合しい感じが。

将来何処かの国で色々な意味でキャラかぶりが激しいと突っ込みが来そうな予感がするのが。

それにしましても、女三人寄れば姦しいなんてよく言いますし大変やかましいです、
和様の顔を見ると喧しさに表情はいつも通りですが明らかに怒りをこらえているのが分かります。

涼州の高級役人として採用即和様の怒りで斬馬刀でバラバラに切り刻まれ鳥葬、
なんてのはさすがにまずいので、なんとかしないといけません。

ここは全員の配置をバラバラにして黙らせましょうと、和様の補佐役に田豊さん、
空様の補佐役に沮授さん、母上の補佐に審配さんと決めました。

あとは僕と保さんの手元に優秀な軍師見習いが欲しいのですが、まあ、
知らない人からしたら子供に補佐職はとなりますので、これはおいおい募集していこうかと。

将軍クラスが3人、軍師が3人新規加入と涼州の人員不足解消の目処が立ちそうです、
まあ、とはいえこれからも人材募集の手を緩めずにいきましょう。

うちで出番無いくらいでも飼殺しにすればその分他国は人材難となるのですから、
やってやりましょうと思いましたね、劉備や曹操が人材不足だった

ら面白いでしょう。

さてさて、これからの董家、いや、私と保さんの悪ふざけが何処までいけるかと楽しみです。

人材が確保できたならば、涼州だけでなく領土を広げるとか考えてみますか、

司隷州は流石に無理ですが、そうですねえ益州の漢中とかくらいは欲しいですね。

楽しいですねえ、こういう謀略を考えるだけで、それにしてもふと思ったのが、

イレギュラーな存在の私と保さんが頑張ってますが、正史で言う董卓と入れ替わりでですかね？

まあ、もしそうならば悪役として突っ走って董卓とは違って勝つようにしましょうか。

第十三話、人材難にやり過ぎたかもしれない（後書き）

書き終えて一言、６名は人が増えすぎた、オリジナルキャラばかり。

これで話が進んで恋姫原作キャラが来たらどうなるのだろうか、

大丈夫か私？と胃が痛くなるばかりであります。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十四話、恋姫達と天才作家（前書き）

今回は拠点フェイズ、董家兄弟の触れ合い編です。

この話を読んだ皆さんに喜んでいただければ幸いです。

第十四話、恋姫達と天才作家

―保―

まさか、私が子供達に大人気になるとは思わなかった、
前世の私を知っているのならば皆が口を揃えただろう「嘘だ！！！」
と。

友人ではなく、なんか蝉が鳴く話の鉈女が出てきそうだが。

蝉で思い出したが仕事のしすぎで疲れていたんでしょうね、
蝉の鳴き声が「死ね死ね」言っているようにしか聞こえない、
と支店長に話したら「今すぐ有給を取れ」と言われ休まされた事が。

昔の思い出話は置いておいて何が人気なのかと言いますと、
紙芝居屋さんを始めたんですよ、今や街を歩くと子供の列がついてくる。

まるでハーメルンのバイオリンひきか、レミングスの集団入水だなと。

きっかけは可愛くて可愛くて仕方無い月の為に絵本を作ろうと。

実は前回の話からまたキンクリしまして私が１２歳、月が４歳に、
私の服の裾をつかんで「おにいたま、あしょんでくだたい」

舌足らずに喋るところや私の後をとことこついてくる姿が愛おしくて、
何度吐血しながら「我が生涯に一片の悔い無し」と叫んだことか。

そんな可愛い月の頭を撫でてあげると頬を染めながら上目遣いで、
「へうっ、おにいたまはずかしいでふ」これもヤバかった気絶していた。

ある日なんか遂に月に「やさしいおにいたまだいすきでふ」
死んでも良いと思えましたね、司が言うには三日間意識不明だったと。

後に聞いたが父上は、自分よりも先に月に大好きと言われた私に嫉妬、
だが、父親として私を助けないとと血涙を流して苦悩していたようで。

だから私が目を覚ました時壁にめり込んでいた父上がいたと。

月の可愛さを語り始めたら何年かかっても止まらないので、
話が脱線しすぎは不味いですし、話を元に戻しましょう。

前に話をして計画していた孤児員が完成しまして、
孤児員は聞こえが悪いと保育園とさせていただきましたが。

同い年位の子供が多いからと月や馬超こと翠ちゃんをよく連れて行

ってあげるのですが、
月が「おにいたまのはなしをみんなにしてあげてくだしゃい」と。
こんな事言われたならば兄としては頑張らないといけませんよ、
執務、鍛練、保育園で授業、新商品開発、視察、
やる事だらけですが寝る時間を削って紙芝居作りですよ。

「夏の間遊んでいたキリギリスは冬になりご飯がなくなり困っていました。」

月や子供達は目を輝かせて私の話を聞いています。

「おにいたま、きりぎりすさんはどうなるんでふか？」

話の展開を気にする月が可愛すぎる。

「ご飯無くなったら戦えないからどうするんだ何処かに食べに行くのか？」

なんで飢えて困っているのか分からないのか翠は、なんでこんな残念な子に。

「ゆ、月が気にしているんだからはやく続きをはなしなさいよ、ぼ、僕も月につきあって話を聞いてあげるんだから。」

緑の髪の子は保育園で一番賢いがやはりまだまだ子供で自分が気に

なるのに、
必死で誤魔化そうとするなんて可愛いなあもう、それにしても月に真名を許されているとは。

「なあ、てきちゃん、きりぎりすはどうなってまうんや。」

何故かこの時代に関西弁の子は、私を妙な呼び名で呼んでくる。

「ごはんがないならかりをすればいいんだ、なんじゃくな。」

銀髪の子は幼子とは思えぬ勇ましい発言が、軍人にしたら楽しみなような不安なような。

「・・・ごはん?」

赤いアホ毛のあるこの子だけ明らかに話に食いつく場所が違うのが。

「はやくはなすのです、きりぎりすはどうなるんです!」

黄緑の髪の子は一番子供らしい反応だな、気になって仕方がないようで。

いろんな子供がいるが皆話をすると反応が違って面白い。

ここで蟻とキリギリス“弱肉強食編”の話の続きをはじめる。

「夏に頑張ってご飯を貯めていた蟻さんはキリギリスさんを家に呼びました、
大変だったね外は寒かったろう、早く入って。君を歓迎するの宴会だよ。」

ここでまた一旦話を区切って見渡してみると。

「きりぎりすさん、たすかったんだよかった」

ああっ、もう、月は優しいなあ、ついつい目を細めてしまう

「なんだ宴会準備してあったんだよかったじゃんキリギリス」

裏があるとか考えないのでしょうか翠は、お兄さん貴方の将来が不安で仕方ないです。

「なんで蟻はキリギリスを甘やかすの、弱味を握られているの？」

子供らしくない意見だ、もっと素直にいこう私が言うのもなんだが。

「なんやたすかったんかいな、えんかいかさけでるなんていいなー。」

酒のさの字も知らないガキんちょが、まあ、大人ぶるのも可愛いな。

「なきつくきりぎりすもなさけないが、あまやかすありもありだ！」

君は何故そんな人生ハードモードを歩もうとするんだ。

「えんかい、・・・ごはん」

お兄さん君に話を理解してもらうのは諦めたぞ。

「あまやかすとやさしさはちがうのですぞ、ありはしょうらいくろうするですぞ。」

なんだろうお兄さん、将来君がそうなりそうな気がしてしかたがないんだが。

流石にみんな蟻とキリギリス“弱肉強食編”の展開は読めないようで。

「宴会の最中にキリギリスさんは安心からか寝てしまいました、蟻さんはその姿を見て笑いながら“やっと薬が効いたか”と呟きました。」

ザワザワ、福本な擬音が部屋に鳴り響く

「“冬の間の御馳走が自らやって来るとはな”と蟻さんは、哀れキリギリスさんは、
蟻さんに殺され食べられてしまいました、油断大敵、蟻さんやった

ね、めでたしめでたし」

創作紙芝居、蟻とキリギリス“弱肉強食編”が終わり周りを見渡すと。

「へううっ、きりぎりすさんたべられちゃうなんて。」

泣きそうな月が可愛い、はううお持ち帰りー！

「なあ、兄貴、キリギリスを食べるつもりなら宴会はしなくても良くないか？」

油断させるとか策だという事は分からないんでしょうか、策があっても気にしないのか。

「僕も先を読めなかったが、蟻の真意を読み取れなかったキリギリスの負けか、
いや、準備らしい準備をせず冬を迎えた段階でキリギリスの負けか。」

軍師みたいな思考をする子だな、鍛えたら面白そうな、
とはいえ、やはりキリギリスが食べられた事は驚きだったようで。

「まさかたべられるとはおもわんかった、いんどじんもびっくりや。」

インド人もビックリって古い表現だな、いやこの時代なら新しいか、といいますか、なんでお前さんはその言葉を知っている。

「くすりとはなんとひきょうな、ぶじんのかざかみにもおけん」

蟻は武人じゃないぞ、お兄さんは君が将来猪武者にならないか不安だ。

「ごちそう、おなかすいた、ごはん」

うん、お兄さんそう言われると君の台詞を読んでいたよ。

「ありのさくはみごとにきまったですが、ねねにはつうじないです。」

君が将来キリギリスに食われる蟻になりそうな気がしてならないよ。

余談だが、この時の私は知らなかったが私が作った創作絵本、「蟻とキリギリス弱肉強食編」「三匹の子豚～逆襲の狼～」「カチカチ山復讐の代償」等の作品が、後に大陸中の軍師見習い達に策の重要性を教える教科書になったそうで。

「はわわ、実は蟻の策は冬になる前から仕組まれていたなんて。」

「ほお、狼は完璧な籠城したと思った豚をこう破るとは面白い」
「なんで狸もあっさり引っかかるの馬鹿じゃないの、だから男は駄目なのよ」

各地に散らばる軍師予備軍達にはかなり好評だったようで。

更に余談ですが、夜中のテンションで一気に作った大人向け絵本、「白雪姫～鬼畜の宴～」「桃太郎～栄光の代償～」「裏切りの兎と亀」といった作品も、
後に各地で大ヒットし、舞台化され上演はロングランになるのだった。

「あわわ、これは過激すぎるでしゅ、でも、朱理ちゃんにも教えてあげないと。」
「なんて華麗でないのかしら私と違って、私ならば皆がひれ伏したでしょうしオーホッホ」
「覇王はいつでも全力、とはいえ力を見せつける兎のような存在も面白いはね」

とりあえず色々な場所で色々な人に愛された作品だったようで。

紙芝居終わった頃合いを見計らっておやつを持った女性がやって来る。

まさか、この黒髪を束ねたエプロン姿の上品な女性が、
憂いを含んだ微笑みをする綺麗な女性があの丁原だなんて。

呂布の育ての親の丁原がまさか保育園の保母さんをするなんて、

丁原という名前を聞いた時は驚いて飲んでたお茶吹き出したくらいで。

丁原さんがいるくらいですからもしかしたらこの保育園に、三国志最強の呂布がいるのか？なんて馬鹿な事思ったりしましたよ。

とりあえずおやつですよ、新たなバトルが始まりますよ。

「おにいたまいっしょにおだんごたべまひょう、へうっ。」

月が私の手を引いて隣に座らせる、それにしても舌足らずなだけでなく噛むのも可愛過ぎるよ。

あまりの可愛さにちょっと鼻血でたし。

「僕は月と一緒に食べたいだけなんだから、でも月が望むから一緒してあげてもいいわよ。」

そう言いながらも隣にちょこんと座る子、可愛いなあ、この年で僕っ娘ツンデレメガネって。

「おっ、なんやいつもどおりおもしろそうなことになっておるやんか。」

この子はなんで反応がこうおっさん臭いんだ、ただいずれ一緒に楽しい酒が飲めそうだな。

めっちゃ好かれていますよ、ちびっこハーレムですよ、ロリならたまらないんでしょうなあ。

精神年齢４５歳のおっさんには微笑ましいとしか思えなくて。

一方、団子に必死な連中を見てみると、

「よし、お前と勝負だどちらが沢山食べられるか。」

翠、この中で7歳と一番お姉さんなのに、仕方がないなあ、これがあの錦馬超だとは。

「なにをー、はやくたべないならぜんぶわたしがもらうぞ・・・うぐううう」

急いで団子を食べるかのどに詰まらせているよ、この銀髪の娘は。

「・・・・・もきゅもきゅ」

一心不乱に団子食べているこの子、何?食べている姿にめっちゃ癒されるんですが。

「れんどのーーー、おだんごだけでなくおちゃもありますぞ。」

うん、間違いなくこの子は将来貢いで痛い目にあう子だね。

こうして私の月達との紙芝居の会は終わるのだった。

第十四話、恋姫達と天才作家（後書き）

今回の話はいかがだったでしょうか？

それにしても前回出した6人のオリジナルキャラの設定をとばして、恋姫原作キャラを一気にこんなに出してしまうとは。

大丈夫なのか私、話が進むのか、どう絡ませて遊ぼうかな、とか、不安だったりわくわくだったりと変な感じを楽しんでいます。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十五話、保と司の考え事（前書き）

真面目とギャグが中途半端に交じってしまった、
ギャグオンリーなはずがどうしてこうなった。

そして話数を間違えていた直したが恥ずかしいミスして気づかないとは。

第十五話、保と司の考え事

―保―

朝の執務も終わり昼食を取る、訓練も無く午後からする事が無く、ならば、と思ったが月達は侍従達と保育園に行っている。

未来技術の応用開発もする気が起きない、たまには、と部屋で一人ボーっとする。

ボーっとしていると、ふと、いろんな事を思い出す、司が前に面白い事を言っていたなと。

私は正史での董卓の代わりとして今の時代にいるのではないか？と。

この世界には董卓である月がいるとはいえまだまだ幼子であり、時代は三国志にはまだ早く、

皇帝は霊帝になったばかりで、とはいえ本来ならば董卓はそれなりの歳になっていないといけない。

まだ１２歳という若い私が月を若いというのもなんなんだが。

正史ならば既に死んでいるはずの董擢という存在になった私がいて涼州を実質治めている、

後の董卓の悪事の協力者で知恵袋な李儒が司であり、いないはずの時期に手元にいる。

董卓の元にいた郭?に李?までもが手元にいる状態、
この外史では正史の董卓役を私に求めているのだろうか?

それでもいいが、とはいえ、悪役董卓をやるのは真っ平ごめんだ、
まあ正義も悪も世の中には無いから、正義の味方とかでなく場をかき回す存在になれれば。

その為、正史でやらかした郭?、李?達やらお馬鹿さんは魔改造の最中。

それにしましても、ヒャッハーな正史の董卓にはならないように頑張っていますが、
うーん、順調過ぎますねえ上手く行き過ぎている不安になるくらい。

涼州なんて辺境があり得ない規模で経済が拡大し続けているんですから。

私と司が政治に参加するようになった7年前と比べおおよそだが人口は倍増、
農業生産高もおよそ倍、商取引に関しては3倍以上になった。

とはいえ農業は水の確保など諸問題が山積みで中々規模の拡大できないのが悩みだ、
農薬と肥料、輪作等で生産量は増えてはいるがこれからの伸びしろに不安が。

涼州の利益の一番は地の利を活かしシルクロードを使った大陸以外の貿易の独占、
あとは全国に散らばらせた大谷商会でうる新商品の販売での利益が。

とはいえ、頑張っても悲しいかな此処は辺境、北方四州だとかには敵わない、
一人当たりでは圧勝でも人口が違うなど、これだけ儲けていても総額では全然敵わない、悲しい物だ。

まあ、順調な経済はいいや、では、軍事は？漢の天敵である異民族への対策は？
涼州に限って言えば完璧に近い、例えば羌族とは相思相愛の関係である、ちと大袈裟か。

この前の事だが、羌族の族長が日頃の支援のお礼をしたいと隴西までわざわざやってきて、
ならば私は史実で董卓がやったように飼っている牛を潰して出したらえらく感謝されましたよ。

トラクターなんてないこの時代に貴重な農機具である家の牛を潰す、しかも、子供である私が牛を潰す重要性を分かりながらそれを行う。
族長が如何に自分達が大事にされているのか分かり感涙するのも、まあ当然か。

ごめん族長、見た目は子供だが私は実は族長よりはるかに歳上なん

だ、
しかも正史を知っているから出来たやらしい手段なんだな、まあ言わないが。

おかげで軍馬を千頭程プレゼントなんてあり得ないサプライズが、ただそのあとにもサプライズが族長が娘を側室に差し出すとまで言い出したのは参った。

馬のオマケが族長の娘って、提供するなら順番が逆だろ、普通なら娘そして馬もだろ、
ビックリマンならシールだろ普通はウエハースではなく。

最近は出番が少ないから?皆忘れていないか?母上の私ＬＯＶＥぶりを、
いやまあ族長に関しては私とは初対面だし知らなくても仕方無いが。

だが、砲弾は別の所からも撃ち込まれるとは思いもしなかったですよ、
琅?さんが黒さが漂ういい笑顔で「うちの翠が先だろ順番無視はいかんよな。」って。

琅?さんがいつもと口調が違う!?黒いオーラが怖すぎます、
あと、私と翠ちゃんって何の話ですか、私は何も聞いてませんよ!?

太守の息子であり恋愛結婚なんか無縁な時代で、私の思いなんか関係ない時代だとはいえ。

翠ちゃんは7歳ながら可愛く将来は美人さん確定で物件としては優良物件です、
ただしお馬鹿すぎます、あと、当人の意思を無視してはいけません。

翠ちゃんは年齢的に私からしたら嫁ではなく、私は独身ですが娘みたいなもんですよ。

それに仮にですよ、翠ちゃんが１５歳で私と結婚したとして、その時私の精神年齢５３歳ですよ！

ナイスミドルですよ、ブランデーグラスとガウンな組み合わせの年齢です、
それで１５歳の幼妻、犯罪ですよ、御天道様に顔向け出来ません。

この時代的にはセーフでも私的にはアウトです、一番アウトなのは、親友でありますが、あのナチュラルボーンテロリスト司になんといじられることか。

司にかかれば私など強風の前の蝋燭ですよ、一瞬で吹き消されますよ、
そうか！！翠ちゃんを司のお嫁さんとして押し付ければいいんです。

ナイス提案、私天才だ！！！！司が「これは孔明の罠だ」と叫んでいる頃には、

私はそれを見て司に「ロリコンにジョブチェンジおめでとう」と祝福のニヤニヤが出来る。

完璧なる勝利ですよ「勝ったッ！第3部完」って奴ですよ。

・・・・・・・、やはり負けフラグだったか、勝ったッ！第3部完は。

心を読みきられていたんでしょうな、それとも分かりやすいくらい顔に出ていた？

1点ビハインドでノーアウト、ランナー1塁バッターは川相、何をする位分かりやすかったか？

「安心して司君のお嫁さんには蒲公英がいるから。」

ボス戦からは逃げられないというのは本当なんですね、私も司も、琅？さんというボスに一方的に殺られるのか・・・。

しかも、司は私の翠ちゃんより年下な蒲公英ちゃんですよ、完全にアウト。

司を見ると顔付きが覚悟を決めた顔まさかメガンテを唱えるのか？

「お母さん助けて～！！」

やりやがった、司ＬＯＶＥの薊さん、私ＬＯＶＥの母上が暴走したら琅？さんでも危うしか？

違ったよ・・・・・・・。

「こういう機会で使わないと翠も蒲公英も将来行き遅れかねないんじゃ！！」

本音を隠せよこの人！あと、もっと娘と姪の可能性を信じようよ！

そして、みんな客人である羌族の族長を忘れすぎだよ、いくらなんでも。

族長固まっていたし。

「保様も司さまももてますなあ、ワシもあやかりたいは。」

雷は空気を読め！とりあえず司と二人で雷はボコったが。

あれは悪夢な事件だったな・・・。

話が明後日の方向に行きすぎた軍事に関しての考え事に戻そう。

太平要術の書も確保している、書の力を使えば張角達の場所も分かる、
そうなると身柄を抑えるのも可能、黄巾党すら起こるのを防げてしまう。

これに関して司の言った言葉が、物騒にも程があるがどうも気になってしまう。

「いっそ黄巾党、何進と十常侍の対立をこっちで管理して動かさない？」

凄いよな!?軽い発想なのが、この大陸を揺るがす二つの大事件を、コンビニに煙草買いに行ってくるね、なんて感じで話すんだから。

まあ、私達が大陸の平穏の為に暗躍して黄巾党が起きなかったとしても、
漢王朝の無能無策ぶりで世は乱れるのは確実、黄巾党は看板にしかすぎず、
結果は大して変わらないだろう大規模な反乱は遅いか早いかの違いだけ。

霊帝がくたばって宦官と何進が争いその後の群雄割拠も確実に起きるだろう、
霊帝が死ぬまでに完全に洛陽のごみ掃除と改革が済めば別だが、う

ん無理だね。

うーん、確かに面白そうだ、正史だと黄巾党起きるまで調べたらいまから１３年後。

私達で時計の針を進めてしまって、早い段階で群雄割拠にするというのも、
今の段階で人材確保出来ていて金もある有力勢力は涼州位しかいないのが。

例えば袁家なんて金しかない存在なのが、まあその金が桁違いなんですが、
正史での袁紹は猜疑心強いと問題あったが優秀だった。

だが、こちらの奴さんは今は私と同じ子供、そうなれば袁逢・袁隗は優秀だが、
この二人が死んだら袁家は今の段階で内部分裂しておしまいでしょうなあ。

二人を殺れるくらいの暗殺者はいるからいざとなったらやってしまうか。

曹操だってまだこの外史では単なるガキンチョ、劉備なんて筵織りだ。

内心、司の言葉をやってみたくはある、とはいえ私はこの世界に積

極的に戦争しに来たわけではない。

それに私と司は戦争未経験の人殺しについては童貞だ、頭でっかちな童貞軍師が、
そんな人間が思い付きだけで人を死に追いやる戦争をやっていいのか！？

あかんよなあ。

悩むねえ、本当にろくでもない人間だな、私も司も。

大陸の安寧を求めるならば私と司の排除が一番の最短ルートっぽいというのが。

思考が変な方向に行きすぎたそろそろ司が訳のわからん事言ってやって来るかな？

―司―

今日は昼食後暇だし、する事が無いので部屋で一人考え事中、
とりあえず、あとで保さんのところに悩み相談しに行こう。

最近よく思うのが、漢中とか司隷州といった涼州の周辺が欲しいというのが。

どう攻めるかなんてよく考えますが、欲しいから侵略を考えたりって私は一体何処の蛮族だ！と。

とはいえ、益州なんてグチャグチャになるなら早い段階で欲しいなあ。

涼州は広いが住みやすい場所が少ない水の確保やら生活基盤を大規模に揃える困難さが。

ならば我々がはやくでかくなるには早い段階でまともな土地を貰ってしまうしかないかと。

国境線周辺に小さな集落を作ってそれを刺史の郤倹の所のはねっ返り兵が気に食わないと、
兵に襲われて哀れ、可哀想な村、こんな悲劇が起きたら私達はやり返さないと。

こちらは領民保護と制裁という大義名分がありますから、
こちらは何もしていないのに郤倹の兵の鎧を着た軍人に襲われるなんてねえ。

いくらなんでもあからさますぎるか？まあ霊帝や宦官共は馬鹿だから平気だろう、
実行するときは念のため奴らに金や酒といった鼻薬を嗅がせれば確実だな。

こういう事を考えているから腹黒とか言われちゃうんでしょうねえ。

まあ、そんなことやるならば安全策で、漢王朝の連中に金ばらまいて司隷校尉を買わせてもらうかな。

涼州太守に異民族対策で活躍した褒美で琅?さんになってもらって、董家は司隷校尉になって、
長安とか洛陽をおさめて実質董家がかなり早い段階で周辺を統一してしまうなんてのも。

これはいいなあ、董家なんて名門でも何でもない家が金を稼ぎ統治を成功させ名君主扱い、
董家に新たにどこかの州の太守と兼任させてなんてのは洛陽はやりたくないだろう。

和さんは地元出身だというのもあるが、母さんと同じで洛陽に睨まれたから僻地涼州にきたと。

異民族対策成功なんて事で出世させると、洛陽の馬鹿共には邪魔な存在が増えるだけ、
校尉任命は董家への褒美でありながら、故郷から引き剥がす罰にもなるなんて思えるでしょう。

涼州新太守に琅?さんにすることで董家の戦力をかなり削ることができる、
二人が仲違したならばそちらに気が向き洛陽に砂掛けるような真似はしにくくなる。

司隷校尉は洛陽と長安を抑えるでかい地位だがそんな風になればより舐められる、
地方の豪族程度に漢王朝に刃向う力など無い、とこういう勘違いで舐めてくれるのが一番ありがたい。

漢王朝はでかいだけの龍、しかも死にかけ体のいたる個所が腐っている死にかけの龍、
宦官やら何進なんて連中はくたばり損ないという事実が分からないでしょう。

ちょっとこれは面白い、今度、会議の際に提案してみましょう。

色々考えるのが実に楽しい、たぶん今の僕は黒い笑いをしているんだろうなあ。

そういえば月ちゃんの保育園仲間に賈?がいたなあ、あの賈?だろうから鍛えてみるかなあ。

やめておくか、月ちゃんに影響あったなんて事になったら、保さん怒るから。

怒れる保さんにかかれば人体にある関節の数を倍にするくらいよゆうでしょうから。

とりあえず、今一番の悩みを相談するか、保さんならばナイスな答えを出してくれるはずだ。

―保―

予想通り、司がわけのわからん事を話にやってきた。

「保さーん、将来戦争となって兵の前で演説をするならば、どちらのほうがいいかな？」

満面の笑みで何を言いだしているんだこいつは、頭が痛くなってくる。

「私の親友諸君らが愛してくれた董擢様は死んだ！　なぜだッ？！
戦いは、やや落ち着いた。
諸君らはこの戦争を、対岸の火と見過ごしているのではないか？！
董擢様は諸君らへの甘い考えを自覚させる為に死んだ！　諸君の、父も、兄も、・・・以下略」

おいっ！！いきなり俺が殺されたことが前提の演説なのかよ、とりあえず突っ込んでおく。

「勝手に殺すな！あとそれは戦況が落ち着いた時にやるもんじゃないのか？
もう一つの案が嫌な予感がするんだが怖いもの見たさで聞こう、教えてくれ。」

笑顔の司が

「こっちは開戦前に適しているんだよ。」

嫌な予感しかしない。

「とりあえず言ってみろ」

司の演説原稿を聞いていたら猛烈な頭痛がしてきた。

「諸君、私は戦争が好きだ、諸君、私は戦争が好きだ、諸君、私は戦争が大好きだ、
殲滅戦が好きだ、電撃戦が好きだ、打撃戦が好きだ、防衛戦が好きだ、包囲戦が好きだ、
突破戦が好きだ、退却戦が好きだ、掃討戦が好きだ、撤退戦が好きだ・・・以下略」

「聞いた私が馬鹿だった、いつから私はこんな戦争狂いキャラになったんだ司さんよ!?」

満面の笑顔で司が

「平気、演説姿恰好良いと思うよ、似合うよ。」

とりあえず司に対してオラオラをしておいた、大丈夫なのかこの天才軍師は。

これに頼らないといけない涼州ッて・・・。

第十五話、保と司の考え事（後書き）

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

とりあえず司の黒さが作者の予想を裏切り勝手に黒くなっていくとは。

第十六話、涼州の新人はやはり変人？（前書き）

第十三話で新たに涼州に加わった6人のうち軍人組が加わった直後の話を、
まあこんな感じのキャラですと言う説明の回です。

それにしても今後彼らは出番があるのか？和や司といった、
個性だらけのキャラの中で新人達はいけるのかと不安になるばかりです。

第十六話、涼州の新人はやはり変人？

―淳于瓊―

皆様はじめまして私、馬騰様率いる騎馬軍団で団長代理を勤めさせていただいております、
姓は【淳于（じゅんう）】、名は【瓊（けい）】、字は【仲簡】、真名は【紅（ほん）】と申します以後お見知りおきを。

二つ名は「涼州最後の突っ込み」「没個性の教科書」「困った時は淳于瓊」というのが。

将軍ですが二つ名がなくていいです、嫌がらせとしか言えない感じの物ばかりなのが。

涼州最後の常識といいますのは、涼州の突っ込み役は池陽君様、董擢様、私の三人いるが、
董擢様は実際はボケで、池陽君様は普通に見えて普通にぶっ飛ばされていたりギャグ担当で、
そうなると涼州で純粋な突っ込みと言うのが私しかいないことからつきまして。

「お母さん、紅は泣いても良いのですか？」

つい、不条理な人生が嫌になり呟いてしまいました。

「没個性の教科書」とは、政治、戦闘、キャラ、突っ込み全てに特

徴が無いと言われたことから、
「お父さん、まだ勤め始めたばかりですが紅は涼州での職を退職してもいいですか？』

「困った時は淳于瓊」とは私の突っ込みや発言があまりに普通な為、執務室での会議が目茶苦茶になった時に、普通の発言で場の空気をどうにかできるからと。

私は本当に軍人として涼州に採用されたのでしょうか？自分の人生に疑問が。

話を元に戻しましょう。

軍人としましては、涼州いや大陸に名を轟かす名将、馬騰将軍の副官をさせてもらっております。

私などが涼州騎馬を手足の如く扱う偉大な将軍の副官が務まるのかと思いますが、
太守の君雅様のご子息である擢さまの強烈な推薦があり今の地位につきました。

擢様とはじめて会ったのは君雅様との面接の時であり、正直なところ、
“何故子供がこんな所にいるんだろう？”と思ったのですが。

採用が決まり何処の部隊への配属になるのか等決める際に私が呼ばれ部屋に向かうと、
君雅様、池陽君様、馬騰将軍、韓遂将軍だけでなくそこにも擢様、更に李儒様がいました。

「淳于瓊さんは戦場でのいたる局面で堅実に部隊を運用指揮することが出来る人物ですので、
馬騰さんの補佐として騎馬隊が効果的な活動出来るように尽力していただくのが適任かと思います。」

なんでこの場に子供がいる?くらいしか思っていなかった私ですが、私の事をろくに知らないはずのその子供が、私以上に私のことを評価してくれるなんて。

とはいえ、天下の馬騰将軍の補佐なんて無理だと思い断ろうか悩んでいると馬騰将軍が笑顔で、

「保君や司君は見た目は子供だけど実際はどんな軍師よりもはるかに賢い軍師様なんだよー、
今の大陸で保君達を超える軍師なんかいるのかなー?保君が信じた人ならば琅?も信じるよー」

と驚く発言が、それどころか擢様は騎馬の新しい装備、戦術、涼州の政策全てに携わっていると。

世界は広く自分などまだまだだということを思い知らされました、

だが、そんな私を擢様はかってくださったので期待に応えられるよう努力する日々です。

こういう風にしか喋れない私を見てまた普通とか皆に言われるんでしょう、それが辛いです。

だが、紅の一番の問題は、能力は良いがキャラにあまりに個性が無く普通な為、
和や司といった話を弾ませる事が出来る存在と違うので今後出番があるのか？という点だった。

―琅？―

新しく涼州にきた紅ちゃんが部隊にきて、琅？は凄く助かったー。

保君はいろんな事を知っていたり頭がすごく良いのは分かっていたんだけど、
琅？の部隊に何が足りないか？紅ちゃんが部隊に必要、って良く分かったなーと感心しちゃった。

皆が紅ちゃんの事を特徴無い普通とか、からかっていて紅ちゃん怒っているけど、
実はみんな紅ちゃんの実力の凄さを認めているからなのが紅ちゃんだけが分からないなんて変なのー。

突撃するだけでなく奇襲したり、罠の準備をしたり、偵察や兵站を管理したり、
陣形の指示や伝達したりと地味な事もキチンとこなせるなんてどんな部隊も必要とする人なのに。

琅?の部隊は突撃は強いけど粘られて長期戦に入ったりすると大変だったけど、
部隊の皆も紅ちゃんがいるようになってからどんな状態になっても戦いやすいって言ってるのー、
でも、それだと私の元だとやりにくいって言われているみたいだから怒っちゃった。

からかったり面白いから紅ちゃんには皆が褒めている事を内緒にするんだけどね・・・ニシシシ。

あっ、でも、普通と言う皆の意見に賛成する点もあるよー。

紅ちゃんも年頃の女の子なんだからもっとお洒落をしないと可愛くないのー、
街で紅ちゃんに声掛けられた時、警邏の兵に話しかけられたと思って気付かなかったなんて事あったの。

仕事ない御休みの日に街に出るなら鎧姿ではなく女の子っぽい服を着ないと、
警邏の一般兵と間違われない日が無いって普通ではなく逆に凄い事なのが感心しちゃう。

今日は新たに涼州の将軍見習いとして入ってきた二人の挨拶の日で、城の謁見の前で自己紹介しているが、どうしようもないのが入ってきたなと呆れたは。

「郭?阿多だ、呼び方は任せる」

「李?稚然っす、阿多に誘われてきたッす」

ワシも軍人として細かい事は気にしないし、色々口うるさく言われたりしたのを無視してきたが。

この二人は流石にワシもあせったぞ、ワシの部隊への挨拶ならばいいんだが、
和や空、保様、司様いる場での挨拶でこれはいくらなんでもないなと。

自由な城だが明らかに皆苦笑している、まあ結果出せば皆多少は目をつぶるところだが。

「なんで子供がいるっすか?」

気になるのは仕方ないにしても、太守への言葉づかいではないな。

「小守だろ。」

保様と司様の凄さを知らないからとはいえ、もしかしたら?を考えないの軍人として情けない。

「涼州の人間は基本寛大ですが皆が寛大だとは限らないですよ、礼儀を知らないなら躾されるべきかと。」

薊の口調が怒っているか、まあワシもこれは怒るべきだと分かっているが、
まあ、ワシの場合はゴチャゴチャ言うのは苦手だから力で教えてやろうと思ったが。

この少し前に入ったばかりの淳于瓊という奴なんか二人を怒鳴りつけたいが、
太守の面前だからと我慢しているが怒りで肩がふるえているのがよくわかる。

「躾されるべきって犬じゃないっす、失礼っす」

失礼はお前達の態度がだぞ、頭が痛い、李?か、こんな馬鹿でも武将になれる時代になるとは。

「文句あるなら回りくどく言うな、むかつくと素直に言えよ。」

なんだろうか、李?は馬鹿で済むが郭?はなんだ反抗期なのか?

「優秀な武官と聞きましたが、いたのは躾もされていないおつむがからな野良犬でしたか。」

「いい歳して権力にも怯えず反抗する俺恰好良いみたいに思っている痛い思考の人でしたよ、野良犬に失礼ですよ董擢様、犬の方が賢いですよ生き残るのに知恵が必要なのですから。」

保様と司様が顔は笑っている目が笑っていないあれは相当怒っている、あの二人殺されなきゃいいが。

「ガキが失礼なこと言ってやがるっす、ただ大人としてお前らが謝るなら許してやるっす」

「口先だけが一人前のガキがうるさい。」

保様と司様に確実に殺されるな、まあ御二方に忠誠を誓う私が代わりに拳で指導するか。

ワシがぶっ飛ばそうとする前に、保様が郭?の、司様が李?の懐に飛び込んで右の正拳突きを

ドゴッ!!鈍い音がした、二人は手を休めず更に前のめりになった相手の顎にガスっと左肘の一撃。

倒れこんだ二人の頭を右足で踏みつけ押さえるお二方、馬鹿共に何があったとかよりも、

お二方の息のあいかた、同じ間で綺麗に重なる一連の動作の見事さに感心する。

「「うぐぅうう」」

小さく鈍い声をあげる二人、将軍見習い候補でありそれくらいでは気絶はさすがにしていない。

「お前らが馬鹿であろうが構わない、ただ軍人なんだろ目上の者に敬意を払え、
お前らが馬鹿で勝手に一人で死のうがこちらは一向に構わない、だが皆馬鹿の巻き添えはご免だ、
次会った時も馬鹿だったならばどんな敵よりもまず最初にお前らを殺してやるからな。」

司様が普段の喋りとは違う冷たく吐き捨てるように言う。

「礼儀を知らない知能も無い、そして、こんなガキにのされる、お前らに何の価値がある？
今、這いつくばらされているのはお前らは殺すべき価値も無いと判断された事を足りない頭で理解しろ。」

保様が司様に続いて頭を踏みつけ抑えつけ、同じく冷たく口調で言い放つ。

この二人の問題は傲慢さと固定観念という致命的な物なのが、武人

ならば相手の強さを読み、
どう動くか察せないといけないが、強さを見誤りお二方が攻撃してくると思いもしなかったのが。

今まで生き残っていられたのは偶然相手が弱かっただけで、これでは遅かれ早かれ、
相手の強さも分からないで強者に喧嘩を売り突っ込みのたれ死にだなと。

お二方は武の方はまだ成長途上であり、大陸有数となっている知力と比べるとだが、
空いた時間は鍛錬に励み、いつもワシや琅?に殴られ蹴られ這いつくばらされ、
血まみれ泥まみれになりながらも這い上がり更に強くなろうとしている。

そんな二人に、軍人としての肝心な物が不足する人間がどうやって勝つのだと。

「韓遂将軍、郭?、李?というヒヨコを預ますので、軍人とは何か?戦いとは何か?を、
大変お手数ですが、ヒヨコを真の軍人とする為に軍人魂を叩きこんであげてください。」

言っている言葉はかなりきついが先程までの吐き捨てるような冷たい言い方ではなく、
むしろ優しい口調でワシに保様が命令してくるのだった。

「はっ、この韓文約が二人を董擢様の前に出しても恥ずかしくないよう鍛え上げます。」

保様と司真に絶対の忠誠を誓ったワシだ、忠誠の証としてこの二人を一流の軍人にしてやらないと。

「お前らが子供にやられて悔しいと思うのなら無様な姿を晒そうが這い上がってみせろ、
ワシを筆頭に涼州の人間は優しいから貴様らが這い上がってくるつもりがあるならば、
お前らが血反吐吐くまで、殺してくれとワシに頼み込むくらい徹底的に鍛え上げてやろう。」

ワシの軍人としての優しさを見せてやったら、まさか周りが冷やかしてくるとは。

「雷が優しいなんて大嘘つき、地獄の鬼だって逃げるにきまっているよ。」

「自称優しい雷に鍛えられるなんて、私ならば今すぐ殺してくれと頼むな。」

琅?に空やかましい、まあ、ワシの優しさは忠誠を誓う保様、司様にだけ向けられるのだから。

今日のこの出来事を悔しいと思うのならばこの二人は成長して強くなるだろう、さてどうなるか。

それにしても採用決めたのは和に空、そういった点でこの太守夫婦はよくこの二人を採用したな、
将来の可能性への投資なのか、人を見る目が無いのか、不安だ後者でない事を祈るばかりだ。

ちなみに郭?の真名は【日(りー)】、李?の真名が【光(ぐわん)】、さすがにまあ
あんだけ人前で無様な姿を晒し自分の未熟さを思い知らされたら真名を預けて忠誠を誓うか。

二人は馬鹿だが素直でよかったわい、これでひねくれていたら保様に逆恨みとかしていたな、
まあ保様や司様ならば逆恨みしても１００倍返し位でやり返してくるだろうが。

第十六話、涼州の新人はやはり変人？（後書き）

郭？、李？の馬鹿さ加減をどういったものにするか悩んで、
キャラ設定をきちんとせず思い付きでいったら駄目でしたね。

これでは涼州の人間達がなんで二人を採用したのか分からない位、
痛いお馬鹿さんになってしまったのが、失敗であります。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第十七話、未来の涼州将とまたも紙芝居？（前書き）

今回は未来の涼州将軍のちびっ子と保達のお話であります。

早く皆を成長させたいものですが、問題はそれがいつになるのかが。

今回も相変わらずの話ですが、皆さん生温かい目で読んでください。

第十七話、未来の涼州将とまたも紙芝居？

―保一―

今日は月に司、護衛に紅さんを連れて保育園に来ました。

いつものように皆と遊んだり勉強を教えてあげたりしたあとお楽しみの紙芝居となりました。

ただ紙芝居に不安が、今日のは私のではなく司のという点に猛烈に嫌な予感が。

タイトル見る限りは「赤頭巾」となっているから平気でしょう、いや、表紙の絵が原哲夫チックなのが大変バイオレンスな臭いがする。

いつから司はこんな画風を身に付けたのでしょうか？

紙芝居の絵柄ではない点に紅さんが明らかに頬をひきつらせている。

「今日は兄貴の絵じゃないんだな、愛で空が落ちてきそうだ！」

翠ちゃん、なんであなたが北斗の拳のオープニングを知っているんですか？

「いや、それよりもＣＹＢＥＲブルーだろ、ちょうちゃん」

霞、なんで貴女はそんなマニアックな作品を知っている?
北斗の拳が出たら普通そこは花の慶次ではないかい?原哲夫作品の知名度ならば。

とりあえず往年のジャンプ作品の話は置いておこう、
ちびっこ軍団が楽しみにしている紙芝居をやりましょう。

「おばあさんのお口はどうしてそんなに大きいの?」

絵のタッチが原哲夫作品な以外はここまでは普通にすすんでいるぞ、
司作が不安だが。

この絵柄の狼だと食われたら絶対に赤頭巾ちゃんは助からないと内心思っているが。

「「「「「あかずきんちゃんはやくきづ（け!）いて」」」」」

「“それはお前を食べる為だよー”そう叫んだと思ったら、
おばあさんに化けた狼が赤頭巾に襲いかかりました、危うし赤頭巾!!!」

驚かそうと盛り上げて演じながら読む私

「「「「「あかずきんちゃんにげ（るです）てー」」」」」

やはりちびっこだからすごい怯え方、皆いいはまり具合である

「「いまこそたたかうんだ！」」

翠ちゃんに華雄ちゃん二人だけ答えが明らかに違うぞ・・・、お兄さんは不安だ。

部屋を見渡すと護衛の紅さんもこの後どうなってしまう？と興味津々の様子、

前に絵本描いている時にいたから赤頭巾はこんな話って簡単に話したし知っているはずなんだが。

考え事はいいや、ちびっ子たちの為に紙芝居に戻ります。

「隙をつかれた赤頭巾は狼に丸飲みにされてしまいました。」

周りを見渡すと子供達が今にも泣きそうな顔になっている。

「たべられちゃうなんて・・・うるうる」

あー、月はなんでこんなに可愛いんでしょうか。

「常在戦場、油断していた赤頭巾が悪いんだよな兄貴？」

翠ちゃん、私は貴女にどう接すればよいか分かりません。

「てきちゃん、くわれておしまいなんか？」

霞もなんだかんだ言って気になっている模様。

話の続きをはじめる、なんかセリフが明らかにおかしくなってきている、

司の野郎め・・・、とりあえず動揺を隠しながら紙芝居を続ける。

「見たか愚かな人間よ、最後に笑ったのはこの狼様なのだからな！」

なんなんだこの狼のキャラは。

「おおかみのくせになまいきだ。」

華雄ちゃんジャイアンじゃないんだから気持ちは分かるが。

「勝ち誇る狼の耳に‘それはどうかな最後に笑う狼君？’謎の声が響きます。」

「「「「「「「えっ！？」」」」」」」

今にも泣きそうだったちびっこ達が顔をあげる

ちびっ子たち驚いているが私だって驚いているんだぞ、
なんだこの目茶苦茶な展開は、猟師は出てこないのか？

「“誰だ！？”誰もいないはずのおばあさんの家に狼の声が響きます。」

もう嫌な予感しかしないよ、この後の展開予想すると。

「みかた・・・・・？」

恋ちゃんごめん私にもわからない。

「‘まだ分からないのか間抜けが！’まさか！？狼が自分のお腹を見ると、
‘外からの攻撃に強いが内側からは弱かったな。’赤頭巾の声が響きます。」

赤頭巾の台詞が最初の時と全然違うよ、なんなんだこのキャラは。

「僕は最初から分かっていたんだからね、赤頭巾が無事だって。」

さっき驚いていたのは誰？でもそんなところが可愛いぞ詠ちゃん。

「うちがわからこうげきするためだとは、ねねにはもうてんだったのです。」

素直に驚いてくれるのは演じる側としては嬉しいが。

「ズブシュと音がしたと思うと“うがぁー”狼の泣き叫ぶ声が響きます、
狼の体の内側から鋭利な刃物と化した手刀が飛び出してきました。」

いつからこんなに派手に血が飛び散る作品になった赤頭巾は？
紅さんが固まっているよ急展開とあまりのバイオレンスさに。

「やったか！？」

華雄ちゃん、さすがにそれはフラグだ。

「すごい・・・」

確かに凄いな恋ちゃん、絶対に出来る訳無いんだから。

「狼のお腹の裂け目から右手だけでなく全身狼の血にまみれた赤頭巾が遂に姿を表します、
左手には最初に食べられたが無事だったおばあさんを抱き締めながら。」

普通なら婆さんは死体、死体どころかミンチだよな。

「おばあちゃんもぶじだったんだー！」

目をキラキラ輝かせる月、駄目だあまりの可愛さに卒倒しそうです、ただ、こんな凄惨な紙芝居で喜んでいる月に不安もあります。

「‘食われたんじゃない、わざと貴様の口の中に飛び込んだのさ、お前さんに噛まれないか一か八かの賭けで内心ヒヤヒヤだったがね’」

うん、気にしたら負けだ、キザなヒーローみたいな喋りになっているのは。

「ぜったいにじしんあったくせにいやみなやつです。」

ねねちゃん、女の子な赤頭巾の口調に疑問は持たないんですか？

「不適に笑いながら言う赤頭巾、絶対に成功させる自信があったのでしょう、
さすがは地獄の戦乙女と呼ばれた伝説の戦士、赤頭巾」

赤頭巾にこんな嫌な二つ名があるなんて初めて知りましたよ、なんでしょうこの飛び具合、頭痛がします話を辞めたい誰か止めて。

「兄貴格好良すぎるぞ赤頭巾の奴、俺もやりてー」

翠ちゃん無理です狼に食べられたら死んじゃいます。

「腹を切り裂かれ息も絶え絶えな狼が命乞いをします、
“助けてくれ、婆さんだって無事だから、俺はもうこんな状態なんだぞ”」

話の終わりが予想付いたがいいかげんにしてくれ、これはいくらなんでも。

「うわー、いのちごいとはおおかみもなさけないやっちゃのう。」

霞ちゃんなら突っ込んでくれそうと思ったら、話に引き込まれている。

「赤頭巾やってしまえー」

駄目だ、常識人なはずの詠ちゃんがこれでは完全に手遅れだ。

「命乞いをする狼に対し、赤頭巾は一言，貴様の失敗はただ一つ，」

「「「「「「「「「「きさまはおれをおこらせた」」」」」」」」」」

見事にちびっこ達の声がハモった、なんでここでジョジョ？
なんでちびっこ軍団は台詞が分かるんだ?と私は叫びたいよ。

「・・・いけ」

恋ちゃんがのっている。

「こうして赤頭巾のオラオラで吹き飛ばされ殺られる狼でした。」

その前に腹切り裂かれた段階で死んでいるんだが、突っ込んだら負けか。

「「「ヤッター！」」」

ちびっこ軍団大喜び司も作者冥利に尽きるでしょう、

紙芝居を読んでいる私は不満というか色々な意味でお腹一杯です。

「その日の夕方、丘にある小さな墓に話かける赤頭巾その顔は寂しそうでした、

‘子豚達よ遅くなったが仇は討ったからな’

そうです、それは煉瓦の家ごと焼き殺された子豚達の墓だったのです。」

私の作った「三匹の子豚～逆襲の狼～」と勝手にリンクしている。

子豚の死は悲しいが全て終わって良かったと安心するちびっこ。

「ドシュッ、妙な音が辺りに響きます‘グッ’赤頭巾のくぐもった声が、

立ち上がろうとした赤頭巾の胸に一本の矢が突き刺さったのでした。

」

「「「ええっーーー！！！」」」

子供達が１０里先にも届かんばかりに驚きの声をあげる、
うん、紙芝居を読んでいる私も驚きの声をあげたい。

「胸に矢を受けた赤頭巾、矢が飛んできた木陰を見ると、
そこにたたずんでいたのは・・・、はいっ、今日はここまで続きは
次回。」

このあと「あかずきんはどうなったおしえろー！」と、
翠を中心に霞ちゃん詠ちゃんにまでボコボコにされるとは思わなかった。

幼稚園や小学校低学年にフクロにされるのはおっさんの心へのダメージでかいよ。

一番ダメージが大きかったのは月がポカポカ叩きながら、

「へうっ、おにいたまのいじわる、おにいたまなんかきらいでふ。」

膝から崩れ落ちたよ月に嫌いなんて言われたら生きていけない。

でも、私はすぐには死ねない、こんなふざけた話を書いた男を！
連載物にして月に嫌われる原因を作り出した男を道連れに！

部屋の隅では、ちびっこ軍団に袋叩きにされている私の姿を見て爆笑している司と蒲公英ちゃん

蒲公英ちゃんだけ他にいたのは3歳にして紙芝居よりも、翠ちゃんとかを驚かすドッキリの策を司に聞く方が楽しいようで。

私や司とは違った点で天才になりそうだな蒲公英ちゃんは。

蒲公英ちゃんはまあいい、とりあえず被疑者司を拘束しないと。

「保さん大丈夫ですか～～？」

笑ってやがる、司め。

「司くぅ～ん、こんなふざけた作品を作らなければ僕は無事だったんだよ、
なんで完結する話に勝手に続きを作るんだ、新たな刺客まで出して。」

「保さん実はこの先の展開に悩んでいまして、皆には内緒ですよ、赤頭巾の母親率いる新たな敵軍団を出し、死んだはずの狼が赤頭巾の仲間に入るのもいいかなと？」

なんでそんな男塾的な展開なんだ。

「しんだあかずきんにしょっくりな、いもうとがでてくるのもありだとおもうにょ。」

蒲公英ちゃん、満足に喋れず舌足らずな3歳の子がそんな駄目なストーリーを考えなくていいです。

私は貴女の将来を考えると大変不安になってきます。

「とりあえずお前を殴る、私の怒りを知ってもらおう。」

拳をボキボキ鳴らし司に近づく。

「逆恨みでしょう、大体保さんが紙芝居でゴルゴ１３をやろうとするからです、
しかも、ゴルゴの武器はやはり銃だ、って、機密の火縄銃まで作品に出そうとして、
機密をなんだと思っているんですか。」

どうせいずれ分かっちゃうし、今ならまだみんな知らないんだから空想の武器扱いでしょ。

「最初に用意した僕の浦島太郎を没にするからこれになったんですよ。」

「絵にも描けない美しさはモザイクかかるＲ―１８な意味ではない！」

司の描いたのを見た瞬間即破りましたよ、紙がもったいないが。

それにしても浦島太郎なんかやったら、

「絵にも描けないならなんで此れ描けているん？」と霞あたりに言われそうだ。

「とりあえずゴルゴ１３は社会人の必読本じゃ～！」

人類史上最高の作品をなんだと思っているのでしょうか司くんは。

「月ちゃんの教育に良くないと普段は色々五月蝿いくせに、ゴルゴ１３はセックス、殺人なんて一番教育に悪いでしょうがー！」

なんて屁理屈でしょうか、司は至高の作品であるゴルゴを理解出来ないとは。

私は司と戦うべき運命にあったようです、向こうも覚悟を決めたようです。

―紅―

今日は董擢様、董卓様、李儒様の護衛として保育園にきたのですが。

ただ、最近韓遂様、馬騰様との調練で引き分ける事もあるお二人に護衛が必要なのでしょうか？

もしかしたら私よりも強いのではないか？と思ってしまいます。

それにしましても董擢様は本当にマメな方です、董君雅様達と一緒に執務を行い、
調練に参加し、色々な物を発明し、紙芝居や本を書き、保育園にも来る。

一体、董擢様はいつ寝ていらっしゃるのでしょうか？
子供なのに倒れてしまわないか心配で仕方ないです。

今日は董擢様達の護衛で保育園に行くと最初聞いた時私が小さな子供と一緒なんて大丈夫か？
つい粗相をして泣かせてしまったりとか不安でしたが、それは平気でした。

子供達と仲良く遊んでいるとチリンチリンと音が聞こえてきました、見てみると董擢様が「紙芝居の時間だよ」と鈴を鳴らしてました。
紙芝居が楽しみで子供達は走って集まっていました。

董擢様の紙芝居どんな話かと、大人ですが私も楽しみにしていました。

この日は「赤頭巾ちゃん」という私も少し知っている話でした。

前に董擢様から大まかに噺を聞いた限りの内容ですが。
おばあさんの家にお見舞いに行く赤頭巾をかぶった可愛い女の子がいて、
おばあさんだと思ったら実はおばあさんに化けていた狼にと。
そのあとどうなるのかが気になっていたので楽しみです。

「今回の紙芝居は自作ではなく司の作ったのだから不安でしかたない。」
董擢様がそのような事を呟かれていました、どう不安なのでしょうか？

一目見て分かりました、李儒様の絵は大人顔負けの上手さなんですが、
子供向けの紙芝居には似合わない物凄い迫力のある力強い絵柄なのが。

絵を見た馬超様が「愛で空が落ちてきそう」と言われました、
私は、親の事言われると「親は関係ないだろ」とキレる銀行員に思えました。

絵が力強い以外はお話は普通でたんたんと進んでいましたが、
赤頭巾ちゃんが遂に狼に食べられてしまった辺りからおかしな事に。

飛び散る血飛沫狼のお腹から飛び出た内臓、絵の凄惨さに驚きここで記憶がなくなりました。

どれくらいたったのでしょうか？私が意識を取り戻すと、紙芝居は終わったのか董卓様や馬超様はおやつを食べてました。

ただ、董擢様と李儒様の姿が見えないので辺りを見渡すと、お二人は互いに愛用の武器である方天画戟と鉄扇を構えて向き合ってました。

「「殺す！！」」

何があったのでしょうか、とりあえず危険なので止めないと、ただ先程も言いましたがもしかしたら私より強いかもしれない二人をどうすれば？

オヤツに夢中になっていた子供達も二人の闘いに気付き、董卓様やら皆が危ないからと必死で止めようとしています。

「へうう、おにいたまあらそいはいけません」

「何やってんのよ、二人共止めなさい！」

「ばかなのです、どうせくだらぬりゆうなんですからやめるのですっ。」

董卓様、賈？様、陳宮様皆の言う通りです、危ないからやめるべき

です。

「兄貴、軍師に負けたら恥ずかしいから勝てよ～」

「つかさおにいさま、さくしのすごさをみせてみてっー」

「なあ、かゆうよ、どっちがかつかかけへんか？」

「ぐもんだな、いつものようにさいごはあいうちでおわりだな。」

「みんなたべないからおやついっぱい」

訂正します、勝負を止めないどころか余興にしている人が大半です。

ガキーン、ドガーン、グシャ、ドゴッ、子供の喧嘩の音ではありません。

「くたばれ、このボケー！」

「死ぬのはお前だ！」

明らかに台詞が喧嘩どころではないです私の実力では相討ちがいいところです。

天国のお母さん、私、紅はとても無力です、どうすればいいんですか！？

どうすればと途方にくれていると張遼ちゃんと華雄ちゃん、呂布ちゃんがやって来ました。

「しょうぶにみずさすのはぶすいやけどしかたない、いくでかゆう、れん。」

「「「おかあさーーん・・・・・・おかあさん」」」

お母さん?最初誰の事かわかりませんでした。

ニコニコした丁原さんが奥の部屋からやって来ました、
丁原さんは見た目からして強くなさそうですが大丈夫なのでしょうか?

人は見た目によらないと言います、実際董擢様も李儒様見た目は子供です。

戦いはどうなっているか見ると、李儒様が董擢様に馬乗り鉄扇で滅多打ちに、
死にますよアレは、なのに「撫でているのかきかねーよ」董擢様は人間ですか?

私の気のせいでしょうか、普通なら争っている二人は血まみれの大怪我なはずですが、
傷口がどんどん塞がっていっているように見えるのが、お二人は人外ですか?

そんな人外、もといお二人の前に丁原様が現れました。

不思議と二人の争いがピタリと止みました、丁原様はどれほど強いのでしょうか？

アレ？地面にペタンと座った丁原様がホロリと泣きました、それだけです、
何も言わず、ただ涙を溢しただけです、ですが場の空気が変わりました。

先程まで争っていた董擢様と李儒様が揃って土下座したり必死で泣き止むよう頼んだり、
なんなのでしょうか涙一粒だけでこのようになるのですか？

涙一つで圧勝なんて、今まで武を磨くとかやってきた私の人生に意味はあったのでしょうか。

涼州はなんでこんなに常識が通用しない土地なのでしょうか、私は勤め先を間違えたのでしょうか？

淳于瓊の悩みは続く。

第十七話、未来の涼州将とまたも紙芝居？（後書き）

駄目だ司の描くどうしようもない童話ばかり思いついてしまうのが、保達の訓練とか書くべき話があるのに、駄目ですねえ。

それにしても淳于瓊さんが没個性な割に使いやすい、その分キャラかぶりで空が消えてしまいそうですが。

思い付きで話を書いているから初期キャラがどんどん消えていきそう、不安だ。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？（前書き）

今さらながらドラマの三国志を見ていますが、見ながら恋姫は失敗でした。
小汚いおっさんの袁術に慣れてしまい美羽に愛着が持てない、美羽好きだったが。
華雄の戦いが敵将を宙に舞ませ最後は構えておいた偃月刀で串刺し、なんて魅せる戦い、でも殺られる時もお約束の関羽に瞬殺と魅せてしまうのが。
悲しいですよ華雄さん好きとしてはこの話での華雄さんは、まあ・・・頑張ってもらいますか。
それにしても一番違うはずの貂蝉に違和感を感じないのは何故でしょうか？
さて、雑談はさておき今日もまた初っぱなからふざけた話です、皆さんどうぞ。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？

―保―

テンテンテンテンテテテンテレレレレ～♪

「いらっしゃいませー」

店内に入って面喰った、此処は本当に三国志の時代なのか・・・？

前回（第十話）“あの曲が流れたら此処はファ○マだ”と言ったが、あの曲が遂に流れはじめたよ、なんだ私が疲れているのか？妖術なのか？

此処は涼州にある武器屋なはずなのに完全に現代社会のコンビニだよ、

お会計の所で一番クジらしきものまでやりはじめているし。

いくら外史だとはいえ大丈夫なのかこの三国志世界はフリーダム過ぎるぞ！？

まあ、一番クジの商品が名馬だとか鎧だとか辛うじて三国志的要素があるのだが。

店内をきょろきょろと見渡していると『おおっ、久しぶり』と声かけられた。

神出てきたよ、ちょっと待て！！なんでそんなコンビニの制服っぽ

い物を着ているんだ？
この間まで仙人服と呼べばいいのか如何にも神様って格好だったのに。

見た目が禿げ上がった頭、額に深く刻まれたシワ、張りを無くした年寄りの皮膚、
それに胸くらいまで延びている長い真っ白な髭、手にはゴツゴツした杖を持っている。

見た目が完全に神だよな、なんで勝手に衣替えしてコンビニのユニフォームみたいなの！？

神な見た目な顔で神っぽくない服装していいのは亀仙人だけだろ。

『やはりお客さんとしてはワシが店の人間と分かりやすいじゃろ、
あと商品陳列とかで汚れにくいし。』

ふ、普通の答えだよ・・・、いや、ぶっ飛んだ答えを求めてはいないよ、
だって、神なんてのがいて、コンビニ？経営している段階で既にぶっ飛んでいるんだから。

それにしても普通に心を読むな！！！普段神との会話が念波だからとはいえ。

『おおっ、それはすまんのう、つい聞こえてしまうからな。』

だからそれをやめろと！！！

『ちなみに制服を着るようになったのは指導員が巡回に来た際に怒られて、
店長として店に立つのならばちゃんと制服を着ろと。』
指導員！！？？？完全にコンビニのシステムやん。

「もしかしてフランチャイズ制で他にも店舗があったりして。」

『おや、知らんのか知っていると思ったぞ？多店舗展開するにはチェーンよりＦＣ制だろうと、
とはいえ、まだまだ規模は小さく、長安、洛陽、陳留、建業とかまだ都市部だけじゃが、
まあいずれそのうちこの店も大陸全土に出来るぞ。』

はじめて知った驚愕の事実ですよ。

実に嫌すぎる光景だ、このままだと三国志の時代の中国なのに、扱っているのが武器だとはいえ、
どんな地方に行こうがこのなんちゃってコンビニだらけなんて事がありえるのか。

『文句があるならお前さんの横にいる社長に言ってくれるか。』

だから心を読むな！あと、犯人は司なのね、ＯＫ、あとでぶっ飛ばしておく。

「いやさ、前にはじめて来た時に店に活気がないから、その後、店に来る度にやり方教えていたんだ、

ならば、いっそ親会社を涼州にして運営しては？ということになってね。」

司君、大事なことは皆に相談しようよ、なに州の金でコンビニ経営をやっているの？

頭がクラクラしてきた、とはいえ、コンビニの話をここでしていても仕方ないので、
私達が神に呼び出された理由を聞くことにしよう。

『では、話が長くなっていいように裏に行こうかの。』神の後をついていく。

バックヤードに行く為の入り口をくぐると、いつものあの真っ白い部屋に、
ただ、いつもと違うのはテーブルに椅子、そしてコーヒーとケーキが用意されている。

「今回わざわざ私達を呼んだのは如何様で？」と私が話を進めようとすると、

『お前さんらには久しぶりだろう、まずはケーキとお茶を楽しむといい。』

「お茶と言うがコーヒーだけどな。」

司君細かいよ突っ込みが、貴方は相変わらず神を相手にするときは口調が荒くなるな、
神の出番があるとその分、貴方の大好きな母親薊さんの出番が無く

なるからとはいえ。

私は司ほど神には恨みが無いのでこちらに来てからはじめてのコーヒー、
１２年ぶりのコーヒーをゆっくりと味わうとしましょう、うん、実に美味い。

そういえば、転生する時に成長限界突破するから頑張れば知はヤン・ウェンリーに勝てる、
と言われたな、それはまあいいんだ、ヤン・ウェンリーで思い出しただけの事なんだが。

彼は優秀だがコーヒーの良さを理解しなかったのが勿体無い、
私みたいに紅茶もコーヒーもたしなめばいいのに、まあどうでもいいことだが。

さて、コーヒーの香りと味で鼻と舌をしっかりと癒されたし、肝心要な話を始める。

「久しぶりにコーヒーを楽しませてくれる為に呼び出した？」

「なわけないよな、保さんはコーヒー党だが僕は抹茶派だし、呼ぶなら抹茶を出すでしょ。」

司君それはギャグで言っているんだよね？まさか本気で言っているのかい？
私よりもはるかに優秀なのに、たまに君が頭が良いのか悪いのか分からなくなるよ。

そんなどうでもいい事を思っていると神が怒って叫び出した。

『いい加減馬を手に入れろ～！！』

横にいる司の顔を見ると向こうもこっちを見ていた、目線が合う、
お互いに忘れていたぜよ、
おおう、神が転生の時に私達に馬をくれると言っていたんだったな・・・。

『ワシの設定ではお前さんが羌族の領地に挨拶しに行くと族長がお前の為にと、
この前の歓待の感謝で馬貰えるようにしておいたのに、一向に行かないんだから。』

神、神、神さんよぉ～、駄目だろ私とかに話さずに隠しておくべきだろ裏設定は、
カジノでディーラーが勝たせてくれるとかしないやろ、それくらいあり得んぞ。

「気持ちは嬉しい、ありがたい、本当に感謝している、転生して三国志の時代を楽しめているし、
これだけでも満足なのに徹底的に優遇してくれるのはありがたい、
でも、仕方ないでしょうが！！」

私の発言に続いて司も神に答える。

「僕だって色々行ったりしたいんですがあの過保護な親が行かせて

くれると思いますか？」

『・・・・・・。』

神黙っちゃったよ、神が両親の性格をいじっていくれていてもよかったんだよ、
過保護過ぎて私達心配されすぎて遠くに二人で行けるような自由がないですから。

あり得ない存在ですよ私達の親、神を黙らす息子への溺愛、それを二人共持っているんですから。

どうするかねえ～、まいったねえ～、母上にロボトミーするわけにはいかないしねえ、
それに、この世界での大事な母上にそんなふざけた事出来ませんし、させませんし。

さて、どうするか悩むもんだねえ～。

―司―

母さんの出番を奪う憎き神、最近は店長と呼ぶようにしているが、
それはどうだっていい。

まあ僕もムカつくとか色々言ったりしていますが保さんと同じで神に感謝しているんですよ、
それなりどころではない物凄い優遇をしてもらっているんですし。

それに僕は先程抹茶でないのかよと言いましたが、コーヒーでも私の好きなキリマンジャロですよ、
こういう心遣いは嬉しいですよ、ただ僕にコーヒーを出すならやはり抹茶にしてくれと。

まあ、僕の抹茶好きな話は置いておきましょう。

前に神が言っていた、ごっつい馬をくれる話ですが貰えるのならば是非欲しいですよ、
まあ、馬どころか望めばＶ－２２オスプレイだろうがなんでも貰えますが。

ですが、この時代にそこまでふざけたものは欲しくないですよ、、
それにヘリにしろ飛行機にしろ操縦した事が無いのでオスプレイなんか貰っても困りますから。

馬の話に戻しましょう、転生直前に神が言っていた原哲夫作品の馬を、
というのは大変面白そうです、ただ、不安もあります、貰っても乗りこなせるかどうかが。

うーん、でも黒王号にしろ松風にしろ欲しいですよ、なんとか乗りこなして愛馬にしてみたいです。

見た目だけで周りは逃げ出しかねない巨体と威圧感を持っている点。

更に、馬鹿みたいに強いですから、もしかしたらあの馬はそこいらの武将より強いかも？

『強さは・・・、まあそうじゃの、三国志ならば関羽に敵うか敵わないかくらいだ。』

「「ブッ！！！」」

あまりの驚きに保さんと揃ってコーヒーを吹き出す。

神、それはやり過ぎにも程があるぞ馬だけで軍神とやりあえるってどんな強さだと！？
そうなるとあの馬に勝てるのは呂布しかいないくなるような？
そんな馬を乗りこなせるように出来るのか、不安だ・・・。

話が少し変わりますが、先程名前が挙がった呂布ですが、いま保育園にいて、
保さんや月ちゃんに懐いています、涼州は将来の大陸一の武力を押さえているんですよ。

それに、僕や保さんは成長限界突破というアビリティがありいずれは範馬勇次郎越えの強さです、
原哲夫の馬に乗って、実力が最大で範馬勇次郎を超える生き物が二人いることになると涼州は。

涼州は将来ですが、大陸最強の上位三名おさえてしまった？

そうなればかなりの無茶が出来るでしょうねえ、歴史では董卓に対抗するため十八鎮諸侯が集まり、
中国史特有の水増しだろうが４０万という大軍団を集め洛陽に向けて攻めてきますが、
董家は史実みたいにしないでも真っ向から戦っても圧勝しそうですよこのままいけば。

実際涼州の騎馬部隊とか錬度、武装、戦術とか全てが他国と比べてチートクラスなのですから。

武将は将来有望な大陸最強の三人、さらに霞ちゃん、翠ちゃんもいる。

現役組ならば琅?さん、雷さん、見習い組の紅さんに、日、光の馬鹿二人もいる。

兵数も常備軍だけで今の段階で６万、余力はまだまだあり１０万でも余裕でいけます、
さらに徴兵もしたらどれほどの数になるやら?望めば異民族も派兵に協力してくるでしょう。

更に保さんと作り上げた大陸中に散らばらせ広げている商売人と細作の網で、
市場価格を常にチェックし兵糧や鉄などの転売でかなり稼がせてもらっています。

おかげで他国は戦争をしたくなっても準備に相当苦労するでしょう、
その間こちらは一方的に殴り続ける事が出来ると。

「アレッ、これって詰んでない！？」なんて漫画とかの台詞でああ
りますが、
今の段階でそれは涼州以外の国が「これって詰んでない！？」と言
うでしょう。

そんな状態ですから、馬鹿な霊帝に、玉無し、妹におんぶでダッコ
な肉屋の馬鹿、
明日にも洛陽に進軍すれば今言った馬鹿一同みんな仲良く晒し首に
してあげられるかと。

とりあえず、こういう事を深く考えるのはやめましょう、まともな
思考ではない、
勝てそう、と、勝てる、と、勝つ、では意味が全く違うのですから。

それにしても私の発想が明らかに悪なのが、神の目の前で神の代理
人に近い僕が陰謀を企むのは。

この戦乱の時代をどうにかしろと言うのが神の指示だったのですし、
陰謀は控えましょう。

『今日呼んだ本当の理由は馬の件ではなく、今、司が考えている事
に関してなんじゃ。』

神が口を開いた。

とりあえず保さんではないが、勝手に心を読むなよ！？

―保―

『今日呼んだ本当の理由は馬の件ではなく、今、司が考えている事に関してなんじゃ。』

何の事だろうか？たぶん司が黒い笑みを浮かべていたから陰謀についてなんだろうが。

とりあえず分からない事は素直に聞く事にしましょう。

「どういったことでしょうか？」

『ワシがお前達を転生させる時にこの世界が大変な事になっていると伝えたじゃろ、
その件に関してお前さんらに協力を頼みたいと思ってな。』

その後聞いた限りでは神の代理人として混乱した世をおさめろと。

『そうなんじゃ、この世を安定させるというのは間違ってはいないんだが、
たぶん想像している事とはかなり違うのじゃ。』

どういうことだ？

『この大陸の戦乱を治めるだけだったらお前さん方は必要ないんじゃ、英雄がいるから。』

此処までは言わんとしている事が良く分かる。

「性別や性格とかが反転していたりしているＩＦの世界だとはいえ、
やはりそこは三国志、
今はまだだが後々劉備や曹操といった英雄が出て来るから安定は築
けるという事ですか？」

『そうなんだ、問題はこの外史事態がなんじゃ。』

とりあえず私も司も黙って神の話を聞いてみようとなる。

『正史に対してこんな世界があったらという願望から誕生するＩＦ
の世界が外史なんじゃが、
時として皆の願望とかに関係無く偶然誕生してしまう外史があるん
じゃ、ここの事なんじゃが。』

『外史は願望の具現であるが、此処は望まれて出来た訳でなく、存
在が非常に不安定なんじゃ、
だから此処が存在するという認識が弱いとこのまま消えさってしま
う、この世界の生き物には悪いが。』

「テレビの視聴率みたいだな。」

その例えはどうかなぁ？司君よ。

『あながち間違っていない、だからこの世界を安定させる為に正史
と違う特色を出さないと。』

「私達がこの世界に送り込まれたのは、既存の三国志をひっくり返

し目茶苦茶にする為と。」

なんか昔のプロレスの軍団抗争みたいだな言っている事が。

『そうじゃな普通にそのままでいてはいつ消えるか分からないと不安定ならば、
劇薬だが徹底的にこの外史をかき回すお前さん達のような存在が必要じゃと思ってな。』

なるほど司の企む陰謀と関係しているというのもあながち間違っちゃいないな。

司はどうせ乱れる世の中ならばいっそのこと早い段階で黄巾党、何進や十常侍の争いを起こさせ、
または漢王朝やそれに準ずるだけの無能な諸候を早急に潰す事を計画したりしている。

一時的な混乱はでかいだろうがその方が大陸への被害を少なく出来るからという大義名分で、
とはいえ正史を知っている人間、維持しようとする人間がいたら、
真っ先に狙われるだろうな。

まあ、私も司も実のところ大陸の平和の為なんかではなく、自分が面白いかどうか、
あとは自分の周りにいる人間の命を守る為だけのエゴイストでしかないのだから。

傍から見れば場をかき回すだけの台風みたいな、そう、テロリスト

にすぎないんですから。

「私達みたいなふざけた人間のやる世を乱す行為が、皮肉な事に外史の存在価値を高め、
この外史に住む人間の命を守る事になるとは実に皮肉で面白いじゃないか。」

私はやはり狂っているんだろう、こんな事を普通に思いニヤリと笑っているのだから。

「本来は暴君に天罰を下す存在の神が、好き勝手暴れまわっていいと錦の御旗をくれるんですから、
こんなありがたい申し出はないですよね保さん、是非かき回してやりましょう。」

司も笑っている、お互い少しどころかかなりオツムのネジが外れているな。

「司なんか、錦の御旗なんか無くても常に面白いと思えば喜んで場をかき乱す人間だけどな。」

私の言葉にそれは心外だという表情を見せ苦笑している司、そんな二人を見ている神

『すまない、嫌な役回りをさせてしまって、危険で人から恨まれる事でもあるのに。』

神に頭を下げられるようなことではないんだがな、とはいえ凄いな

神が頭を下げて来るんだから。

既に私達はこの段階で、洛陽にいる天使とか呼ばれているお飾り皇帝よりも遥かに上の存在だな、
まあ、皇帝の地位なんか興味無いし、だからどうしたというところではありますが。

それにこんな事言ったら気がふれていると言われるか、まあその前に不敬罪だと処刑されるか。

「今も好き勝手やっているんですから構いませんよ、歴史を無視している、
波乱万丈な人生に自分から飛びこめるこれほど幸せな人間なんかいないんじゃないんですか。」

「おもしろき　こともなき世を　おもしろく、ですよね保さん。」

あの世の高杉晋作が聞いたら蘇って怒鳴りつけてくるぞ司君。

『とりあえず、この外史はお前さん達のおかげで今の段階でも当初に比べかなり安定している、
今のままでいけば近いうちに、それでも何年もかかるだろうが完全に固定されるじゃろう。』

「では固定されたら教えてください、ただ言っておきますが外史が固定されたからといって、
私達二人が急に真人間になれるわけないですから、死んでも無理だよな、特に司君は。」

「暴走した時の保さんの方がはるかに危険ですよ。」

とりあえず普段と同じように馬鹿話をする事で世界の平和を守る事を知るとは、
もう少ししたら司と話し合って、色々やらかしてみるか涼州の為にも。

まずはなんだ静かに徐々にだが近隣州を切り落としていくとかか、
楽しみだ、どう遊ぼうか。

『あっ、お前らに最後に頼みごとが、特に用無くてもいいから店に来てくれ、
お前さん達は何をするか分からないという点で他の人間と違って面白いからな。』

宇宙で一番偉いというか、この世界を作った神が完全に友達になっているな、
こんな狂った世界を楽しめるなんて死んで転生するのも悪くないな、
うん、じつにいい。

「保さんは知らないが、また店の経営状態チェックでいくから待っていろよジジイ。」

司も心底楽しんでいるな、さあ、これから更に好き勝手暴れまわりましょうか。

第十八話、忘れられていた馬、そして二人の任務って？（後書き）

恋姫世界をかき回す存在である二人に、更に自由に動けるようにさせてみました、フリーダム過ぎてどうなるか作者の私もこの後どうすればと。

後々なんでこんな展開にしてしまったんだ俺は！？と猛烈に後悔していそうです。

いつもいつもこんな馬鹿な話ばかりですが、皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第十九話、嵐を避けられるのか？（前書き）

この話とは全く関係ないのですが今日は夕方から取引先のパーティでした。

会場にいた人でずっと無口で、口を開いてもボソッと用件しか喋らず、
黙々と山のようにご飯を食べ続けている人がいた。

恋転生したのかよ!?と突っ込みたかったが、
問題はその人が５０近いおっさんでったのが。

多分、ここ最近の仕事の忙しさで疲れているんだなと思いましたよ。

話に全く関係ない雑談ですいません、さて、今日はどうなりますか。

第十九話、嵐を避けられるのか？

―保―

あっ、どうも皆さん、００７ならば殺しのライセンス保有者みたいに、
神から好き勝手やっていいよとお墨付き貰った董擢こと保です。

今日は涼州の外れに来ていますが、何もありません。

テレビもねえラジオもねえ、あの歌よりも何もありません、
車が若干でもあったら怖いですが。

いるのは羌族の皆さん方にあとは馬やら家畜、涼州から来た我々がいるくらい。

何故そんな場所にいるのかと申しますと羌族から招待を受けたからでありまして。

招待を受けたのならばと涼州も羌族を大事にしているというアピールのために、
太守である母上は無理ですが父上、琅?さん、雷さん、薊さん司の親子、紅さん、私、
といった恐ろしく豪華な涼州の主力メンバーで行って来ましたよ。

羌族の皆さんから普段の取引や友好関係、そして族長達が城に来た時受けた歓待の礼をと、
族長さんが特に私にお礼がしたいと大変貴重な牛を潰してまで出してくれたことへと。

「何が貰えるんでしょうねえ族長自ら渡そうとするくらいですから楽しみですね保様」
とか、紅さんやら皆族長のプレゼントが気になっているようで。

「そ、そうですね、どのような物を用意していただけるのかと。」

引き攣りながら返事します。

羌族の皆ごめんなさい貴方方の用意したサプライズプレゼントの正体を知ってます、
しかも、私だけでなく司君も、私の手元に来るように神が準備した馬なんですから。

羌族の皆さんとても良い人なんだろうなあ?驚かせようと頑張っているんだよ。

本当にごめんなさい、としか言えないですよ、答えを知っていて。

まあそんな事を思ったりしているうちに時がたち夜になり宴席にな

りました。

私は太守の息子な為見た目１２歳のガキンチョな私もかなり良い席に案内されました、
問題は私の横にチョコンと座らされたこちらの可愛らしい女の子はなんでしょうか？

族長が満面の笑みで「自慢の娘なんだが董擢様の妻として」私のお嫁さんにですか、
族長第十五話で懲りてな・・・、なんて嬉しいサプライズプレゼント、
ごめん、このサプライズプレゼントは予想していませんでした。

馬じゃないとは、神大丈夫なのかあっさり期待を裏切られて。

まずいです、今回は母上は来ていませんが、琅？さんと薊さんがいます。

琅？さんは翠ちゃんを僕に、蒲公英ちゃんを司にと企んでいるんですから、
これは危険です、前回族長に順番があるだろと切れるような人です。

母上の私ＬＯＶＥぶり、薊さんの司ＬＯＶＥぶりとはまた違った危険さがあります。

それにしても翠ちゃんは私なんかに押し付けようとしないでも、今のまま成長すれば
将来結婚相手に困らない位美人さんになるの確実な可愛い女の子な

んですから。

とりあえず前回と違い母上はいませんが、このまま結婚の話になると大惨事でしょう。

琅?さんキレる薊さんに飛び火、大惨事この流れだけは防がないといけません、

全力でなんとかしないといけません、あと族長でも当人の意思を無視するのも駄目です。

ただ“お前の娘なんかいらない”なんて言ったりしたら、今度は羌族側がキレます。

父上、雷さんとか涼州組は大丈夫か?と不安な顔を司君だけは楽しそうな顔をしてます。

司君貴方も蒲公英ちゃんがいるから他人事では済まされないんですよ。

流血沙汰を防ぐ為にも舌先三寸でなんとか乗り越えられるように努力しましょう。

舌先三寸といえば昔、会社で部下の子に言われました

「課長は息を吐く様に嘘をつきますね。」

営業熱心でちょっとオーバーな表現をすると言ってほしかったなと

思いましたよ。

まあ私の知り合いの社長は部下と取引先へプレゼンに行った帰りのタクシー内で、
「社長は嘘つき病です今すぐ病院に行ってください」と部下に言われたそうで。

そこまで部下に言わせるとは何があったのでしょうかねえ？
聞いた話では仕事とるために納期で相当無理をしたようで。

まあ、嘘つきだとかの話は置いておいて今そこにある危機に対処しましょう。

「羌族の皆様に普段から私達涼州の人間は感謝しきれないほどお世話になってます、
それなのにこのような豪華な宴席に招いていただけるとは誠にありがとうございます。」

お世話と言ってますが持ちつ持たれつな取引の関係ですがへりくだっておきましょう。

更に挨拶を続けます。

「そして更に族長の自慢の娘さんを私のような未熟者にという話をいただけるとは、
これほど厚遇していただけるとは涼州の人間はどうやって羌族の皆様に恩返しをすれば。」

遠回しな表現でやんわり断っておきましょう。

族長とか羌族の皆さんはどうやら話が変な流れに進んでいる事に驚いているようで。

驚くのも無理もありません、母上が進めている異民族融和政策で一番簡単で確実な手段は、
家族にする事ですから、それを断ろうとしているのが融和推進者の一族では驚くでしょう。

「もしここで娘さんを私の妻に、となりますと涼州の者は諸手を挙げて賛成してくれるでしょうが、
我々を知らぬ他州の口さがない人間達は族長は保身の為娘を人質として売った等と嘲るでしょう。」

彼らのプライドを守るためという形になるよう話をすすめましょう。

そんな事態になっていないＩＦの話だが、私の例えでその様子を想像し、
羌族の皆さんの表情に怒りが灯りはじめている。

実際漢王朝の人間達に異民族だからと蔑まれてきた屈辱の歴史があるのですから。

「誇り高き羌族の皆様が愚か者に馬鹿にされても平和の為にと怒りを堪えるのは辛いでしょう！
そして、私は羌族の皆様以上に羌族の皆様への侮辱に耐える事が出

来ないです!!
その愚か者共を皆捕らえ首を叩き落とし門前に並べても決して気は晴れないでしょう。」

皆驚いています子供である私が此処まで激しく羌族の為に怒りるのですから、
ここまでの言葉を吐き出すとは思わなかったでしょうとどめを刺しにいきましょう。

「何故ならば親を家族を侮辱されて許せますか!?私にとって羌族とは友人であります、
そして、それ以上に父であり母であるのですから。」

中国ではお前の息子や孫だとか言うのは相手への最大の侮辱になるから、
気をつけないといけない表現ですがあえて言ってみました。

「娘さんの話を断っておいて、更に恥知らずな事にお願いさせていただきたいのですが、
ただ一つだけ、父上と呼ばさせていただけませんでしょうか?」

ここで土下座をしてみました、やりすぎたかもしれません、いや実際やり過ぎでしょう、
実の父親の目の前で勝手に異民族の族長を父と呼ばせてくれとか言ってるんですから。

族長とか皆さん感激しているようです、涼州の人間はポカンとしております、

司君だけは“上手く逃げ切ったなあの野郎”という顔でニヤニヤしていました。

上手くいったのは良いですが、この時代の人は皆ピュアですよ、もう少し、
人を疑う事を覚えましょう、騙した私が言うのもなんですが。

とりあえず逃げ切りに成功したようです、羌族の皆さんが笑顔で私の所に集まってきました。

私の知っている正史では羌族は漢に従うようになった後も何度も刃向ったりでしたが、
これで更に結びつきは強くなったでしょう、漢ではなくあくまでも涼州であり私にですが。

無事に宴会は終わりました、これで琅?さんとかがキレるシナリオは回避できたなと。

問題は涼州に帰った後に、今日の私の発言が母上に怒られないかがとてもとても不安です。

まあ後の恐怖は後に考えるとしましょう。

翌日族長が「お前は私の自慢の息子なのだから何処に乗っていっても恥ずかしくない

汗血馬にも負けない羌族自慢の馬を乗るようしないといけない」と、見に行ってきました。

「この馬“達”は羌の人間の誰にも懐かなかったがお前なら出来るだろう。」と案内されました。

達って複数いるんですか?神が私達二人の分の馬を用意してあると言っていましたが、
まさか羌族の皆は司の分もくれると言うのでしょうか?

私の分は分かるが羌族に司はあまり関係ないんだが。

一応、司は私と杯交した義兄弟と教えてあるので、兄貴だけでなく弟の分もという事でしょう。

それにしましてもどれ程凄い馬なのか分かりますが、羌族の人間の誰にも懐かなかったって、
ある意味“人に懐かない厄介な馬をよこしたの?”と勘繰ってしまいますよその台詞では。

着いた先にいましたよ馬が、いや、馬!?という感じです。

馬の概念に収まらない巨大な生き物が。

普通の馬がポニーそれどころか世界最小の馬ファラベラに見えてしまう馬が二頭もいる。

あまりのでかさに見て驚いてフリーズしている常識人グループである父上や紅さん、
琅?さんや雷さんといった馬に慣れている人間もなんか引き攣った顔をしている。

私と司が近付いてみる「危ないです」おっ、紅さんがフリーズから復活して叫んでいる、
いや、馬のそばでいきなり大きい声出したりする方が危ないのに、臆病な生き物なんだから。

私と司が近付いたら何も言わず屈んで、背中に乗れと態度で示してくれ、
だから跨ってみましたよ。

私達が跨ったと思うとスッと立ち上がりドドドドドっと走りだしました、
試し乗りをしてくれたんでしょう、感動しました、それ以上に死ぬかと思いました。

ラオウさまや前田慶次はこんな物に乗っていたんですか、阿呆ですよ。

ちなみに彼らに乗るのは簡単だったがその後が大変でしたよ。

鞍も鐙も付けていない状態で黒王や松風に全力疾走されるんですから、

私も司も何度舌を噛み切りかけ、股間から破滅の音が聞こえかけたことか？

危うく何もしていないのにナチュラルで宦官の仲間入りする所でしたよ、

嫌やー、まだ此方の世界に来てから全く使っていないのにおさらばするなんて、

まあ、おさらばしないで済みましたが。

「玉が潰れて駄目になっても将来子供が駄目になるだけやん。」

司君そんな冷静な答えはいらないよ、君だって危うく砕けかかっていたんだから。

「あの馬達を乗りこなし無事だったとは！？」

族長ーーー！！！！！！なんだ、その発言は！そんな危ない物を渡すな！

昨日まで自慢の娘を与えて引きこもうとした人間になんて馬を渡そうとするんだ！！

まあ、元が神のプレゼントではあるんだが。

遂に族長までもが私達のようなギャグの世界側に足を踏み入れてしまうとは。

とりあえず、こんな風にでしたがなんとか念願の馬を手に入れましたよ。

ちなみに黒王号や松風は流石にそのまんますぎてまずいのではと思い、
中国の伝説の馬から名前取ろうと穆王八駿から。

私が光より速く走れた「踰輝（ゆき）」司が翼ある馬「挟翼（きょうよく）」と名付けました。

私達二人のチート化がこれで更に加速しました、大丈夫か三国志の世界？と不安になります。

とりあえず司君は長物武器を手に入れてもらわないとそうでなくても武器が鉄扇と、
リーチがまったく無いのにこんなばかでかい馬に乗ってどうやって戦うつもりなんでしょうか？

此処から余談、

隴西の城に戻る最中にためしにと父上も踰輝に跨らせてあげました、まさか乗った瞬間に振り落とされ鐙に足がハマったまま落馬したために、
引き摺られ続け城まで赤い線が延々と続いていました。

ちなみに母上はさすが沈着冷静の董君雅と呼ばれるだけあり、見ても「あら大きいのね」

うーん実は母上は沈着冷静ではなく感情の一部が欠損しているのでは?と悩んでしまいました。

あと、関羽とやりあえるという神の言葉通りだけあり、今の涼州での武力比較をすると

キレた和＝キレた薊＜琅?≧踰輝＝挟翼＜雷≧保＝司＜紅

紅さんが「馬に負けた、馬に負けた、馬に負けた」と死んだ目をして呟いていたとかいないとか。

更に余談ですが涼州最強は一粒の涙でどんな争いも鎮圧できる丁原さんという事で意見は一致しておりますが。

更に更に余談、私達が帰る際に族長が「なんとしてもうちの子の婿に」と呟いていたとかいないとか。

第十九話、嵐を避けられるのか？（後書き）

ご都合主義にも程がある感じですが、やっと主人公達がチート化第一弾でした。

それにしても普通人である紅さんが普通である分かなり使いやすいとは、
キャラ設定していた時は思いもしませんでした、・・・お恥ずかしい限りで。

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております。

第二十話、いつのまにやらラブ空間に？（前書き）

どうしてこうなった、どうしてこうなった、気づいたらこんな話になっていた。

淳于瓊さんがこんなに出番が増えるようになるとは思わなかった、この話を書いている作者が言うのもなんですが、どうしてこうなったのだろう。

あっ、ちなみに時間は更にキンクリして保達は今１４歳です。

第二十話、いつのまにやらラブ空間に？

―紅―

「ひまだぁぁあああ～～！！！！」

李儒様がいきなり叫び出す、何を言っているのでしょうか？

つい先程朝議が終わったばかりでまだまだ執務が控えているのにですよ、

涼州の政治を司る李儒様が暇なわけないのですから皆書簡の山の処理なのですから。

だと思っていたのですが。

「分かる分かるぞ司さんよ～～！」

分かる人が出てきてしまいましたよ、しかも董擢様ですよ。

董擢様も李儒様と同じく涼州の指導者なんですよ、何処が暇なんですか！？

つい董擢様と李儒様をにらんでしまいましたよ。

「紅さん、こちらを見詰めていますがどうかされましたか？

美人に見詰められると恥ずかしいので照れてしまうんですが。」

いきなり何を言うのでしょうか李儒様は。

「な、な、何を言っているんですか李儒様は、わ、わ、わ、私がびびび美人だなんて！

び、び、美人というのは董君雅様みたいな方を言うのであって。」

私なんかが美人なわけないんですから。

「紅さん、そこまで動揺しないでも惚れた司に誉められたからとはいえ照れちゃって。」

と、と、董擢様まで何を言ってるんですか！董擢様といい李儒様といい、

こうやって私をからかって遊んでくるんですから困ってしまいます。

私より年下の子供なのにわざとドキッとする事を言ってくるんですから。

最近の李儒様は、２年前に比べ背も延びてきて私とかわらない位になられて、

空いた時間を作っては調練に参加されているので日に日にたくましくなってきていて。

茶色がかった肩まで伸びた美しい直毛、浅黒い肌に漆黒の瞳、彫りの深い顔立ち、

年相応に子供っぽく笑っていたかと思うと、時おり見せるやけに大

人じみた横顔が。

李儒様は軍師であり戦場に出る事になっても後衛で武を振るわないでいいはずですが、
李儒様にしか懐かない凶暴な巨馬挟翼を乗りこなし、最近の調練では、
涼州最強の琅?様とほぼ互角に戦える程の武の実力を見せつけたり。

そんな李儒様の姿を見ると胸が苦しくなる事があるんです。

って、ええい、私は何を考えているんですか、落ち着きなさい私。

李儒様は上司李粛様のご子息で単なる同僚で、年下の子供でしかないんだから。

「最近の李儒様は格好良いし、好きかと言ったら好きかな?と・・・。」

はっ!!!私は無意識にとんでもない事を口に出してしまっていた。

こんな事を聞かされても李儒様は迷惑でしょう、ううん、
迷惑とかでなくまた困惑している私を見てニヤッと笑っているはずです。

はっはっ恥ずかしい、どうすればいいんでしょうか、
そう、これは気のせい、そう、気のせいに違いないんです!!

―司―

どうもここ最近の仕事がパターン化していて落款押しマシーンになれば、
すぐに済んでしまうような仕事ばかりで、ついストレスがたまって叫んでしまいましたよ。

「暇だー」と愚痴の為に叫んだら保さんも同意してくれたが、
なんか紅さんがこっちを見ているのでからかったら話がおかしな方向にいっている。

「最近の李儒様は格好良いし、好きかと言ったら好きかな?と・・・。」

あれっ?紅さんがとんでもない事を口走っているような・・・・。

「ほ、紅さぁ～ん、もしも～し、大丈夫ですか?」

呼び掛けるが返事がない、返事が無いただの屍のようだ、
いや、違うし!紅さん生きているし、自分の発言にパニックっているだけだろ。

顔を真っ赤にして両手を頬にあて顔を左右にいやいやという感じで振っているよ。

紅さんもしかしてもしかして、私にガチで惚れているのか、だとしたら参った。

う～ん、紅さんが私に好意を向けてくれるのはとてもありがたいが、好きとか嫌いとかそういう感情は無いし、でも人に嫌われるよりは好かれる方がいいが。

紅さんはすれ違った人間十人中十人が振り向くなんて程の美人ではないが、
でも、けっこう顔立ちは整っているから美人な方だしなあ。

うん、性格は真面目だし、仕事もキチッとやるし皆の評価も良いし、服が破れていると気づいて縫ってくれたり女性的な面もあるし。

今までなんとも思っていなかったんだが、相手がこちらを好いてくれる、
なんて知ってしまうと、ちょっとは気になってしまうなあ。

これから仕事とかで顔合わせたりするとやりづらくなりそうだな、
どうすればいいのかなあ、紅さんについて・・・・。

―保―

おかしい！？冗談半分で二人を冷やかしたら、なんか反応がおかしい、
紅さんが司を意識しているのは何となく分かっていたから冗談で話

したら。

司も満更でないような、お互いがお互いを意識するようになったのか？

冷やかした人間としてはなんだかなあ・・・・。

それにしても、このままで良いのか？今回の話が一向に進まなくなるが大丈夫か？

いいや、よくない！折角最初に司が暇だ！と話を振ってくれたのだから、

司もまさかこんなＢＯＹＳ　ＢＥもどきみたいな展開にする気はなかったはず。

話を進めるようにしよう！

では話を進めるためにまずは状況確認だ、執務室を見渡すと、うん、薊さんがいる。

はっはっは、薊さんが紅さんの言葉に反応しそうだぞ大丈夫かな二人は？

こういった発言をしていると、友達の恋を邪魔するモテない男の嫉妬に見えてしまうね。

うん、嫉妬ではないよ司が上手くいってくれるなら嬉しいし、

ただ、司は良き人でいられるかがわからん、下半身とかフリーダムだったし。

まあ、司の恋愛の話はいいや話を進めましょう、
何故なら今執務室では司ＬＯＶＥな薊さんが荒れ狂っているんだから。

現実逃避しておきましょう。

とりあえず司の暇だ、という理由はよく分かる。

仕事がワンパターンで飽きているんだよなあ、書簡は多いが落款を押すだけ、
量はあるが簡単に終わる仕事だから、皆なんであんな時間かかるんだか？

司が叫んだのは普段の単純作業へのイラつきもだろうが、
最近の張略がなかなか結果が出てこない事へのイラつきだろうな。

司が仕事で悩んでいるのならば友人として手伝ってあげましょうか、
司の企む事なんて絶対に面白いだろうし、協力するしますか。

問題は司がどれくらいの事をやろうとしているのかだな？

前にボソッと「漢中」と呟いていたし、あの漢中だろうなあ。

たぶん漢中地域の混乱起こさせるとかかな？

漢中って歴史ではたしか劉焉が張魯を送りこんで橋を切って道を遮断し官吏を殺し、
それを張魯のせいにして益州が中央との連絡とれないと言い訳の材料にされていたはず。

もしかして司はそれを早い段階で此方で起こそうとしているのか？

漢中を益州から独立させてしまって、涼州に増えている難民や族を鎮圧で派兵する気か？

もし私の予想通りならば実に面白そうだな、あとで聞いてみるか。

国境線周辺のゴタゴタほど戦争の材料に適した物はないしな、ふふふ。

「保様、保様、何やら考え事でも？」

おおっと、考え事していて雷さんに話し掛けられていたの気づかんかった、
漢中の乗っとり、戦争を企んでた、とは言えないので適当にごまかしますか。

「司と紅さん二人がもし将来くっつこうとなったらどうやって薊さんを説得するか？」

いくらなんでもこれは答えに無理があるかな？

「おお、それはたしかに難しい問題ですなあ、でも平気では？」

雷さんって戦場では策略家で頭良いが、こういう点は結構間抜けというかよく騙されるな。

それにしても過保護な息子ＬＯＶＥな薊さんが平気とは？何か策があるのか？

「親はなんだかんだ言いながらも子供の事を理解してくれるでしょうから。」

う～ん、雷さん、だとしたら今この部屋の惨劇という状況を回避できていたような。

部屋を見渡したら、部屋が戦場になっているよ、何処の激戦地だよ。

もしくは忠臣蔵の松の廊下、薊さんがモルゲンステルンを振り回す室内にいた衛兵達が敵わないまでも何とかしようとおさえつけに。

“吉良殿殿中でござる、殿中でござる”と吹き替えて違和感がまったく無い状態だ。

「保君は翠がいるから平気だよね～。」

そんな事を思っていると琅?さんが来たよ、このままではまたこじれてしまうよ。

母上が介入してくるよ、私の結婚とかの話しになったら、どうおさめるか。

とりあえずいなしてみますか。

「ええっ、翠ちゃんがお嫁さんに来てくれますから私は安心してますよ、
翠ちゃん可愛いですし、ただまあお馬鹿さんなのはちょっといただけませんが。」

いつもなら嫌がる私があっさりと翠ちゃんの結婚を受け入れたことに驚いているよ。

「本当に翠でいいの?」

うん、いつもと明らかに反応違いますね、あんだけ結婚させようとしていたのに。

「ええっ琅?さん、翠ちゃんはお馬鹿ですが純粋でとても可愛いですし、
いずれ私と手を取り合い共に歩んでもらえたら嬉しいですよ、
ただそれは将来お互い大人になり、その時に翠ちゃん当人が望んでいたらですけどね。」

こういう断り方ならば琅?さんも仕方ないなとなるな。

「はあっ、やっぱり保君は首をなかなか縦に振ってくれないねー。」

当たり前ですよ。

私は人に言われたからといって“はい、そうですか”と言う人間ではないですから。

それにすぐそばに母上がいるから不用意な発言は惨劇を迎えますので。

実際、翠ちゃんが、と言った時、母上の表情に一瞬ピクリと反応があったんですから、

わずかな変化で分かりにくいですが、これは気付かなかったら大惨事でしたよ。

それに私の好きな女性のタイプが母上みたいなクールビューティーですから、

翠ちゃんが将来クールビューティーになるかというと、うーん・・・・?

今思い出しても転生した直後は辛かったね、理想のタイプの女性がいて母親だったと。

私転生しているから精神年齢は４７歳ですよアラフィフですよ只今、今、３７歳の母上位の年齢でちょうどいい感じなんですよねえ。

こちらでの年齢は１４歳ですから、２３歳歳上ですから世間はビックリ、
ペタジーニやラミレスみたいな姉さん女房ですから。

あれ?当初母上が「保ちゃんは私の婿だ」発言をするたびに、聞こえないふりをしていた私は何処に行った・・・。

あっ、結婚したいのはクールビューティーとは違いますが、可愛い月です。

母上も月も私を大好きと言ってくれてます幸せですよ、ただ家族としての好きですが。

うん、私は先程から何を言っているのでしょうか?

多分仕事の疲れとかストレスで混乱しているだけでしょう。

気のせいか?私の好感度が先程からストップ安という感じで駄々下がりしているような。

―和―

キュピーーン

今、何か凄く嬉しく感じる事を感じとりました、何か強烈な思いを感じました。

私にとってはすごく嬉しい事のようですが、気のせいかしら？

まあ、たまには感じたことや思っていることを横にいる空に素直に言ってみましょう。

「貴方、最近思ったのですが、今はいいですがいずれ保君も結婚しますよね、
今まで保に近づく悪い虫は排除なんて思ってましたが、それではいけないと思って。」

あら、あの人がふるふるしています、どうしたのでしょうか？

「ううっ、ついにお前も子離れをするようになったんだな。」

泣きながら何を言っているのでしょうか、一体うちの人は・・・。

「保くんがお嫁さんを連れてきたら暖かく迎えてあげないと、
保君が選んだ人なら間違いないですから、ただ一回はひっぱたきますけどね。」

私が微笑みながら言うと横にいたあの人が苦笑してる、でも一度位はね、
私がお腹を痛めて産んだ大事な保君を取られるんですから。
でも、それ以上はしませんよ、余裕があるところを見せないと。

「やはり正妻の余裕を見せてあげないと保君の側室に対しては、ねえ貴方。」

あらっ、あの人が固まっている、どうかしたのかしら?

ー空ー

久しぶりな出番の空ですが、とりあえず今から一言

『誰か助けて下さい、妻が、妻がぁぁあああ〜〜!!』

どうして妻がこんな風になってしまったんだ・・・。

なんか妻がこの後も

「最近、保君を見ると一人の男として見てしまいそうな私がいる。」

「貴方も好きよ、ただ保君も家族としてだけでなく男として好きになりそう。」

あまりの恐ろしさのあまり妻の目を見ることが出来ませんでした。

誰でもいいので助けて下さい！妻を治せる医者はいませんか～？

五斗米道でも妖術でもいいから助けて下さい・・・！！！

なんでこんなことになってしまったんだ。

ー百合ー

「二十話目にしてやっとの僕達の出番がきました！皆さんはじめまして、
僕は涼州三人娘で姓は【田】名は【豊】字は【元皓】真名は【芍薬（しゃくやく）】って言うんだ。」

執務室の中が混沌としているなかで芍薬は一体誰に話しかけているのだろうか？

「芍薬ちゃん誰と話しているの？あっ、ちなみに牡丹は涼州三人娘の一人、
牡丹の名前は【沮授】で字が無くて真名が【牡丹（ぼたん）】だよー。」

牡丹まで一体誰と話をしているんでしょうか？

「ふふふ、牡丹さんあなたまで一体誰と喋っているんですか？

私も他の二人と同じように涼州三人娘と呼ばれておりますが、姓は【審】名は【配】字は【正南】真名は【百合(ゆり)】と申します、以後お見知りおきを。」

なんか私も言わないといけないような気がしたのでとりあえず名乗っておきましょう。

それにしても芍薬さんも牡丹さんもよくこんな混沌とした状況で普通でいられるんですはね。

李粛様が暴れ衛兵が取り押さえ、淳于仲簡さんや李文優様が呆けていて、
董君雅様が何かを話して、池陽君様は何か叫んでいて、何なのでしょうかこの状態は一体。

「ついに紅ちゃんが司ちゃんに告白したね、しかもこんな人前で。」

何処をどう見れば告白に見えてしまうんでしょうか牡丹さんには。

「アレを告白って牡丹さん貴方どこをどう見ればそう思えるのかしら。」

夢見る乙女ということだからなんでしょうか？

「でも、僕は紅さん誉めてあげたいな、だって好きって言うの勇気いるから。」

確かに告白は勇気が必要でしょうが、どうして二人には告白に見えるのでしょうか？

「芍薬さんまで、アレを告白というなんて、どう見ても独り言のたぐいでしょう。」

二人にあの瞬間がどう見えたのでしょうか？私の眼とは違った物が見えていたのかしら？

「紅さんも長かったねー、周りで見ている方が頭にきたくらいで。」

確かに芍薬さんの言うとおり淳于仲簡さんが李文優様を気にしているのは、
私達の間ではいつも話題に上がっていましたが。

「でも、芍薬ちゃんだって好きな人いるのに告白してないでしょ牡丹知っているよー。」

牡丹さんも此処で芍薬さんの思い人について話を振るなんて酷い人ですはね、
狙って発言しているのではなく自然と言っているのですから怖い人で。

「ぼたーーん、何を言っているの僕はそんな雷さんの事をなんて」

芍薬さんもまた淳于仲簡さんに負けず劣らず分かりやすい反応をされる人ですはね、
長い付き合いですが芍薬さんの新しい一面を見る事が出来るとは思いませんでしたは。
たまには芍薬さんを困らせてあげましょうかしら。

「あらあら、牡丹さんは韓文約様の名前など一言も出していないのに、
芍薬さんは何故ここで韓文約様の真名をよばれるのですか。」
私達三人の中で一番優秀な芍薬さんがどうされますかしらねえ。

「ううう、あううう・・・。」

実に面白いですはね、真っ赤な顔して泣きそうなこんな可愛い芍薬さんを見られるなんて。
たまにはこういうのもいいなと思っていましたら、空気を読まない人間がいるんですはね。

ー光ー

「ただいまっす李?っす、族討伐から帰ってきたっすが部屋どうなっているんすか?」

阿多と一緒に族討伐から帰ってきたっす、だから太守に報告に来たっす。

そしたら執務室中が目茶苦茶だったっす、盗伐した族のネグラより汚いっす、
だから、言ってやったっすよ。

「こっちは阿多と一緒に族退治をしてやっと帰ってきたっす、それなのに皆が遊んでいるなんてふざけているっす、真面目にやるっす。」

そしたら急に執務室が静かになったっす、さすがおいらっす、おいらの威厳にかかればあっというまっす。

なんか部屋のいたる所から「光が常識を問うとは」「光に言われたらおしまいだ」
「李稚然に言われたらおしまいですはね」

皆して酷いっす。

第二十話、いつのまにやらラブ空間に？（後書き）

涼州の新加入六人組の出番を出来る限り作ってみました。

なんだろうハムの人を超える常識人で個性薄くなるはずの淳于瓊が、当初の予定と違ってなんかやけに出番が増えることになるとは、なぜなのかなあ？

今回は修正いらないと思ったら、年齢の所間違えていた、またか。

皆様のご意見ご感想お待ちしております

第二十一話、徐州から招かれざる客（前書き）

おうふ、またも新キャラを出してしまった。

恋姫原作キャラでなく、しかもまたもマイナーどころから、いや曹操や劉備とか大好きですよ、でも気づくと変なところから採用と。

第二十一話、徐州から招かれざる客

―保―

おはようございます、どつきあいでしたら、
今、涼州最強の一人になりました董擢こと保です。
部屋の外に出たいのですが、今、私室に身柄拘束されています。

「董孟高様、今の事態を認識されておりますわよね、
何故、今、部屋に閉じ込められているのかを。」

いいえ、いきなり軟禁される理由なんて身に覚えがありません、
品行方正、勤勉実直、質実剛健な私には全くわかりません。

ちなみに今、部屋には百合さんと雷さん私と三人がいるのですが。

「保様ならばあんな奴片手で捻って倒せてしまうぞ、
だから、気にすることなくどうどうと戦えばいいんじゃよ。」

ええ、今や琅?さんともガチで引き分ける自分の武に少しは自信はあります、
ただ、雷さん誰かが来ているの?相手誰なの?刺客が送り込まれてきたの?

本当に訳が分かりませんよ。

私が私室に書簡を持ち込み落款押しマシーンになっていたら、半刻程前に
いきなり部屋の扉が開いたと思ったら雷さんと百合さんがやってきて。

「董孟高様、緊急事態ですので部屋から出ないで下さいますか。」

口調はいつもと同じだが、百合さんの表情からただならぬ事態と。

「百合殿も芍薬殿といい心配性だのう、保様ならば平気だよ、わはは。」

雷さんはいつものように豪快にお前らは心配しすぎだと笑っている。

うん、何が何だか分からないね。

「韓文約様、世の中にはもしもということがありますので、大体ですね韓文約様、
事態を悪化させない為にこのような手段をとらさせていただいてるのですから。」

百合さんが雷さん相手に怒っている、雷さん百合さん苦手なんだよな、
上品な口調で理詰めで徹底的に攻めてくるからやり辛いようで。

謎だよなあ雷さん、私や司ほどではないが戦いにおいて策略家で優

れた武勇もあり、
でも、まずは策で相手を弱らせ最小被害で勝つ、この時代としては珍しい勝利至上主義者で。

手段を選ばないで戦ってくれるから軍師の出した非道な策もOKと、個人の武がとか寝言が当たり前な他の武将からすると卑怯、と言われるような、まさに名将だが普段は何でこんな大雑把で、理詰めに弱いんだ。

まあ、雷さんの考察はいいや、とりあえず話を進まそう。
ただならぬ事態なんだろうが一体何があったのか?まずはそれについて聞こう。

「百合さん、雷さん、一体何があったのか教えてもらえますか?説明ないのは困ります、
先程から部屋を出るな!私ならば平気!とだけ言われても、何があったのですか?」

「「・・・・・・」」

あれっ、急に部屋中が沈黙に包まれたぞ、これはもしかして、
内容伝え忘れた事に気づいてしまったか二人とも。

「わ、私としましたことがついつい焦ってしまって、
肝心のあらましを伝えるのを忘れてしまっていたなんて。」

滅多に見られない百合さんの慌て具合。

「おおっ、そういえば何があったか話すの忘れておったは、いかんのう、ガハハ。」

雷さんはいつものように気楽に笑っていた。

「百合さん、雷さん、二人ともうっかりさんなんだからまったく、ブッ飛ばすよ！！」

満面の笑顔で殺気を飛ばしながら言わせてもらいました。

「「誠に申し訳ございませんでした。」」

使徒イスラフェルに勝てるくらい見事に二人の動きがユニゾンした土下座だったね。

まあ、許してとりあえず話を進めましょう。

「実は問題はこれなんです」

百合さんが取り出して私に見せた物は、私が書いたジョークの本、この娯楽が少ない時代なら受けるだろうと私の知っている、落語やら小噺やら古今東西の笑い話を乗せて出した本です。

「これが何か?売り上げが悪く赤字出したからキレた本屋が乗り込んできた?」

自分の本だけ見させられても訳がわからないので適当に答える。

「いえ、今もこの本は売れております、問題は売れ過ぎた故になんです。」

意味がわからん?私の頭上に巨大な?が浮かぶ。

雷さんが本を開いて渡してくる。

「この噺に怒って保様を出せと怒鳴り込んできた奴がいて。」

開いたページを見ると、お釈迦さまと侍従の会話のページが。

「なんだ単なる小話じゃないの、これで怒るって尻の穴が小さい奴だ。」

そういった後自分の書いた小噺本を読み、面白いなと笑っていると。

「確かに器が小さい相手ですが、相手が問題なんですよ董孟高様。」

相手が問題ねえ?誰でしょうか全く分かりません。

「誰が来たの?仏陀は既に死んでいるが?融でも来たか?」

まあ、んなわきゃないな、かるく話すと。

「保様よく分かりましたな、？融と名乗る男で。」

ブッ！！！

思わず吹き出してしまう。

？融ですか、三国志での知名度は地味ですが、仏教の庇護者で略奪好きな人ですよ。

演義ではなぜか良い奴になっているあの略奪スキーが来るとは。

そりゃ怒るか、自分が庇護している宗教を笑い話にされたら。

ちなみにこんな感じの小噺なんですが。

お釈迦様は産まれるまで母親のお腹に3年3か月もいたという事で、私からしたらなわきゃねえだろと思いますが、老子が母のお腹に80年とか。

噺をすすめましょう。

侍従が仏陀に母親のお腹の中はどうだったのですか？と聞いてきたから仏陀が、

「夏のように暑すぎることもなく冬のように寒くなくすごしやすかった」と。

「ほう、それでは母親のお腹は春のようであったと」侍従が話すと、

仏陀は「いや季節は秋でした、時折下から松茸がニュッと顔を出す。」

じつにくだらないどうしようもない小噺ですよ、ただ酒飲んだおっさん達には大ウケ。

今、謁見室にいる?融殿から百合さんが詳しく話を聞くと。

当人は徐州で役人やっていて、ある日街を歩いて本屋に寄ってみたら、
今人気と書かれた本があり、なにげなしに手に取り読んでみると、
自分が支援している仏教をネタに笑い話をする奴がいる許せん!

それどころかこの本のおかげで、街を歩くと「松茸の庇護者」と笑われ。

更に出勤すると小噺をネタに同僚に「松茸庇護ってあやかって大きくなりたい?」
「チ〇コに生まれ変わりたい?」と散々笑われ屈辱の日々を過ごしていると。

松茸呼ばわりされたり、普段から脳味噌筋肉と馬鹿にされるのも、
食卓に行ったら私の分だけ朝飯がなかったのも、全てこの私のせいだ!と。

この屈辱は涼州にいる作者を討ち取って汚名挽回、名誉返上じゃー

！！

そして、その後名誉の死を迎えるんだと槍を片手に涼州に突撃してきたと。

おい、？融大丈夫か？汚名挽回、名誉返上はいくらなんでも不味いだろ、

ネタにした私も悪いが松茸のとか笑った住民や同僚にキレろよ、私にって八つ当たりだろ！

「切っ掛けを作ったわけですから八つ当たりではないですわよ。」

百合さんが突っ込んでくる、心を読んで発言しないでくれ。

「保様どうしますか？徐州のチ〇コ人間は？追い返しますか？」

雷さん、松茸呼ばわりならまだしもチ〇コ人間はまずいだろ、

下半身に脳味噌があるような人間じゃないんですから。

怒れるお馬鹿さんがいるのか、実に厄介です、会いたくないです。

「とはいえ私が会わないわけにはいきませんね、会いたくないですが。」

ここにはいないが先程名前が上がったということは、

芍薬さんが向こうで私を会わせないようにしているんでしょうが。

私を守ろうと考えて行動してくれた二人には悪いが謝罪しに行きましょう、
？融さん自身は悪い事していないのに松茸呼ばわりは可哀想ですから流石に。

まあ、馬鹿だし、かなり八つ当たりもありますが目を瞑ってあげましょう。

「ちなみに今、誰が応対してくれているの？」

とりあえず私が行くまでの間宥めすかしている苦労人は誰かと尋ねる。

「あああーーっ！！」

慌てないキャラの百合さんが叫んでいる、何があった！？

「今、謁見の間におりますのは、池陽君様に、芍薬さんに李文優様が・・・。」

あかーん、他の人間は良いが司だけは絶対にあかん、宥めるどころか火に油を。

「大丈夫だよ、司様ならば」

雷！！お前のその根拠の無い自信は何処から出てくるんだ！！！

「大人しく突き殺されろーーーーーーーーーーー！！」

雷さんに怒鳴ろうとしたら城の奥、謁見の間辺りからすさまじい叫び声が聞こえてきた。

―司―

仕事が早く終わったので城内をうろついていたら謁見の間から怒声が聞こえる。

小話の件で？融とやらが保さんを殺すと徐州から殴りこんできたそうで。

これは面白そうだなあ、こういう絶好の暇潰しがやってくるなんて・・・、

もとい、親友である保さんの命を守らないといけませんね！！

謁見の間の中を見ると空さんと芍薬さんが多分その？融という人を諫めていて、

その間に牡丹さんと雷さんが保さんを部屋に閉じ込めておくと。

じゃあ、それなら私も手伝おうと「此処は任せて行って来て」

と僕が言ったら、皆絶望的な顔するのは何故かなあ？

？融という人を見てみると、ショートボブにした髪型が特徴な人で、

うん、後ろから見ると巨大なチ○コだね。

「“松茸庇護するってあやかって大きくなりたい？”とか笑われているけど、
その髪型と後ろ姿って、やはり松茸、もとい、チ○コを意識したの？」

素直に思った事を言ってみたんだ、人間我慢しすぎるのは体に良くないですから。

「貴様ぁぁぁぁあああああ～～～！！！！！！」

あら、何を怒っているんでしょうかねえ?槍で襲い掛かってきましたよ。

ヒュッヒュッヒュ、？融の放つ槍が空気を切り裂く音が聞こえる。
ただ、私の相手にならない、上半身を軽くそらすだけで避ける。

「遅い遅い、そんな三段突きくらいなら簡単に避けれるぞ、あと、青筋立てて怒らない方が良いよ、更にチ○コそっくりになったよ。」

面白いから軽く煽ってあげましょう。

「誰が青筋立て怒張したチ○コそっくりだとおのれぇえええ。」

ブウン、ビュッ、ガキン

そこまでは言っていませんがさすがに僕でも。

それにしてもよく怒鳴りながらあんな早い速度で槍を振ったり突いたり出来ますねえ。

とはいえ、しゃがむ、バックステップでかわし、たまに愛用の鉄扇で叩き落としてあげると。

「大人しく突き殺されろ！！」

なんて物騒なんでしょうか、そんな事を言うなんて。

それにしても突き、薙ぎ払い、切り上げ、切り下げ、必死でやっていますが遅いですねえ。

いや、馬鹿力はすごいですよ攻撃を鉄扇で受け止めたら手が痺れましたから。

でも、避けるのは簡単です。

「司ちゃん煽っちゃだめええ」

芍薬さんがこっちに向かって叫んでいますね、これはいわゆる振りですね、

上島竜兵がいて目の前に熱湯風呂押すなよ発言、それは押せという合図のように。

芍薬さんの方を向いて笑顔で頷く事で返事ということにする。

「さあ、お前のそそり立つチ○コ力はそんなもんか。」

アレっ?芍薬さんが絶望的な顔している、おかしいな!?

「当たれぇぇえええい」

だから避けれてしまうって、学ばないのかな?このお馬鹿さん、薙ぎ払いならバックステップ、突きならば軽く体を捻るだけで切り上げならサイドステップで余裕で避ける。

フェイントがないただ突っ込んでくるだけの攻撃ならば簡単に避けれますよ。

おっ、保さん達がやってきた、主役が来たようですし、そろそろ終わらせましょうか。

「チ○コだけにやはり突っ込むのは得意なんですね~、それにしても特大サイズチ○コのくせに玉のちっちゃい男だなー。」

更に煽ってみましょう、動きがより大振りになって突っ込んできました。

あら?保さんが笑っていなくて項垂れている、保さんなら煽ると思うんですが。

「俺は女だああ！！！！」

あら女性でしたか、それは失礼しました。

「失礼しました女性だとは、とりあえずそのチ〇コ髪型は男性になりたい願望からですか？」

男性と間違えるなんて失礼な事したので素直に謝りました。

「あがあああうがあああああ」

もはや人間の言葉ではない、獣の雄たけびみたいになっていますよ。

「おかしいですね、謝っているのに何故か攻撃が激しくなっているのは、
うーん、獣のようになってしまってはいけません仕方ない終わらせましょう。」

ブウン

空気を切り裂くような切り下げを避け懐に飛び込み鉄扇で右手を思いっきり強打する。

ガランガランカラーーン

強打の痛みで？融は槍から手を話し、その槍が床に転がる。

ふう、これで大人しくなったでしょうね。

「うわわーーーーーん」

あら、膝を崩してペタンと座りこんだと思ったら泣きだし始めちゃいましたよ。

これは参りましたねえと思ったら、

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！　消えろ！！」

保さんの声が聞こえたと思ったら意識を失う事になるとは。

―芍薬―

保ちゃんを切る、と徐州から？融さんっていう人が怒鳴りこんできたから、

僕も頑張って緊急事態を何とかしようと宥めすかしていると司ちゃんがやってくるなんて。

司ちゃん根は良い人だから平気だと思ったら、駄目だった僕の努力の水の泡なんて。

どうしよう謁見の間で戦いが始まっちゃうなんて。

「司ちゃん煽っちゃだめえ」

こっちを向いて笑顔で、理解してくれた。

「さあお前のチ○コ力はそんなもんか。」

ネタ振りだと思われるって、もう駄目だ僕には止められない、おしまいだよー。

そんなところで保ちゃんや百合ちゃん達がやってきた。

どうするんだよーこんな目茶苦茶な状態、僕なんかじゃむりだよー、？融さんはやられて地面に伏せて泣き始めて、司ちゃんは僕悪くないって顔して。

こうなったら保ちゃんならばこの場を丸く収めてくれるはず、頼むよー。

「貴様のようなのがいるから、戦いは終わらないんだ！消えろ！！」

保ちゃんが叫びながら縮地で一瞬で間を詰めて司ちゃんを殴ってたー。

「悪は倒した、だから貴女も泣きやんでください」

そういって？融さんを泣きやめさせようとしていた、なんか納得いかないのはなんだろう。

「うわあーーーん、俺は汚名挽回も出来なかった、徐州では松茸呼ばわりされ馬鹿にされ、
涼州ではこんな奴にチ○コ呼ばわりされ辱められ武では打ち負かされる、
こうなったら生き恥をさらす前に死んでやる。」

汚名挽回って発言は恥ずかしいと思うんだ、しかも地元ではなく涼州にまで来て、
ボコボコにされて既にこの段階で生き恥をさらしまくっていると思うんだ僕は。

って、つい軍師として内心突っ込んでいたら事態は大変な事になっていたよお、
?融さんが小刀を取り出す喉を突いて自害しようと、止められないと思ったんだ。

そしたら保ちゃんがその小刀の刃を右手で握り締めて止めていたんだ、
右手からすごい血が出てて凄く痛そうなのに保ちゃん微笑んで。

「貴女が死んでしまったら悲しむ人がいます、私もそのうちの一人です。」

「貴女を悲しませた男は私が退治しました。」

「貴女のような美しい人に涙は似合わない、だから笑ってください。」

保ちゃんが自害を食い止めたんだけど、口説きにいってるスケコマシにしか見えないよ。

結局、司ちゃんという悪がぶっ飛ばされた事でうまくおさまったんだよー、
でも、？融さんいいのかなあ、原因は保ちゃんが書いた本なのに・・・。

しかも、？融さん明らかに最初は保ちゃんのことを切るとか言ってたくせに、

「こんな俺を美しいなんて言ってくれる人がいるなんて。」

「私を助けるために怪我を恐れず守ってくれるなんて」

「私の命を助けてくれた王子様」

なんか言い始めているんだけど、しまいには。

「お、おれ、いや、わ、わたしは？融と言います、真名は嵐(らん)と、
貴方様への愛のために戦わせていただきます。」

なんかとんでもない事を言いながら保ちゃんに真名を預けてたよー。

保ちゃんがあんな本を書かなければよかっただけなはずなのに、
なんか全て司ちゃんが悪者になって保ちゃんが良い人になっていて。

それでいいのかなあ？融さん？

第二十一話、徐州から招かれざる客（後書き）

うーん、なんでまた？融なんかを採用しようと思ったんだろう、話を書いている自分でもまったく分からん。

とりあえず、また新キャラを出してしまった収拾つくのだろうか、そろそろ恋姫原作キャラを出さないといけないのに、どうしましょう。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

オリジナルキャラ紹介（前書き）

とりあえず話が２０話を超えオリジナルキャラがかなり増えたので、
此処でやっとキャラ紹介をさせていただきます。

これからさらに新キャラ増やそうとする私って馬鹿なんだろうな、
収拾つかなくしてしまう可能性が。

オリジナルキャラ紹介

一保一

姓　董

名　擢

字　孟高

真名　保

年齢　１４歳（転生前の年齢は３３歳）

通称　涼州の神童、産まれた直後に喋り立ち上がるなどした為、政治の世界で表に出ていないが城内から漏れ聞く噂で神格化されている。

特徴　この物語の主人公、前世の名「大谷　保（おおたにたもつ）」

一人将は私、元々は数百年続く地元の名士の息子、悪巧み大好き、悪戯大好き

もう一人の主役である司とは前世の段階で義兄弟の杯を交わす

司の悪ふざけに巻き込まれ突っ込み役が多いが基本はボケ、神から貰った能力成長限界突破があり鍛えると範馬勇次郎を超えられる。

今現在は琅？（馬騰）と怠慢でガチンコできる実力。

ただ、出陣した経験はなくそういった点で童貞の為、琅？には劣る実力
超回復でアンデルセン神父並みの回復力＋毒、病気無効

将来のお嫁さんは月と公言するほどの重度のシスコン
好きな女性のタイプは母親である和（董君雅）のようなクールビューティー

最近は母親が理想と公言するなど初期の時とは違う、
マザコンを超えた厄介な何かの病を抱えている

趣味　未来知識を使った発明、子供達に読む為に紙芝居作成、自己鍛錬
雷との酒造、司に負けぬ悪戯

見た目　董毛特有のウェーブのかかった紫色の髪を伸ばし、丸い卵のような輪郭
見た目は可愛らしい、目は常に笑っていない、背は１５５ｃｍ（成長中）

武器　近接、乱戦時は方天画戟、遠距離は重藤弓、愛馬は黒王号
こと「踰輝（ゆき）」

その他　過去の悪戯エピソードなどは作者の実体験が多数
ハロウィーンのコスプレで頑張り過ぎて警察に通報されたなど

―司―

姓　李

名　儒

字　文優

真名　司

年齢　１４歳（転生前の年齢は３２歳）

通称　洛陽の神童、産まれた直後に天上天下唯我独尊というなど悪乗りした為
　ナチュラルボーンテロリスト、生粋のトラブルメーカーの為保命名

特徴　前世では保の一歳年下の友人、前世名「上尾　司（あげおつかさ）」
　一人称は僕、前世では防衛医大卒から実家の総合病院勤務
　保曰く天才、当人は姉が国指定の天才であるＩＱ１４０越えだった為
　自分は凡人だと思いこんでいる、謀略大好き、この世界では重度のマザコン
　戦闘力では神との取引によりいずれは範馬勇次郎、今は琅？と互角
　保と同じくアンデルセン神父並みの超回復能力＋毒、病気無効
　最近では紅（淳于瓊）と相思相愛まではいかないがお互い意識する関係、

前世ではかなり自由な貞操観念だった為、女も男も有り、保に家庭は持てないと思われている。

場をかき回す悪戯大好き、当人曰くキレた保さんにはかなわない、

だから保さんにやる時は命懸けだとのこと

子供時代に先生に言われた「人の嫌がる事をしなさい」を間違った解釈で実行

趣味　陰謀、例えばいかに面白く三国志の時代をかき回せるか検討する事が多い

絵本作成、保絵本と違い原哲夫タッチなどかなり見た目のインパクトあり

農業、漢方薬や農作物の開発研究を兼ねて

見た目　茶色がかった肩まで伸びる髪をオールバックで、浅黒い肌、彫りの深い顔

鍛え上げられた逞しい体、可愛いではなく格好良い、背は１６７ｃｍ

武器　近接では鉄扇、遠距離は元戎、愛馬は松風こと挟翼（きょうよく）

その他　作者の友人がモデル、悪戯の大半は実話

一和一

姓　董

名　君雅

字　無し

真名　和（なごみ）

年齢　３７歳

通称　沈着冷静の董君雅、どんな窮地でも慌てず指示を出す姿から命名される

特徴　涼州太守、高貴な家の出ではない政務能力は大陸有数、賄賂を否定するなど、性格が誠実過ぎた為宦官に疎まれ故郷涼州太守に出世という名目で左遷

保、司の転生したという秘密を打ち明けられている、保大好き

最近は保を息子ではなく一人の男として見てしまうと発言、夫の空を悩ませる

私塾時代の同級生は空、薊、荊州太守劉表らがいる

保と月の二児の母

趣味　あるとすれば息子の保の行動を監視、応援する事

最近は保を争う好敵手である嵐との調練が新たな趣味となってきている

見た目　董毛特有の柔らかなウェーブがかった腰まで伸びた髪、丸

い卵のような輪郭
目は特徴的なつり上がったきつい目付き、背は１６５ｃｍ

武器　斬馬刀（鬼切丸）鬼すらも切るからと命名、空はこの命名センスはどうなの？と
保に言いよる人間が出たと感じた瞬間には構えている
キレた時の実力は薊と並んで涼州最強

ー空ー

姓　池

名　陽君

字　無し

真名　空

年齢　３９歳

通称　涼州の常識、変人揃いの涼州人の中での常識人の為

特徴　和の夫で保、月の父、洛陽の名家の三男坊、私塾時代の同級生の空と恋愛結婚
和と同じく将来有望視されたが宦官に嫌われ、妻の和と共に涼州へ、
今現在は筆頭軍師として知恵を働かせる。

月大好き人間、月に将来はお父さんと結婚すると言われたいと発言するなど

よく和にぶっ飛ばされるが、すぐに回復するなどギャグ体質持ち

月ほどではないが、また和には敵わないが息子の保大好き、保と司の秘密を打ち明けられてからは息子ではあるが、二人の実力を一人の政治家として男として尊敬する事も。

酒に酔うと「私の真名空はそらではなく、存在が空気の“くう”だ」が口癖

家庭では良き父であり良き夫である、最近の悩みは常識人の為の出番の少なさ

趣味　和のご機嫌取り、月と遊ぶ、ただ和も月もベタベタされすぎて嫌な時もあると

城内の営繕、和達が壊した城内を笑顔で修繕している姿をちらほら

見た目　身長１７７ｃｍ、カラスの濡れ羽根色と言われる漆黒の髪をオールバック

糸のように細いたれ目、優男のような細い顔立ち、ほんわか癒し系

武器　トンファー（名無し）あっても無くても変わらず一般兵に毛が生えた程度

ただし月をめぐって保と争う際は保と互角の力を見せつける事も

その他　本当は池陽君は名前じゃないんだが、作者の勝手な解釈で

名前にしました。

一薊一

姓　李

名　粛

字　無し

真名　薊（あざみ）

年齢　３８歳

通称　李儒攻略の最大の敵、紅の壁、最近はとくに紅を危険視している為

特徴　司の母、洛陽の私塾時代は和、空、劉表と同級生、空に惚れていた
和に負けたが今も空を落とせないか陰謀を企てる事も
紅は司を奪う敵でもあるが真面目さなどから内心認めてはいる

趣味　料理、司の服を縫うなど司に関して母親的な行動

見た目　光り輝く黒のタキシードにオールバック、保曰く宝塚、身長１６４ｃｍ
美人よりもハンサムと言われる、実際涼州では女性人気が

高い

武器　モルゲンステルン（名無し）司に言いよる女性が出ると襲い掛かる

キレた薊は涼州最強

その他　作者としては出番を増やしたいが、何となく使いにくい存在

一琅？一

姓　馬

名　騰

字　寿成

真名　琅？（ろうかん）

年齢　３７歳（和の二カ月遅れ）

通称　涼州の化け物、見た目１５歳のロリッ子おばさんの為

特徴　翠（馬超）の母親、保に翠、司に蒲公英を嫁がせようと企む、

嫁がせる為ならば鬼にもなれる、でないと二人が将来確実に一人身になると。

一人称は琅？、保の底の知れなさに平伏、保、司に絶対の

忠誠を誓う
　大半の人は真名＋君付けで呼ぶ

趣味　翠と蒲公英に保と司を籠絡するためのテクニックを教える
　乗馬および馬の世話、これは涼州で生きていくための必須技能の為

見た目　恋姫の蒲公英そっくり、身長１４８ｃｍ、茶色い直毛な髪をポニーテールで、
　上着はスカイブルー胸元オレンジのスカーフ、真っ白なショートパンツ、
　足元はスニーカー、どう見ても１５歳程度

武器　十文字槍（石断槍）石すらも紙を切るように切る切れ味から保ＬＯＶＥでキレた和とかネタを抜けば涼州最強

一雷一

姓　韓

名　遂

字　文約

真名　雷

年齢　３４歳

通称　天水の策士、これはそのまんま天水周辺で謀略に必ず名を連ねている為

特徴　口癖はワシ、戦闘時は謀略、暗殺何でも有りの謀略家、普段は真逆の豪放磊落
　武力は琅？に負けず劣らず、保と司に絶対の忠誠、二人だけは真名＋様
　それ以外は真名の呼び捨て。

　保に愛馬を殺されるなどされるが、保や司が子供でありながらも、
　謀略、肝っ玉のでかさ全てにおいて器の違いを見せつけられ忠誠を誓う

趣味　酒造、保や司の発明した酒を作る手伝い味見目当てではなくかなり真剣
　流鏑馬、騎馬調練で知って以来はまる

見た目　身長１８４ｃｍとこの時代では長身、左顎から鼻にかけて大きな傷跡あり
　四角い顔で逞しい顔つき、一言で表すなら実に男くさい顔

武器　馬鞭（絶対勝利）保が戦で必ず勝つ事を命令された事からそのまんまな命名

一紅一

姓　淳于

名　瓊

字　仲簡

真名　紅（ほん）

年齢　２２歳

通称　涼州最後の突っ込み、没個性の教科書、困った時は淳于瓊、変人だらけの涼州で怒鳴れるなどからついた物がほとんど、あまりに常識的行動過ぎて花が無いなど言われるのが悩み。

特徴　涼州が開いた人材募集試験第一号合格者、琅？率いる部隊の副隊長
最近の司に惚れている、今は相思相愛までいかないがお互い意識する関係
常識的な突っ込みには定評あり

趣味　家事炊事と意外と女性らしい

見た目　趣味は女性らしい行動が特徴的だがファッションセンスは壊滅的
私生活での街への買い物時も鎧姿など私服は無いも同然性
真ん中で綺麗に別れた真っ蒼な肩まで届く髪、美人系統の顔
１０人中１０人が振りむくような顔ではないが整った顔立ち

武器　柳刃刀（文司）、先祖伝来の無名刀だったが司の名前から

抜き出し名付ける

一日一

姓　郭

名　？

字　阿多

真名　日(りー)

年齢　２７歳

通称　年中反抗期、その態度の悪さから命名。
遅れてきた厨二病、普段の態度から司が命令
馬鹿一号、光とセットで馬鹿二人組扱い

特徴　紅と同じく涼州人材募集第一弾で募集、遅れてやってきた厨二病
あまりの態度の悪さから制裁ときたちびっ子保に一瞬でメられた屈辱あり。

普段の喋りからは想像がつかないが街の子供達の遊び相手で人気
光とは幼馴染

趣味　凧揚げ、子供達には凧揚げ名人と呼ばれている

達磨さんが転んだ、司に教えられて以来子供達には最強の王者として君臨する

見た目　身長１７４ｃｍ痩せ型、赤い髪を短く刈りあげ、髭を伸ばそうか悩み中
　やせぎすな為見た目の威圧感が無い顔つき対策として。

武器　昇竜偃月刀、前は特に武器にこだわりは無くあてがわれた物を使っていたが、
　司の運営する店のくじで当たって以来愛用、理由は壊れにくいから

ー光ー

姓　李

名　？

字　稚然

真名　光（ぐわん）

通称　馬鹿二号、言わずもがな日とセットで馬鹿一号、二号扱い救いようが無い馬鹿、他の馬鹿キャラと違い憎め無さが無いから
　ウドの大木、涼州一の背の高さぬぼっとした顔つきから

年齢　２７歳

特徴　日とは幼馴染、兄貴分の日の後を追いかけ続けていてそのまま涼州へ
「っす」が口癖、救いようが無いくらい馬鹿と認識されている為
２０話の時のように彼に常識を問われた時のダメージはでかい
人の名を呼ぶ際は字呼び捨て

趣味　趣味が郭？と言われているほど郭？の追っ掛け、
ＢＬ要素ではなく子供の頃から親分子分の付き合いの為

見た目　身長１９６ｃｍこの時代にしては長身、ぬぼおっとした顔つき

武器　槍（名無し）日の昇竜偃月刀と同じくくじの景品
日と同じく今まで武器にこだわりは無かった。

ー芍薬ー

姓　田

名　豊

字　元皓

真名　芍薬

通称　涼州三人娘一号、芍薬、牡丹、百合の三人一組でいることがほとんどの為
　知恵の一号、三人娘の中での一番の知識がある為

年齢　１９歳

特徴　僕っ娘、人の名を呼ぶ際は地位に関係なく真名＋さん付けでガールズトーク大好き、全ての物を恋愛と結びつけてしまう桃色目線装備、
　普段の喋りや行動から百合が一番に思えるが三人娘一の知識戦場と普段のギャップ萌えで雷に片思い中

趣味　甘い物食べ歩き、牡丹からはあれだけ食べて太らないのは卑怯と言われる。
　牡丹、百合とのガールズトーク、三人寄れば姦しいの見本

見た目　水色の髪の三つ編み、白いセルフレームっぽい眼鏡、
　グレーのブレザーにベージュのタータンチェックのスカート
　身長１５８ｃｍ

武器　鉄扇、司から護身で習っているがいかんせん付け焼刃護身程度の実力

　一牡丹一

姓　沮

名　授

字　無し

真名　牡丹

通称　涼州三人娘二号、二番目に自己紹介したから二号と
　　天然の二号、天然発言でパニックに陥らせるため

年齢　１９歳

特徴　自分を牡丹と呼ぶ、人の名を呼ぶ際は地位に関係なく真名＋ちゃん付けで。
　ガールズトーク好き、芍薬と同じく全て恋愛ごとに見える
桃色目線装備
　素で芍薬の雷好きをばらしたりと爆弾発言娘として恐れられている

趣味　芍薬、百合とのガールズトーク

見た目　黄緑色のポニーテール、縁無し眼鏡の眼鏡、紺ブレザー白のパンツスタイル
　口調性格とは対照的で身長１７３ｃｍと長身、巨乳ではなく爆乳

武器　バグナウ、三人娘に共通しているが武力は無く護身程度の為

一百合一

姓　審

名　配

字　正南

真名　百合

通称　涼州三人娘三号、三人娘で常に最後に自己紹介している為おっちょこちょいの三号、冷静でいながらおっちょこちょいの為

年齢　１９歳

特徴　喋りはかなりお上品、しないが高笑いがあったら完全なお嬢様キャラ、
普段は冷静だが結構おっちょこちょい、芍薬、牡丹とのガールズトーク大好き
人の名を呼ぶ際は姓＋字で様付け

趣味　芍薬、牡丹とのガールズトーク、話のまとめ役

見た目　銀色のお団子ヘアー、
ベージュのブレザーにベージュのタータンチェックのスカート
身長１４８ｃｍと、口調、態度と対照的な見た目ロリッ子、でも巨乳

武器　皮の手甲、他の三人娘とおなじく武は嗜み程度で拳を守る

ため程度で手甲を装備

一嵐一

姓　？

名　融

字　無し

真名　嵐

通称　チ〇コ人間、司がショートボブにした彼女の後姿から命名、禁句中の禁句

きのこの山、同じく司命名、これも呼ぶと危険だが最近は受け入れている？

神童の盾、保に常につき従う護衛

年齢　２０歳

特徴　一人称は俺、自害しようとしたところを保に止められて以来の保大好き

汚名挽回、名誉返上などとお約束的な発言を平気でしてしまう馬鹿、

ただ竹を割ったような性格、見た目のかわいらしさなどから許されてしまう

史実で仏教の庇護者だったように熱心な仏教徒、最近は保

が上になった

趣味　保の護衛、保の副官兼護衛として趣味と実益を兼ねている
和との調練、保ＬＯＶＥ同士の好敵手としての女の争い

見た目　ボーイッシュな見た目、胸が無い、俺口調の為男性と間違われやすい
あだ名となったショートボブが特徴、身長１４５ｃｍ、涼州のちびっ子

武器　槍（蜻蛉切）保が自分の部下になるならばと神から受け取り渡す

オリジナルキャラ紹介（後書き）

オリジナルキャラの設定はこんな感じにして見ました。

うーん、どうなんでしょうかねええ。

第二十二話、遂に出陣？（前書き）

北京ダック、恋姫の世界にあったら何と呼ばれていたのだろうか？
北京はまだこの頃無かったし、そんな事を夢で悩んでいた今朝。

自分でも分からないくらいこの作品で悩んでいるのか？とか思いましたよ。

とりあえず、今日も皆様生温かい目でよろしくお願いします。

第二十二話、遂に出陣？

―保―

「見ろ人がゴミのようだ！」

司くーん、開口一番君は何を言っているのかな、ため息が出てきたよ。

「司、今この場で言うな身内に言っている事になるぞ！敵兵に言おう。」

なんでこんな当たり前の事を言わないといけないんだ私は。

「董擢様、李儒様そろそろお願いします。」

うん？何か聞こえた？気のせいか。

「そうはおっしゃいますが、ムスカは一応味方にも言ってたじゃないですか。」

たしかにそうだけど、って、待ぇえええーい！

「駄目じゃん！！それだと私達が敵ごと涼州兵殺す事になっちゃうじゃん。」

私は仲間を大事にするぞ、勿論司だって仲間を守るが。

「保さん、真面目に答えないでも、流石に私でも・・・ねえ。」

妙に嫌な間があったぞ、今。

「いくら司でも平気だ、平気だと思う、まあちょっとは覚悟しておけ♪」

自分に言い聞かせましょう。

「オッホン！保様、司様ーお話をやめてください！」

あれ？やはり何か聞こえましたか？

「関白宣言乙、保さん、さだまさし好きですよね～、歳に似合わず。」

さだまさしの良さを知らないとはなんと勿体無い！

「さだまさしの良さを知らないなんて人生かなり損しているぞ、ライブなんか歌よりもフリートークを聞きに行っているくらいだし。」

だてにライブのフリートークがＣＤ化されてないですよ。

「董擢様！！！李儒様！！！」

なんかうるさいな、先程から周りが。

「歌じゃないのかよ！！さだまさしに求めるものは！？」

さだまさしのライブを知らない人は皆最初そう言うんだよな。

「いや、償いとかいいよ、あれを酒飲みながら聞くと泣きそうになるよ。」

タイトルの通り償いについての真面目な歌で染みるんだこれがまた。

「董擢様、李儒様、いいかげんにしてください！」

本当にうるさいなあ先程から、こちらは話が盛り上がっているのに。

「マジで！？あの涙を知らない冷血人間な保さんが泣くの！？」

えらく酷い言われようである。

「何気に酷いな、まあいいや、さだまさしは聴くと良い歌あるぞ。」

「こうなりましたら！」

ゴスッボグッ

「「うぐぉ、いってぇー！」」

司と話が盛り上がっていたらいきなり頭部に凄まじい痛みが走る、
頭を殴る時ってゴチーンとか響く音だろ？なんでこんな鈍い音がするんだ。

「誰だー！！！」

頭を押さえ踞りながら犯人を探す。

「と、と、と、董擢様と、り、李儒様がい、い、いけないんです！」

あら、顔真っ赤にして泣きそうな表情の紅さんがいた、
もしかして先程のうるさいのは紅さんが呼び掛けていたのか？

「お二人がさっきから何度も呼び掛けていたのに無視するから・・・
ううっ」

全く気づかなかった、って、これはまずい、紅さんが泣き出している、
泣きそうな美人というのはグッとくるものがありますが、って違う。
司と目線を合わせる、うん、これしかないね、恥も外聞も捨て

ＤＯ・ＧＥ・ＺＡだね。

「そ、そ、そ、そんな頭をあげてください、ど、ど、土下座なんかしないでください。」

紅さんいい人だ明らかに俺らが悪いのに、土下座したら慌てちゃって。

ただ、これで終われば良かったんだが・・・。

―琅？―

これから部隊を率いて出発だと言う時に皆気が緩んでいるなー、まあ、琅？としては今回の派兵は余裕あるんだけど、流石に気が緩みすぎだよ。

今の保君と司君は特に酷いんだからよく分からない話に夢中になっていて、紅ちゃんの呼び掛け気づかないし、紅ちゃん泣きそうになっているし。

紅ちゃん大好きな司君に無視されていると凹んじゃっていたし、二人とも殴られて気づいたみたいだけど殴った紅ちゃん泣いていたし。

司君には蒲公英がいるけど、でも、恋する女の子は助けてあげないとね、

こういう時は琅?みたいにやはり頼れるのは年上のお姉さんなの。
女の子泣かせる悪い男の子には罰がないとね、キシシ。

「二人とも本当に悪いと反省しているなら何処でも謝れると琅?は思うんだ。」

謝っていた保君と司君の二人が、私が話に加わってきて焦っているの。

でも、もう遅いんだ、パチンと親指と人差し指を鳴らすとあれが運ばれてくる。

「本当に反省してるなら土下座できるはずだ肉を焼き骨を焦がす高熱の鉄板の上でも。」

此処で決め台詞を言わないとね。

あれっ、泣きそうだった紅ちゃんが固まっているよ?

「ろ、ろ、琅?さん、その物体はヤバイ、それは冗談でもヤバイ!!」

司君が腰を抜かして怯えている、でも、琅?は驚かせたりするけど冗談は言わないよ。

「なんで琅?さんがカイジを知っているんだよ!」

カイジ知っていたらいけないのかなあ？保君が変なことを言ってる、
それよりも、今は焼き土下座の心配じゃないのかなあ？
気になるなら保君に教えてあげよーっと。

「今、保育園の紙芝居で翠や蒲公英とか子供達に大人気だよ司君の
紙芝居のカイジは。」

保君が絶望的な顔している、知らなかったんだ、
まあ、この後の展開の方が不安なんだろうけどね、ニシシシ。

「「うぎゃゃゃぁぁぁぁぁあああああああ～～～～～！！！！」」

可愛い女の子を泣かす悪は琅？によって滅んだのだ。

―光―

うっす、光っす、今日はこれから孟高や文優達が出陣っす、謁兵所
に見送りに行ったら、
一向に進んでないっす、自分は関係無いっすが流石に酷いと思った
っす。

だから、常識人の自分がバシッと言ってやるっす

「いい加減出兵するっす、遊ぶのはやめるっす！」

相変わらずな俺の一言っす、切れ味鋭いっす。

でも、また言われたっす。

「光君に言われるなんて。」「光さんが正論吐いたら涼州は終わりだ」

皆本当に酷いっす。

―保―

熱いは痛いは散々だった、いくら超回復能力があるとはいえ痛い物は痛い。

まったく司がカイジを紙芝居で広めなければこんなことにならなかったのに、

最近忙しくて保育園に行っていなかったが、まさかカイジが流行るなんて。

あのあと司から聞いたが、目眩がしてきたよ。

月が利根川、詠が会長、恋が班長をお気に入りなんて聞きたくなかった。

可愛らしい月が言うのか？「Ｆｕｃｋ　ｙｏｕ・・・ぶち殺すぞゴ

ミめら」と、

詠ちゃんが「祈るようになったら人間も終わりって話だ！」なんて言うのか？

うーん、詠ちゃんが言ったらちょっと似合ってしまいそうだった。

恋が班長なのは「班長ご飯持っている」と言っていたらしいが。

月と詠に関しては兄として保護者として不安しか感じません。

って、話が明後日の方向に行きすぎた、本題に戻りましょう。

今日は何があるのかと言いますと、今回益州を荒らしていた２００名程度の賊が涼州に、

涼州に被害が出る前に兵を派遣し鎮圧を、それで私と司が派遣される事になったんです。

それで今から閲兵場に集まる千名の兵の前で将としてこれから演説を。

私も司も、琅？さんとガチでやりあえる人間なのは兵達は知っているが、

初陣がまだなガキ二人が補佐が付くとはいえ大将で派兵されるんですから。

一応、大将が私、大将付き軍師が司、補佐として琅?さんに紅さんって。

うん、初陣を迎える私や司にはとてもありがたい事ではあるが、つき従う兵達からしたら実にふざけていますよ、たまらないでしょうな。

琅?さんが大将で二万とか普段率いているのに、千名の部隊の将の補佐職って、
紅さんだって琅?さんの部隊の代理でいるのに申し訳ないとしか言えない。

まあ、今回は上二人が初陣、しかも、兵数は賊より多いが新兵ばかり、
賊に負ける訳はまず無いが何があるか分からない保険の為なんだろうが。

母上も父上も親馬鹿だよなあ、嬉しすぎるよ心遣いとして。

ならば期待に応えられるように頑張りますか。

では、まずは鼓舞しますか、兵達を、兵の前に出て演説を始める。

「諸君達を率いる事になった董擢だ、此処に集まっているのは私と同じく皆新兵だ、
私のような者に率いられて皆不安であろう、私もだ。」

一瞬程度だが間を明け、新兵の顔を見る、皆不安そうな顔をしている、
まあ、私が弱気な発言をしているんですから当然でしょう。

「だが、それがどうした！と、我々も諸君らもまだ初陣もまだまだなひよっこだ、
だが普段から我々は馬騰将軍、韓遂将軍に鍛えられている一騎当千の兵ではないのか？」

新兵達に自分は強いんだという事を認識させましょう、そして燃料を投下しましょう。

「舐められているんだぞ、益州を追われ涼州に逃げてきたんだ賊徒共は、
精強なる涼州兵はだらけきった益州兵より弱いと看做されたのだ、
よいのか諸君！我らは新兵だが愚かな益州の連中より弱いのか？」

「「「「「「否！！！」」」」」」

叫んでいる新兵達の顔つき、目付きが最初と違い瞳には怒りの炎が宿っている。

「ならば奴等に教えつけてやるのだ涼州の強さを、怖さを、
我ら涼州を舐めた代償が如何に高いのかということを、
奴等の首をネジ切り街道という街道に並べてやろうぞ！」

「「「「「「「「応！！！」」」」」」」」

これだけ煽ればいいでしょう、皆がやる気、もとい殺る気です。
補佐で一騎当千の琅?さんに紅さんいるんだから圧勝してくるしかないでしょう。

「街道という街道に首を並べるですか怖いですねえ保さん」

演説後に司が愉快そうに笑いながら話しかけてくる、目が笑っていないが。

「廃村を根城にした族はおよそ２００名、こちらは5倍で猛将揃い余裕でしょ。」

わざとお気楽に発言する司、司も同じく緊張しているんだろう。

戦いに行く前に弱気でいてはいけないんだが、周りに兵はいない、私と司の二人しかいないから出来る話なんだが。

「常識的に考えたら勝てるのは分かっていても死者を出さないか？不安だよ、
戦に犠牲は付き物とはいえ、やはり怖いよな人の命を預かるのは。」

たぶん率いる兵が１００万だろうが、この怖さは消えないでしょうな。

ただ、ここで躓くわけにはいきません、今、司と企んでいますが、将来歴史通りとなったら黄巾党、反董卓で何十万と戦うのですから。

「さあ保さん行きましょう、数は揃っているが初陣の将軍と軍師に初陣の兵達、
相手はしょぼい益州から涼州に逃げてきた馬鹿な賊徒共、全てがふざけている、
悪ふざけが大好きな僕達の為にあるような戦じゃないですか。」

司の言うとおりだ、ふざけ過ぎな条件ばかりだ。

「これから嫌という程戦争するんだからな、ならば今日の戦いは次の戦いの為に、
次の次の戦いの為に行くか、派手に大陸に名を響かせるか。」

まるでどこかの少佐みたいだな、あちらの台詞はもっと凶悪だが。

「保さん、良いですねえ悪い笑顔していますよ、そうでなくちゃ保さんは。」

これからはじめての殺し合いに臨むのに笑っている私と司、
戦を楽しもうなんて頭がおかしいんでしょう、でもそうでないと。

三国志の世界を本当の意味でかき回すんですから馬騰と淳于瓊なんて、
凶悪な助さんと角さんを従えていくんですからねえ。

―司―

保さん大将に千名の兵をひきつれて賊の討伐で益州の境にある廃村近くまで来ましたが、
さてさて、いったいどうしましょうかねえ？

賊共は、村に籠城していて防衛戦する気満々で困った、とかではなく、
賊の連中油断しきっていて、こちらに全く気付いていないのが。

楽に勝てるなんていいですよ、ローリスクハイリターンなんて最高ですが、
ただ、此処まで相手が何もしていないと罠なんではと疑ってしまいますよ。

斥候を放って待つ事数刻、戻ってきた斥候の報告を聞くと、
村の入り口に二か所に見張りが二人ずつ、あとの賊達はまだ夕方だが酒盛り中と。

益州から逃げ切れたと安心しきっているんでしょう、涼州がすぐに気付く訳無いと、
舐めてますねえ、益州は攻略の有力候補ですから細作だらけなんですが此方の。

しかも、こっちの兵は騎馬が大半なんですから情報伝達も移動速度も反則ですよ、
それなのに賊徒共は涼州で大手を振って生きていられると思っているんでしょうか。

さて、これからどうするか話をしましょうか。

「斥候の情報からですと賊徒は当初聞いていた数二百名より多くおよそ三百弱程度、
村には西と東の二か所しか入り口が無くそこに二名ずつ警備が、あとは中で皆宴会中。」

皆が食いつく情報は賊の数が予定よりも若干多いという点よりは、
村の出入り口は二か所、警備も合わせて４名しかいなくあとは皆だらけていると。

「部隊を二つに分けて村に近づき夜まで待ち二か所から夜襲では？」

まあ、紅さんの言うのが無難ですが確実でしょう。

「紅ちゃんの言う方法で良いと思うんだ。」

琅？さんも同意と。

「夜襲もいいが村に攻めるとして同士討ちの危険性は？」

まあ、保さんの言うとおりですね、それならば。

「では、部隊を二つに分けて西側の出口側から火矢で攻撃しましょう、
此方は村に無理に攻め込まず、混乱した賊徒共を東側出口から逃げ

させます。」

なんで一気に攻め込まないのか紅さんとか聞きたい模様

「賊からしたら西側から敵が来ている、東側出口の方はあいているし益州に近い、
となると、賊徒共も土地勘の無い涼州よりも益州側に逃げるでしょう、
それで東側出口から出た先で待機していた混乱する部隊を攻撃をしていき、
弱り切ったところにトドメで琅?さんの騎馬部隊が。」

部隊を夜戦専門で鍛えた訳でなく夜戦で同士討ちのリスクがあるのですから、
出来る限りそうならないように被害を少なくする安全策で参りましょう。

これが敵がちゃんとした軍ならば罠仕掛けられているか?
とか疑うんですが、ろくに見張りも立てず夕方には酒飲んでいるって。

とりあえずこの啄木鳥の策で痛い目にあってもらいましょう。

西側からの襲撃部隊は紅さん率いる３００名の部隊が火矢で攻撃尻を蹴飛ばし。

僕や保さんが６００名を率いて東側出口の先の森で待機、琅?さんは１００名の騎馬で。

数刻後、現代とは違い何も無い静かな夜、遠くからかすかだが銅鑼の音が聞こえる、
赤い炎が遠くからでもよく分かる、廃村だとはいえかなり燃えている。

少したつと東側の門が開いて賊共が逃げてきた、大半が飲んだくれ寝ていた奴らばかり、
軍師として策を練った苦労が、鴨撃ちの鴨よりも楽な獲物になるとは。

兵が新兵達ばかりだから焦って混乱しないかなど不安な点もあったが、
あまりに相手が情けないからか、普段の訓練の方がはるかにきついからか、
皆落ち着いていて、敵を引きつけ、そして弓や元戎から矢が一斉に放たれる。

ハリネズミになって死んでいく死体だらけ、琅?さんの突撃準備なんかいらなかった。

結局半刻程度で逃亡してきた賊を退治し終え、紅さんの部隊から終わったと伝令が。

琅?さんは出番が無かったと凹んでいた、仕事しないで済むなんて、

私からしたら実に羨ましいんだが目指せ給料泥棒ですから。

そんな雑談はさておきまして本筋に、

伏兵がいないか念のため気をつけながら村の中に入ってみたら、
戦意があるような敵はいず、いたのは戦に気づかず寝ていた賊くらいだったのが。

結局、涼州軍は千名ひきつれ、軽傷5名、重傷、死者0名
賊徒共は死者237名、捕縛14名の完勝となった。

それにしても保さんは弓で僕も元戎ではじめて人を殺したが大した事は無かった。

向かってくる人を斬ったとかではなく、混乱した賊という名の酔っ払い達を、
遠距離から一方的に射殺す、そういう点では胸をはりづらいい戦いだが仕方ない。

あまりにもあっさりと童貞を捨てる事になるとは、普通ならば人を殺した事に悩むとか、
罪悪感から押しつぶされそうに、といった感じがほとんどないとは。

ただ、幾ら罪悪感が無くても人を殺す事に慣れてはいけないと自分に言い聞かせ、
そして、保さん達と賊の死体を荼毘にふし埋めるなど戦後処理を終え。

いつもの日常生活に戻る為に城に戻る事にするのだった。

第二十二話、遂に出陣？（後書き）

保と司の初陣をさせてみましたが、うん、手を抜き過ぎましたね、
カロリー５０％ＯＦＦどころか０カロリーみたいになってしまった。

主役たちが人を殺すという大事なイベントを、
此処まですかすかにするとは我ながら酷い文章です。

こんな調子でいずれ黄巾党とかの戦闘が起きたら、
一体私はどう表現するんですかねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第二十三話、涼州の為に、未来の為に（前書き）

ギャグとシリアスが混じる感じになりました、
文章力無いから凄い中途半端になってしまった。

まあ、ギャグオンリー、シリアスオンリーでも中途半端ですが。

この作品のヒロインのポジションを独走するザ・普通な紅さん、
大丈夫なのか？恋姫なのにヒロインが淳于瓊ってマイナーで。

頑張れ紅さん。

第二十三話、涼州の為に、未来の為に

―司―

ガギーーン、ガギッ

「薊さん止めるんだー！！！」

おっ、すごい！武器がどちらも刀じゃないから鍔迫り合いと言うのか？

まあいいや、保さんの方天画戟と母さんのモルゲンステルンが押し合いになってる。

保さんが必死で叫んでいるが今の母さんには届かないと思うんだなー。

ドゲシッ！

あっ、母さんが鍔迫り合いから脱する為保さんに蹴りを入れて距離とった、

保さんが吹っ飛ばされているって、この国で一番強いのに保さんが。

ブンブン　ブーーン

物凄い勢いでモルゲンステルン振り回しているよ、空気切り裂いているし、

あのスイングあればベイスターズなら即日スタメン４番になるよ。

「保君行かないでください、お母さんを捨てないでーーーー。」

部屋の中を見渡すと玉座では和さんが捨てられた女みたいになっているよ。

「和、泣きやむんだそんな姿を見せてはいけ‘ブーン、ドゴッ’・・・グフッ」

あっ、空さんが母さんの見事な一撃に殺られたぞ、
往年の中村紀のフルスイングみたいに振り抜いた一撃腹に喰らっているし。

「お義母様、やめてください！！！」

いいね、涙流して叫んでいる紅さんの横顔にグッときたぜ！！

「紅ちゃん、それが状況を悪化させているんだよー！空気を読んで！」

あっ、琅？さんが本気で言ってるよ。

「淳于仲簡さん、何故このような事態になったのか理解されているのでしょうか！？」

口調がいつもと変わらぬようだが百合さん完全に怒っているよ。

「たもつくん、なんで私を捨てるんですか・・・」

和さん、あんな状態だと今後の涼州は大丈夫なのか？

「牡丹には泣いた和ちゃんの相手は無理だよー！！！！！」

沮授の知恵をもってしても泣く和さんは無理なのか。

ドガッ、ボゴッ

暴れる母さんを止めに入った親衛隊が吹き飛ばされている。

「とにかく紅さんを守るんだよ、紅さんを此処から連れ出してー。」

芍薬さんが一番冷静に判断して指示しているね。

「・・・此処は保育園か、うるさい」

「まったく、あぶないっす、いい加減にするっす」

日、光、うん、玉座の間が戦場と化していても馬鹿一、二号はいつも通りか。

「うぐるぅうあああーーー、その女をこちらによこせ、邪魔をするなーーー！！」

母さんがなんか獣みたいな唸り声上げて叫んでいるよ。

ブーーン　ビュン　ビュン

あいかわらず凄まじい勢いで空気を切り裂いているぞ、あんな重たい鈍器で。

「どうにかして薊さんの足止めをしろ、紅さんの避難時間を稼げーー！！！

母上の説得をしたいのに、それどころではないーー。」

保さんが必死で食い止めようとしている、おっ、馬鹿一号、二号に気付いたぞ！

「行けっ馬鹿ミサイル！」

保さんが一号、二号を母さんに向かってぶん投げたよ。

グワラゴワガッキーーン！！！！！

あらっ、岩鬼のような一撃が出たよ、すげー壁を突き破ったよ、まあ、日と光の馬鹿コンビならば誰も惜しまないだろうし平気か。

「保様と司様の前でお前ら無様な姿を見せるなよ、韓遂隊突撃ーー！」

怒れる母さんには敵わないだろうが、雷さんの虎の子の部隊ならなんとかなるか。

ドゴッ、グハッ、ボゴッ

うん、駄目だね、足止めにもならないで雷さんともども吹き飛ばされていってる。

「お義母さんも泣きやんでください、今のままでは俺も王子様も困ってしまいます。」

嵐が混乱する場に更に油を注ぎにいったぞ。

「ううう、保君はそんな女を取って私を捨てるのね・・・。」

駄目だこりゃ、和さん再起不能だな。

あっ、おはようございます、今朝も良い天気ですね李儒文優こと、司です。

今、城内の玉座の間は見ての通り修羅場です、どうしてこうなったかと言いますと、
では、これから何があったのか説明の為過去編に入りましょう。

ちなみにここまでギャグパートですが、これから一気にシリアスパートに入りますので。

って、僕は一体誰に向かって話し掛けているんでしょうねえ僕は！？

時は遡り、一週間前の朝議の席

「先程、提案があったが洛陽に将を派遣するのは何故ですか、司様？」

雷さんは内心分かっているんだが皆への説明の為に尋ねてくる。

「涼州の為にです、死にかけの王朝にトドメを刺しにいこうと思ってまして。」

満面の笑顔で楽しそうな事があったかのようにコメントしましたよ。

母さんは私から、和様、空様は保さんから前以て話をしていたので、琅？さんや雷さん達はなんとなく漠然としてますが感じとっていたようで。

ただ、紅さん、三人娘、馬鹿一号二号、嵐さんとかは口開けっ放しで固まっているよ、

僕のあまりに恐れを知らない傲岸不遜な発言にビビっているのか？

まっ、王朝が死にかけでそれにトドメをさす、なんて言い訳無用の不敬罪ですし。

これから何をやる気なのか計画について計画者の私と保さんで話しましょう。

「漢王朝の政は皇帝ではなく宦官によって動かされてきたが、

霊帝は政を顧みず女の尻を追うしか出来ない愚物、政は全て十常侍任せ。」

保さんが発言する。

「肥料や農薬を使い、二期作、二毛作、輪作をする農法、米、麦以外の食料生産、
大谷商会経由の大陸全土での兵糧の売買で涼州は食料事情に困っていませんが、
大陸は近年の凶作や蝗害により他州は確実に弱っていっているのですから。」

２０世紀になり人口激増にたいし食糧難が起きると言われたが、
化学肥料のお陰で食料を増産し人類の激増に対応出来たんですから、
堆肥なんて存在すらないこの時代の農業では凶作も当たり前かと。

おおっと、考えが脇道に逸れすぎていましたね、元に戻しましょう。

なんで農業の話になったんだ？と皆は思っているようで。

「下手の考え休むに似たりなんて言いますが、実際は休むどころか迷惑をかけるばかり、
凶作により離民が増えその為税が減りと悪循環が起きているのですから、
困った馬鹿は減った税の穴埋めに増税で、更に国が弱まるだけなのに、ククク。」

保さんが肩をすくめ、洛陽の間抜けさに苦笑する。

「何故今回の計画をたてたかといいますと、大谷商会経由の確実な情報ですが、洛陽の馬鹿とその周りが税収対策に官位の売買を検討していると。」

保さんの話に皆ザワザワしていますねえ、まあ、当然でしょう。

元々官宦に賄賂を払えば出世しましたが、それはあくまでも暗黙の了解で、なのに、皇帝がそれを許すどころか自らが役職の叩き売りを検討なんて。

「凄いのう、洛陽はどうしようもないと聞いていたが霊帝がそこまでとはな。」

漢の駄目さを知っている雷さんは良くも悪くも感心している。

「洛陽は汚職にまみれているけど売官なんて僕は信じられないんだ。」

芍薬さんが疑いを持つ、まあ当たり前でしょう、三人娘が頷いている。

では、此処は私がだめ押しをしましょう。

「諜報部からの情報ですが袁家、曹家からも売官の話の確認が取れています、

まあ、袁逢、袁隗、また曹嵩なんかは売官に難色を示していますが。」

「「「「なっ！」」」」

今度は和さん、空さん、琅?さん、雷さんとかが驚いている。

まあ三公を出すような名家の中にそれも当主周辺にこちらの細作がいる、

とバラしたんですから、まあ、驚くのも当然ですかね。

僕と保さんが作り上げた細作網がどれだけ広がっているのかという点、

あと情報源をボンヤリとだがばらした点、これらの事で驚いたんでしょう。

「今回の計画で洛陽に将を送るのはそれを、官宦達を後押しする為です、

実際、袁家は既に売官が始まるという流れに抵抗は諦めていて、

ただ、面白い物で金で地位を買った曹嵩は抵抗をしているというのが。」

保さんが愉快そうに皮肉な現状を語っている。

実は保さんと僕は皆に嘘をついているんですよねぇ～、

だって霊帝や官宦が売官を考える切っ掛けは僕達が唆したからなんですがね。

まあ僕達の提案は色々経由させて伝えていますから誰の案か彼らは知る事無いですが、
あいつ等は涼州によって踊らされているとは気づいていないなんて。
それとも踊らされているなんて関係なく捕らぬ狸の皮算用に必死ですかね？

「どうせ今の洛陽の連中なんて死に体なんですから徹底的に利用してあげましょう、
最後くらいは僕達に役立ってもらわないと、死体にも使い道はありますよ。」

保さん以外の皆が息を飲むのが分かった。

―空―

相変わらず保と司君の二人には驚かされることばかりだ。

二人がこの世界と似ているが異なる遥か未来から転生したと打ち明けられ、
家族だけの秘密が出来たあの時からもうすぐ十二年になりますが、
これだけ一緒にいるというのにまだ底を見せない二人の実力に怯える。

父親として子供の実力に怯えるなど実に情けない限りだが、
同じ政治家として、男として格の違いをこうまで見せつけられると。

保達は未来の知識を持っている、だがそれは此処と似た世界で、
答えを知りながら試験を受けても実は間違っていたなんて事も。

二人は答えが合っているか確認して答えていく事が出来る、
答えが分かっている試験の内容確認なら楽勝と誰もが思うだろう、
ただ、それを誰にも気付かせず事も無げに迅速に精密に出来るだろ
うか？

袁家、曹家の中に情報源があるなんて二人は普通に話していたが、
そんな情報網を構築しているような国が大陸中にあるのか？
何処にも存在しないだろう、だが、この二人の子供は持っている。

しかも、情報源を守るつもりがないのかあっさりと袁家、曹家とば
らす、
それとも情報が漏れる事で袁家、曹家の中で疑心暗鬼を起こさせる
気か？

二人は大陸中の人間の何手先を読んで行動をしているんだ。

二人は私の自慢の大事な息子であり、その友人なんだが、
どれほどの化け物なのか涼州は化け物を懐に飼っているのか・・・。

ふうっ、父親の思考ではないな、実に情けないな私も。

―保―

司の話に皆実に驚いている、正義感で王朝を建て直す為洛陽派遣ではなく、
王朝を徹底的に腐らせ食い荒らし死んでもらおうと企んでいる事に。
私も計画立案者ですし、反対派も多いでしょうが計画の後押しをしましょう。

「今回の計画は皆さんからしたら賛成できない案なのは分かっています、
此処にいる人間全員に賛成どころか反対されても仕方無い案でしょうが。」

私達の計画の非を素直に認めましょう、営業と同じです、
最初に不利益な点を伝え、あとから利益を伝えた方が良いので。

「母上、父上、李粛様、皆清廉潔白な人間で賄賂と無縁な誠実な人間という評を、
地に落とさせるような案、ただ、私達もやりたくてやるのではない事を理解して下さい。」

内心ノリノリですけどね二人とも、この時代で暴れられる!!と、
騙している点は心苦しい、ただ、やむを得ずな点も伝えましょう。

「正義に燃え漢を建て直したいと思うのが普通でしょう、
ただ漢は大きすぎて贅肉が付きすぎ今からでは間に合わないんです、
大陸の民という大の虫を生かす為なら漢王朝なんて小の虫を殺すし

か。」

これは二人の本音、皇帝がくたばろうが何ともないし守る気もないですから、
ただ漢に属する民は出来る限りは守ってあげないといけませんからね。

「俺はコイツは嫌いだが王子様を守ると決めているから手伝う。」

予想通りまずは嵐が最初に同意してくれたか、司をコイツ呼ばわり、あと私を王子様呼ばわりは尻がこそばゆくなるからやめさせないと。

「前から言っているがワシの忠誠は洛陽でも和でもなく保様と司様にのみ、
だから正しい正しくないではなくお二人に付き従うのみだ。」

嵐に続いてこれまた予想通り雷さんがこちらについたか。

「今回の計画は机上の空論にしか過ぎないんだけど、ただ洛陽への対策は必要だし、
僕は軍師として常に色々と今後の事を考えておくべきだし賛成するね。」

これは意外だ慎重な軍師勢から芍薬さんが賛成するとは、
史実の田豊ならば堅実さを求めて反対されただろうな。

「ガキが必死なら、大人は助けその業を背負ってやるのが宿命（さだめ）だ。」

なんでこう言い回しが厨二病患者臭いんだ、久しぶりの出番の日は。

「阿多が賛成なら、孟高や文優に賛成するっす。」

日が賛成したから乗っかってきたか、本当に分かりやすいな光は、
ただ一番問題だよなー、主体性がなく常に日におんぶでだっこでは。

「牡丹としては洛陽対策が必要なのは分かるし面白そうだから賛成したいなー、
でも、売官をさせることでその後何がしたいの？それが分からないと賛成できないな。」

牡丹さんがまあ条件付き賛成で。

当初の目論見よりも賛成の意見が多いですね、とは言いましても、
結局は太守の母上と洛陽対策の責任者になるであろう薊さんが了承しないと。

では、何故、こんな事をするのか目的を明確にしましょう

「今回の目的の第一弾は涼州の安泰の為に益州を手に入れる事です、
今の益州刺史である郤倹は無能で悪政により難民が涼州に流れて来ています、
これから世は更に乱れ漢王朝に対し大規模な農民一揆が起きるようになります。」

民は蛮族の襲来に怯え何も無かった辺境が、今や大陸で一番の治安の良さなんですから、
おかげでいつも言っていますが益州、司隷州からの賊徒や難民が。

「洛陽では抑える事は出来なくなり地方軍閥に泣きつく事になるのですから、
そして迎える群雄割拠の時代と、先が分かっているから我が国は先手を打つのです、
必要な地位を買い、あと洛陽から雀れるだけ雀るだけです。」

皆は将来の平和を考えるといっても所詮は数年先の事、
こちらは未来知識有りますから１０年、２０年以上先を見ていますから。

「涼州、益州にまたがった国家を樹立する利点としては防衛のしやすさ、
そして大秦、貴霜、南蛮と言った国々の交易独占が出来るのですから。」

攻められにくく守りやすい、そして大陸の富の独占、それで確実に力を蓄えれば、
曹操や劉備なんかが立ち上がる前にこっちは大陸の大半を支配出来るでしょう。

「高祖や光武帝みたいに大陸まとめようなんてうぬぼれる気はありません、
ただ家族や仲間が無事で過ごせる新しい国を作りたいだけなんです

よ。」

巨大帝国を作りあげ歴史に名を残すんだというならば中国ごときだけでは無理ですね、
アレクサンダー大王や元を越す広さを支配しないといけないんですから。

そんな無理をするならば、益州、涼州程度の土地で、
司君と二人でこの世界をグチャグチャにかき回して楽しんで老衰で死ねれば満足です。

―和―

話を聞いた限り、保君と司君らしい計画的なようで実に無鉄砲な計画で、
ただ涼州が此処まで発展してきたのも二人のこの計画的で無鉄砲なおかげで。

それに親として保君達には、私達を踏み台にしより高く羽ばたいてほしい物です。

ならば私のとる道は一つしかないでしょう。

「分かりました。孟高、文優、貴方達がそこまで言うのならば計画を実行しなさい、
どうせ貴方達の事ですから、私の了承など関係無く話を進めているんでしょうが。」

保君も司君も一瞬表情が曇りましたね、読まれていたと、
それくらい分かっていますよ太守である前に親なんですから。

保君は本当に自慢の息子ですよ、子供っぽい笑顔を見せながら謀略を企て、
大人顔負けの策を立てながら子供っぽい詰めの甘さを見せたり、
誰よりも強い武を持ちながら争う事を嫌ったり、こんな素敵な男の子になるなんて。

好き勝手やらせてもっといろんな面を見せて貰いましょう、保君には。

「私達の名誉など気にしません、涼州の、いや、民の平和の為になるのならば、
漢がどうなろうが知りません、将、銭、物資を貴方達に預けます徹底的にやりなさい。」

みんな驚いていますね、でも、太守としてこれほど面白そうな話はありません、
涼州は富ませ大きくしてくれたのですから、増やした彼らが使い道を決めるべきです。

「「御意！！」」

さて、保君達の計画は上手くいきますかねえ、フフフ。

「では母上、善は急げと申しますので、司と共に部隊の引き継ぎなど済み次第、
そうですねえ七日後には洛陽に向けてたたせていただきます。」

えっ、保君は何を言っているんでしょうか・・・・!?

「な、な、な、何を言っているんですか保君!!!」

司君が洛陽に行くのは分かりますが保君は此処隴西にいるんですよねえ・・・。

「母上、洛陽に行くといっても半年もあれば戻れますので安心してください。」

保君が半年もいない生活なんて考えられません、そうやって私を捨ててしまうんですね。

「ううううう、保くーーーーん、お願いだからお母さんを置いていかないでーーーー。」

「な、和、保も言っているじゃないか、これではたも・・ドゴッ・・うぐぁあ」

貴方までも保君と私を引きはがそうとするなんて・・・・ウワーーン。

ー紅ー

司様が洛陽に向かわれる、保様も言っている半年以内に戻ると。

でも、董君雅様が泣かれる気持ちもわかります。

たかが半年されど半年“も”会えないなんて。

こんな乱れている世だと一騎当千の武を誇る司様でも賊に襲われるかもしれない、

無事に洛陽に着けないかもしれない、そんな事になってしまったら私は・・・。

いや、司様の武ならば、保様もいるのです賊に後れをとる事なんて無いですよ。

それよりも洛陽には私なんかよりも綺麗な人はたくさんいるでしょうし、

司様みたいな美男子ならば言いよる綺麗な女性はいくらでも。

私なんて美人でも何でもないし、司様だって私みたいな女よりも、

どうせ私なんかすぐに司様の記憶からも忘れ去られてしまうに・・・。

嫌っ！！司様が他の人に取られるのも胸が張り裂けそうなほど辛いけど、

それ以上に司様に忘れ去られるなんてもっと嫌！そうなったら私は・・・。

ならば私は悔いを残したくない、司様に私の思いを伝えないと、

ふられてもいい、私は誰よりもお慕いしている事を司様にお伝えせねば。

―百合―

まさか董君雅様も、淳于仲簡様も末期の別れみたいになってしまうなんて、
このままでは董孟高様も李文優様も洛陽に旅立てなくなってしまいますわね。

しかたありません、董君雅様については董孟高様に頑張ってもらえばいいとしまして、
淳于仲簡様に関しては私が後押しして差し上げましょう。

「李文優様、お話しがございます。」

夜に李文優様の私室に伺わせていただきました。

「こんな夜分遅くにどうかされましたか百合さん？
貴女のような美人が来てくれるのなら、もっとめかしこんでおけばよかったね。」

李文優様はいつもこうやってお戯れになるのですから、悪い人です。

「夜分に参りましたのは、淳于仲簡様が軍務の事で至急お話ししたい事があると。」

お膳立ては私がして差し上げましょう、あとは淳于仲簡様の頑張り次第で。

「こんな時間になんでしょうかねえ?まあ良いでしょう、執務室にいるのかな?」

「いえ、私室でお待ちになられていると申しておりました。」

軍務と言いながら夜分に私室で、さすがに李文優様も分かられたようで。

「ふふ、内密な軍議なんでしょうね、百合さん伝言役ありがとうございます、
もし母さんが来たらよろしくお願いします、ではちょっと行ってきます。」

さあ、賽は投げられましたわよ、さてさて淳于仲簡様はどうなるのでしょうかねえ?

明日の芍薬さんや牡丹さんとの話題にさせていただきましょう・・・
ふふふ。

ー光ー

昨日の会議はなんか色々凄かったっす、頭悪い自分にはよく分からなかったっすが、
孟高と文優の話で分かったのはこれから涼州は忙しくなるっす。

阿多と一緒に頑張るっす!!!!

ただ自分には何をすればいいか分からないっす、だから、朝早くから訓練するっす。

皆起きていないような時間から頑張るっす、人が見てない所で頑張る俺恰好良いっす。

錬兵場に行こうとしたら文優に偶然会ったっす、仲簡の部屋から出てきたッす。

悔しいっす、自分だけでなく文優も仲簡と秘密の調練していたっす、でも、頑張っている人を認めないほど自分はケチな人間じゃないっす！！

ただ文優は失礼っす！自分を見たら「あっ！」と言って挨拶もしないでいなくなったっす、
多分自分と同じで隠れて頑張っているの見られて恥ずかしかったからに違いないっす！

普段から文優にいじわるされるっす、だからたまにはこっちがやり返してやるっす、
兵との訓練の際に「文優は仲簡と朝早くから調練していたっす！」秘密ばらしてやったっす。

そしたら訓練中なのに急に兵達がやかましくなったっす、訓練なめているッす！
仲簡も隠れて頑張る姿ばれたの恥ずかしいからいなくなったっす！！職場放棄っす！

でも皆酷いっす、寿成、文約そして阿多にも殴られたっす、いじめ

恰好悪いっす！！！

第二十三話、涼州の為に、未来の為に（後書き）

とりあえず司君と紅さんに何があったかは想像にお任せします、
まあ、分かりきっているでしょうが。

光の空気の読めなさ、馬鹿さが気に行ってしまった、
それと対照的な兄貴分の日の使い辛さ、作者として頑張ろう。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第二十四話、保と司、二人の愛の差（前書き）

前回第二十三話の続きと言いますか？後日談と言いましょうか？

保、司、紅、嵐の４人のお話を書いてみましたが、
当初の予想よりかなり甘くなってしまったような。

とりあえず紅さんの件で司に痛い目にあってほしかったと。

第二十四話、保と司、二人の愛の差

―司―

「ふぁあわわ～～、眠い」

握りこぶしがスポッと入りそうな位の大あくびをする保さん。

コトッ

「昨日はお疲れ様でした、大変だったようで。」

紅さんがテーブルに全員分のお茶を置きながら保さんに話し掛けている。

「ええ、大変でしたよー、本来なら昨日には洛陽に旅立っていたのに、
連日のろけまくりで騒動をでかくし続けた人がいて、おかげで引き継ぎはまだ終わらず、
私は母上を説得する時間がなく、昨晩やっと泣き止んでもらったんですから。」

あらっ、保さん、今日は随分トゲの有るお言葉で、それにしても酷い人がいるもので。

紅さんが申し訳なさそうな顔している、たしかに、お義母様発言で被害増したね。

「司くぅ～ん、なんで君は他人事のようにしているのかな？」

あれっ、なんか話の矛先が何故だか私に向かってきたような？

「保さんが母さんを止めたり、和さんを説得したり大変だったな、と。」

ありのままに事実を伝えましょう、伝え足りないかもですが。

「君が（前回の）あの後、に、「二人共私の為に争わないで！！」なんて、
泣きながら余計な事を言ったりしなければよかったのに。」

ゴキゴキ

あれ？なんか保さんが拳を鳴らしながら近づいてきましたね。

「男二人が女を求めて争ったら、女は必ず言わないと駄目でしょ？」

それが形式美なんですから、皆がやりたがらないならば、
俺がやる、俺がやる、俺がやるどうぞどうぞみたいにお約束はあるのですから。

「それはねえ司君、物語であるから盛り上がるのであって、
お前は紅さんに何度も使ったチ〇コがついている男だろうが！！」

いやまあたしかに僕は男ですが、三国志の英雄が女性と性別が反転した世界ですし。

「な、な、何度もって・・・あわわわわわ。」

あっ、保さんの発言に紅さんが完全にパニックだ。

「保さん発言が下品です、大体何度もではなく、何十回もです！」

間違いはちゃんと訂正しないといけません。

「何十回って・・・グフッ」

あっ、紅さんが血を吐いて倒れた、一体誰が犯人なんだ、ヤスか！？

「貴様が紅さん相手に一日何ラウンドやろうが知らないが、連日ハメ狂うのと場をかき回すばかりで仕事をキチンとしろ！！」

なんて失礼な暴言でしょうか、保さんは僕をいったいなんだと思っているんですか！？

「ハメ狂いとは何事か！僕を四六時中発情しているみたいじゃないか！

僕は仕事を終えた空いた時間に貪りあっているだけだ、訂正しろ！

！！」

たまには保さんにガツンと言ってやらないといけません。

「む、むさぼ・・・ブクブク」

先程血を吐いたと思ったら今度は口から泡吹いて気絶した紅さん、一体誰が犯人なんだ、犯人は俺が見つけてやるじっちゃんの名にかけて！

ちなみに父方のじっちゃんは実家の病院の院長で産婦人科医で、母方のじっちゃんはゼネコンの取締役でダムを作っていたが。

「貴様がいつ、そのチ○コを使おうが知らないが反省しろー！！」

遂に殴りかかってきた保さん、右ストレートか、甘い！

ビュッ！空気を切り裂くような速さの保さんの拳をスウェーで避ける、

本当なら殴り返したいですが、紳士なので注意して反省を促しましょう。

「先程からチ○コ、チ○コと叫んで下品にも程があります保さんは！！

嵐さんに悪いと思わないんですか！今までチ○コ呼ばわりされていた彼女に。」

保さんの護衛で一緒にいる嵐さんへの配慮が足りないと教えてあげないと。

「きぃ、きぃ、貴様ぁぁあ～～、殺す！確実に殺す！！！
俺の王子様から授かったこの蜻蛉切で全身膾にしてくれるは！」

ほらっ、チ〇コ発言連発で嵐さんがキレたよ、って、何故僕の方に向かってくる？

ヒュッ　ヒュッ　ヒュッ　ヒュッ

速い！初めて会った時より更に速くなった四連突きが、
ただ甘いっ！突きだけならばウィービングで狙いを定まらせず避ければいい。

僕はモハメド・アリのように、蝶の様に舞い！蜂の様に刺す！

「もし僕を倒すなんて夢を見ているのなら、さっさと目を覚まして僕に謝った方がいい」

偉大なるモハメド・アリの言葉を使わせていただきましょう。

スパーン、ガキーン

懐から取り出した鉄扇を高速で振り降ろし、槍の穂先を上から叩き落とす様にはじく。

「甘い、甘い、不〇家のペ〇ちゃんが泣いて謝るくらい甘いぜ。」

モハメド・アリの名言よりも僕的にはこちらのほうがいいか、問題はペ〇ちゃん通じるか？

僕に勝負を挑んできたのならば叩きのめして格の違いを教えないといけません。

「そうそう当たるものではない。」

ふっ、大佐が私に降臨してきたぞ、この物真似意外と似ているんだ、ちなみに池田秀一が水戸黄門出た時の回はちゃんと見ていましたよ。

「嵐さん、貴女では僕を倒す事は不可能です。」

無理な物は無理と教えてあげませんと、軍人に必要なのは実力差を認識する事ですから。

「なにおおおお」

それでも嵐さんは攻めてきますねえ、おっ！更に速くなった！

突き、薙ぎ払い、袈裟掛け、足払い、先程よりも鋭くなっています見事です、頭に血が上っているのに攻撃の質が上がっているのですから。

シュッ　ヒュッ　ビューン

凄まじい速さで振るわれる突き、薙ぎなどすべて交していく

ウィービングで動きを絞らせず、サイドステップでかわし、

鉄扇で穂先をはじくバーリング

「先程より速い、それでも僕を倒すのは不可能です!!」

ここまで見せつければ私の勝ちは決まったようなものです、負ける訳ないですが。

「不可能とは、自らの力で世界を切り拓くことを放棄した臆病者の言葉だ!」

ここで僕の大好きなモハメド・アリの言葉を聞くとは思いませんでしたよ。

「だが、不可能です!!」

ガシッ

あれっ!?何だろうか?僕を後ろから羽交い締めにしているこの腕は?

「じゃあ、これならどうかな?不可能なのかな司君!?イケッ!嵐さん!」

これはいけませんねえ・・・。

「臓物をブチ撒けろ！」

なんでこの時代に武装錬金なんだ！何故嵐さんは知っているんだ？って、それどころは。

ザシュ　ザシュ　ブスッ　ドブシュ

「ウギャアアーーーーーーー・・・」

いくらなんでも麻酔無しで滅多突きで腹切り割くのはやり過ぎだろ・・・ぐふっ。

十分後

「幾らなんでも腹切り割くのはやり過ぎですよ、嵐さん！腹ってのは腕と違って生えてこないんですからね！」

とりあえずやり過ぎな保さんと嵐さんに注意をする。

私が超回復能力を持っているのを知っているのは保さんだけなんですから。

「腕もはえてこねーよ、ニンジャマスターガラみたいな事言うな！」

おおっ、人のボケが分かってくれた懐かしのＢＡＳＴＡＲＤから使ってみたんですが、
それにしてもハンターＸハンターとどちらがキチンと終わるのか？

「キサマがいけないんだろうが！！首を跳ねられ四肢をバラされ、その肉片全てを長江にバラ撒かれ魚の餌にされないだけ感謝しろ。」

嵐さん、この人目が一切笑ってないね、本気だよ、僕一応涼州の軍師だよ？

「嵐さんは優しいなあ「えっ！？」私ならば決して殺さないで、全身全ての関節を曲げてはいけない方に曲げてあげたりするよ。」

絶対に死にますそれは私でも、保さん本気で殺る気だよ。

これは参りましたねえ、仕方ない。

「誠に申し訳御座いませんでした。」

土下座ですよ、ＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡ、これならば怒れる保さんでも。

「「本当にすまないという気持ちで胸がいっぱいなら・・・！
どこであれ土下座ができる・・・！たとえそれが肉焦がし骨を焼く鉄板の上でも」」

保さんも嵐さんもハモってる！？まさかの第２２話以来人生二度目

の焼き土下座か！！

やめて、それは！焼肉は好きだけど焼かれるのは嫌いなの！

ネイチャージモンには負けるかもしれないが作者は肉を焼くのは上手なの、

でも、作者でもやって良い事と悪い事があるんだ、牛肉と違うんだよ！！

３０分後

恥も外聞もなく涙と鼻水流して謝り続けても許してもらえませんでした、

大分前から気絶していた紅さんが復活して一緒に謝ったら許してもらえた。

ただ、何故だか紅さんが謝る時に少し引っ掛かた点が。

「司さんを許してあげて下さい“うちの主人が”すみませんでした」

アレッ！？もしかして私詰んだ？人類に逃げ場無し！？

「助けてえー！！ビアン・ゾルダーク博士にディバイン・クルセイダーズ！」

「王子様、コイツどうしたんだ?急に叫びだして。」

やはりスパロボは分からないか、三国志時代の人には。

「司様に何があったのですか?」

紅さん、あなたの発言が原因なの。

「馬鹿が自分の人生の逃げ道の無さを知って絶望しただけだよ、あと嵐さん、前々から言っているがお願いだから王子様と呼ぶのは止めてくれ。」

保さん、幾らなんでも酷いよ、傷心の友は慰めようよ・・・。

ククク、だが保さん、見ているがいい!どうせ保さんも近いうちに、嵐さんにハメて後々ハメられた!?と気づいた頃には手遅れになるがいい!

フハハハ、俺は一人では死なんぞ!

俺はもう駄目だ、だがキサマも道連れだー!!

あれっ!?そんないずれハメられる男、保さんが嵐さんに耳打ちしている、

嵐さん顔真っ赤にして首を横に振っているが、最後頷いていた。

嵐さんがこっちにやって来た、なんだ?項垂れる私に耳打ちを。

「ボソボソボソッ・・」

ぐふっ!?わ、わ、私の負けだ、完敗だ。

保さんに完敗するとは、ここまで差を見せつけられるとは、無念・・・。

―嵐―

いつも俺の事を侮辱するコイツを、ここ一週間散々迷惑かけられたから、

怒った俺の王子様と一緒に徹底的に成敗してやったぞ。

これが俺と王子様との愛の共同作業って奴なんだな!

本当ならバラして長江の魚の餌だが、紅がうちの主人を許してくれと謝ってきた。

コイツは俺をからかうから嫌いだが紅は俺を馬鹿にしない良い奴だ。

折角、紅がコイツと婚約したのに結婚式前に俺の怒りで、

紅をカモメ?だとか言うのにはしたくないから王子様に言ったんだ。

「結婚前に紅をカモメにしたくない、紅も謝ってきたし許したい。」

俺の王子様に紅の事があるからと言ったら、よく分からなかったが、それを言うならヤモメ?ヤマメ?だ、と笑いながら言って許してあげていた。

流石俺の王子様だよ!コイツは“ふぐ対てんぷらの敵?”とか言う奴なのに許すなんて、
物凄く器が大きくて、物凄く優しくて、そして格好良くて素敵だ、コイツと段違いだ!

俺が王子様に初めて会った時も格好良かったもんな。

コイツに敵わず侮辱され散々だった俺に対し、
王子様はスッと現れたと思ったらコイツを一撃で殴り飛ばして力の違いを見せていて。

俺はコイツに侮辱され負けた屈辱に耐えられず自害しようとして、喉を小刀で突こうとしたら王子様は怪我するのに刃を握り締め助けてくれて。

俺に泣き顔は似合わない、とか、俺が美人、とか、俺が死んだら悲しい、
なんて言ってくれて、あの瞬間、初対面なのに俺の王子様になってしまった。

その後、お礼を言おうとして王子様に話した時に、なんでそんなに優しいのか聞いたら、

「強くなければ生きていけない、優しくなれなければ生きている資格がない」

好きな台詞なんだと照れながら言っていたが、こんな事をサラッと言える、

俺より年下だけど優しくて、キザで、格好良すぎて、更に惚れてしまったんだ。

俺は馬鹿だから惚れた相手にどう思いを伝えればいいか分からなくて、

ただ、思い立ったが吉祥寺?って言うから、その日の夜に部屋に忍び込んで。

部屋に俺が入ってきて王子様驚いていたな。

惚れたって言ったがこんな男みたいな俺だから無理だと思ったら、

王子様優しくて、

俺の事を抱き締め、接吻してきて、沢山愛してくれて、思いを受け取ってくれた。

でも、馬鹿な俺でも分かってる、俺の王子様は俺の物にはならないって。

「俺は王子様にこんなに愛してもらえてとても幸せです、
でも俺は王子様と違って馬鹿で、偉くないし、女房なんてなれないし、不釣り合いで、
だけど、俺は王子様を愛してます、だから女房にしてくれなんて言いません、
ただ王子様の護衛として俺を側にいさせてください。」

俺がこんなこと言ったら王子様は優しいから断れないのに、
幾ら馬鹿な俺でも俺の発言が卑怯なのは分かる。

王子様は一瞬だけ寂しそうな顔した後、俺を抱き締めてくれながら。

「では嵐さんに命令します、護衛として必ず私の横にいてください、
そのかわり常に誰よりも早く、私と共に勝利の美酒を味わって下さい。」

俺の王子様は子供なのに本当にキザです、そして、とても優しいです、
だから惚れた俺は死ぬまで王子様の命令を聞いて何処までも着いていきます。

なんで俺があの日の事を思い出して語っているんだって?

さっきコイツが謝った後、俺様と王子様を見て気持ち悪い笑いしていて、
それに俺が何となくムカついていたら王子様が耳元で言ってきて。

「嵐さん恥ずかしいと思いますが、あの晩寝台で私に言った事を司に伝えてもらえますか?

そうすれば嵐さんが司を武とは違う形で打ち負かした事になりますから。」

凄く恥ずかしいし、馬鹿な俺にはどういう事なのか意味が分からなかったが、
天才な王子様が言うんだから、間違いないと思ってコイツの耳元で伝えましたよ。

そしたらコイツ「完敗だ」とか「家庭という監獄送りは僕だけか」よく分からないこと言っていた、とりあえず俺がトドメをさせたのは分かった。

「流石王子様、コイツくらいなら一瞬でいつでも退治出来るなんて。」

俺の王子様を褒めてあげたら、また照れ臭そうにしながら。

「嵐さん頼みなんですが、いつも言ってますが王子様と呼ぶのはやめてください、
なんか尻がむずがゆくなるというか落ち着かないので、呼び捨てで良いですよ。」

むぅ！俺にとっては完璧な王子様なのだから王子様と呼んでいるんだから。

「これだけは我儘言わせてもらいます。」

寝台でいつもやられているから、こういう時くらいはやり返してみ

ないと。

第二十四話、保と司、二人の愛の差（後書き）

うん、何でこんな話になってしまったのかなあ。

愛とモハメド・アリ語録の回になってしまったな。

さて、保と司は洛陽に無事旅立てるのでしょうか？次回へ続く

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第二十五話、今回も紙芝居、こんな状態で洛陽に行ける？（前書き）

恋姫の二次創作ですから恋姫キャラを出さないといけません！
というわけで原作と比べてまだまだちびっ子ですが、
原作キャラ達を久しぶりに出してみました。

久しぶりにちびっ子軍団と紙芝居を書いてみました、
さて、今回の話はどんな感じになるでしょうか？

ちなみに前回出演時より二年たっているので恋姫達も成長し、
その成長を分かりやすくするため、台詞に漢字を使いました。

大変分かりづらい訳の分からない表現方法で、ごめんなさい。

第二十五話、今回も紙芝居、こんな状態で洛陽に行ける？

―保―

前に朝議で決まった為、私と司達が洛陽に最長で半年程行くことになりました。

司と紅さん、薊さん達による痴話喧嘩やら、私と離れる事を嫌がり泣く母上、
それら騒動の為、一週間で引き継ぎ等準備を終え出発の予定が、遅れに遅れてます。

あの朝議から二週間経過、本当なら既に洛陽の拠点にいるはずなのですが・・・。

引き継ぎも終わり明日出発ということにやっとなり、
今日はしばらく会えなくなる保育園のちびっ子連中と遊んであげようと。

少しの間会えなくってごめんねと謝りました。

「お兄様どうぞご無事で」

月は家族で元々知っていますから、簡単に納得してくれました。

「ぼ、僕は平気だけど、ゆ、ゆ、月が寂しがるから早く帰ってくるのよ。」

ツンデレ僕っ娘の詠ちゃんについ「寂しがってくれてありがとう」と言ったら殴られた。

「兄貴、あの馬と行くんだからすぐ帰ってこれるだろ。」

翠ちゃん、私と司はお仕事で半年近く行くと前から話してますよ、コンビに行くわけでないので洛陽についてすぐに戻るなんて出来ませんよ。

「かあー、ええのう洛陽っちゅうのはどんなところか行ってみたいはー。」

霞ちゃん、観光旅行ではないんですが、とはいえ皆を連れていってみたいですね。

「馬鹿者！なんでそんな大事な事をいわない、早く帰ってこい。」

華雄ちゃん年下にそんな風に怒られたくないです、でも、ありがとうね。

「早く帰ってくるのです、でないとちんきゅーきっくなのです！」

ねねちゃん蹴った後から言わないでください。

「たんぽぽにおみやげよろしく。」

蒲公英ちゃん遊びに行くんじゃないのになあ。

「もう会えない？・・・・」

会えます、会えます、半年だけです、恋ちゃんの言い方だと末期の別れみたいです。

とりあえず色々あったがちびっ子達とのお別れの挨拶は無事?終わりました。

皆文句を言いながらも、私と司の出発を受け入れてくれました、彼女達に出来る限り寂しい思いをさせないためにいっぱい遊んであげました。

皆で鬼ごっことかして遊んだり、歌を歌ったり、勉強したりして、お昼になったので一緒にご飯を食べ、そして今は皆大好き紙芝居の時間です。

今日の紙芝居は私の前世での有名作品「桃太郎」にしました。

今回の紙芝居も不安で仕方ないです。

あの後描かれていませんが実は保育園の紙芝居で赤頭巾以来の久しぶりの司君作品で、

私が暇ならよかったのですが引き継ぎで時間が無くやむなく司君が作る羽目に。

なんで不安で仕方ないのか、と言いますと少し見た限りなんですが絵が普通なんです、

前は原哲夫調だったのに日本昔話っぽく柔らかい絵になっているんです。

逆にそれに不安を覚えてしまいます、嵐の前の静けさと言いましょうか、
あと司君の作った今回の紙芝居の量がやけにボリューム感がある事に疑問が。
ただまあお馴染みの桃太郎です、平気でしょう・・・・・たぶん。

話は普通に進んでおりま“した”過去形なのは皆さんの予想通り途中から一気に。

だんだん絵のタッチがおかしくなってきています、日本昔話なのが棟図かずお調に、
鬼退治した桃太郎が血まみれです、見た目も漂流教室とかみたいになっていってます。

「桃太郎達は鬼達を退治し、鬼達の隠し持っていた宝を持ち帰ったのでした。」

なんともいえぬ不安感を漂わせている絵ですが内容はまだ普通です、というか桃太郎は此処で終わるはずです、おしまいでないのが不安です。

「桃太郎の奴凄いよな兄貴、鬼達を犬や雉とかだけで退治しちまうんだから。」

翠の言うとおりですどう見ても戦闘力の無さそうな生き物ばかりで良く勝てたなと。

「活躍はすごいんだけど、僕はこの絵にはものすごく嫌な予感がするんだ。」

詠ちゃんいい読みです、お兄さんは不安で心臓が１６ビートを打っています。

「鬼退治をし宝を持ち帰った桃太郎達は英雄です、凱旋となるかと思いきや、
街に戻ると街の空気が何やら不穏なのです、民の様子が変なのです。」

おいっ、やはりか！？何でこんな陰々滅滅とした瘴気が漂うような街並みなんだ！

「へうっ、街の皆さんに何かあったんですか心配ですお兄様。」

あああああっ、月は可愛いなああ、今すぐ抱き締めて撫で撫でしてあげたいです、
ただ、お兄さんは月の心配以上に、展開が心配です。

「喜び勇んで帰ってきた桃太郎は気づかなかったのです、
そうでしょう、桃太郎は良い事をしたのだと思っているのですから。」

子供達に話す話くらいは夢があってもいいのに。

「えっ、どういうことなんだ？英雄の凱旋ではないのか！」

華雄ちゃん、君の言いたい事はよく分かる、だが、えっ、と言いたいのは私だ。

「そうです鬼を退治した際の返り血にまみれた青年に犬に雉に猿といった異形の集団、
しかも、その血まみれの青年の引く車には大量のあり得ないような金銀財宝が。」

確かにリアルに考えるとそうだけど、それは暗黙の了解で触れてはいけないだろう！

「あちゃー、そりゃ間違いなく不審者扱いやな、擢ちゃんこれからどうなるんや？」

霞ちゃん、お兄さんも全く分からないんだ、展開が怖くてこれ以上めくりたくないんだ。

「“鬼達を退治して奪われた宝を取り戻しました”桃太郎は高らかに叫びました。」

「ここにいりゅぞー、ってにゃのりはだいじ。」

うん、蒲公英ちゃんにとってはその名乗りはアイデンティティーみたいな物だもんね、
まだ小さいから舌が回ってなくて決め台詞が決まっていないぞ

「しかし、桃太郎の言葉を聞いて内心喜ぶ街の者はいませんでした。」

もう嫌だ、展開が読めてしまった、司ならばこうするというのが確実に分かった。

「早く気付くのです、自分達の姿が異常な事に。」

ねねちゃんそうだね、でも、それ以上にこの話がイカれている事に気づいて。

「ほとんどの者は桃太郎の言葉信じる事が出来なかったのです、何故ならば、今まで色々な町や村が鬼達に襲われ、宝を奪われ、鬼達に抗おうとした者達は皆殺されていたのですから。」

まあ、鬼と戦ったらそうなるだろうなあ。

「・・・・・死んじゃったの？」

あああっ、恋ちゃんそんなつぶらな目で此方を見ないで、こんな酷い作品を演じている私の心へのダメージが大きすぎるの。

「多くの者が死んでいったのに、たった一人の人間とわずかな動物の力だけで、
鬼達に勝てる訳がない！、この男は嘘をついていると思われたのでした。」

街の人たちの気持ち分かるが、それはあかん、この展開はあきませ

ん！！

「なんでなんだよ、桃太郎をなんで皆信じてやらないんだよ！！」

翠ちゃん、貴女の純粋さはとても大事な宝物です、とはいえそこまでのめりこまないで、
まだ9歳とはいえ貴女の力で首を絞められたら下手したら死んでしまいますから。

「もちろん、桃太郎の言葉を信じて彼が鬼達を退治したのだと信じた町の者もいました、
ただ、そのような者達も桃太郎を明るく迎えるたわけではございません。」

もう嫌だ、ギブアップしたい早く終わらせたい助けて。

「信じているのに明るく迎えられないってどういう事なのですかお兄様？」

月その答えは多分恐ろしく残酷だぞ、どういう事かすぐに分かってしまったよ。

「彼らは怯えたのです、この桃太郎という青年達は鬼をも殺す事が出来る人間、
それは鬼よりも強い生き物、人の形をした妖怪の類ではないのか？
と思われたからです。」

やはりそうか、というか怯えない方がおかしいよな。

「僕もそう思ってしまうかも、鬼を倒せるという事はもはや鬼以上のなにかと。」

あああ、今回も手遅れだ、詠ちゃんが街の人間の不安に理解してしまった、

「僕の月になんて紙芝居を読んでいるの！」と怒って欲しかったのに。

「もしこの妖怪が暴れたら鬼にも勝てない人間が勝つ事が出来るのでしょうか？

いや、それは非力な人間には無理なお話なのです。」

街の住人が不安に思う異形と言っていい程の実力だろうが、話的に妖怪扱いは駄目え。

「街の人間側にねねや恋殿のような人間がいれば別なのです。」

たしかに、あの陳宮と呂布がついたら妖怪どころか何でも勝てるだろう。

「そして、またある者は鬼達の逆襲を恐れたのです、もし本当に鬼を退治していても、

鬼達を根絶やしに出来ているのか？生き残りが彼がいなくなった後に襲うのでは？」

討ち漏らしとか怖い事を書くなよ、分かるよ実際族討伐やっている人間として。

「手負いは怖い・・・・」

恋ちゃんの言うとおり、だから根絶やしが必要って違う！これは桃太郎なんだー

「街に戻った桃太郎を街の住民達は笑顔で歓迎しました、偽りの仮面をかぶった姿で、
桃太郎の宣言を信じる者、桃太郎を頭のおかしい男と思った者達、
鬼達の逆襲に怯える者色々な考えを持つ人間がいました、ただ皆偽りの笑顔でした。」

もう嫌だ、皆が作り笑いしている街なんて見たくない、というか話をやめてくれえ。

「へうう、皆が嘘をついているなんて悲しいですお兄様。」

そうだな月、嘘は必要な時もあるがつかない方がやはり良いよな、
作られた物語何だがそれに心を痛める月の優しさに、お兄ちゃんは獣になりそうです。

「ただ一つ街の人間皆に共通した意識があるのでした、あの持ち帰った宝が欲しいと。」

これから桃太郎を殺して山分けする算段だろ、それしかないよこの展開は。

「兄貴、何でこんな欲深いんだこの街の人間は。」

優しくて純粋な翠ちゃん貴女には分からないでしょうが、業が深いんだよ人は。

「元々田舎で優しいおじいさんとおばあさんの三人で暮らし育った純朴な青年、
そのような青年に街の人達の悪意を読み取る思慮深さなど無かったのです。」

昔話で意地悪じいさんとか以外でそんな能力持っていたら駄目ええ。

「擢ちゃん、人を信じるって難しいなあ。」

霞ちゃん8歳の娘が、そんな黄昏た様な表情で深い発言をしないで。

「そして桃太郎一行の前に身なりの良い街の代表者という者が現れこう言いました、
“貴方様の活躍のおかげで鬼は退治され私達は安心して暮らせる事が出来ます、
しかも宝を取り戻してくれたとは、感謝しても感謝しきれるものではありません。”」

絶対に下心あるというか裏がある発言のふりじゃないかこれは。

「そうだろ、そうだろ英雄を湛えないとは何事だ！」

華雄ちゃん、街の人達は腹に一物あるとさっきから言っているでしょ、

どうして罠だと疑えないの？本当にお兄さんは君の将来が不安です。

「“鬼退治からお戻りになられお疲れでしょう今日は私の家で休んでください、
そして明日感謝の意を表す為街の者総出の大宴会を開かせていただきます。”と。」

あー、確実に血の惨劇が待っているよ、皆殺し確定じゃないか。

「ぐぬぬ、桃太郎早く気づくのです、このままでは危ないのですぞ！」

ねねちゃんは罠と気づいたか、というか罠以外の何物でもないが。

「家に招かれた桃太郎達はお風呂に入り、その後、その家が用意した食事を食べました、
冒険の疲れもあったのでしょう桃太郎も雉も猿も食事を少し口に付けただけで、
ほとんど食べずすぐに寝てしまいました。」

犬だけ名前が出てこないという事は気づいたという事だよな。

「いにゅだけよびゃれていないからぶじにゃんだね。」

おおっ、さすが蒲公英ちゃんにいい読みだ！！ぶじにゃんだねで猫かと思ったぞ

「ただ、何故か犬だけは他の仲間と違い、食事の時から吠え続けていて、
食事をとらないどころか皆の食事の邪魔をしようとしていたのでした。」

薬の匂いに気づいたんだろうなあ、って、俺何こんな話の考察をしているんだ。

「・・・・セキトと一緒で賢い」

セキトは賢いよね、前世でコーギー飼っていたからつい昔を思い出してしまう、
ええ、現実から逃避していますよ、こんなひどい話やりたくないので。

「寝てしまった桃太郎達を起こそうと必死で吠える犬、ただ皆起きる気配がありません、
そうしていると襖があきました、そこには家の者達皆が立っていました、
彼らの手には刀や槍が握られ、そして一斉に襲い掛かってきたのでした。」

ホラー映画でも何でもよくあるパターンだな、
とりあえずもう良いよこの話は、げっぷが出そうなくらいお腹一杯だよ。

「兄貴助かるんだよな桃太郎達は、なあどうなるんだよ！！」

死ぬ、死ぬ、首が締まって死ぬ、桃太郎達だけでなく私が死にます

このままでは。

「なんと先程の食事とかは桃太郎達を殺そうとした家の者が用意した罠だったのです、
眠り薬の入った食事を食べてしまい桃太郎達は目覚める事がありません。」

助からないよなあ、いや司の話だ、いきなり変なキャラが出て来て、助けるとか偏頭痛がしてきそうな展開があるか？

「擢ちゃん、もうおしまいなんか？英雄として死なせてやれんのか？」

霞ちゃんの言うように軍人の死に方としては悲惨すぎる、
ただそれ以上に昔話の展開としてこの話が悲惨過ぎる。

「鬼達を退治した英雄ですが薬で眠らされてしまえば赤子も同然、武器を持った家の者達に刀で切られ、槍で突かれ殺されてしまうのでした。」

絵がああ、絵がああ、楳図かずお調の絵では駄目だああ凄惨過ぎる！！！！！

飛び散る血しぶき、槍に突き刺された体、千切れている手足、これは。

「へうううう」

あああああっ、月が顔を伏せてしまった今にも泣きだしそう、頭を撫

でて慰めないと。
紙芝居を中断して慰める、ただこれから先もひどいはずだ大丈夫か。

「唯一食事の中に含まれた眠り薬の臭いをかぎわけた犬、もう桃太郎は助からない、
このままでは自分も危険だと察して一目散で家から飛び出ました、
元々きび団子程度での契約、これで殺されては割に合わないと必死で逃げます。」

原作のきび団子で犬を引き込むというのが理解できないが、
それにしても犬も明らかに死亡フラグだよな、この逃げるのは。

「逃げるのか卑怯な残って戦え、犬には牙があり、爪があるではないか！！！」

華雄ちゃん貴女の猪武者度はノーベル賞物です、死んで花実が咲く物かですよ。

「しかし、犬は甘かったのです、家を出て助かったと思ったのもつかの間、
家の外は中以上に包丁や鎌を持った街の住人に囲まれていたのでした。
鬼に勝てる実力があったとはいえ、それは桃太郎と3匹の獣という隊だからであり、
犬一匹だけでは多勢に無勢。犬もまた刺され、斬られ死んでしまうのでした。」

相変わらず絵がああああ、犬のバラバラ死体酷過ぎる。

「殿もいなく、退路の確保も出来ていない、一人で逃走に無理があったのです。」

いやまあ、そうなんだけど戦場ではないからおとぎ話なんだけど。

「街の皆は事件の発覚を恐れ桃太郎達の死体を燃やし骨を砕き灰にし川に流すのでした、
そして、それからゆっくりと桃太郎達の持ってきた宝を山分けしようとしました。」

今度は街の皆でバトルロワイヤルかい？

「・・・・・犬達の敵を討つ」

恋ちゃん行っちゃ駄目え、これはお話敵はいないから！
敵がいるとしたらこの話を作った司だけど、これはお話なの。

「街の皆はお互いがお互いを監視しあう日々でした、誰かの口からばれるのではないか、
いつ誰かが桃太郎を殺った時のように宝の独占の為殺しに来るのでは？と。」

ヴェルディのレクイエムＢＧＭにすべきか、バトルロワイヤルスタートだ。

「ううううう」

あああああああああああー、月が泣いている、俺も泣きたいが、
可愛い月が泣いている！許さん司を殺す！護衛の嵐さんが慰めてくれる。

司にキレたが、ただ泣いている月も可愛い、はううお持ち帰りーー！

「ゆ、月、大丈夫だよ、怖くないよ。」

詠ちゃんもいてくれてよかった、でも、そんな詠ちゃんも泣きそうな顔、
ごめんね月に詠ちゃん、あとで司は〆るから。
部屋の隅にいる司を殺意のこもった眼でにらむ。
嵐さんに月と詠を慰めてもらう。

「きっかけは偶然発生した小火でした、だが疑心暗鬼になった街の人は興奮します、
“あいつが殺そうと火をつけたんだ”“いややったのはコイツだ”
もう手遅れです、
皆が皆を敵と思い、武器を取り合い老若男女問わず殺し合いが始まるのでした。」

展開通りだ、脳内ＢＧＭ流れたよ、この絵にも慣れたよ、
でもこの紙芝居は受け入れられないよ、とりあえず司を殺す、月を泣かしたのだから。

「なんでこんな事になるんだよ、分からないよ兄貴」

第一次世界大戦は一発の銃弾で始まったように翠ちゃんきっかけは小さいんだよ、
って、真面目に語る事ではない、これは紙芝居なんだから。

「こうして一人の青年の正義感による行いから一つの街が滅びることになるとは、
人の世とはなんと儚いのでしょうか、人はなんと罪深いのでしょうか。おしまい」

てめえええええええ司、なんだこの終わり方は最後にぶん投げやがったなああ！

紙芝居終わった後室内を見回ると皆泣きそうな顔になっている、
うんいくら何でも凄惨過ぎるよ、今回は絵といい内容といい。

って、部屋の隅にいたはずの司がいない！！！！！

そこに丁原さんがおやつの乗ったお盆を持ってやってきたので司の行方を聞く。

「司君ならば先程至急視察の仕事が入ったといって出て行きましたよ。」

丁原さんありがとう、オリジナルキャラ紹介の際に紹介忘れてしまい、
しかも、今回はじめての台詞で、しかもそれが一行と散々な扱いで。

あの野郎、月が泣きだした事で俺がブチ切れるの分かって逃げ出したな、

とりあえず今から行きますかマンハントに！！！！周辺にいる護衛兵達に伝える

「私の方天画戟と弓を用意しろ、兵達も武装準備出来次第出陣する、目標は李儒文優、とらえた者には金一千銭、生死は問わずだ、至急用意しろ！！！！！」

さあ、司君敵は涼州兵すべてだぞ、大秦くらいまで逃げてみせろよ。

―琅？―

城で馬達の世話をしていると司君が息を切らせてやって来た。

凄く慌ててるし様子が変だし話を聞いてみたの、

司君の紙芝居をやっていたら月ちゃんが泣きだしたから逃げたって。

うん、それは必死で逃げるね、私でも怒った保君に隴西から天水辺りに逃げるよ。

司君は「まずい、まずすぎる、月ちゃんがまさか泣くなんて、保さんの怒りが収まるまで消えます大秦あたりにでも行ってきます。」

大秦ってあの大秦？涼州から抜けて遥か遥か遠いあの西の端にあるという？

司君は蒲公英の婿になるから大秦に行くのは困っちゃうな、

しょうがない此処は琅？が保君の事を相手してあげるか。

司君、どうやら紅ちゃんに捕まったけど、あくまでも蒲公英が奥さんだから、
今回の件を貸しにして蒲公英と婚約してもらうことで貸しを返してもらおっと。

「司君、流石に大秦は遠いよ、それならがなんとかするよ。」

普段の思慮深い司君と違って今の司君ならあっさり引っ掛かるかも。

「でも、怒れる保さんは怒れるバンダースナッチより危険ですよ！」

ば、ばんだー？なんだろう、なんか聞いたことない名前だけど怖そうな、
でも、可愛い蒲公英の結婚がかかっているから頑張ってみるの。

「司君が謝ったら許してもらえるように琅？も頼んであげるよ。」

司君は保君に戦っても勝てないと怯えているけど戦わなければいいのに、
普段誰よりも頭いいのに、こんな簡単な事が分からないなんて。

それに保君倒すと将来の翠ちゃんのお婿さんがいなくなっちゃうから、
蒲公英よりも翠の方が結婚に苦労しそうな気がして。

「保君と戦おうと思うから勝てないのが分かっていけないんだよ、
司君も悪気があってでなく、ついなんだよね、だから琅？も一緒に

謝ってあげるよ。」

こう言われたら司君も琅?を頼るに違いない。

「そんな悪いですよ琅?さんは何も関係ないんですから、
それに月ちゃんが関すると保さんは人が違うから許してくれるか。」

司君の言うこともよく分かるけど少しは友達を信じないと。

「保君は大好きな月ちゃんが泣いたから怒ったけど、逃げたらより怒るよ、
でも、保君だってちゃんとごめんなさいって謝ったら許してくれるよ、
一緒に謝ってあげるから、司君も保君も琅?の大事な家族なんだから。」

「ろ、琅?さん、本当にありがとうございます、保さんにちゃんと謝ります、
たしかに逃げてしまったことでより怒っているでしょうが。」

司君も逃げるのやめたし、もう平気だね、じゃあ謝りに行かないとね。

そう思っていたら武装した保君の兵隊達がやって来たの。

「失礼します馬騰将軍、我々は李儒様を拘束するよう董擢将軍から指示が出ています、
馬騰将軍、李儒様の逃走を手伝いをされるなどということは・・。」

司君はもう逃げないから平気なのに、それに逃走の手伝いの疑いって、
だからいつもと違って真面目な口調で少し怒気を含ませながら言ってあげたの。

「李将軍は逃げる事なく董将軍の元に出頭します、馬寿成がそれに付き添うのですが、
貴方方は私や李将軍を疑うというのですか。」

失礼しましたとおびえた表情をしながら兵隊達がどいていく。
ちょうどそこに方天画戟握りしめた保君がやってきたけど、これは司君が怯えるのも。

今の保君には琅?と司君二人がかりで襲いかかっても勝てるかどうかわからないの。

「誠に申し訳ございませんでした、月ちゃんを悲しませてしまい、
そして、保さん達の手を煩わせた事深くお詫び申し上げます。」

態度だけではなく心底申し訳ないという思いのこもった土下座をした司君

「保君、司君も本当に悪い事をしたと分かって今謝っているの、それで、
今から保君と月ちゃんの所に謝りに行こうとしていたんだ、
月ちゃんの事で怒るの分かるけど、琅?も謝るから許してあげてほしいの。」

怒っていた保君も琅?まで謝るとは思っていなかったらしく、
「わかった、では司、私ではなく月に泣かせた事を謝ってこい。」
と。

司君は保君の言葉を聞いてすぐに走って保育園の方に向かっていったの。

「司も逃げないでちゃんと謝ったから許してやろうと思いましたが、琅?さんが一緒に、琅?さんまで謝ってきたら許さないわけにはいきませんよ。」

保君は琅?が謝ってきた事を不思議に思っていたみたい。

「だって、保君も司君も琅?の大事な家族だから、家族は仲良くないとね。」

笑いながら保君に伝えてあげる。

「家族・・・、そうですね家族ですからねえ、いずれは・・・・ククク」

流石保君、琅?の言いたい事すぐに分かってくれていた、

「司君は家族と琅?に言われて意味が分かっていなかったみたいだけどねえ、
頭良いのにあーいった所が詰めが甘いなって、蒲公英の旦那さんになるんだから。」

司君、蒲公英との縁談はまだ早いなんて言ってたけど逃がさないからね。

「私も、司が琅?さんの家族になる事で反対しなかった事を証言しますので。」

保君が楽しそうに黒いオーラ撒き散らしながら笑って言っていたよ、謝った事で許したというけど、やはり保君許していなくて利用するなんて腹黒いなあ。

翠は馬鹿だから旦那さんには保君位賢くないとね、こちらも楽しみな旦那さんで。

第二十五話、今回も紙芝居、こんな状態で洛陽に行ける？（後書き）

うーん相変わらず紙芝居の時は筆が進むというか、
乗り乗りですぐに出来てしまうのが。

あと、司を紅さんに続き更に自由な独身生活から縁遠くしました。

とはいえ、紅さんに続き、将来楽しみな蒲公英ちゃんと婚約なんて、
ちくしょー司モゲロ！！！

皆さんのご意見ご感想お待ちしております！

第二十六話、悪意の伝言ゲーム（前書き）

ドラマの三国志Ｔｈｒｅｅ　ｋｉｎｇｄｏｍｓを何度も見直していますが、
陳宮の死の瞬間に「ねねちゃんがー」と言っていた自分に愕然。

何か色々と戻れない位置に来てしまったのか？
と自分を見つめ直したい今日この頃

さて、遂に今回の話で保達は洛陽に向けて出発しました、
とはいえ私の思いつき行き当たりばったりなご都合主義、
洛陽に無事着けるのか作者ながら不安です。

第二十六話、悪意の伝言ゲーム

―保―

パカラッパカラッパカラッ

「待って・・・さーい！」

良い天気だねえ、今日も見事に日本晴れ？日本ではなく漢だから、漢晴れ？かんはれって言うと頑張れって応援しているみたいだな？

「そこは大陸晴れでよろしいのではないか？と。」

「おおっ、それナイス提案！ただ人の心を読まないでくれ司君。」

パカラッパカラッ

「だか・待っ・・・さー・・！！」

先程から後ろが何か煩いのですが、どうしたのでしょうか？

チラリ

おおうっ、嵐さん達が必死の形相で土煙を巻き上げながら追っかけてきている。

「おね・・・から、いか・・・で、はや・・ぎ・・す。」

よく聞こえません、何を言っているんでしょうか？

「保さん多分、“御願いだから先にイカないで早過ぎる”らしいよ。」

つ、つ、司君、何とんでもないことを言っているんですか。

「つ、つ、つ、司くぅう～～～ん、なな、な、な、何を、何をいいいい言っているのかよくききき聞こえなかったたた・・・。」

司君がニヤニヤしながら叫ぶ。

「だから嵐さんが、保さん勝手に先にイクな早過ぎるって。」

なななな、なんですとー、嵐殿ぉー！

ショックで口調がねねちゃんみたいになってしまった。

絶望した！

ショックです、愛した女性に先にイクな！と罵られるなんて、しかも早いと言われるのも辛いが“早過ぎる！”なんてショックです！

流石に竿師として食っていけるなんて思ってはいませんが、前世でそれなりに女性経験はありますから自信はあったのに。

それなのに、しかも、あれだけ愛し合い、相性がかなり良かった、
そんな嵐さんに人前で早過ぎる先にイクな！と人前で罵られるなんて。

ここにいられません！、いやっ、ここにではなく皆と一緒にいられません。

あと、泣いていいよね！？

「うわ～～～～ん！！」

バカラッバカラッバカラッバカラッバカラッバカラッ

―司―

ここ最近散々でしたがやっと目的地である洛陽に向かって出発しました。

保さん、私の作戦計画者二人、洛陽での太守代理で母さん、
母さん付き軍師百合さん、護衛で嵐さん、馬鹿一、二号に兵２００名。

更に涼州域内をぎりぎりまで琅？さんに雷さんに紅さん達が、
騎馬隊を中心に2万の兵を引き連れ大規模調練と見送りを兼ねて。

とにかく暇です途中で長安に寄ったりするつもりですが、

その長安にしても遠いのですから、私と保さんだけならば、
踰輝と挟翼がいるので飛ばせば長安くらいすぐですが、他に人がいるので。

暇ですよ、実に暇ですよ。

今後の計画やら打ち合わせしながら移動すればいいですが、
流石に兵隊引き連れていると聞かれては不味い内容がありますので。

なんか良い暇潰しはないでしょうかねえ?心からスッとするような。

それにしても保さんと私の愛馬はさすが元々原哲夫作品の馬、
やはり凄いですね、普通にのんびりパカパカ歩いているつもりが、
ふと気付いたら他の馬率いる人を引き離してしまうんですから。

根本的に馬の大きさが違うから仕方ないんでしょうが、
この時代サラブレッドはいなくポニーとかくらいの大きさですから。

三国志のドラマや映画とか見ると騎馬隊は格好良いですが、
実際は大人が乗ったら地面に足が着きそうな小型馬ばかりで。

軽トラとフェラーリ位、いや、原チャリとヴェイロン位?段違いですな。

段違いの速さというと作者は昔、ランボルギーニオーナーに、
憧れの車だから知識で知っていたが「このディアブロどれ程速い?」

と。

「なんであの時の俺はあんな不用意な質問をしてしまったんだ!?
３００は」
と後に謎な言葉を助手席でブツブツと言い続けていたとか。
って、何の話をしているんでしょうか僕はいったい？

保さんと無駄話をしていると後ろで嵐さんが叫んでいますね。
先程僕が考えていたようにどうやら僕達が先行しすぎている、と、
僕は耳がすごくいいからなのか？保さんは聞き取れていないようで。
優しい僕は保さんに嵐さんの言った事をそのまま伝えてあげましょう。

「保さん多分、“御願いだから先にイカないで早過ぎる”らしいよ。」

そのまま伝えてあげました僕って優しいなあ、イントネーションは違うかも。

「つ、つ、つ、司くぅう〜〜〜ん、なな、な、な、何を、
何をいいいい言っているのかよくききき聞こえなかったたた。」

保さんが面白いほどに動揺しているよ、久しぶりに見たが。
よく聞こえなかったみたいですから、もう一度言ってあげましょう。

「だから嵐さんが、保さん勝手に先にイクな早過ぎる！って。」

僕は正直者なので嘘も誇張も全く言ってないですからねえ、
保さんがなにか勝手に勘違いしてしまったら仕方ないですがニヤリ。

あっ、保さんの様子が変だぞ、よく観察してみよう。

プルプル震え始めたぞ、どうなるのかな？

「うわ～～～～ん！！」

うおっ、あの怖い物知らずな保さんが大泣きして、踵輝で逃げていっちゃったよ。

保さんって僕ほどではないが昔からかなり遊び歩いていたから、
結構な技術と女性に評判なのに知らないんだ、自信持てばいいのに。

遊び相手ではなくガチの交際相手に言われたらショックか、
こちらも保さんに恨みがありますからたまにはいいか。

一昨々日の晩の食事中に（前話第二十話後）に母さんや皆の前で、
「司君、蒲公英ちゃんと婚約おめでとう、めでたい！」と爆弾発言した恨みを。

突然の発言と、何を言っているか分からないと固まっていると、
「琅？さんが司を家族と言ってたの否定せず嬉しそうにしてたやん、

前から琅?さんが言ってた蒲公英ちゃんと結婚決めたから家族なんでしょ。」

あの時の琅?さんの台詞を思い出し、気づいた頃には手遅れだった。

まさかそんなあり得ない、とカイジみたいにぐんにゃりしたり、

「待て慌てるな、これは孔明の罠だ！」と叫んで慌てる僕を見ても、あの時は保さんは慰めるでもなくニヤニヤしながら耳元で。

「おめでとう李儒文優君、５歳の嫁を持つペド軍師誕生だね。」って。

確かに僕は転生したから精神年齢４６歳のおっさんだが、

５歳の蒲公英ちゃんと一緒にいたらロリ野郎呼ばわりも仕方ないが、ロリ呼ばわりどころか根も葉も無いペド軍師呼ばわりなんて酷過ぎる。

「それを言ったら保さんだって９歳の翠ちゃんの婚約者のくせに！」やり返せたと思ったら保さんの方が一枚、いや、はるかに上手だった。

「翠ちゃんが将来大きくなって私と結婚が嫌でなければ喜んで妻として迎えます！

と琅?さんに約束して書類作ったから、あっ、司君先に言っておくね、

母上にばらしても平気よ、書類作成は父上で、母上と琅?さんの同意で作られたから。」

な、な、なんだと、そこまで先を読んで行動していたのか保さんは。
だが、保さんの言葉に窮地からの脱出のヒントを見つけましたよ。

「蒲公英ちゃんが同意しないと、無理矢理なんて政略結婚は駄目です！」

これならと思ったが保さんと琅?さんの方が遥かに上手だった。

「たんぽぽはすきだから、おにいさまのおよめさんになってあげるね。」

ナ、ナ、ナンダト・・・!?

「たんぽぽはやさしいからおとこのかいしょうも、りかいしているよ、
たんぽぽいがいにおんながいてもゆるしてあげるから、にしし。」

な、な、な、なんて事を喋っているんだ蒲公英ちゃんは。

子供だと思って甘く見ていた、小悪魔だったんだった蒲公英ちゃん、
しかも、琅?さんと保さんなんて悪知恵働く悪魔二人が入れ知恵してたら。

あの晩、私は血涙を流したね、母上がいつものようにきれるのではなく、

「紅さんと蒲公英ちゃんに優しくしてあげるのよ。」あの言葉はきいた。

ききすぎたよ、母さんまで説得しているって、どんな根回しの良さだよ。

今日の意地悪くらい許されるでしょう、あの日の僕からしたら。

この前の屈辱を思い返していたら保さんが遥か遠くに、
速いなー、流石に踰輝でとばすと、あっという間に豆粒だよ、
って、保さん、そっちはまずいそっちは益州！司隷州とは向きが違う。

これはいけません、至急どうにかしませんと、急いで嵐さんの元に。

―嵐―

王子様とアイツの馬は羌族の自慢として送られた馬だけあり凄いが、
もう少しおさえて歩いてもらわないと追い付くのがやっとで。

踰輝と挟翼が早歩きしただけで俺の馬は全力で追い掛けないといけないとは、
本気であの馬が走ったりしたらどれだけ速いんだろうか？

あと王子様が言うには馬の乗り方にも色々あるみたいで、

飛ばす時用とか乗り方を色々使い分けていたが、
それで華麗に岩を飛び越えたりしながら宙を舞う用に走っていたり。

それで驚いていると、王子様が言うには、海の先にある東の国には、
鹿が降りれるならいける！と蹄の形が鹿と馬は違うから無理なのに、
断崖絶壁を騎馬部隊で駈け降り敵陣を奇襲した天才がいたと言ってた。

なんでも知っているんだな王子様は。

って、そんなことを考えていたら王子様とアイツの馬が独走している、
走っていなくてあれなんだから、待ってもらうように伝えないと。

「王子様速すぎます、抑えてください！」

向かい風もあるから叫んでも聞こえないか？でも叫ばないと。

「二人とも速い、待ってくれー！」

全然気付いてくれない。

「待ってくださーい！！」

走っても追い付かない叫んでも声が届いていない、だんだん懇願になってきた。

「お願いだから行かないで、はやすぎます！」

おっ、アイツが気付いたみたいだぞ、いつもムカつくが役に立ったぞ。

俺の王子様に話しかけている、馬の動きが止まったぞもう一回だ。

「お願いだから行かないで下さい、はやすぎます！」

今度も王子様にはよく聞こえていないみたいだが、アイツには聞こえたようで、
アイツが王子様に何か話しかけているのが見える、立ち止まってくれた。

って、俺の王子様が何か叫びながら変な方向に行っちっまったぞ、
って、ヤバイ誰かとめろー！！なんだあの速さは、追い付けないどころじゃ。

そしたらアイツがなんか急いでこっちに来たぞ。

「保さんが泣きながら暴走して益州に向かっている！
勝手に他州に兵が行くのはまずいから、そのまま行軍を。」

って、何があったんだー！？

「貴様が何かやったんだろ王子様がそんな暴走するわけないだろうが！」

アイツが珍しく申し訳なさそうに言ってきたが。

「嵐さんが保さんに、イクの早すぎって、からかった。」

言っている意味が分からんぞ、王子様の馬が走るの速いのが？

悩んでいると、異変を察知してやって来た琅？さんが。

「嵐ちゃんは鈍いんだから、司君は、保君が閨で下手くそって言ったの。」

何を言ってるんだ、琅？さんは。

「王子様に閨で愛してもらったが凄く気持ち良かったのに、それなのに王子様が下手くそって、って、俺は何を言ってるんだ！！！」

琅？さんがニヤニヤしながら、「へえ～保君って可愛い顔してやるんだ。」

「保さんをどうにかしないと！」

俺は何を口走っているんだ！これが“公明正大な罠”という奴だな。

アイツがまともな事を言ってるのがムカつくが、今は仕方ない。

とりあえず部隊は州境まで進む予定通りの行軍を続けることにして、
俺の馬では追い付けないから嫌だがアイツの馬に同乗して追っ掛けることに。

コイツの馬は俺の王子様の馬と双璧をなす馬だけあり速いです、
コイツには本当に勿体無い程の名馬だと思ったよ。

コイツが涼州の軍師だから仕方無いが敵ならばすぐにでも、
王子様から貰った蜻蛉切で串刺しにして馬を貰うんだが。

踰輝の足跡追い掛けて行ってる最中になんで王子様が泣いたか、
どういう意味なのかコイツに詳しく説明を聞いて理解したが、
王子様の一大事だから我慢したが今すぐ何度も殺したくなった。

一刻くらい挟翼で飛ばしていたら崖っぷちに王子様がいた。

「来ないで～、近付いたら此処から身を投げて死んでやる！！」

普段の格好良い王子様と違いすぎて頭が痛くなってきたです。

「下手くそな俺なんか」「どうせ早いよ」「笑いに来たんだろ」
完全に人間不信とかって奴になってしまっている、どうすればいいんだ！？

「崖に追い詰められて泣いている人間と追い掛けた人間、
二時間ドラマのエンディング寸前だね、刑事役は蟹江敬三?平泉成?
最後は聖母達のラブバイで・・・ドゴッ、グブァッ」

とりあえず訳の分からない事を言う、この元凶はブッ飛ばす。

「私に近づかないで!!」

さっきからだが俺の王子様が完全に壊れている、ドーシテコウナッタ!?

まあ原因は今さっき俺に槍の石突きで殴られたコイツだが。

「王子様、危ないから此方に来てくれ。」

崖っぷち危ないから徐々に近付くように。

「嫌だ、近づくな。」

完全に愛してる王子様に敵とみなされているなんて、俺も泣きたい。

「コイツを信じたら駄目です、嘘ですよコイツが言うことは、
俺馬鹿だし難しい事分からないが王子様に嘘はつかない。」

俺の王子様が少しこっちに近づいてきてくれた。

「僕は嘘はついていないのに、意味深な言い方しただけで。」

ザクッ

「うぎゃあああああああーーーーーー！！！！！！」

手元にあった蜻蛉切でコイツを黙らす為脇腹を突く。

「やっぱり本当なんだ、早いって下手くそって笑うんだ私を。」

ああーーーーー、コイツのせいでせっかく上手くいっていたのに。

「さっきも言ったが俺は王子様に嘘は言わないです！！！
それに下手くそって、王子様に閨で色々気持ち良くしてもらって、
耳をかまれたり、うなじをくすぐられたり、いろんな所に口付してくれて。」

「あーーー、聞きたくない、友達や知り合いの閨での様子なんて、
聞いてしまうと想像がついてしまうから嫌なんだああ・・・・グフッ。」

コイツがうるさすぎるから石突きで顔面を突く、
それにしてもコイツさっきからあれだけやられてなんで無事なんだ。

この後も閨での王子様の事を正直に言って説得し続けてなんとかなったが疲れたよ。

でも、おかげで夜に王子の天幕で嘘でない事証明してあげることになり嬉しかったよ。

―光―

洛陽に向かう事になったっすけど、なんでいきなり大将の孟高がいなくなったっす。

後で戻ってきたっすが、やる気あるんすか。

涼州は自分と阿多が頑張らないと終わってしまうっす。

夜に孟高の天幕に抗議に行こうとしたッす、
天幕から?融が出て来て「殺すぞ!」脅されたッす、ちびったっす。

?融も自分と同じように孟高に抗議しに行ってくれてたっす、
自分に手柄取られると思って怒ったに違いないっす、そこまで自分ケチじゃないっす。

とりあえず涼州には自分と阿多だけでなく?融もいるということがわかったっす。

―和―

キュピイイイーーーーーーーーン

「なんか感じた、今、保君に危機が迫っている、いま保君の危機が。」

「和、何を言っているんだ、今は保達は2万の兵と共に行軍中でそんな危機なんて。」

なんでこの人は親なのに感じ取れないのでしょうか、でも娘の月ならば。

「月は分かるわよね？」

「へうっ、危機ではなくお兄様に良い事があったような気がしました。」

えっ？危機が訪れているはずなのに、いいことって・・・。

「今から私も保の後を追って出ます。」

こうなったら人任せに出来ません、私自ら保を守らないと。

ガシッ

「何を言っているんだ、太守が勝手に城を離れては。」

あの人に後ろから羽交い絞めにされてしまった。

「貴方離してー！保に危機が！保に危機がーーー！！」

保君に危機が近付いているの、危機が近付いているのー！！！！

保ＬＯＶＥな和に取っては（性的な）危機が迫っているで間違いないでしょうが、
とりあえず色々あったようですが良くも悪くも今日も涼州は平和なようです。

第二十六話、悪意の伝言ゲーム（後書き）

紅さんに嵐さんに、保君に、司君、お前らまとめて皆死んでしまえ、
何ラブってやがるんだ、こっちはイラついているぞ！
と作者のくせにやさぐれてしまっております。

どうしてこんなラブな感じの話になってしまったのだろうか？？？？

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第二十七話、欲しい者はどうやっても欲しい！（前書き）

なんか凄くまじめな回になってしまった、
自分の書いたものなのに違和感が。

とりあえず今回もご都合主義満載ですので、どうぞ。

第二十七話、欲しい者はどうやっても欲しい！

―保―

前回（二十六話）のような騒動はあったが無事に長安に到着した一行、
大谷商会経由で取った宿で夕食を終え明日に備え休憩中。

コンコンコンコン

「ちゃんと四回のノック、司だね、どうした？」

司が入ってくる

「ノック？」

護衛という名目で相部屋となった嵐さんがノックについてきいてくる。

そうそう、余談ですが、後に私と嵐の相部屋を聞いた母上は血涙を流していたとか。

「ノックとは大秦とかより更に西の国の礼儀作法です、司が扉を四回叩いたことで、
室内の主に入室の許可を求めるのと自分が来ましたという合図になります。」

嵐さんが感心している、まあ、この時代ノックなんてありませんか

らね。

ノックについて話を続ける

「扉を四回叩くのが正式な作法、三回は恋人や夫婦がする私的な関係者の合図、
間違えて二回の人がいますが、それは厠が空いているか確認するノックです。」

前世で実家の会社の面接の際ノックと喫茶店に連れて行くとか見極めによく使ったな。

「夫婦や恋人は三回なのか、王子様、俺はさ、三回で良いか？」

照れながら聞いてくる嵐さん、この人めっちゃ可愛いんだけど！！！！

司がいなかったら即寝台に引き込んで夜通し楽しんで、
夜明けのコーヒーを楽しみたいんだけど、ちっ、お邪魔虫め。

って、コーヒーが無いから夜明けのウーロン茶か、なんか締まらんな。

「保さん、人をお邪魔虫扱いしないでください、最近扱いが酷いですよ、
私がノックしたから盛り上がれそうなきっかけが出来たが、今は内密な話が。」

司の言う内密な話という点で嵐さんが席を立つ

「いえ、これからを考えて、嵐さんにはいていただいた方がよいかと。」

司が引き留める。

「わざわざ夜に、内密な、でも、嵐さんがいた方が良い、どういう面白い事かな？」

司がそんな揃った厄介事の匂いのする話を持ってくるなんて期待してしまいます。

「ゴホン、長安周辺にいる人材で将来有望な人材いないか探っていましたが、
諜報部からの面白い情報が入りまして。」

諜報部からの情報ですか、それは貴重ですね。

「何れ程の信用出来る情報ですか？」

私と司二人だけの取り決めでこの後の言葉で情報源や質を確かめる。

「絶体です。」

情報源は絶体に信頼できる、二人だけの秘密である“太平要術の書”ですか。

「なるほど、それは大事ですね。」

ついニヤニヤ笑ってしまう。

「本当に俺がいても良いのか？」

嵐さんは私に部屋にいて良いよと言われたが、
本当にいてよいのかか明らかに戸惑っている模様

「いえ、嵐さんがいないと困るかもしれないので。」

最悪、結構な揉め事が起きるということですか。

「では、前置きはいいや本題を。」

話を進めましょう、久しぶりの人材確保です、これは楽しみで。

「此処、長安の今の主はどんな人物か御存じで？」

回りくどいですね。

「本当の主人ですか？表面上の周辺地域の領主である司隷校尉のことではなく、
実質この街の政治を取り仕切っている官宦の王謙はかなり愉快な方なようで。」

王謙は歴史上では当人は家柄の卑しい何進が縁戚関係作ろうとして

断ったから干されて、
息子の王粲は後に魏の政治家として活躍した人間だったはずだが。
ただ、こちらの王謙は世間的にバレてはいけない大変愉快な性癖をお持ちのようで、
極度のサディストな性癖を普段は上手く隠しているようですが。

「洛陽では張譲達がいて出世争いに敗れ最高位大長秋までいけないからと、
長安に赴任してその時の悔しさを晴らすかのように好き勝手やっていますが、
最近は特に学のある女をいたぶる事が好きなようで、今回彼が奴隷商人から掘り出し物を。」

話している内容は最低なんだが楽しそうに語る司、
その売られたという掘り出し物が余程の大物なんだな。

「司馬防の長子、司馬伯達です。」

司の口からとんでもない名前が出てきた。

「・・・・・、マジ!?」

あまりに予想外の大物の名前が出てきたから一瞬固まってしまった。

一族揃って有能な大物大物キターーー!!!

涼州強化の為に司馬八達全て引き込み計画してましたが、

来ましたね、なんて幸運、まさにご都合主義、これぞ僥倖。

「善は急げと思いまして、お話を。」

なる程売買は決まっているが引き渡しはまだという事なのね、
その前に私達が今日にも買い取りに行くと。

「嵐さん、今から出掛けますよ、奴隷商から有能な人材を買いに行きます、
揉め事になるかもしれないので武装を、ただ基本は話し合いでいきます。」

奴隷商なんて嵐さん的には許せないでしょうから釘をさしておかないと。

「分かった奴隷商人なんてむかつくから殺したいが、王子様が止めろというなら。」

すみません、ただ、いざとなったら大暴れしましょう。

「では、身元を隠す為にこれに着替えてください。」

何処にでもありそうな服に、その上から羽織る道士服風のフード付きコート、
問題といいますか気になったのは、一体何なのでしょうかこの蝶の形の仮面は？

なになに、司君自作の正体バレるのを防ぐ認識阻害能力保有したマ

スクですか、
神に頼んだのではなく露天で売られていた生地を加工!?嫌になります、この世界。

ただ、こんなマスクをしている知り合いがいたら正体を見破れないのではなく、
私にはそんな知り合いはいないと思い込んでいるだけなのでは?

コートとマスクをあとはかぶるだけの姿に着替え、目立ついつもの武器は持てないので、
と、司君が日本刀を渡してくる、気が利いています。

まさか、こんな所で長曽禰虎徹を渡されるとは。

「保さんにはこれも」なんか時代に不釣り合いなアタッシュケースを渡してきた。

こ、こ、これは司君・・・・。

ＭＡＲＫ２３とＭＰ５ＳＤ３はあきません!!神の店から持ってきましたね!!

三国志世界をぶち壊すから駄目だって。

銀行に籠った強盗退治に行くＳＷＡＴじゃないんですから、
見つからなければ良いという意味ではありません。

そのステルススーツも駄目です、それゴルゴ13で出てきた奴ですよねえ!?

二人で転生する時に三国志の時代に無い物は持ち込むのは止めよう、と話したじゃないですか、そんなコンビニで煙草買う位気楽に破るのは。

まあ折角司君が用意してくれたので、気持ちを受け取って装備させていただきましょう、
どうせ今回の件では使いませんし、終わったらすぐに返しますので。

作戦としては私と嵐さんの二人で中に入り商談、
いざとなった時は待機している司君が退路の確保と。

それならば司君は道士服ではなく夜間用の迷彩にすればいいような。

「そこは仲間意識を高めるためです。」

さいですか、気をつけてください。

「では、嵐さん、とりあえず奴隷商人の所まで行きましょう。」

―司―

一般人はまず近づかないであろう長安の貧民街の一角に到着しましたが、

いやあ、此処はヤバいにおいがぷんぷんしていますねえ。

まあ、此処に揉め事を持ち込むとかしないのであれば、
貧民街の人達は生きるのに必死で他人を気にしませんが。

さて、保さんと嵐さんが奴隷商人の建物に入っていきましたね、
では、私は周辺の様子確認をしたりしますか。

うーーん、暇です、あれから四半刻位たちましたが何も起きなそうです、
まあ、その方が平和で良い事なんですが。

本当は考え事なんか良くないんですが、少し暇つぶしをしましょう

それにしましても太平要術の書はありがたいですね、望めばその答えが分かるのが、
まあ今の上司に不満ある人とか涼州に来たら使えそうな人探すくらいにしか使いませんが。

今回の長安の奴隷商人が司馬朗を捕まえていたのには驚かされましたよ、
司馬八達全員を口説き落として涼州に引き込む予定でしたが有り難いことで。

私が計画して誘拐したわけではないですからいいんですが、
流石に自分がいつ実行に移した?とかつい自分を疑ってしまいまし

たよ。

マッチポンプは戦争以外ではやらないつもりなので、僕は誘拐はしませんから、
だから太平要術の書に出たリストを見た時は見間違えたかと思いましたよ。

あっ、そうそう、リストチェックの際に張角達を見つけました、旅芸人一座のガキでした、
当分先でしょうが、今後涼州に来た時に身柄を拘おうと企んでいます。

それにしても僕も保さんも真面目に働き過ぎですよ、涼州の為に働き、
この大陸の平和の為に黄巾党やら群雄割拠を何とかしようとするんですから。

どれだけの正義の味方、英雄なんだと、曹操、劉備、孫権なんか相手にならないですよ。

今日もこれから極秘裏に捕まった人間を助けに行くなんて、働き過ぎですよ、
労働基準監督署があったら助けてヘルプミーと言ってもよさそうな。

おおっと、いけませんね、こんな素敵なアイテム手元にあると、
ついつい、本筋に関係無い事を考えてしまったりしてしまうのが。

さて、もうそろそろ商談も終わるでしょうし真剣に待機していますか、
保さんならば上手くやってくれるでしょうし、私の出番はないでしょう。

ただ、世の中絶対はありませんし、戦いになったらいっそ名乗り上げましょうかね？

「愛ある限り戦いましょう。命、燃え尽きるまで。美少女仮面！ポワトリン！」

うん、これはいけませんねえ、どうしましょうか、まあいいや。

「動きありそうだぞ。」

「変な感じっす」

「そうですか、では、二人ともよろしくお願いしますよ、偽名を名乗るんですよ。」

保さん達も知らない伏兵も用意しておきましたし、有事でもなんとかなるでしょう。

一嵐一

アイツがまた変な話を持ってきた、ただ今回は救出作戦だと、

アイツにしてはまともだ、ただ、戦うのではなく買い取るというのが。

王子様が言うのも分かる、長安で揉め事は起こせないというのは、分かりたくはないが王子様が言うならば我慢するしかない。

それにしてもこの蝶の仮面はなんなんだ?正体がばれないというが実に胡散臭い!

ただ試してみたら本当らしかった、部屋に王子様とアイツがいたはずなんだが、
ふと気付くと俺の前に、アイツと蝶の仮面をした怪しい男がいた、誰だこいつは?

しかも、ムカつく事に、俺の大事な王子様の声そっくりにしゃべる偽物だったから、
つい槍で突いてしまいそうになってしまった、仮面外したら王子様だった、凄い。

とりあえずこの仮面が凄い事は分かった、夜で人が街にほとんどいないのも良い、
だが、本当に身内に分からないのだろうか、不安だ。

不安だ、奴隷商人の屋敷に入ったが、この取引が上手くいくか不安だ、
俺や王子様ならば余裕で脱出できるだろうが、騒ぎを起こさないようにするのが。

この嫌らしい笑みをしたデブな商人が変な事しなきゃいいが、周辺にいる気配だけで5人、
この建物に入ってから感じた気配で30人はいるな敵が。

30人程度ならば俺一人で皆殺しに出来るが王子様から貰った武器の蜻蛉切でないのが、
武器で身元が割れないようにと柳刃刀を渡されたが慣れてないから不安だ。

司馬なんとか言う奴は奥にいたみたいで、奥の部屋見せてもらうが、
王子様と同じくらいの歳の子が汚い部屋の中で鎖に繋がれていた、
許せない。

我慢だ、我慢、今は大人しくしないと。

うん?王子様が交渉しているが嫌な雰囲気が、王子様ヤバいぞ!!

ー司馬朗ー

お父さんの紹介で宮中で働く事になり毎日休みなく働かないといけないて辛かったが、
この前久しぶりの休みを貰えたから洛陽の街で買い物していたんだけど。

気づいたら夜で家に急いで帰らないといけないと思ったけど、

家まで遠いから近道しようと裏道通ったのが失敗だった。
失敗なんて言葉で済まないからこんな所にいる羽目になっちゃったんだけど。

怪しい5人組が「お嬢ちゃん遊ぼうぜ」なんて絡んできたから無視したが、
囲まれてしまって、知識には自信あるが体力がからっきしだからあっさり捕まって。

犯されて殺されちゃうんだ、とか覚悟していたら、
髭生やした頭っぽいのが「殺すより上玉だし売った方が良いな」って。

あんな汚らしい奴等に犯される心配はなくなったのは助かったが、
奴隷商人に売られて長安まで送られるなんて。

捕まってから二週間以上たつ昨日変な仮面をかぶった奴と太った奴隷商が来た。

私の顔を見た後仮面をかぶった奴がこの牢屋から出て行った、奴隷商が
「あのお方はお前の正体を知って気に行ったと買っていかれたぞ、よかったな。」

最悪だ、あのお方とかいう仮面の奴、顔隠していたけど洛陽で見た事ある、
たしか、今長安で領主気取りで偉そうにしている王謙とかいう宦官

だ。

去勢されている宦官が俺なんか手に入れてどうするんだろうか？
って、こんなこと考えても仕方ないんだ、明日には王謙に渡される
って。

何度も死のうと思ったが怖くて死ねなかった、でも、いざとなった
ら。

そんな事を考えていたら、また牢屋にあの男と蝶の仮面した二人組
がやってきた。

―保―

前世の日本で生きていたら決して会う事はなかったんだろうな奴隷
商人なんて、
この時代でも今回みたいな事はなければ会う事はないんだろうが。

建物に入ると、歳の頃なら４０過ぎた堅気ではない雰囲気したデブ
がやってきた。
見せ金で袋に入った金を見せたら、すぐに下卑た笑みをしやがった。

「私を選んでいただけるなんてお客様お目が高い、司隷州で一番の
奴隷商人ですから、
大きな声で言えませんが洛陽や長安でお偉方で当方を贔屓してくれ
る方も多数おりまして。」

目は笑っていないし信用は出来ない、ただ金の面で折り合いがつけば、
喜んで自分の親すら売ってくれるだろう、今回に関してはありがたくはある。

「女が欲しい、私の手元に置いておこうと思ってな。」

まずはラインナップを見せて貰う。

ろくでもないな、分かっちゃいたが、壊れている女だけで5人はいる、
嵐さんなんか我慢しているが怒りを隠し切れていない、分かるが抑えてくれ。

「俺をなめているのか！こんな女が欲しければ娼館に行くは！」

少し怒気を含め、腰の刀を抜くそぶりをしてみせる。

「滅相もございません失礼いたしました、こちらには色々な女がおりますが、
お客様は具体的にどういった女性を、ご期待に添えられると思いますが？」

安心しろ、お前さんは私の期待に添えられるのは分かっているんだよ。

「歳の頃なら15，6歳くらい、まだ男を知らない上玉をよこせ、聞いているぞ洛陽から連れてきた娘がいるだろ、あれを見せろ。」

具体的に知っている事に男は驚いている、既に王謙に売却決まっているから、
この話をどうやって断ろうか悩んでいるようだな。

奴隷商人なんてゴミだが、一度売った物を二度売りしたりしない、そういう点では商人としては信用出来るのだろうが。

「金ならあるぞ忘れたのか・・・。」

先程見せた金をデブに見せる、嵐さんに持たせた鞄の中にもまだ金があるように。

本当は金の入った袋これと併せて二つしかないんだよね、
とはいえ、この二袋であわせて金一千銭とんでもない金額ですよ。

董卓が曹操に暗殺されかけて怒って賭けた賞金と同じなんですから。

「分かりました、どうぞこちらです。」

屋敷奥の牢屋に案内される、牢屋の中には両足を鎖に繋がれた少女が此方を見ている。

「楚漢戦争期の十八王の一人である殷王司馬?の十二世孫に当たる司馬伯達だな?」

俺が正体を言い当てるとデブは驚き、娘はこちらを睨んできた、間違いないようだ。

「身元を当てられ驚くならまだしも、睨んでくる気概実に気に入った、この娘を買おう。」

さて、此処で金を払っておしまいです。

「娘の値段は金五百銭でございます。」

すさまじく吹っかけたな下手な郡の半年分だぞ、まあ足りるが。

「あとほかにですね、この娘は買い手が決まっており買主の方には娘は自害したと伝えます、
そのためお詫びであと最低でも買値の倍金一千銭を払わないと。」

な、な、なんだと、合計で金千五百銭かよ、まずい足りない。

「私どもの商売は信用第一です、お詫びするとなったらそれ相応の慰謝料を払わねば、
お客様は手持ちがあるようですのでこの価格でしたならば。」

実は一千しか持ってませんでした、他にもあるよといったお金ははったりでした、
とはいかないよなあ、さてどうするか悪知恵を。

「それにしても謎なんですよね?この娘の身元は私とあのお方しか

知らないのですから、
うちの部下共すら知らない身元をなんで貴方様は知っているのかとお尋ねしたいのですが。」

まずいね、うん、武器持ったコイツの部下が武器持って三人も入ってきやがった、
本人確認する時に調子に乗り過ぎたね、まいったねえ、こうなったら先手必勝。

縮地で間合いを一気に詰め、デブの左後ろに立っていた男に長曽禰虎徹で袈裟斬り。

まずは武器を持っている後から入ってきた部下から始末を。

「へっ・・・。」

デブが驚き間抜けな声を上げる、まあこっちが一瞬で間合いを詰めて、
牢屋に入ってきた部下を一瞬で斬ったんですから驚くのも仕方ないか。

俺の動きを見て嵐さんも普段使う蜻蛉切とは違う柳刃刀だが、
デブの右後ろに立っている一人の男を斬り伏せた。

よそ見している暇はないもう一人の武器を持った男を横胴で斬り始末する。

とりあえずこの牢屋にいる武器を持った奴は全員殺したな。

チャキッ

長曽禰虎徹の切っ先をデブの首筋にあてる。

「さあどうする？一か八かの賭けで此処で助けを呼んで俺とこいつを殺すか？
娘は自害したという事にしてこの金を受け取り何も無かった事にする、好きな方を選べ。」

まあ、答えは一つしかないんですがね、ＹＥＳか？ハイか？みたいな質問ですが。

「お、・・・それでは！？」

嵐さん私のことを王子と呼びそうになりましたが止めましたね、驚かせないで下さいよ、
こんな下種を生かしておく必要性はないですからねえ、怒りも分かりますが。

「わわわわ分かりました」

デブがゆっくりと懐から司馬朗の足かせの鍵を取り出す、多分コイツちびってるね。

「嵐さんコイツを任せた。」

そう言ってデブから受け取った鍵で少女の足かせを外す。

「君を助けに来た、今はまだ名乗れないが勘弁してくれ。」

少女を見ると驚いて呆けている、仕方ないですかね。

牢屋に閉じ込められていたら客が来て自分が売られると商談になって、
しかも今度はそこで刃傷沙汰になり一瞬で三人が殺されるなんて流れじゃ。

「もしもーし、もしもーーーし」

返事が無いただの屍のようだ、いや死んではいないか、とはいえ何だろう、
驚きのあまり瞳孔開いていないか?それを世間では死んでいるというか。

って、あかーーん、って、良かった息をしている。

外が騒がしいようです、司達が突入してきたのかな?
警戒しておきますが問題が無いようなら彼女を連れて帰りましょう。

ドタドタドタ、誰かがこっちに向かって走ってくる、武器を構える。

「大丈夫か?フェイスマン、エンジェル。」

司くーん、なんで君は敵のいる屋敷に突撃してきて名前で呼べないからとはいえ仲間をフェイスマンとエンジェル呼ばわりなんだ？

嵐さんがいきなり出てきた司に混乱しているよ。

「では、お前はハンニバルなのか？」

特攻野郎Aチームは嫌いではないが少し乗った野郎、本当は頭が痛いが。

「いや俺はハウリングマッド、今庭ではハンニバルとB．Aが戦っている。」

日本語吹き替え版ではなく原作での呼び名かよ、ハウリングマッドって何人が分かる？

せめてクレイジーモンキーといえ日本人の為に。

って、ハンニバルとB．Aって誰だ？

「とりあえずリンチ大佐は捕えたんだな？」

普段人の心を読んでコメントとするくせに今回は無視で、しかも特攻野郎Aチームネタを続けるか、何でこんなにこだわるんだ。

「とりあえず人質は救出、ターゲットは確保した、さてこれからどうするよ。」

良い笑顔したぞ司が、たいていろくでもない事なんだよな。

プシュプシュッ

くぐもった音が連続して響く、デブの胸が真っ赤に血で染まる。

ＭＰ５ＳＤ３で奴隷商を射殺する司

「邪魔者は消えました奴隷たちは全員大谷商会にいったん避難させましょう、
こういう時の為に店は極秘裏に裏門を開けさせております。」

相変わらず用意が良い事で、って、なんか忘れているような？

「コイツの言う通りやるとして、捕まった人連れて逃げられるのか捕まらないか？」

嵐さんの言うとおりで何処まで考えてあるのかな？

「あっ、途中で見つけた金がありますので、陽動部隊で僕がこれを街にばら撒きましょう、
こんな時間ですがここの人達は必死で金集めに夢中になりますよ、
後は油と蝋燭と。」

ＯＫＯＫ、燃やすのね。

「保さんには前に教えた、油に船浮かべる時限装置で此処が燃えるようにしてください、

それでハンニバルとB．Aが引き連れてきた小隊長達と共に女を避難させて。」

本当に良くやるよコイツは俺に隠して部隊動かしたり、準備時間が無い急きょな作戦を何とか出来るようにするんだから。

Aチームにやけに拘るのだけは理解できないが。

とりあえず目標達成しました撤退するぞ、派手に燃えるように発火装置を仕掛けましょう。

あっ、大事な事を思い出した、虎徹を帯びているのならば「今宵の虎徹は血に餓えている」
この決め台詞を言うのを忘れていたんだな、しまった。

―日、光―

「阿、・・・、ハンニなんとかは何人っすか、自分は9人っす」

「11名だ」

「先行ったハウリンなんとかが3人だから、もうすぐで終わっるっす。」

「そうか」

「敵を斬りまくっているッす、でも、見せ場が無いような気がする

っす」

「そうだな。」

結局保にハンニバル、Ｂ．Ａの正体が二人だと気づかれることなく、しかも、
二人の予想通り殺陣などがあるわけでなく見せ場は特にないまま終わるのだった。

ー和ー

キュピーーーーン

今日も来ました、長安の方角から何かを感じました！

保君を狙う敵が増えたような気がしました、前に保が言ってました、“イベントでフラグが立つ”とかいうのですね“イベント”とかいうのがあったんですね。

では、今日こそ

「長安にいる董孟高将軍に危機が迫っているようです、確認の為太守である私自ら長安に向かい対処します。」

私が宣言すると玉座の間が騒然となり、皆が一斉に立ちふさがってくるなんて。

「おいっ、和を止めろ、保様、司様に顔見せできなくなるぞ！」

「牡丹じゃ、和ちゃん止めるのは無理だよー」

「お前、ほら月も止めているん・・・へブシャアアアアア」

「へううう、お父様が・・・・。」

今日も涼州は平和です・・・・。

第二十七話、欲しい者はどうやっても欲しい！（後書き）

とりあえず相変わらずオリジナルキャラだらけで、
恋姫原作キャラがほとんど出てこない話です、
それなのに司馬朗なんて出してしまうなんて。

桂花に「馬鹿なの、死ぬの」くらい罵られてしまいそう。

皆様のご意見ご感想お待ちしております。

第二十八話、司馬伯達調略作戦（前書き）

キャラの性格はほぼそのまんまで私や友人を出したらどうなるか、そんなことを考えながらホテルニューオー〇ニでお茶していたあの日。

まさか、もうすぐ三十話というところまで書くことになるとは。

ちなみに主人公の名字大谷はホテルニューオー〇ニから、司の上尾は打ち合わせ相手が上尾から来た人だったから、まんまです。

さて、今日のお話も皆さんからしたら半端でしょうが、よろしくおねがいします。

第二十八話、司馬伯達調略作戦

―保―

どうしてこうなった？いや当然なのか？

「被告、董孟高、李文優、二人共申し開きはありますか？」

薊さんが全く笑っていない、いや笑う要素無いんだが。

はい、意義なんか有りません、言える訳ありません。

こうなったら弁護人の百合さんに期待するしかない。

「今回の作戦は太守代理である李粛様に極秘で行われたのは問題ですが、
弁護人としましては今回司馬伯達様の救出という緊急性、
また董孟高様達が望むべき戦闘でなく、あくまでも自己防衛だった点を。」

よしいいぞ、百合さん、そこだイケっ！！

「更に死傷者や金銭的な面で涼州軍への被害が皆無という点、
しかも、長安の街では事件は仲間割れのせいと噂されております、
また、救出された司馬伯達様当人からも寛大な処置をと。」

この弁護人優秀すぎるぞ、いいぞー、行け行け百合さん、
これならば無罪は無理でも情状酌量で執行猶予は確定だ！

「検察側の意見はありますか？」

よし検事は誰だ？ボンクラだ勝てるぞ、勝った第三部完だ！

「検事の李？っす、孟高と文優の悪い所を言えばいいっすか？」

これは絶対に勝つ、こんな裁判制度分かっていないポンコツ相手なら。

「あん時急いで逃げるの分かったっすが、燃やさなくても平気だったっす。」

ヤバイ馬鹿がまともな事を言っている。

あの火事は逃げる際の陽動だから仕方ないやん、って、駄目やね、
流石に派手に燃やしすぎた長安の貧民街の半分焼失したし。

幸いなことに死者０だったのは不幸中の幸いです、
書類上いる人間が無事で無戸籍の人間が死んだなんて落ちはないよな？

中国ならば普通にあり得てしまいそうで怖っ。

「説明無しでいきなり自分や亜多、小隊長を呼び出して戦闘は無茶っす。」

むう、緊急だから仕方ないんだって。

「一番酷いのは自分や亜多頑張ったのに気づいてなかったっす、出番が全然無いなんて酷いっす、一番の激戦地だったっす。」

そんなメタな理由が許されるのか?文句は作者にだろ。

「頑張ったんですね、日さんも光さんも・・・ウウッ。」

あれっ!?薊さんが泣いているような?って、そんなふざけた理由で有罪は・・・。

「判決を下します、被告董孟高、李文優の二人は死刑!」

そんな理不尽なーーーー!!!!!!!

「という夢を見たんだが、保さん。」

夢の話かよ!

「司君、薊さん達の取り調べを受けている最中に何でそんな余裕な

の？」

「ケセラセラ？」

なるようになるさって、そういう問題ではないような？

取り調べくらいは真面目に受けようよ、司君。

数刻後

とりあえず、前回は奴隷商人との取引のつもりでしたが・・・。

「ついうっかり？気づいたらなんですが奴隷商人一味を３７５６４、長安の一角を焼け野原にしちゃった、てへっ、うっかり、うっかり。」

取り調べで、それで済まそうとする司君の肝の太さにびびらされましたよ、

私的な部隊の利用やら暴走と言われても仕方ないのにあれは。

逃げる為にですが奴隷商人の金を奪ってばらまいて火をつけた、

鬼平いたらおしまいだったよな、火付けに押し込みって一発アウトだよ。

あと、司の野郎、三国志世界を壊さないようにするため、

自分達が開発した以外は未来兵器使用禁止って約束していたのに。

あっさり前回奴隷商人射殺しているし、それは駄目だろって注意したら、

「人が作った規則ならば、それは押し付けのエゴにしかすぎない！」

良い事を言っているみたいな感じでドヤ顔していたが、
その決まりを作ったのは私であり司くん本人なんだが！？

まあ、そんな事言ったら、「僕が作ったなら僕が破って何が悪い！」
多分、こんな感じで普通に呼吸するようにコメントしてくるよ。

ちなみに薊さん、百合さんの取り調べは司馬朗さんが寝込んでいるので、
当人が回復するまでは取り調べはストップとなりました。

とりあえずその司馬朗さんは救助した後ここ三日間ずっと寝たままです、
たまに魘されて叫んでいたりするようで、どれ程辛い監禁生活をされていたのか。

先程目を覚ましたと報告がきたので、お風呂に入ってもらって、
その間に着替えと食事を用意させることにしましたよ。

今回の件で洛陽に向けての出発が一週間以上遅れますがやむを得ないと、
司馬八達の一人と、官宦や何進達宮廷工作なら前者の方が大事ですから。

お風呂から戻ってきた着替えた司馬朗さんは可愛かった、
歳は私と変わらないくらいか？茶色い瞳のクリクリッとした目、
あと赤身がかった茶髪を両サイドでポニーテールにしているのが特徴的で。

監禁生活の影響で食事も満足でなかったろうに若干頬が痩けているが、
とはいえ、それでも可愛らしい女性？いや、可愛らしい女の子だなと。

司馬朗さんへの食事は胃に負担がかからないようにお粥や麺類、果物とかを用意して、
胃腸の調子に問題なければガッツリ食べてもらえるようにしましょう。

「なんでこんなにしてくれるんですか、助けてくれただけでなく。」

司馬朗さんは私達涼州の歓待ぶりに驚いていますね、まあ、当然か、
普通は見知らぬ他人の為に命懸けたり歓待はしませんからねえ。

「話は置いておいて食事を、三日三晩寝ていたからお腹がすかれたでしょう？」

いやあ、大変気持ちの良い食べっぷりで、あれだけ食べてもらえたなら、
料理人達も満足でしょう、当初用意した病人食どころか、
私達が食べるような食事も食べ足りないとがっつかれましたよ。

私と同じくらいで１６０ｃｍ無い小さな体の何処に消えるのでしょうか？
病み上がりに酢豚や麻婆豆腐をがっつく人始めてみましたよ。

まあ、明日胃カメラだから食事禁止ねと言われていたの忘れて、
寿司屋で寿司に日本酒三昧をやって医者に説教食らったり、
胃カメラ飲んだ後一時間は飲食禁止と言われていきなりカツ丼、
こういった事を普通にやらかしていた私が言うのもなんですが。

食後のお茶も終え、司馬朗さんが落ち着いたようなので話をしましょうと。

太平妖術の書で知ったというのは私と司だけの秘密なので、
涼州の人材確保の為洛陽で評判の人物として前々から調べていた、
先月から行方不明となったので探らせていて偶然見つけたと話を。

「司馬家の人間として育てられ人よりは優秀という自負はありましたが、
私のような小役人に何故そこまで、危険をおかしてまで。」

史実で伝えられる司馬朗よりは若干自信家のようですね、
とはいえ、涼州の厚遇ぶりに何故と疑問を持つほどには謙虚と。

どう答えましょうかねえ?照れ臭いですが熱い答えがいいでしょう、司君も情熱的に熱く口説きなさいといってきましたし。

さすがに歴史が証明しているからお前ん家優秀じゃん、とは言えませんしねえ。

―司―

「董孟高将軍、司馬伯達殿との会話の前に大事な事をすべきではないでしょうか?」

とりあえずこれから保さんが口説きにいく前に堅さを取り除かないと。

「どういったことですかね李文優殿?」

保さんは僕の言葉の意味を読みかねているようで聞いてきましたね。

「なあに簡単な事ですよ、此方の自己紹介をしましょうよ、こちらだけ司馬殿の名前を知っていては不公平でしょう、ふふふ。」

「そりゃそうだ、これは失礼しました司馬伯達殿。」

僕が笑ったら、それにつられて保さんも笑っていますね。

「私は涼州太守董君雅の第一子で姓は董、名は擢、字は孟高と申し

ます。」

「僕は涼州軍軍師で姓は李、名は儒、字は文優です。」

「俺は董擢将軍の護衛で?融だ。」

「私は涼州太守代理洛陽駐留大使、姓は李、名は粛、字はありません。」

「私は李粛様付き軍師をさせてもらっております、姓は審、名は配、字は正南と申します。」

「将軍の郭?阿多だ。」

「阿多と一緒で将軍の李?稚然っす。」

「えっ・・・・・・!?」

地位を気にせず順番も気にせず気楽に自己紹介をしましたが、どうやら司馬朗さんはこちらの正体に驚いている模様ですね。

太守代理に将軍、軍師と大物が集団でいるとは思いませんよね、僕が司馬朗さんの立場ならば、何これドッキリ?と思うでしょうなあ。

「申し遅れました、私は洛陽で役人をさせていただいておりました姓は司馬、名は朗、
字は伯達と申します、名乗り遅れた無礼誠に申し訳ございませんで

した。」

とりあえずお互いの自己紹介は終わりましたので、これからの事とかを話しましょう。

「伯達さんを僕達が救出をしたわけですが、何故このような事態に。」

敢えて聞かないでも知っているんですが念のため本人の口から言わせましょう、
それでいかに此方が頑張ったのか恩にきせてしまいましょう。

まあ、予想通りで司馬朗さんは洛陽で拉致されて危うく売られるところだったと。

「翌日に私は引き渡されると言われ絶望していたところを助けられました。」

そんなピンチに僕達は颯爽と駆けつけて名乗る事もなく助け出し、
しかも、寝食の世話までしていると、此処までやれば平気でしょうが、
借りはそれだけでない事を教えて差し上げましょ、ふふふ。

「あっ、そうだそうだ此処にいる皆に大事な事を伝え忘れました、
特に司馬伯達さんのお話に関する事で大事な連絡となりますが。」

あまりに私の思い出したふりとか言い方がわざとらしいですが、まあ平気でしょう、

大事なのは演技ではなく私が今から伝える事なのですが。

「今回世間では奴隷商人と一味３３名は同士討ちと謎の火事により全員死亡となってます、
それで今回の関係者で唯一此処で名前が挙がっていない男についてなんですが。」

これだけ言うと司馬朗さんがピクッと反応しましたね、まあ、
身元や顔を隠していたようですが直接会って知っているわけですから。

「今回の事件で諜報部が必死で調べましたところ買主は王謙と分かったのですが、
僕達では手が届かなくなってしまったという事態が。」

保さんや嵐さん以外室内の人間全員が驚いている。

司馬朗さんが明らかに動揺している、逃げられたと思ったからでしょう、
皆は買主が長安の実質的な主である王謙と大物の名が出た事に。

「ご安心を、奴が逃げたとかではなく、王謙に関する資料を送らせていただきまして、
先程ですが王謙は汚職、横領の容疑で処刑となりました。」

あのような小物を殺す為に兵を動かすのはもったいないので、
私達がまとめていた資料が彼のライバルの手元に届いていると。

そのライバルも綺麗な人間ではないですが、御しやすそうな小物なので、
将来の長安を併合するまでは上手く使わせていただきましょう。
って、長安の吸収は保さんしか知らない極秘事項でしたね、
いけませんね気をつけないとついポロっと喋ってしまいそうです。

「今回の騒動に関して司馬伯達様に害をなそうとした者達は全て冥土に、
あっ、洛陽にいた拉致したゴロツキ共は洛陽に着き次第捜索し処刑予定です。」

ふふふ、司馬朗さん、此方がここまでやることに驚いていると言いますか、
何でそこまでと疑問でしょうねえ、まあ、私と保さんだから出来るのですが。

「何故そこまでとお思いでしょう司馬伯達様、説明は僕から、
いや、救出計画責任者の保さんから説明した方が良いでしょう。」

あくまでも保さんがＯＫ出さなければ実行されない作戦ですからねえ。

熱烈に口説いてくださいよお、将来の司馬八達とか引き込みの為に。

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しいからです、

貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

「「「「「「ブッ！！！！！」」」」」」

保さん以外全員噴き出したよ、保さん情熱的に口説けといったが、それは直接的過ぎて駄目だろう、仕官を求めているではなく女を求めているみたいだぞ。

「あうあうあう」

司馬朗さん顔真っ赤にして固まっちゃったよ。

「よろしいでしょうか？」

保さん空気を読んで！話をちゃっちゃ進めないで！今、この部屋の空気は変なのよ！

「董孟高様も天然なのか、凄い事を言われますはねえ。」

「保さんも大きくなられたんですねえ、羨ましい限りで。」

母さんに百合さんとか桃色空間の空気に飲み込まれているよ、はあ、なんだかなあ。

おっ、あがっていた当人が復活した。

「な、なんでまた私をほし、ひ、必要とされるのですか？」

復活しきれていないね司馬朗さん、仕方ない。

「保さん堅い口調ではなく、いつもの口調でいきましょうよ、さっきの言葉もあれじゃ説明が舌足らずで閨に誘っているみたいじゃないですか。」

保さんもアッ、っていう感じで情熱的にと言ったが、あれは熱すぎるだろ。

「そっかそっか、じゃあ、司馬伯達殿、呼び方は伯達さんで良いですか？」

一気に砕けたなあ、まあ保さんらしくていいんだが、こっちの方が。

「私の命を助けていただいた恩人であられる董孟高様に恐れ多いです、

私の真名は桜花（おうか）です、桜花と呼び捨てていただいて結構です。」

おっ、真名を預けた、そうすると保さんも真名預けるから、

司馬朗さんまた恐れ多いとか言いださないかな？

「貴重な真名をありがとうございます大事に預からせていただきます、

では、私も真名を預けますね、保と呼んでください桜花さん。」

保さんが気楽に真名を預けてしまったから桜花さん困っているやん、

保さんらしいな、そういうところは。

それにしても保さんのあの発言で、雷さんと光が寂しそうにするとは、
まあ雷さんは分かるが、光がねえ、面白いもんだ。
前回忘れ去られていた事にショック受けているのか、
今回の言葉に重ね合わせて、だとしたらすこしだけごめん。
平気よ捨てないから、保さんの肉の壁だからとか言ったら冗談でもヤバいかな？

―桜花―

奴隷商に捕まりもう駄目だと覚悟を決めていたら、いきなり表れて敵を倒し、
それだけならまだしも更に私の寝食の世話までしていただけるなんて。
正体を明かされたが涼州の太守子息の董擢様に、太守代理の李粛様と洛陽の小役人にしか過ぎない私なんかより遥かに偉い人たちがなんで？
命がけで私を助け、世話までしてくれるのかと思っていたら。

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しいからです、
貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

いきなり私が欲しいと言われるなんて男の人に口説かれた事ないから驚いてしまって、
どうすればいいのか分からず混乱してしまいました。

李儒さんと名乗られた方が言うには、そういう意味では内容で安心しました。

でも、何故か分かりませんがそう言われて少しさみしい気持ちがありました。

命の恩人でありますし私の真名桜花を預けさせていただきましたが、董擢様は笑いながらあっさりと保という真名を私なんかに預けてきて。

その時の笑顔を見て可愛いと思えてしまった。

「涼州は常に有能な人材を求めていて、桜花さんからしたら薄気味悪いかもしれませんが、
私達は桜花さんの智謀、人柄が優れている点をよく知ってます。」

だから、あの時司馬？の十二世孫と私の事を知っていたんでしょうが。

「そこまで言われるのはとても嬉しいですが、私位でしたら他に幾らでも。」

謙遜ではなく思った事を。

「「おいいいいーーー！！！」」

驚いた、保さんと司さんが同時に叫んで突っ込んできた。

「いやいや桜花さん程の人間が幾らもいるなら大陸に千年帝国が出来てますよ。」

千年帝国ですか、そこまで言われるなんて。

「桜花さん以外の司馬家の皆さんの優秀さもよく知っております、桜花さんを含め姉妹が世間では司馬八達と呼ばれる程の智に優れた姉妹と、
さらに桜花さんの叔母上にあたる司馬徳操さんの教育者としての優秀さも。」

私の事を知っているんだから知っていてもおかしくないんですが、司馬八達ってこれも知り合いが言い始めただけでまだ知られていないですし、
おばさんのことも詳しく知っているなんて。

「桜花さん、そして姉妹の皆様に涼州の未来の為に是非来ていただきたいんです、
そして人材育成の点で徳操さんにも協力していただきたいんです。」

私だけではなく一族全員欲しいんですか欲張りなんですね、
私だけでないというのがちょっと寂しいと感じてしまったんですが。

「なんで私の一族なんですか？」

「漢は近いうちに消滅します、大陸の為に涼州は益州等周辺を併合し独立します、
その為に必要な人材を確保したいんですよ、優秀な政治家である桜花さん姉妹を。」

漢が消滅するって何を言っているんですか。

「漢が消滅するなんて、それにそんな事誰かに聞かれたら!?」

「放っておいても漢は消滅しますよ、まあ私達がとどめを刺しに行くですが。
そんな事はどうでもいいんです、将来の人材確保の為子供達の教育をしております、
その時に教育者の一人として徳操さんの協力をお願いしたいんです。」

漢王朝消滅がどうでもいいって扱いなのが、って、とどめを刺しにいく、
って何を言っているんでしょうか保さん達は。

もしかしたら私は奴隷商人の手からは助けてもらえましたが、
とんでもない人に助けられてしまったのか、大丈夫でしょうか・・・・?

野犬から助けてくれたのが猛虎の群れなんて。

それにしても攫われたなんて言っても洛陽の人達信じてくれるかな?

今から帰っても一か月以上の無断休職扱いで席無いんだろうな。
仕方ない、仕事がもらえるんならば、この虎の穴に飛び込んでみますか、
それにちょっといいかな保さんも、なんてね。

―嵐―

王子様が決めた事に従うと俺は決めていたけど、

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しいからです、
貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

王子様がそういった時に俺は凄く苦しかった、なんだろうこの嫌な感じ。

俺にはよくわかんないから聞いちゃだめなんだろうが王子様に素直に聞いてみよう。

―光―

「司馬伯達殿、今回このような手段をとったのも私は貴女が欲しいからです、
貴女が手に入るのならば私はどれ程の犠牲も払いましょう。」

孟高も思いっきり言ったっす、それにしてもどれ程の犠牲ってこの前の俺とかっすか。

だとしたらキツイっす、自分は消耗品っすか？

終わった後で文優が気持ち察してくれたっす、話しかけてきたッす

「日さんも光さんも使い捨てなんかじゃないですよ。」

文優は意外と優しいっす、見直したっす。

「肉の盾でい続けてもらわないと」

やはり文優は酷いっす。

第二十八話、司馬伯達調略作戦（後書き）

うーん、連休中出掛けたりしながらも空いた時間で、
三国志を見直し続けるが本当に張飛ってトラブルメーカーだなと。

あれを見る度にどんどん鈴々が嫌いになる私がいます。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第二十九話、長安での紙芝居と妹の愛（前書き）

今日はいつもより短めでございます。

話を進めるよりも、紙芝居とか歪んだ昔話を考えるのが楽しくて。

考えるも何も脳が昔から閃いているんですよね、病気ですよ。

さて、今日は紙芝居と、司馬家のお話で。

第二十九話、長安での紙芝居と妹の愛

―保―

おかしい、既に洛陽に着いているはずなのに、私は何故未だに長安にいるのだ！？

何故、私は未だに長安にいるんだ？大事な事なので二回言いました。

しかも、何故子供達の玩具にされているんだ！？

「紙芝居のにーちゃん紙芝居をやってくれよー！」

「おにいちゃんは私と愛憎劇おままごとするんだ。」

「じゃあ、わたしも愛憎劇おままごとがいい、愛人役やる。」

「にいさんとは十七歩をやるんだ！」

完全に私は子供の玩具やね、愛憎劇おままごとは疲れるからやりたくない、

おままごとに「この泥棒猫」とか料理にタワシ出されるとか。

「お前ら絶対にごきげんよう次にやってるドラマ見ているだろ！」

と何度叫んだことか、子供の遊びなのに荒みすぎているよ。

十七歩って多分司が広めたカイジの影響だろうが、ガキに余計なもんを教えやがって。

どうしてこうなったかと言うと前々回の騒動で逃走の際に火を放ったら、
まあ、貧民街を派手に焼いてしまいまして、勿論世間では犯人は謎のままですが、
やり過ぎた罰として連日の炊き出しやら遊んであげるといった慈善活動を。

それで大谷商会等の出資で長安臨時保育園をやりはじめたと、
孤児は洛陽に行く際に引き連れて将来の部下になってもらいましょう。

ちなみに司君は桜花さん混ぜて今、むこうでおままごとやっていますよ。

「あなた、今日もお義母様が・・・。」

「俺は仕事で疲れているんだ、それにお袋の事はお前に任せているだろ。」

「みち子さーーん、みち子さーーん、部屋に・・・」

なんであんなリアルなおままごとなんだ、夢が無さすぎるだろ、
まさか桜花さんが司とセットであのおままごとを楽しんでいるなんて。

桜花さんは常識人だと期待していたのに、ないは・・・。

愛憎劇おままごとや十七歩とかは嫌なので仕方ない、紙芝居でもやってあげますか。

「昨日やった或負巣（あるぶす）の少女廃児（はいじ）の続きだよー。」

当て字が嫌すぎます、ある地域の負け犬な駄目人間になりかねません。

「やったー、廃児と苦羅羅（くらら）はどうなるんだー！」

やはり日本で人気あった物はこの時代の子供達にも人気です、ただ、苦羅羅の字も何とかしてほしいです、苦行僧みたいな当て字は。

四半刻後

「“苦羅羅の意気地無しー！”廃児は苦羅羅を車椅子から突き飛ばします。」

さあ、この話のラストです、一番盛り上がるところです。

「苦羅羅頑張れー！」

涼州も長安も同じで子供達は紙芝居大好きです、さあ感動のエンデ

ィングです。

「なんと苦羅羅がゆっくりとですが、震えながらも立ち上がったのです。」

「「「「「やったー！立ったー！」」」」」

子供達だけでなく一緒に見ていた大人達も大喜びです続きがあるのに。

「“奇跡だ”苦羅羅が立てない事を知っていた街の人は沸き上がります、
廃児は“苦羅羅が、苦羅が羅立った、教祖様のありがたいお力で。”
“俺のお袋の目の病も教祖様に”“うちもだ！”至る所で教祖様の奇跡が称えられます。」

紙芝居を聞いている子供たちだけでなく、大人達も動揺しはじめているようで。

「“二度と立ち上がれないと医者に見放された私が、
今こうして立ち上がれたのは平田亜（ぺーたー）様のおかげ”
この一言で奇跡の人、聖者平田亜と呼ばれ教団は大きくなるのでした。」

福本作品みたいにザワザワしていますね、まだ続きがあるんですが。

「医は無力なのか、いや、五斗米道ならば・・・！！」

やけに暑苦しいやかましい喋りをする子がいますね、
ただ、この時代にしてはヴェとかの発音が素晴らしいですが。

「その晩、屋敷にて平田亜に足蹴にされる苦羅羅の姿が、
“てめえは演技一つも満足に出来ないのか愚図が！！演技する位しか能が無いんだろ、
とりあえず廃児、この街で一通り信者も増えたし稼いだら次に行くぞ。”」

うん、凄い絵だね、ペーターに足蹴にされるクララって、
可愛らしいあの絵で描いてあるが地獄絵図だね。

ザワザワ言うだけでなく観客の顔がみんな福本作品キャラみたいになっているよ。

「そうです、奇跡など無かったのです全てお芝居だったのです、
しかし、騙された事に気づかない村人達は幸せそうにしていました、
奇跡には種があり、知らない方が幸せな人生を歩めるのが世の中でした、おしまい。」

実に酷い、うん、酷いねえ、よくこんな話がかけるな私。

私は子供劇場作品でもフランダースの犬を観ると泣き出すくらいなのに、

母を訪ねて三千里やらアルプスの少女ハイジは普通に汚せるって、一体どういう育ちをすればこんな酷い話が普通に思い付くのでしょうか。

パチパチパチパチ

おっ、こんな話でしたが至る所で拍手が起こっています。

「こんな深い話だとは、感動しました、最初は子供騙し程度だと思っていたら。」

天下の司馬八達の一人が感動しているよ、マジでっ！？

「宗教は毒なんだな！と改めて気づかされました、あっ、失礼しました、
私は張魯と申しまして、流れの医者で長安に立ち寄ったら何やら楽しげな催しがと。」

うん、気のせいだ、此処に五斗米道の張魯がいるわけないし、
宗教を否定するような事とか絶対に言うわけないから、うん、別人だよ。

「董孟高様、今回の話は些か子供向けの話ではないかと思われますが。」

多分、百合さんの発言が感想の中で一番まともなんだろうが、
百合さんが一番空気を読めていない人に思えてしまうのは何故だろ

う。

とはいえ、紙芝居をやったり、遊んであげたりする事で、
ちびっ子達に人気になるのも悪くはないですな。

―司―

う～ん、保さんの紙芝居は大陸中何処に行っても子供達に大人気だな。

羨ましい、実に羨ましい、僕も紙芝居で子供人気で対抗したいが、
僕の紙芝居も子供に人気なのに保さんに見られると殴られたりするのが。

保さん友人として先輩としていい人なんだが、たまに暴力的なのがいけないよなあ、
保さんはもう少し気が長い方がいいのに！後輩の私が苦言を呈さないと。

夜に保さん達と話をするから明日の紙芝居について打ち合わせしましょう、
その際にお互い作品の方向性違うが尊重して暴力はやめようと提案をしましょう。

今回候補にしているのが保さんも大好きなＳＡＷシリーズにしよう

かと、
あのシリーズはいつも保さんと映画館で観て笑って、その後は焼肉にしていますし。

そういえば、作者の母親なんか作者の姉がお腹の中にいる時に父とデートで、
エクソシストを見に行って婆ちゃんにボロクソに怒られたなんて事があったそうで。

話がそれましたね、さて保さんの暴力頼みをどう無くすか考えないと、そうだ！
桜花さんが手紙の件で相談あるという事なので、説得を手伝ってもらいましょう。

桜花さんに出来たての新作紙芝居ＳＡＷを見てもらいましょう、
そうすればこれは良い作品だと押してもらえるでしょうし。

―桜花―

お父さんへ

お父さんは既に伝令の使者の人から話を聞いていると思いますが、
洛陽で誘拐されてしまいましたが運良く助けられまして今は無事です。

お父さん心配掛けてごめんなさい。

今、涼州太守のご子息である董擢様一行に助けられて、皆さんのお世話になってます。

ちょっと変わっている所もありますが、皆凄くいい人です。

すぐにでも洛陽に帰って皆に早く会いたいですが、
一人で戻るのは危ないからと涼州の皆さんと一緒に洛陽に向かいます。

早くお父さんや梅花ちゃん達に会いたいです、もうすぐ帰りますので待っていてください。

追伸

洛陽に戻りましたら、お父さん達に董擢様を紹介します。

「これでよしと、では保さんこの手紙も一緒にお願い出来ますか？」

私は保さんに許可をもらって一足先に洛陽に向かう方に、
仕事に関する書類と一緒に家に手紙を届けてもらうことに。

「桜花さんわざわざ書いた手紙を見せないでいいですよ、
人質じゃないんですから手紙の検閲なんかしませんから。」

私が渡した手紙を見て保さんが言ってくる。

「いえ、私も涼州で働くと決めたとはいえ、やはりまだ所属は洛陽での人間ですから、
他所の人間ですからケジメとしてキチンとやらないと。」
普通はこういう事はうるさいと思うんですけどねえ？

「真面目ですねえ桜花さんは、それにしても手紙があっさりしてますね、
拐われた、助けられた、と物凄い波瀾万丈で手紙書ききれなそうなのに。」

司さんが手紙の話に加わってくる、それにしても司さん、
顔の左側が腫れていて鼻血が出た跡がそのままでいて怖いんですけど。

曹？とかいう紙芝居をやりたいと司さんが保さんに話しかけたら、
保さんが「あんな物やれるか！どんだけ人の死を見せたい」と司さんを殴り始めたのが。

保さんが乱暴なのを注意したいと司さんが此処に来る前に言っていたから、
これはいけないと思い注意しようとしたんですが、絵を見てやめました。

カラクリ仕掛けの罠を突破しないと殺されてしまうというお話は画期的で面白いんですが、
流石に子供達に読んであげるには無理があり過ぎるような。

話を戻しましょう。

「手紙を書こうにも書き始めたら長くなりすぎてしまいますから、それにもうすぐ会えるので今ここで書かないでも。」

手紙に書ききれるような量ではないですから、私もあんな経験をするとは。

「あっ、そうだ、保さんを紹介したいって追伸で書いてましたけど、お父さんである司馬防さんが男連れて来ると勘違いして怒るとかはないんですか？」

司さんも軍師だからか想像力が豊富なのか、お父さんは私を可愛がってくれてますが、
そんな意味深に解釈する事はないですよ、それに隠す方が怒るでしょうし。

多分、勘違いとか起こるのならば。

「お父さんよりも梅花ちゃんの方が、あっ、妹の仲達のことです。」

まあ、大した事はないですけどね、普段はしっかりしているのに、家族だけだとお姉ちゃんな私に頼りっきりなんですけどね。

「たいしたことないですよ普段しっかりしているんだけど私にちょっと甘えるくらいだけで、
お風呂入っていると途中から入ってきたり、寝ている布団に入ってきて抱きついてきたり、

ふざけて接吻してきたりするくらいだけで、子供っぽいだけで。」

「「えっ？」」

あれ、なんか反応が変ですねえ、気のせいでしょうか。

「梅花ちゃんはちょっと人見知りが激しいのか人と話していると私のお姉ちゃんを取るな！
と言って武器持って相手を追いかけまわすくらいだけの普通の子でちょっと甘えん坊な。」

まあ、甘えん坊なだけで普通の女の子ですよ。

「「「えええええっ？」」」

部屋の隅にいた嵐さんまで、そんな驚く事ですか？

「そんな驚く事ですか普通ですよ皆さん大げさに驚きですよ、梅花ちゃんは１５歳にしてはちょっと甘えん坊なだけですよ。」

「「「ちょっとまったーーー！！！！」」」

全くどうされたのでしょうか？

「桜花さん、十五歳ってもっと分別ある年齢ですよ、私の一歳上ですよ！？」

保さんは１４歳とは思えないような落ち着きがあったりするんですが、
お父さんよりも年上に見えてしまうんですが。

「そんなお姉さんが人と話しているだけで武器持って追いかけまわすって危険すぎるでしょ。」

危険すぎるって梅花ちゃんの事をひどく言い過ぎです！

「俺も甘えん坊とか言われたりしたが、そんなひどくないぞ。」

男っぽい嵐さんが甘えるんですか予想がつきませんね、
何故か分からないですが保さんが照れていたのは何故でしょうか？

「梅花ちゃんは甘えん坊な普通の子です！！！！」

お姉さんとして梅花ちゃんを守ってあげないと。

「「「絶対無い！！！！！」」」

そんなに三名揃って声を合わせて否定しないでも。

「お風呂入ってきたり、布団に忍び込むって桜花さんを襲う気満々でしょ！？」

保さん、そんなあり得ないです。

「どうみても肉食獣が獲物として狙っているところでしょ。」

司さんまでなんてこというんですか。

「俺だったら貞操の危機を察して家からすぐに逃げ出しているぞ！」

まるで梅花ちゃんが私に襲いかかろうとしているみたいじゃないですか、

単なる家族愛なだけですし、みなさん何を言っているのでしょうか？

「皆で梅花ちゃんの事を言い過ぎです、ならば洛陽で皆に紹介しますから、

そうすればすぐに梅花ちゃんが普通の子だと分かりますから。」

こう言ってみなさんに納得してもらいました。

とはいえ何か引っかかるようでして、保さんなんか。

「やはり涼州はネタな人しかいないのか、常識人が欲しい。」

なんでしょうか？

第二十九話、長安での紙芝居と妹の愛（後書き）

ＳＡＷを観て焼肉は司のモデルとなった友人といつもやっていた実話です、
ええっ、普通に話していますが元同僚達はドン引きしてましたね。

ＳＡＷは観ると馬鹿だなーと笑えるギャグにしかみないんですがねえ。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第三十話、洛陽到着前も後も色々ありました。（前書き）

タイトルまんまで涼州軍団が洛陽に着いたはいいが、というお話を書いてみましたが。

元から表現力ないですが、半端な内容ですいません。

最初から謝っておきます、すいませんでした。

第三十話、洛陽到着前も後も色々ありました。

―保―

「「は～～るばる来たぜ洛陽～～あ～らゆるトラブル乗り越えて～～♪」」

函館の女の替え歌を大音量で歌いながら登場とご機嫌な私と司です。

「わざわざ歌わないでください、しかも突然。」

あらっ、桜花さんに突っ込まれましたよ、私達の苦労を知らないんですかねえ？

その原因の一人であるというのにねえ。

「保さん悩んだんですよ、洛陽よー私は帰ってきたー！と。」

それもいいな、ただ、どちらにしても桜花さんに怒られそう。

「ガトーは格好良いなあ、でもただ叫ぶだけじゃ寂しくないか？」

あれはやはりＧＰ０２Ａでアトミックバズーカ攻撃があったから絵になって、

ただ「ソロモンよ私は帰ってきた！」と叫んでも絵にはならないような。

それにしましても私達が騒ぎたくなる気分も分かってほしいですよ、最近のゴタゴタを。

やっとですよ、やっと洛陽に到着できるんですから、実に長かったですよ、

長安に到着して桜花さん助けて事前活動してはや一ヶ月半もたってしまったんですから。

何があったのか最近の流れを説明しますね。

今回の洛陽への遠征は半年で帰還の予定で出発をしましたが、桜花さん救出など騒動もあり涼州離れる期間が更に延びそうだと手紙を。

涼州の色々な方々から返事がすぐに届いたんですが。

母上は「絶対に駄目！私と一緒ならば一緒に１０年くらい二人っきりで旅を。」

父上が「和を止められないからやめて！！」牡丹さんが「牡丹を精神的過労で殺す気？」

あらまあ、見事に反対だらけという返事でしたよ。

大人達だけでなく保育園の子供達も怒ってましたよ。

月の「お兄様の嘘つき」はかなり心にダメージを与えましたね、
洛陽遠征中止して涼州に戻ろうとしたら皆に羽交い締めにされましたよ。

詠ちゃんが「月が悲しんでいるから早く帰ってきなさい」も悪い事したなと。

華雄ちゃんが「武士に二言はないはずだろ腹を切れ」と、
武士はこの時代にいないはずなんだが、腹切ったら死にますし。

「保は嘘つきなのですぞ、だからダブルちんきゅーきっくです」
ねねちゃんにも悪い事したな、ただ、この時代にダブル？キック？
謎だ。

ただまあ、まだ私はまともだった、司がババを引いたなと。

「お手紙読ませていただきました洛陽の旅の日程が延びるとの事で、
長安にて人助けをされたということですが本当はその女性と・・・
途中略、
司様は甘い蜜を出す美しい花、綺麗な蝶が群れ集まるでしょう、
そんな綺麗な蝶と比べたら私のようなものなど・・・以下略」

紅さんの手紙を読んだが、あきらかに厄介な匂いがぷんぷんしているのが、
「あなた様の重荷になるのならば私は死を」なんて書いてあったりもしたし。

この紅さんの状態はあまりにもまずいのではないか？
と紅さん対策に司を涼州に一時的にでも送り返すべきか議論が。
ただ、それをやったら壊れかけている紅さんが正気を取り戻したあと、
自分のせいで涼州がとか考えはじめてそのあとどうなるか分からないからと。

これはもっとまずい事態になりかねないと司の帰還は無しと決まりました。

結局、司は洛陽に行っても涼州に戻っても紅さん地獄から抜け出せないなと、
司が寂しそうに「紅さんの愛がこんなに重たいなんて」と呟いていたな。

うん、まさか私も紅さんがあんな爆弾案件になるとは思わなかったよ。

ちなみに司はそんな壊れかけのＲａｄｉｏ、もとい紅さんをなんとかしないといけないと、
紅さんを如何に愛しているか、如何に会えない事が辛いか、今回の仕事が如何に大事か、
と京極夏彦作品みたいな超大作と化したラブレターを書いていましたよ。

ただ、仕事について書くのは止めた方がいいぞとおもいましたね。

あの質問が来るぞ！「仕事と私どっちが大切なの！？」ってあの面倒臭い奴が。

仕事を選ぶと、愛がない！別れる！死んでやる！などの答えが来て。

私を選ぶと、じゃあ何で構ってくれない！愛が足りない！と。

「仕事は仕事、お前はお前で比べて選ぶ物ではない」、

なんて理論的に答えても感情論には勝てません、無理が通れば道理が引っ込む。

模範回答っぽいので答えてみるとどうなるでしょうか？

「お前といる時間やお金を作るため働いているんだ、分かってくれ。」

これに対し「じゃあ、そんな会社辞めて！」と面倒臭いい返しをされた友人が。

何の話をしているんでしょうか、私はいったい・・・。

結論、泣く子と地頭には勝てない！！

「でも良かった本当に、保さんが私と司さんの仲を邪魔をしている、二人の仲を引き裂こうとする保さんを殺してやる！！！！とか紅さんが言い出さないで良かった。」と司が遠い目をして言っていたのが。

打ち合わせして決めたが、おいっ本当に大丈夫なのか涼州は？紅さんを放っておいて？
司を涼州に戻すのではなく今すぐ紅さんを涼州から長安に連れてきた方が良くないか？
涼州の人手が足りないのならば馬鹿二人を送り返すとかで調整して。

うーん、涼州の先行きがとても不安です、
とはいえ、実は爆弾はそれだけではなかったんですよねえ。

「保さ～～ん、梅花ちゃんから手紙が来たんですよ～読みますか？」
洛陽の桜花さんの家族から返事が来たんですが。

「え～、っと、何々、早く愛しの桜花お姉ちゃんに会いたいのに、洛陽に連れてこないどころか未だに長安にい続けさせて、私と桜花お姉ちゃんとの仲を引き裂く奴がいるから、そいつらを皆殺しにしてやる！って。」

ブルータスお前もか！！！

完全に私を殺る気です、筆遣いがヤバイです、明らかに字に怨念がこもってます。

「梅花ちゃんったら大袈裟なんだから、まったく、ふふふ。」

桜花さん、ふふふって、大袈裟じゃないです！あきらかにガチですよ。

「桜花さん、そんなノンビリしていないで仲達さんを止めて！」

嫌です、ヤンだ人に殺されるなんて人生の終わりは。

「保さん大袈裟ですよ、梅花ちゃんはちょっと表現が過大なだけで。」

絶対に違う！この字を、筆使いを見れば分かります。

私が桜花さんを助けた恩を返すのではなく“おん”が“怨返し”になっていますよ。

しかも、連日長安の宿に洛陽の司馬懿さんから手紙が届くのが怖すぎて、

司も薊さんも百合さんもこれはヤバいと怯えていましたよ。

おかげで、さすがにまずいだろうと長安滞在の予定を前倒しにしましたが。

色々あり過ぎだよ、たかが手紙、されど手紙でこんなおびえさせられるとは。

「董孟高様洛陽にもうすぐ到着しますが、兵も長旅で疲れておりますので、
本日は特に予定は設けず早々に宿に入られた方がよろしいかと。」

百合さんの提言は確かにです。

「では、兵達には旅の苦労をねぎらう為明日、明後日と二日間の休息を与えましょう、
ただこちらには桜花さんがおりますので、私と司、嵐さんと一部の兵は司馬家に。」

桜花さんだけを早く送り届けないといけません、保護したからとはいえ、
こちらの都合で感動の体面が遅れているのですから早く会わせてあげないと。

けっして、司馬懿さんの怒りが怖いというわけではないですよ・・・・。

―司―

桜花さんを引き連れて保さん達と司馬家に向かいましたが、

感動のご対面なはずが、何でしょうか猛獣の檻に閉じ込められたような気が。

目の前にいる人があの司馬懿仲達さんですよねえ？

「桜花お姉ちゃんを返せ―！！」

いや、もう返しておりますよ、それに攫ったのは僕たちじゃないし。

「おおおおお桜花さん、あの人怖い。」

保さんが明らかに怯えております。

「貴様ぁあああ、お姉ちゃんの真名を勝手に呼ぶなあああ！！！！」

おい、司馬懿って軍師だろ、なんで琅？さんよりヤバい殺気を放っているんだが。

「梅花ちゃん、私はこの人達がいたから助かったの、恩人には真名を預けないと。」

庇ってくれるのありがとう、でもお姉さんならもっとガツンと言ってよ。

「お姉ちゃんが言うのならば、ううううう。」

ううううが泣いているとかではなく、獣の唸り声みたいなのが怖いんですけど。

「ただの恩人じゃないんだよ、明日売られてしまうと決まってもう駄目だと思った所を、保さんと嵐さんが乗り込んできて命がけで守ってくれて助けてくれたんだよ。」

桜花さんが司馬懿さんを納得させるためなんだけど、とんでもない事ばらしやがった！

「えっ！！？？」

そりゃ驚くよ、教えた話と真実が違うんだから。

「桜花さん、その話はまずい、って、もう遅いか。」

保さんの言うとおりまずい、あくまでも桜花さんを買い取って助けたという事に、そうでないとうちらが長安焼き打ちした事ばれちゃうのに、って、手遅れだね。

「勘違いで怒る梅花ちゃんには本当の事を知ってもらおうと思って、すいません。」

せめて僕達に事前に「話します」とか一言言って欲しかった。

「保さん、もう完全に手遅れですし司馬家の皆さんには真実を話しましょう、

涼州がどれほど本気なのか話をするのにちょうどいいかと、ただし司馬家限定で。」

こうなったら話をしましょう、長安焼いた事ばれるのはまずいですが、
まあ、桜花さんの命の恩という形で黙ってもらいましょうか。

―梅花―

大好きなお姉ちゃんが攫われて以来、お父さんも妹も毎日眠れない日を過ごしていて、
ある日涼州の董擢とかいう人の使いという人間が来て桜花お姉ちゃんを助けてくれたと。

董擢とかいう人が大好きな桜花お姉ちゃんを助けてくれたのは嬉しかったが、
どうも人買いに売られる所を買い取ったと聞いて、所詮は人買いの仲間だと思っていた。

しかも、洛陽まで送り届けると言ったがすぐに連れて来てくれないで、
家族皆がどれだけ桜花お姉ちゃんを心配していて会いたかったのかわからないの！と頭にきた。

しかも、桜花お姉ちゃんが帰ってきた時に親しげにお姉ちゃんの真名を呼ぶなんて、
助けてくれた恩をかさにきて偉そうにしているんだと思って怒った

ら、
桜花お姉ちゃんに怒られた。
しかも、お姉ちゃんが簡単に話してくれた事は知っていた事と全く違ったのが。

お姉ちゃんを命がけで守ってくれたのならばもっと誇って、こっちに恩を売ればいいのに、
何でそんな大事な事を董擢達は皆揃って隠そうとするの？と分からなくなった。

夜に家族が揃った時もお姉ちゃんは、その事には何も言わず
「全ては保さん達当人から説明を」とだけ言われた、秘密にされて嫌な感じだった。

そんな事が気になっていたら桜花お姉ちゃんが、

「保さん達涼州の方々が私の帰還を祝いたいと言われて、家族皆を呼んでいる」
と招待を受けた、普通は助けられたうちの家族が招待するのに、しかも、助けられたお姉ちゃんがそんな話をしてくるなんて、すごく変な話だと思った。

翌日その宴席に行く事になったら更に疑問が、呼ばれた先が洛陽の中心地にある
大谷商会という大きなお店で此処は大陸全土の特産品を扱うだけの

単なるお店なはずなのに。

お店に着いたら「司馬家の方ですね主人が待っております」と奥座敷に案内された。

主人って誰の事なのだろうか？なんで、このお店何だろうか？わかんないや。

奥の部屋に行ってみたら、昨日お姉ちゃんに紹介された董擢さんや李儒さん、

だけでなく、何人も偉そうな身なりの人とかが待っていた。

「司馬坊様、そして御家族の皆様、本来ならば身内だけで司馬朗様の御帰還を祝いたいのに、

本日は私達のに招待でこのような所まで来ていただく事になり深く御礼申し上げます。」

いきなり董擢さんが深々と頭を下げてきたので、菊花お父さんが戸惑っていた。

このあと董擢さんや桜花お姉ちゃん達から受けた説明を聞いて、驚いてしまった。

此処にいた人たち全員が皆涼州の将軍様とか偉い人なのに、お姉ちゃんを助けるために、

危険を顧みず奴隷商人の所に行って命がけで桜花お姉ちゃんを守って戦ってくれたって。

菊花お父さんも妹の鳳仙花とか皆驚いていた、此処にいる人たちが、縁もゆかりもない桜花お姉ちゃん助けるために危険を顧みず戦ってくれた事に。

「な、何でそこまでしてくれたんですか、私の娘の為に？」

この菊花お父さんの質問の答えも予想がつかないにも程があった。

董擢さんと李儒さんが言うには、漢王朝は既に滅びかけていて、近いうちに大規模な農民の反乱がおきて、王朝はそれを駆逐できず、そのため国は更に乱れ地方の豪族が挙兵をし群雄割拠の時代を迎えると。

その為に地に伏している間に力をためる為司馬家の力を借りたいと。

漢王朝はボロボロでいずれは滅びると思っていた、とはいえまだまだ王朝は健在なのに、

さらに王朝すらおさえられない農民の反乱が起きるなんてあり得ないと思った。

「そんなあり得ない」

話を聞いていてあまりに荒唐無稽でつい口に出てしまった、家族皆もうなずいていた。

でも、董擢さんと李儒さんの二人はまるで未来を見てきたかのよう

に、
静かにただ淡々と歴史を語るように「そうなりますよ」と。

「司馬八達の中で最も才気溢れると言われる司馬仲達殿が、
常識なんてつまらない物に思考が捕らわれてしまうようではいけません。」

同い年くらいの李儒さんにたしなめられた。

この後も延々といろんな話をしたけど、二人の話を聞けば聞く程驚いた。

大陸の外れである涼州はだいぶ前から将来の群雄割拠になる事に備えていて、
異民族を取り込み、優秀な人材を登用し、軍備を整える、拠点を作っていたなんて。

この大谷商会も大陸中に張り巡らせた諜報網であり、将来の軍事の拠点だなんて。

この二人は5歳になった頃には既に遥か未来に起きる事が予想付いていたなんて、
私だって頭の良さには自信があったのに二人には全く敵わないと思いしらされるなんて。

世界中にあるどんな事よりも私には大事な大好きな桜花お姉ちゃんの事とか関係なく、

この二人の見ている世界を見てみたくなった、色んな事を教えてほしくなった。

こんな風に思ってしまうなんて思いもしなかった。

此処にいる董擢さん達は大好きな桜花お姉ちゃんを守ってくれた恩人だから、
家族皆桜花お姉ちゃんを大事にしているから協力しろと言われたら断れなかったが。

「涼州の為に、いや、大陸の民の為に是非皆さんの御協力をお願いしたいのです。」

そんな風に頭下げられて頼まれるなんて。

洛陽にいて勉強するよりもはるかに面白いと思ったから二人についていこうと思った、
そしたら、私だけでなく菊花お父さんも鳳仙花達妹も皆同じ思いなんて。

こうなったら家族全員で涼州に行って、涼州の皆から徹底的にいろんな事を学び、
司馬八達の凄さを大陸中に見せつけてやるんだから！！

第三十話、洛陽到着前も後も色々ありました。（後書き）

ギャグやシリアスが中途半端ですいませんでした。

司馬家まとめて涼州に入れてしまった、やり過ぎてしまったと反省。

どうするんでしょうかこんなオリジナルキャラだらけにしてしまって、

恋姫原作キャラとからむようになったら収拾がまったくつかなくなりそうなのが。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第三十一話、袁家、曹家、お嬢様達への嫌がらせ（前書き）

とりあえず涼州勢以外にも恋姫キャラを出したかったので、いつも通りのご都合主義ですが二人をちょびっとだけ出してみました。

第三十一話、袁家、曹家、お嬢様達への嫌がらせ

―保―

洛陽での仕事終えたある晩、司と二人で酒を飲みながら馬鹿話をしている、
ちなみに三国志の世界だから良いね、ガキなのに酒飲んでも文句言われないのは。

「なあ司君よ～、袁家って名門だよね？」

ちょっとした思い付きを向かいで飲んでいる司に話す。

「何を今さら、三公を四代に渡って輩出した名門じゃないですか。」

司君がなに分かりきったことを聞いてくるんだという目付きで言ってくる。

「いやさ袁逢、袁隗に明日会うんだけど話の内容が涼州と取引継続するかわりに、
涼州の優秀な人間を連れて子供達の家庭教師をしてくれと、曹家からも同じように。」

うちは家庭教師のトライじゃないんだぞ、面倒なことぬかしてと思いましたよ。

「袁家内の派閥争いに関係ない人間に教えを受けさせたい、

まあ分からなくはないですが本当に面倒ですなあ、それに関する事で？」

司君も何の話が来るのか分からない模様、ただ、
話を聞いたら喜んで乗ってきそうだな。

「二人の子供となるとあの袁紹と袁術だけど袁術産まれたばかりだから流石に無理だが、
面倒な事押しつけられた意趣返しで袁紹をお嬢様キャラに改造してやろうかな？と、
当然駄目な方のお嬢様にね。」

絶対に乗ってくるよ、こんな話をしたら司君ならば。

「なにっ？その素敵な！面白そうな！悪巧みは。」

司君が目をキラキラ輝かせて話を聞いてくる食いついたな。

「ほら、曹操と袁紹って若いころから交流があったということでしょ、
この二つの家にまとめて出来る嫌がらせだし面白いかなと思って。」

この世界でも二人が交流はあるようですし、まあ今はまだちびっ子同士のようですが。

「どうしてまたそんな面白い事を思いついたんですか？」

司君は私の思考経路が気になったようで。

「ほらっ、袁紹と曹操って董家の天敵でしょ？反董卓の盟主と檄文を飛ばす、
今日昼飯を食っていた時にふっと急に思い出したんだ、
そしたら、なんか無性に頭に来たんだ月を虐める糞共が殺してやる！！！と。」

昼飯の時に思い出し怒りをしていたら、ふと気づいたら昼飯時の混雑するはずの食堂から、
人がまったくいなくなっていましたよ、どうやら殺気を出していたようで。

「保さん抑えて、思い出しでそんな殺気を飛ばさないで、僕でも怖いんですから！
それにこちらの世界ではまだ反董卓なんて起きてないじゃないですか！？」

当たり前です、あの可愛い月が連合組まれるような人間になるわけないじゃないですか、
まあ連合組まれたとしたら、ふざけた輩は生きたままミンチとか地獄を味あわせますよ。

「それは分かっているけどこの胸のモヤモヤはどうすればいいんだ！？と、
それで思ったんだ袁紹と曹操って若い頃から交流あったということから、
まあ袁紹は内心曹操を見下していたとか色々あったみたいだけど。」

袁紹を駄目にすれば、曹操にもかなりの被害出せるかなと。

「とりあえず保さん馬鹿話するには酒が飲み足りないでしょ、もっと飲みましょう。」

酒飲みながら馬鹿話を続けましょうか。

コンコンコンコン

ノック四回ですね誰でしょうか？

「は～い、いますがどちら様ですか？」

ノックマナー出来ているから百合さんか桜花さんあたりかな？

「桜花と梅花なんですが、今、大丈夫でしょうか？」

おっ、前回からお仲間に入った、司馬懿仲達さんこと梅花さんと、お姉さんの桜花さんですか、どうかされたんでしょうか？

「どうぞ部屋で司と二人で飲んでいるだけですよ、どうかされましたか？」

何でしょうか夜に女性二人で部屋に来るなんて。

「先程この部屋から物凄い殺気が出ていて何かあったのかと思いまして。」

おおっ、それはいけませんねえ、実に申し訳無い。

「すいません、思い出して怒っていたことが、もう何もないですから。」

それにしてもよく私が殺気飛ばしているのに近づけますね、賊狩りやらなんやらやって培った本物の殺気なんですけど。

「無事ならいいんです、賊でも現れたのかなと思って。」

あっ、そうだ、これはチャンスかも梅花さんとゆっくり話をしてみたかったし。

「二人とも、もし時間が空いているのならば知恵をお借りしたいんですが。」

司馬朗に天下の司馬懿の力を借りてみましょう。

「どうされました？お二人がいれば私の知恵なんか必要ないかと。」

え～、司馬朗さんの頭の切れだって並みではないのに、むしろ私なんか未来知識を使うというイカサマしているだけなんですから。

「たいしたことじゃない馬鹿話なんですが。」

馬鹿話と聞いて桜花さんは？と梅花さんは飽きれ顔している。

「司馬家の力を借りたいっていうから何事かと思ったのに、馬鹿話

ですか？」

すいません、司馬家の頭脳無駄遣いしようとする相談なんですが。

「いやあ袁家と曹家のことなんですが、どちらも涼州のお客様ですが、
まあなんといいましょうか董家と浅からぬ因縁があり一泡ふかせてやりたいと。」

嘘は言ってません、因縁があるのはもっと未来なんですが。

「えっ！？」

桜花さんが驚いてますね上客に嫌がらせをするなんて事と、
董家と袁家、曹家に因縁があるなんて知らないですから。

未来の事を知っていたら怖いですが、私や司君以外で。

曹家と聞いてピクリと反応する梅花さん、司馬懿と曹操は外史でも因縁あるのか？

「曹家って、あのムカつく糞ガキ曹操のいるあの曹家？」

酒が入っているせいか、梅花さんがヒートアップしてる。

「梅花ちゃん何かあったの？」

「あのガキ、家に来て糞ガキの癖に私の物になりなさいとか嘗めた事抜かしくさって、
さらに桜花お姉ちゃんとか家族は要らない司馬家で私だけ要ればいいとかぬかして。」

梅花さんの切れ具合ならば涼州を出ていっても決して曹操の元には行かないな、
ただ、梅花さん切れるのはいいが口調が変わりすぎているよ。

「私は何言われてもいいけど梅花ちゃんを怒らせるなんて許せない！」

よし、桜花さんにも火がついた、ここで燃料注入だ。

「聞いた限りだが曹操はろくな女にならないねあれは確実に、いずれ漁色家になるよ綺麗な桜花さんとかお二人の貞操の危険が、あともし曹操に下っても、疑り深いから忠誠誓っても疑い続けるくらいは普通にする。」

史実の曹操についてですが教えてみました。

「桜花お姉ちゃんをあんなちんちくりんな糞ガキには渡さない、殺してやる、
桜花お姉ちゃんと愛を語らいあうのは私だけなんだから！」

うん、この娘怖いよ、いろんな意味で。

「可愛い梅花ちゃんを悲しませるなんて、保さん今から焼き討ちに行きましょう。」

訂正、この姉妹怖い！！

なんだよ焼き討ちって、何処の蛮族の侵攻だよ、全く。

「まあ酒飲みながらの馬鹿話ですからおさえておさえて、さあ飲んだ飲んだ。」

こう言って、少し抑えましょう、怖いよ、のってきた二人が。

一時間後

良い具合に皆酔ってきましたし、何をしたいのかとか酔っ払いの肴として話をしましょう。

「袁紹を馬鹿なお嬢様にして仲が良いという曹操を振り回してもらおうと、
それで僕達や世間の人々は“あ～馬鹿御一行がいる”と笑うとこれだけです。」

下らないわねえ、と笑いながら酒の肴として馬鹿話を楽しむ桜花さんに梅花さん。

「じゃあ、どんな駄目なお嬢様にしますか？揉み上げロールパンはお約束で。」

司君、まずは見た目からいきますか確かにお嬢様は見た目が大事ですから、
問題はもみあげロールパンと言ってもこの時代のお二人には通じないだろう。

「ロールパンどころかガッツリと竜巻みたいにしませんか？馬鹿さの証明として、
あとはオーホッホって無駄な高笑いをして“名門袁家の”とか普通に言うような。」

一目でお嬢様だ！と周りが認識するくらいキャラを濃くするんですね？
桜花さんが乗ってきたな―、かなり酔われているようで。
それにしてもロールパンが何故通じるんだ、これはどの時代もお嬢様には共通なのか？

「それならば悔しい事があると“お父様に言いつけてやる”とか言うようになってもらうとか。」

梅花さん実に良い提案です、たしかに何かあると親に頼み込みに行く馬鹿っていい！
これはお嬢様だけでなくスネ夫とか金持ちキャラはこうでないとだめですよ。

「勝手に目の敵にしている仲間の靴に画鋲を仕込ませるとか、盗みの濡れ衣きせるとか。」

梅花さん、それも良い、やはりお嬢様キャラは底意地が悪くないといけません。

「最高の提案ですね！当人がいない間に忍び込んで服破くとかやらせたいですね。」

うわ～、司君は発想が酷いなあ、そんな風にしようなんて。

「悔しい事があったら手ぬぐいの端を噛ませてキー悔しいって、やらせて。」

皆も拍手して大笑いしている、酒が回っているから楽しめるんだろう。

「保さん酷いねえ、そんな奴いたら絶対に友達にしたくないよ、それを作ろうなんて。」

「梅花ちゃんも保さんも司さんも言いたい放題ですねえ。」

「桜花お姉ちゃんだって、言っている事が酷いの。」

ちなみに、ここにいる四人は知らない、後に袁紹馬鹿お嬢様改造計画は成功するのだが、
主な被害者が曹操ではなく赤毛の地味な子と黒髪のおかっぱ少女になることを。

―司―

酒の席でした馬鹿話なのに、なんで皆それを実行に移そうとするのかなあ、

僕は、保さんや桜花さん達と悪乗りをしすぎたかもしれないと後悔しましたよ。

何故か？

いま、僕の目の前にいるのが袁本初なんですが、何この可愛い生き物！？

ドラマとかじゃ威厳あるオッサンが！優柔不断で常に疑心暗鬼な袁本初が！

将来確実に美人になるの確定な見た目、金髪ストレートのロングヘアー、

誰にも分け隔てなく接する謙虚で心優しい照れ屋な１０歳の娘ですよ。

私と４歳しか違わないですが、若干年の割りに精神が幼いかな？

これを髪の毛ドリルな高笑い恥知らずな馬鹿タカビーお嬢に改造するって、

ダイヤモンドを漬物石にするくらいの無駄遣いを僕達はやるんです

から。

宝石を泥の中に投げ捨てるのとどちらが勿体無いか。

酒飲んで盛り上がった時のテンションを素面の場に持ち込んではいけないですな。

反省しましょう。

「先生、郭図先生、どうかされましたか、お顔の傷が痛まれるのですか？」

「大丈夫ですよ、ちょっと考え事をしていただけですから。」

ちなみにいま僕は覆面軍師“郭図公則”として袁本初の家庭教師をやっております。

保さんが一応お前さんの身元ばれないようにと顔に大怪我を負った設定でいろと、
大谷吉継みたいな白頭巾で顔隠していますが、僕の嘘を素で心配してくれてます。

本当にいい子です、とても思いやりがある。

保さんはすごいですよ、こんな良い娘に呼吸するように当たり前に嘘を教えてますし。

保さん酷いもんなあ、舌切り雀を読んであげていたと思ったら、
小さいツヅラと大きいツヅラを選ぶなら大きいツヅラを選べ！
そして客に選ばせるような試す真似をする雀なんか殺してしまえ！
とか。

董卓にする気ですか、彼女を？

月ちゃん大好きな保さんからしたら袁紹は憎き反董卓連合の盟主とはいえ、
それは史実の袁紹であり、ここは外史なのに、しかも連合は遥か未来なのに、
月ちゃんがいじめられたわけでもないのに、あのシスコンは、まったく。

とは言いながらもまあ、僕もこの教育を楽しんでいますが。

例えばある時は、

「郭図先生、この場合の城攻めにはどのような策を用いればいいのでしょうか？」

常に勉強熱心ですよ、軍事、政治とかいたる事に。

「いいですか袁家のような名門の戦いには策略など要らないのです、
あれは兵を揃えられない弱小の考えなのです、数で押すだけでいいんです、
指示は単純に“雄々しく、勇ましく、華麗に進軍”これだけでいい

のです。」

私が教えているんですが、実にろくでもない教えですなあ。

またある時は、

「人は見た目で九割を判断します、だから袁家の威光を見せつけるため、
袁本初様の率いる軍の鎧は見た目を優先し黄金に輝く鎧が宜しいかと。」

馬鹿が来たと皆に分かりやすくするための目印としていいかと。

「郭図先生、見た目の装備よりも兵の錬度をあげた方がいいのではないでしょうか？」

うん、その通りだね袁紹ちゃん、でも、それでは面白くない。

「たしかに一理あります、ただ見た目から入ることも大事なのです。」

どうせ袁家の兵なんて錬度よりも数頼みなんですから、見た目だけで良いです。

それで戦場で立派な的になってください。

またある時は、

「このような場合は誠意をもって応対すべきではないでしょうか？」

人と接する時は誠意は大事ですよね、でも、私は貴女にそんな物は望まない！

「袁本初様は他人を気遣えるとてもお優しい方ですが、優しすぎてはいけません、
そのような態度をとると相手は袁家を舐めてきます、時には見下しオーホッホと高笑いです。」

高笑いしないお嬢様キャラに何の価値があるのでしょうか？

「相手を侮辱するのですか？」

侮辱以外の何物でもありません、何故そんな疑問形？

「人はつけあがる生き物なのです、だから時には立場の違いを教え込むのです。」

どんどん実直な良い子を歪ませていきましょう、本当に酷いなあ教える事が。

オマケ

「生きる事全てが博打です、だから博打は徹底的にやりなさい、
負けて金が無いなら借金をしてやればいいんです、勝って返せばいいんです。」

「そうだよなアニキッ、勝てばいいんだよな！」

「文ちゃん、それは危険すぎるよう。」

ふふふ、郭図として袁家で好き勝手やっていますが、たのしいですねえ、
あきらかに袁紹さん駄目な方向に突き進んで行ってますから。

本当に僕も保さんもろくな死に方をしないでしょうねえ、
まあ、実際酔っ払ってトラックにひかれるとろくな死に方ではないですが。

ちなみに曹家では僕李儒として普段応対していて、保さんがたまに謎の軍師“許攸子遠”に、
素直だった袁紹さんと違って曹操は大怪我をして顔隠していると言うと疑ってきましたよ。

そこはさすが保さんといいましょうか準備しているんですが、ただその準備が問題で、
賊退治した際の賊の顔の皮剥がしていてそれを被っていたんですから。

少しその顔を見せたら、曹操といえども所詮は子供、すぐに黙りましたよ。

曹操を騙す為とはいえ、躊躇無くそんな物をよくかぶれるな！？と、

何処の羊たちの沈黙ですか？レクター博士ですか？保さん貴方は・・・。

「大事なのは覇道です！他者に頼る事なく自力で決着を着けるのです。」

「同盟を組んで攻める方が効率が良くなくて？」

「曹操殿は他人の力を借りないと敵を撃つ事は出来ないと。」

普段、勝てば官軍、使えるならば同盟だろうがなんだって使えなんて言う保さんが。

たぶん曹操には孤独な辛いルートを歩んでもらって、もし、曹操がでかくなったならば、
近隣諸候と組んで一気に魏を攻めて滅ぼす気なんでしょう、酷いなあ考える事が。

オマケ

「夏侯元譲、武器なんて当たればいいんだ、貴様みたいな馬鹿は頭を使っても無駄なんだから、
考えるよりも貴様は刀を振れ！考えるな感じるんだ！敵を見たら突撃するんだ馬鹿なんだから。」

「きさまぁぁあああ馬鹿にしているのかーーー！」

いやまあ、どう聞いても保さんは馬鹿にしているでしょう、何でわざわざ確認するんだと。

「夏侯妙才、貴女は分かっていますか？この世で姉こそが至高なのです！」

「たしかに、子遠殿に負けて額に肉と書かれ泣いている姉者の姿にくるものが。」

軍人としてではなく、人として駄目な方向に行かせるんですか色々たくらみますねえ。

ふふふ、曹操と袁初をもっともっと徹底的にいじりましょう僕達の玩具として。

後に歴史家は語るんでしょうねえ。

袁家も曹家も破れた理由は官渡でも赤壁でもなく、涼州を信用してしまい、
僕らみたいな酷い人間を教師にしてしまったことだとね・・・ククク

最初は面倒臭いと思いましたが嘘教えたり袁家や曹家を玩具にするの楽しくなってきた、
どうせならば他の家もやってみるかな孫家とか、遠いから会いに行

けないし無理か？

あとは何処の家にやるかな？劉備は筵織りで儲けさせて商売人にしてしまうなんて面白そう、
それか周辺の賊共を太平要術の書で操って、劉備を村ごと焼いちゃうとかもいいな。

ふふふ、僕もとことんゲスな手段ばかり考えつきますねえ、
まあ、この時代を楽しむならタブー無しでいかないとですね。

僕も保さんも十常侍や何進とか馬鹿の相手で普段精神的に疲れていますし、
たまにはこういうストレス解消しないといけませんしね。

さて、次はどんな嘘を教え込みましょうかねえ。

そうそう、それにしても少しずつだが子供達がポンコツになっていってるのに、
こいつ等の親達は気づかないもんなんですねえ、駄目ですねえ、そんな親では。

親ならば子供の事を常に見守っていてあげないと、世間には悪い人が沢山いるんですから。

第三十一話、袁家、曹家、お嬢様達への嫌がらせ（後書き）

恋姫で麗羽の無能具合や曹操の覇道主義とか、
なんであんな致命的な欠点を持っているんだ？と思う事があり。

どうせならばと保と司の二人の悪ふざけを原因にしてみました。

ちなみに書いている私が言うのもなんなんですが、
二人がお嬢様化させる前の賢い麗羽の可愛さがいいなと。

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております

第三十二話、洛陽攻略作戦開始（前書き）

何進はアニメ恋姫の何進ではなく、単なるおっさんにしました。

今回は保に司、何進に、十常侍の張譲、趙忠とおっさんだらけ、しかも、今回はギャグほぼ0、シリアスといいますか悪巧みばかりです。

第三十二話、洛陽攻略作戦開始

―保―

ある日の夕方

「街の酒屋なのですが、先程、何進大将軍様の使いの方が参られまして、
その際に頼まれましたお酒をお届けに参りました。」

荷台には酒の入った甕を満載した荷車を引いてきた酒屋の使い。

「何進様から話は聞いている、酒屋が来たら何進様の所まで持ってこさせろと言われている、
もたもたするな天下の大将軍様をお待たせするな、早くしろ！」

己が偉いわけでなく単なる門番に過ぎないが矮小なるプライドを守るため、
自分も将軍と同じだとでもいうかのように偉そうに命令をしてくる。

“実に愚かだ・・・・・。”

内心呟いてしまう、皇后の兄で漢王朝の最高幹部である大将軍何進が、
酒屋の配達人に直接自分の所まで酒を持ってこさせろなどという、
不可解な命令を出した事をおかしい？と思わないとは。

親切心でこれから会う何進に門番の解雇を伝えるべきか、ふと思う。

そんな事を考えながら何進宅に潜入と、さて、ちゃっちゃと何進に会いにいきましょう、
潜入っていうと泥棒かスネークみたいですね単にお仕事に来ただけですが。

とりあえず壁に耳有り障子にメアリーと言いますし、涼州の人間が何進の元に来た、
なんてことがばれないように気を付けて行きましょう。

そういえば、壁に耳有り障子に目有りと聞いて最初に想像するのが、頭が砕けて死んでいる死体、室内は脳症と共に飛び散った耳や眼球が、
壁や障子にはりついている惨殺現場っぽいイメージが。
多分こんな認識する人間は世界でも私だけだろう、いや、司君もだな、
そんな馬鹿な事を思いながら目的の何進の部屋に向かう。

「何進大将軍、お初にお目にかかります涼州太守代理で参りました董孟高でございます。」

たまには真面目にやらないといけません、第一印象は大事です。
それにしても幾らこの世界は何でもありとはいえこの時期はまだ虎賁中郎将だったはず、
なのに既に大将軍の地位にいるという点に突っ込みたくはある。

「おおっ、遠路はるばる御苦労、わざわざすまんな、このような真

似をさせて。」

ほおっ、笑顔で迎えてきましたね、偉そうな態度はとりませんし、涼州はスポンサーですから上っ面だけでもキチンとしようとか？

いや違うか、根は良い人と言うか、おおざっぱなどこにでもいるおっさんなんだろう、

それが身分不相応な地位についてしまっただけなんだろう。

考え事はよしましょう、今日は将軍の元に陳情に来たのですから、考え事して将軍のご不興を買ってはいけませんからねぇ。

まあ本音は妹頼みでしかないこんな男に嫌われようが全く構わないんですが。

「いえ、何処にハエがいるか分かりませんから、特に十匹のハエはやかましいですから。」

「ハッハッハッハッ！！！」

何進が大笑しているよほど十常侍と上手くいっていないんでしょう、心底大笑いしていますどれほど十常侍の連中を嫌っているんでしょうか。

今の何進があるのは、十常侍の郭勝の後押しのおかげで妹が霊帝に嫁げたのを忘れている？

まあ、そんな恩よりも今は単なる目の上のタンコブにしかすぎないのでしょう。

私は十常侍を庇っているわけではないですよ、私達の本音は何進も十常侍も同じハエ。

「前々からワシと会いたいという話があったから時間を開けておいたのだが、
どういった用件かな？わざわざ涼州自慢の酒を届けに来て酌をしに来た訳ではあるまい。」

事前に話を聞いているくせに面倒臭いなあ、様式に拘るような事か？

「私達涼州の庇護者である何進大将軍様に悩みを聞いて頂こうと思いまして。」

一応、身分が下であるこちらが陳情して助けてもらうという形にしないといけないのが、
こんなただいるだけの愚図に頭下げるのも馬鹿らしいんですが、仕事ですやむを得ず。

「ほおっ、涼州の知恵袋と呼ばれている董孟高殿が悩みですか？
稀代の天才が思い悩むのに、平凡な私なんかで相談の役に立つのか？と。」

ほお、私が単なる子供ではなく政治家である事は認識しているんですね、って当たり前か。

「わ、私なんかを御存じで。」

わざと大げさに驚いておきましょう、此方が洩らしたのが分からな

いとは・・・。

子供が来たらこの馬鹿なら怒るでしょう、だから、たんなる子供でないぞ、とね。

「知らないとでも思ったか?」

してやったりな顔していますね、気づいていないのか馬鹿め!!
してやったりしているようで実は自分はしてやられたりという事に気づかないのか。

あー、それにしてもまだるっこしい、いちいち分かっている用件を延々と語るなんて!
なんて風には流石に突っ込めないから我慢します、ただ面倒臭いなあ。

「実は今、私達家族が住んでいる自宅がかなり古く、また辺境にあり不便でして、
しかも、家族が増えすぎて手狭になり、更に隣家の鼠に悩まされているんですよ。」

「あれほど稼いでいる涼州が引っ越し如きで悩むとは珍しい。」

その稼ぎも宮廷対策でお前さんみたいな馬鹿に配っているんだからな。

「それで手狭になった古い家の代わりに良い物件が無いか探していたら、

隣家が丁度良い広さのようでして、まあそこは鼠が出るのが難点ですが、
出来ればその物件を手に入れ掃除をし、是非引っ越しをしたいなと。」

益州という隣家に引っ越したいだけなんですよねえ。

「回りくどいな、涼州からわざわざ益州に移動したがるのは何故か？」

まあ、ストレートなご質問で御座いますこと、隣家としか言ってないのに、
とはいえ、事前にした交渉で話は済ませてあるから分かっているんでしょうが。

「これは異な事を私は隣家と話しただけで益州等とは一言も。」

まあ、事前交渉しているからお互い分かってはいますが。

「董孟高殿、先程も言ったがワシは回りくどい話が嫌いだ、
お前さんが頭が良いのは知っている、今回の話の、益州牧の見返りはなんだ？
今いる刺史の郤倹を辞めさせてまでお前達を据える利益はなんだ。」

馬鹿肉屋とか言いたいが、あー、面倒臭いなあ、こいつら、死ねばいいのに。

「益州からの金による支援は当然ながら、何進様が一番欲しがる物を用意できるかと、

「安眠できる布団か？」いえ、洛陽で事が起きた際の十匹の蠅退治に必要な兵の派遣を。」

布団って凄い答えが来たな、やはりこいつは馬鹿だ、致命傷の馬鹿だ。

「ふむ、対価として悪くはないな、とはいえお前らを州牧にしろと私に口出ししろと？
ワシはあくまでも大将軍でしかなく政治に口出せる訳ではないのだから。」

よく言うよ妹におんぶで抱っこな外戚で政治に口出しまくっているのが、まったく。

「いえ、何進様は税収対策で陛下が考えている官位の売買の後押しをするだけでいいです、
こちらはそれが始まった際に金を払い益州牧の地位を買うだけですので。」

お前さんみたいな馬鹿にはあまり借りを作りたくないので、自分でなんとかしますよ。

「ほう、ワシは何もしなくてもお前さん達の支援を受けられるというのか、いいな。」

都合がよすぎると疑問に思わないんですかねえ？

「もし董家の益州牧就任に反対する者が出た時にお口添えをしてい

ただければ、
そうですねえ名目としては涼州で五胡を押さえた実力を買って、
益州に被害を出す南蛮など異民族討伐し治安平定のため、私は支持すると。」

まあ、反対なんか出るわけないように根回しはしておきますがね、
とはいえ、保険はやはり必要ですからね。

「たしかに、こういう形ならばワシが横車を、と十常侍は難癖をつけ辛くなるな。」

お前さんも十常侍もいずれ派手にもめてもらいますよ、私達の管理されながら。

「これならば丸く収まりますし、大将軍様の手を出来る限り煩わせないで済みますので。」

この馬鹿には美味しい所だけを得られるように思いこませませんと。

「うむ、貴重な意見、実に参考になったぞ、涼州の漢王朝への忠誠はよく分かってる、
ワシに安心して任せろ！悪いようにはしないぞ！大船に乗ったつもりでいるがいい。」

頼りにされて胸を張っていますねえ、私達に利用されているだけなのに。

「ありがとうございます、涼州の人間はこのご恩決して忘れません、
では、お堅いお話は置いておきまして、何進様に献上品が。」

さてさて、これから更にもてなしますか。

「献上品か、涼州の名産品か？何を持ってきたのだ？」

子供のように目を輝かせているよ、いい年したおっさんが。

大将軍になってしまったのが不幸なんだろう、このおっさんは、
単なる肉屋のおやじのままであったならいいおっさんであったんだろうな。

「まず一つ目は涼州の作りだした酒である焼酎の１０年物の古酒です、
涼州は大秦と取引しておりますが、彼らの皇帝ですら飲む事が出来ない貴重な品です。」

約１０年前に初めて作った焼酎を寝かせたものですから、
そうでなくても焼酎は涼州が作ったた新しい酒で流通量が少ないのですから。

「大秦の皇帝ですら口に出来ないほどの貴重品とは、じっくりと味あわせてもらおう。」

単なる肉屋上りが皇帝ですら口に出来ない物をなんて言ったから、
まあご機嫌な事で。

「もう一つは、先程何進大将軍がおっしゃられたように、

大将軍という地位におられては心休まる時など無いでしょう。」

さあ、司君と二人で用意した悪意のプレゼントを差し上げましょう。

「うむ、このような地位に着くと、無理難題が多くてのう、お前さんのように気を使ってくれる人間がどれほどいる事か。」

演技ではなく疲れた表情を見せているな、それが嫌なら辞めろといいたいが。

「何進様どうぞこちらを、疲れを取り心を癒してくれる霊薬阿片でございます。」

ふふふ、どうせ駄目になるならば徹底的に落ちてくださいね。

「ほお、そのような素晴らしい物があるとは、知らなかったぞ。」

知っていたらこんなヤバい物に興味は持ちませんよ、フフフ。

「大秦よりも先、西の果てにあるある島国はこの霊薬の為に戦争をしたくらいですから。」

阿片はこの大陸を食い物にして、侵略されるきっかけになったんですがね。

「涼州の王朝への忠誠、この何進しかと心に刻んだぞ。」

さて、此方は上手くいきましたが十常侍側に行った司くんは無事に

終わっていますでしょうか？

―司―

さて、何進の方に行った保さんは無事終わっていますでしょうかねえ？

僕は同じ時間に十常侍の張譲の家で、張譲、趙忠と話をすることに。

「張譲様、趙忠様、これは“大秦の皇帝すら”未だ飲む事が出来ない、涼州の酒である焼酎、それを１０年寝かせた貴重な一品でございます。」

張譲はシルクロード経由で来た大秦のワインに喜んだなんて話もあるくらいなので、大秦の皇帝すらという点を強調しましたら実に喜んでいますよ、僕からしたらたかが焼酎くらいでという感じですよ。

沖縄で飲んだ泡盛の３０年物やウイスキーの５０年物とちがって、この世界で作った酒はまだまだ未熟でなんちゃって古酒という感じでしか。

「土産で斯様に貴重な酒を戴けるとは、一宦官に過ぎない私なんかに一体何の用が？」

多分、保さんが行った何進もこんな感じでとぼけたりなんでしょう、

張譲も趙忠も前以て工作しているから知っているくせにボケナスが、まったく。

「張譲殿が言われたように、このような貴重な物に如何に礼をすれば。」

いえいえ、礼だなんて、お題はあんたらの命みたいなもんですから。

「お二方のお力を是非お借りしたいと思いまして本日は参りました、実は私の主を涼州牧に任じていただきたいと思いまして。」

「これはおかしな話を、董家の今までの活躍ならば何もせずとも州牧の地位など、
涼州牧よりも更に上を目指すというのでもないのならば、頼んでくるような事でも。」

見た目からして狸な張譲の親父が戯言を、知っているだろこちらの要求を。

「たしかに董家の活躍は漢王朝にも響いているからそんな心配せずとも。」

こちらの趙忠は見た目は狐だな、狸に狐、何処の昔話だ。

「いやいや、おとぼけはなしにしましょう、涼州を正当な所有者にという事です、
是非、涼州の地は馬騰にお任せいただきたいのです。」

こちらから望みをいきなり言うなんて弱みをさらけ出すだけなんですが、
腹芸を延々としているのもつかれるのでとっとと話を終わらせましょう。

「董家の活躍といいますが涼州の五胡対策も馬騰が現場で話を纏めているのですから、
そういった点からも馬家に正当な評価をしていただきたいというだけです。」

まあ、董君雅様の融和政策は見事ですが、琅?さんの役割が大きいのも事実ですから。

「ふむ、たしかに馬騰殿の活躍は目覚ましく、軍を率いてもよし異民族との交渉もこなす、
と八面六臂の活躍をしている州牧に適しているのでは?と宮中でも言われておるしな。」

張譲がコメントすると、それに乗っかるように趙忠も喋り始める、
二人以内と喋れないのだろうか、どちらかがかけたらおしまいか?

「だが、今、涼州をまとめる董君賀を太守から外す落ち度などないぞ、
無理に董君雅を外して、馬謄殿を州牧にとしたらやかましい事にならないか。」

よくいいますなあ、落ち度が有る無い関係無く、因縁つけて蹴落とすの得意な連中が。

まったく狸と狐ですね、まあ人を騙していると思って良い気になってください、
僕と保さんという二人率いる涼州に踊らされている事に気づかず踊り続けなさい。

「その点に関しましては董君雅様には益州牧でも任じるのはよろしいかと、
五胡対策、涼州の治安改善の褒美という名目で任じるのはいかがかと。」

益州をよこせなんてふざけた注文でしょうが、そこを飲ませましょう。

「ふむ、上手い事を考えましたな益州は高祖劉邦の帝業の基礎となった地で、
涼州での成功による栄転という形ならば文句は無いでしょう。」

趙忠が理解したようですな。

「だが、実際は南蛮の脅威に晒され、治安の悪化もある、また僻地で左遷先と。」

張譲がそれに続く

「しかも董家は涼州の出身ですから、故郷から引き離すわけですので。」

益州をあげるのは高い物ではないという風に思いこませているだけで、
董家への嫌がらせという風に話が代わっている事に気づかないでしょうが。

「董君雅は異民族には上手く対応しているが、漢への忠誠は物足りないからのう、
そういう点としても面白い、ただ州牧で董家、馬家だけ優遇するわけにはいかんじゃろ。」

張譲のおっさんの言う忠誠ね、この馬鹿共への上納金が足りないという事ですな、
今の涼州から物を貰うなんてとんでもない借りを作るだけなのに。

「州牧制を後押しした五月蝿い劉君郎様を交州牧に、荊州太守である劉景升様を荊州牧に、
後は袁家、曹家といったように各家からも州牧に任ずるという形にすれば。」

彼らにとっては魅力的な提案になるでしょうねえ、邪魔者を洛陽から排除できるんですから。

「私達が陛下にお頼みすればどうにでもなるがこのような大計画を実行となると疲れるな、
このような深い疲れがとれるような、私達を心底から喜ばせる物はあるのかね。」

ふふふ、露骨に要求するようになってきていますねえ、

実にありがたいです、話が早くなるのですから。

「良い話があります、ただ、さほど疲れないように出来ますからご安心を、
陛下が進めようとしている官位の売買を後押しするだけです。」

「そんなに楽になる物かね。」

「ええ、理に目ざとい物ならば喜んで州牧やら太守の地位を買うようになりますよ、
それに今回の一番の利益は張譲様、趙忠様にはたまらない物かと思いますが。」

「ほう、それほどまでの価値ある物が手に入るのかね?」

利益がなんなのか分からないんですかねえ、察してくれてもいいのに、
まあ適度に優秀で、それなりに馬鹿であるから十常侍なんかでいるんでしょうが。

こんな事思ったら保さんに「お前から見たら大抵が馬鹿ばかりだ」と苦笑されそうか。

「一番の売り物は時間であり、安心ですね、霊帝の周りにたかるハエがいますが、
そのハエに近い連中などを栄転等という名目で皆洛陽から追放できるのですから。」

二人が唾を飲み込む音が聞こえましたよ“鈍いんだから、もう、いやんなっちゃう!”

うん、可愛く言ってみたが、精神年齢４６歳のおっさんが言う台詞ではないですね。

「事が起きた際にはハエには私兵等いないのですから、大将軍で禁軍の指揮者ですが、
あくまでもそれは陛下がいた時のみですから、ゆっくりと排除できますよ。」

霊帝のおっさんが死んだ時の事を簡単に話しているなんて、
恐ろしく不穏当な発言していますが誰も気にしませんよ、所詮はその程度の皇帝ですから。

「涼州の人間は恩には恩を、と必ず報いる者です、必要とありましたら、
有事の際の護衛および汚れ仕事を受け持たせていただきますが、ふふふ。」

不敵に笑いながら。

「あっ、もちろん金銭、物資という形でしっかりと恩に報いさせて頂きます。」

彼らの大好物をあげる事を伝えないとですね。

「まだまだお若いのに恐ろしい頭のキレだ、貴殿を敵にはまわしたくないな。」

「実にすばらしい、貴殿や貴殿を遣わしてきた馬謄殿には悪いようにしないからな。」

このお二人さんとはいい関係を気づけそうですね、私に操られるだけの人形として、
邪魔になったら捨てればいい、使い捨てしていた側がされる側になってもらいましょう。

「では、仕事の話は此処までにして、お二人に献上したい物がありまして。」

僕と保さんの二人で選んで送ってあげるプレゼントです、
彼らのような人間には実にお似合いだと思いますが。

「先程の珍しい酒や、今までのようなありがたい話だけでなくまだあるとは。」

「李文優殿の恩義にはしっかりと報いさせて頂きますぞ。」

ええ、心底喜んでください、死ぬほど嬉しいと思いますよ。

「普段からお仕事が忙しく、また大変で心休まる日々など無いでしょう、
そのようなお二方の為にこそあります霊薬阿片でございます、
阿片は、吸う事で疲れを取り、心を落ち着かせてくれる、これぞまさに霊薬です。」

どうせ貴方達は死んでるような人生、これで死んでも大して変わらないでしょう、

ふふふ、しっかりと味わってください、もう涼州無しでは生きれないくらいに。

それにしても、僕も保さんも本当にろくな死に方しないでしょうな、正義の味方がいるのならばまず僕達二人を殺すべきなんでしょうね。

死にゆく漢王朝をこれから涼州勢がしっかりと搾り取って貪らせていただきますからね。

さようなら霊帝、さようなら十常侍、さようなら何進、死ぬまでの短い時間をたっぷり楽しんでくださいねえ。

第三十二話、洛陽攻略作戦開始（後書き）

うーん、シリアスになり過ぎたかな？

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第三十三話、三人で悪巧みを話そう（前書き）

久しぶりに神と保、司といった会話を延々と、
今回もギャグがほとんどない回ですいません。

ただ、二人の悪ふざけといいますか悪巧みは健在です。

さて、今回はどうなるのでしょうか？

第三十三話、三人で悪巧みを話そう

―保―

テンテンテンテンテテテンテレレレレ～♪

うん、洛陽でもこの曲が流れるんだね、今日はいつものように嵐さんと司君で洛陽を巡回中、
涼州で見慣れているあの店があったので入って見る事に。

「李ＣＥＯお疲れさまです。」

忘れていた司君はこの武器屋の経営者でしたね、遂にＣＥＯですか、三国志の時代を滅茶苦茶にするとしていたが横文字役職採用ですか。

「しーいーおー？」

「保さん、何が言いたいか分かりますよ、だがまだ甘い！
ちなみに神は今ＦＣ経営から本部に引っこ抜きストアアドバイザーですから。」

兄さん頭が痛いよ。

うん、今頃ナイトヘッドやっても分からないね、今の人には分からないね。

いつも言っているが神って偉いんだよね？なんで巡店指導員なんかを？

「神ストアアドバイザーお疲れ様です。」

スーツに首から社員証ぶら下げてコンビニでたまに見る人な格好だ、本当に、しかも、呼び名神って、そのまんまなのね。

「保さんがなんか色々と話をしたいみたいで、とりあえず奥で。」

司君と神に連れられ、いつものように店の奥からあの部屋に。

“あの部屋”と言ってもＳＥ○Ａにあった、あの部屋ではないぞ、リストラ予備軍を送り込み自分から辞めたいと言わせるあの何もない部屋では。

そういえばセ○ガガであの部屋が無いのには笑ったが、いやまあ、ゲームには出せないし、あったら笑えないか。

まあ、そんな話はどうだっていいや。

真っ白いいつもの部屋の真ん中にテーブルと椅子が用意され、テーブルの上にはケーキと紅茶が用意されている。

「今日はトシ○○イヅカの山椒と胡椒をきかせたチョコレートムースを。」

神、お前はＯＬなのか！？何故そんなにスイーツに詳しいんだ！お笑い漫画道場な過去を捨てた嫁を持つ男の店のケーキとか良く知

っているな！？

「これ、作者が僕のモデルになったあの男に喰われてマジギレした奴ですよね？」

司く～ん、君は何訳の分からない事を言っているんだね！

『そうじゃ、その夜に復讐だ！と言ってバーであの男がキープしている焼酎をあけて、
３０歳過ぎているオッサン二人が掴み合いになったんじゃよな。』

おい、神まで何を言っているんだ！

話が進まなくなるぞ、そんな話をはじめると終わらなくなるぞ。

今日はそんな恥ずかしい話をしに来たわけではないのに。

「雑談を止めて、肝心要の話をしましょう。」

私が真面目にならないとこの話は終わらなくなるから頑張らないと。

「保さん真面目はいいよケーキを楽しもう、チョコレートの甘さだけでなく、
口に含むと広がる粒胡椒のもつピリ辛さ、山椒の香りがふんわりと広がって、
うん、実に堪らないですね、大変美味しゅうございます。」

司君料理記者歴４０年の岸〇子みたいなコメントしないでくれ。

「うめぇー、初めて食べたがめちゃくちゃ美味いじゃん。」

「岸〇子って料理の鉄人の頃から料理記者歴４０年の肩書きが変わらないが、
時の流れから外れた住人なのかな?サンジェルマン伯爵みたいに何百年後にもいるのか?」

司君、岸〇子について私に聞かれても全く知らんがな、料理記者歴４０年は、
女性の歳の事を言わないのはマナーだからじゃねえのか?

『グランナイツの諸君、合神せよ!とか言いだしているかもしれんじゃろ。』

司に神、そこの二人待てーい、なんでそんな話で盛り上がる!

神、何で超重神グラヴィオンを知っているんッだ

四半刻後

肉体言語でやっと収まった、放っておいたらスパロボとかの話になるぞ。

「前に話をしたが、こっちはさんざん暴れているがこの外史は落ち着いた?」

一応気になった事を聞いてみましょう、前回話をしてから半年くら

いしかたっていないんですが。

『まだ外史が固定されるほど完全ではないがあともう一歩くらいじゃ、
普通１０年かかる所を半年で安定に近づいているぞ、何でこんな早いんじゃ。』

神、分かると思うが、俺らが好き勝手やっただけですが。

「外史？安定？」

「好き勝手暴れてあり得ないようなことした方がいいって言ってただろ、
だから、僕達なりの三国志を必死で進めているだけで。」

司と私がやり過ぎというくらい暴れていますからねえ。

『好き勝手やりすぎじゃぞ、何進や十常侍達に阿片教えるとか。』

えっ！？怒られるの？好き勝手やっていいと言われたからなのに。

「怒っちゃやーよ！」

「王子様コイツの変な喋り方はなんだ？」

「司君、さすがに文章では分かりづらい、志村けんのやるオカマ口調は。」

懐かしいなあ、志村けんがいかりやチョースケによく言っていたが。

だが、今の世代には分からないだろう。

「なななな、なんですとー！！」

なんかねねちゃんみたいな反応しているな司君。

『今の世代には八時だよ全員集合はわからないぞ。』

神も私と同じ事思っていたか。

「絶望した！ドリフやひょうきん族が通じない世代に絶望した。」

絶望って大げさな、と言いたいが、ここら辺の話題通じないのはさみしいねえ。

『どうでもいいが話が進まなくなっているが大丈夫なのか？』

うん、気をつけないとあきませんね。

それはいけません、話を進めましょう。

『いやまあ、怒ってはいないんじゃ、むしろ感心しているんじゃ、よくやれるなと、今回のような行動は普通正義感で止めようとしないか？』

まあ、躊躇してしまうかもしれませんね普通ならば。

「手段を選ばない分早く終わらせられますから、それだけですよ。」

やることが多すぎるからチンタラしていられないんですよねえ。

「ルールや正義の価値は場所や時間、育ちで常に変わるものでは？」

その通りだね、皆が一緒なのは管理社会とかどころじゃなくて問題だらけだよね。

『ハッハッハッ、お前さん達は愉快だなあ、普通ならば神に言われたら、悔い改めるとか泣いて許しを乞うたりするんじゃがな。』

「神？」

私と司の会話が聞いていて心底愉快なんだろうな、楽しそうに笑っているよ。

「ご希望ならば今からそうしましょうか？」

神が望むならばたまには神孝行でもしますが、演技ですけど。

「多分世界一の大根役者になりますが。」

そうだねえ、自然に出来るんだったらアカデミー主演男優賞取れますよ。

『さっき言ったとおり怒っているわけではない、世間と違うなと。』

世間と一緒って、そんな大事なんでしょうかねえ？

「世間を知っていますし、常識的だと思いますがね私は。」

この作品でも私なんか常識的なキャラになるかと思いますが？

メタな発言はいけませんね、あと司君が心を読んで突っ込みたいようで。

「保さんの常識って、メキシコの麻薬カルテルとか？あーいった組織的な常識ですか？」

「めきしこ、まやくかるてるってなんだ？」

あのー、私はどんな蛮族でしょうか、警察と戦争なんてやりませんよ、

法を順守する、ごくごく一般的な小市民にしかすぎないのに。

『まあ好きにしてくれ、外史を消滅させるよりは遥かにましだ、それにお前さん方に好きにやれとワシが言ったんじゃからな。』

「消滅って何だ？」

今さら駄目と言われても辛いですよ。

「さすが神！話わかるじゃん、だてに地球を巨大なウォシュレットにしていない！」

司君、それはノアの箱舟の件ですか？

とりあえず突っ込みたい所があるので突っ込んでおきましょう。

「司君、ウォシュレットはＴ○Ｔ○の商標登録です、
せめて、温水洗浄便座と呼ぶべきです、他社に悪いでしょ。」

ＩＮ○Ｘやパナ○ニックや日○とか他の温水洗浄便座製造メーカーに悪いですから。

『ワシの偉業をサニタリー用品と同等扱いにするな、だいたい尻は洗っていないぞ、
だから、それを言うならば水洗便所でいいのではないか？』

むう、たしかに水洗便所といった方がいいかもしれませんね。

「保さん神がこちらに染まってきましたね、こちら側に。」

「うん、いい感じに染まりすぎだな。」

神様がまさかこんなにこちらに染まるとはねえ、まあ、神って結構エゴイストやしな。

『気になっているんじゃが、ちなみに次は何をやるつもりだ？』

普通の人間とは違う、かき回す人間のやる事に気になって仕方がないようで。

「僕の考えている案は色々ありすぎて困るんですよ、益州が手に入

り次第領内統一、
涼州を併合して建国する、うちは善政を引いていますし劉備の入蜀を防いだりして、
あと孟獲が出てくる前に南蛮を制圧し、そのあと人種融和政策で南蛮を併合しようかなと。」

うん、良い案ですねえ、南蛮に煩わされて領内の治安が乱れるのはいやですしねえ。

「私としては今やっているんですが司馬家経由で水鏡先生こと司馬徽を引き込もうと、
荊州から連れ出すことで、諸葛亮やら鳳徳を引き込めないか実験してみたい。」

人材育成の点から水鏡、盧植とかは引っ張り込みたいんですがねえ。

「僕としては史実の董卓のように洛陽に入るようになるならば大谷関、虎牢関
といった関に他国は知らないような大砲などの火薬兵器を設置し、
関をイゼルローン化させてしまって簡単には通過できないようにするとか。」

面白いでしょうな、トーチカ作ったり、関をコンクリで固め大砲設置したり、
ただ数がいるだけの連合軍をアウトレンジからボコボコに。

「あとは黄巾党を私達が管理しながら暴れさせるのも面白そうですかね。」

うん、これは二人で前々から話していた件なんですよね。

「私としては高句麗、烏丸、五胡、山越など異民族と協力関係の維持を、
反董卓のような事態になった瞬間に一斉に蜂起させられるように、
なんてのも。」

こういう勢力と結んでおいて常に他国をかき回せるようにしておきたいですよ、
反董卓や官渡とかで拠点がボコボコにされていたら面白いだろうなあと。

「後、僕が考えているのは三国志演義でいう周泰や蒋欽みたいな江賊あがりを取り込んで、
呉や荊州にも負けないような船団を組んだりするのも面白そうで、
南船北馬どころでないような、陸、海、何でもありの部隊を作るとか。」

たしかに今順調に進んでおりますしこのまま二人の計画通りにいけばこちらは大国で、
そうなると曹魏ではなく涼州益州連合が赤壁をやるかもしれないので準備は必要かと。

とはいえ、無事に涼州、益州連合国家が出来るとも限りませんが。

うん、私や司君の意見はどれも全て絵に描いた餅でしかないですが、

どれも実行できたらたしかに面白いなという物ばかりで。

全部出来たら、うん鬼だね、曹魏？孫呉？相手にならんよ、と。

「まあ、夢ではなく現実的な所だと涼州で上手くいっている保育園制度の先を、
私や梅花さんを中心に教え育てる軍事学校を、司を中心に育てる医学学校設立を。」

国を発展させるためには軍人や医者はいくらいても困りませんから是非やらないと。

「人材育成もですが今の開発を発展させ重工業化を推し進め、富国強兵策の実行ですかね。」

うん、富国強兵というのは分かりやすい指針ですしねえ。

「あと私が考えているのは、まだ量産化は出来ていませんが火縄銃は出来たので、
次は量産化、ゲベール銃やミニエー銃といった更に進化させるのも。」

他国には火縄銃量産も脅威でしょう、ここで更にミニエー銃や、
アームストロング砲とかの開発成功したら大変面白い事になるでしょうねえ。

『どれも実に野心的な野望じゃな、大陸を支配出来るじゃろうな、中国という意味ではなくユーラシア大陸全土を。』

確かに出来そうですが、ただ、二人ともそこまででかい夢は持っていないですよ、
実際そんなでかい国なんか支配出来ても管理しきれないだけですからねえ。

「実は僕の計画で保さんにも話をしていないぶっ飛んでいる計画がありますよ、
ただし、聞いたらイカれていると思いますよあまりにもふざけていますから。」

司君らしくない勿体ぶった言いかた、よほどふざけた計画なんでしょう、楽しみだ。

「イカれているのは元からだろ。」

『今までの計画でもかなりはじけているが、それを超えるというのは気になるぞ。』

神も食いつきますか、どんな楽しい事を教えてくれるんでしょうかねえ。

「大したことではないんですよ、天下三分の計なんですよ。」

司君がぶっ飛んでいるとか散々前振りした割りには普通な答えですね、

三国志で行き着く奴ですね、これがどうイカれているというのでしょうか?疑問ですよ。

司君が話辛そうなというか、内容を話していいのかという感じで思い悩んだいるようで、
いつものようなカラカラ笑うような表情をしていませんねえ、・・・
まさか!?

「史実の曹魏、孫呉、劉蜀の天下三分ではなく、もしかしてだが私、司、月で天下三分か?」

パチパチパチ

「良く出来ました~大当たり~~!!!!」

私の行き着いた結論を手を叩き笑いながら正解と伝える司君。

『確かにそれは普通ならばイカれていると言われるな。』

神もあまりにふざけている答えに驚いたようで、驚く神なんて見れないぞ。

まあ、普通の人は神に会う事すらないんでしょうが。

ー司ー

流石保さん、僕の考える事すぐに分かるんですから、

前世から含めて２０年以上の付き合いになりますが、流石ですよ。

「劉蜀は益州涼州連合でまとめてしまうので存在しなくさせますが、例えば保さんが曹魏に、僕が孫呉に着く事でまとめてしまうと・・・ククク。」

いやあ、感情を押さえているんですがついつい黒い笑いしてしまうんですよ。

「司君も企む事が実に悪いなあ、まさか曹操も孫権も本人達は頑張っているが、
実際はこっちの匙加減で存在しているだけというのが、当人達は踊らされているだけなんて。」

これは実に面白いと思いますよねえ、こっちが人形遣いで徹底的に操ってあげると、
これらの国の王に仕えているふりで仕えさせているんですから。

『二人は本当に面白いな、徹底的にかき回してくれと言ったワシが引き攣るんじゃからな。』

ふふふ、何でわからないんですかねえ、僕達にかかればこんなの日常茶飯事なんですが。

「いつも言っておりますが“おもしろき　こともなき世を　おもしろく”ですよ。」

面白さは人から与えられるのではなく自分で見つけないとですよね。

「司君、いつも言っているやん、あの世の高杉晋作が蘇って殴りに来るぞ。」

「高杉晋作って誰？」

蘇ってきたら舌先三寸で丸めこんで、一緒に遊んでもらうだけですよ。

『外史を安定させるという名目はどうでもよくなってくるぞ、楽しませてもらうぞ。』

ふふふ、神様安心してください、言うまでも無くたっぷりと楽しませてあげますよ、
感謝しているんですよこんな楽しい世界に送ってくれた事を本当に。

保さんと二人でつまらない常識なんか一切無い世界で遊べるんですから、
ただ僕達の活動は普通の人が見たら薬が強すぎて毒になるかもしれないでしょうが。

『そうだそうだ、二人に聞きたい事があったんじゃ。』

なんでしょうかねえ、二人に聞きたいなんて。

『お前さん方と一緒に来てくれたそちらの女性をワシに紹介してくれないのか？
あと、そちらの女性が話についていけないんじゃないのかね？』

そちらの女性?

横を見てみる

「「あっ嵐さん!?」」

保さんと一緒にいつもいるから気づかなかった、待っててくれと伝えるの忘れていた、

さてさて、どうするかなあ?というか、どうにかしないとまずいだろ。

『おっ、第三者を巻き込んだことで更にこの世界が安定したようじゃぞ。』

いやいやいや、今はそれどころじゃないだろう、この馬鹿神!?

さてさて、どうしますかねえ、うん、まいったね・・・。

結局神に頼みこんで嵐さんに此処であった事の記憶をちょっと消してもらって済みましたが。

あぶねえ、聞かれたらまずいとんでもない事を喋りつづけていたな。

「保さん頼むよお、自分のかみさんをしっかり管理してくれよ。」

「いや護衛であり、私の伴侶として自分と常にいてもらうから当たり前すぎて、ついね。」

いやいやそういう問題じゃないだろ、保さんも嵐さんに弱いんだから、まったく。

ちっ、モゲちまえよ。

第三十三話、三人で悪巧みを話そう（後書き）

嵐さんがいるが気づいていなかった感を出したかったんですが、自然な感じで表現しようにも、私の表現力の無さでは難しい。

まあ、難しいとか以前なんでしょうがね。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第三十四話、洛陽滞在中な人々の平穏な休日（前書き）

今日は前回、第三十五話の後日談と言いますか、
涼州から来た人達とかの様子を。

第三十四話、洛陽滞在中な人々の平穏な休日

―嵐―

なんか記憶が昼過ぎくらいから無い、俺はどうかしたのか？

って、俺はなんで今、俺の王子様におんぶされているんだ？

朝、俺の王子様に、アイツと俺の三人で洛陽の街を散歩しようと言われて、

内心、アイツ邪魔だからいなくなれと思ったんだが。

ただ王子様がアイツや俺を誘ったから、俺が文句言うわけにはいかないのが、

アイツが勝手について来たわけでないし、嫌だけど仕方ないと。

それでアイツがやっている変な武器屋に行ってから記憶が無いのが、

気づいたら王子様におんぶされていた、俺に何があったのか？

とりあえず、俺が目を覚ましたの王子様に気づかれたらおろされちまうから、

もう少し寝ているふりしよう、たまにはこうやって甘えないとな俺も。

おんぶされながら洛陽の街を歩いているなんて、普通なら恥ずかしくて仕方ないが、

俺は寝ているんだから、恥ずかしい事は無いよな、あっ、王子様は

恥ずかしいか。

でも、ごめん、王子様もう少しだけ甘えさせてもらうぞ。

「閨だけでなく甘えん坊さんなんだから、嵐さんは。」

しっかり気づかれていた、王子様ズルい、わかっていたなら言ってくれよ！

あと気付かれてると分かったらなんか物凄く恥ずかしくなった。

「は、恥ずかしいからおろしてくれー！！」

こうなったらジタバタして脱出しかない。

「嵐さんは私に甘えたいんでしょ、だからおろしません！！」

太ももをさっきよりガッチリと押さえられて逃げられなくなっちまった。

「・・・いじわる、でも、そんな王子様大好きです。」

は、恥ずかしいけど、素直に思っている事を王子様の耳元で囁いた。

「フフフ、照れ臭いですよ嵐さん、じゃあ、その言葉を部屋で証明してもらえますか。」

しょ、証明って、まだかなり日も高いのに、夜まで相当時間あるのに、
でも、王子様と部屋で好きって証明って・・・・えへへ。

この後おんぶされたまま部屋に戻ってまだ日が高いのに閨で色々と意地悪な事された。

王子様普段とても優しいくせに意地悪なところがあるのがちょっと嫌だ、
ううん、でもそのちょっと嫌というのが好きなんだけど。

うん、閨で王子様が俺にしてくる意地悪なんか大好きだし・・・。

―日&光―

久しぶりの休日っす、暇っす、だから、阿多と調練することにしたっす。

さすが阿多っす、相変わらず強いっす、ただ自分も負けてないっす。

阿多が愛用の武器昇竜偃月刀で斬り払ってくるのを自分は槍で同じように斬り払いで、
お互いの武器がはじかれて阿多が距離を取ろうと後ろに下がるのを見逃すほど甘くないっす。

自分は間合いを詰めながら三連突きっす、ちん、水月、金的の正中線狙いの突きっす、
阿多はそれを読んでいたので左に飛んで避けながらの斬り払いしてくるッす。

でも、自分も阿多の動きを読んでいたっす。

間合いを詰めて自分の槍の柄で阿多の昇竜偃月刀の柄にぶつけて攻撃を防ぐっす、
そして、そのまま押し合いになったっす、自分は体勢崩す覚悟はあるっすが、
此処で決めてやろうと右の膝で阿多の腹に一撃入れてやったっす。

ただ、押し合いになっていたので膝蹴りの威力が弱かったっす、
阿多はそれを読んでいてわざと腹で膝蹴りを受けていたっす。

自分が蹴りいれたせいで片足になり不安定な所に阿多は更に押し込んできたっす、
自分は倒れたっす、上になった阿多は偃月刀の刃を首筋に当てたっす。

自分の負けっす。

攻撃を読んで無理に避けようとしないで受けて利用するなんて、やられたっす。

この試合では負けたっすが、次の試合は自分が優位に立っていたっ

す、
今度もさっきみたいにもつれ合いになったっすが、自分の左肘の一撃が阿多に決まったっす！
阿多がよろけたっす、自分は肘を入れた時の勢いを生かして回転して、
もう一発肘を入れようとして決まったと思ったっす。

「あの万年発情バカップルが、チクショーもげちまえ！！」

いきなり文優がわけのわからない事を叫びながら現れたっす、
あまりの事に驚いて自分も阿多も動けなかったっす。

文優は更に叫んでいたっす！

「こっちはいい人だったがいつのまにか爆弾案件になって、
こっちはいつも涼州から届く手紙を読む度に胃が痛くなるのに！！」

何なのか分からずにいた自分っす、それに対し阿多は頭良いっす。

「嫉妬か、なまじ愛を知った為にその愛がある故に苦しむ。」

多分意味深なんす、ただ、自分には何言っているか意味が分からないっすけど。

訳の分からないこと一通り叫んだと思ったら、文優がこっちに来たっす。

「キサマラは弱い、だから僕がキサマラを鍛えて最強にしてやる！」

目が血走っているっす、片手には文優の得物の鉄扇を握りしめているッす。

明らかに八つ当たりっす、理不尽すぎるっす！

「天は我を見放したか。」

阿多諦めたら駄目っす、そこで試合終了っす！

殺られる前に殺るっす、阿多の時のように寸止めだとか無いっす、自分と文優の力の差では本気で殺しにいくしか生き残る目はないっす。

「ウオオオオーーーーーーー」

文優の間合いに飛び込みながら槍で斬り上げるッす、それに対し文優は読んでいたのか、

左手に持った鉄扇で槍の穂先を引っ叩きながら、空いていた右手の掌打が顎に入ったっす。

文優が前に言っていた脳が揺れて頭蓋骨にぶつかって立てなくなったっす。

脳震盪っす。

一撃で立てなくなったっす、実力差があり過ぎるっす、
阿多の時みたいな接戦と違って完敗っす。

「さあどうした？まだ脳震盪だけだぞ、かかってこい！！
さあ戦いはこれからだ！！お楽しみはこれからだ！！ハリー！ハリー！ハリー！」

文優がヤバいっす、これは確実に殺す気っす、鍛えてやるとか最初言っていたが嘘っす、
確実に自分を殺る気に違いないっす、賊討伐でも感じた事がない恐怖っす！

「そこまでだーー！！！！！」

阿多が文優の背後から昇竜偃月刀で袈裟斬りっす、これなら殺れる！！

「甘い、殺す気ならば声をあげずに殺気を出さずに静かに斬りかかれ！！！！」

左手を後ろに回し、阿多の振りおろした昇竜偃月刀の刃を鉄扇で防いだっす、
そして、そのまま振り向きざまの右拳っす、阿多は後ろに飛び退き避けたっす。

「正々堂々とか甘い事を言わず、卑怯とも思わず背中から斬りかかる実に素晴らしい、
それでこそ軍人の戦い方だ、ならばそれに応え全力で戦ってやろう。」

１４歳のガキの台詞じゃないっす、自分を瞬殺したが本気で無かったっすか、
文優との力の差は分かっていたっす、でも本気で無くて一瞬とは思わなかったっす。

上着を脱いで上半身裸になった文優が構えて言ったっす。

「かかってこい。」

横薙ぎはしゃがみ、切り上げ、切り下げは最低限の横の動きだけでかわし続ける、
阿多が攻撃し続けているのを文優は全て紙一重で避けて格の違いを見せつけているッす。

阿多が振りおろした刃を両手で挟んで止める白羽取りっす、
前に文優や孟高がやって見せたがそれは一般兵の攻撃で洒落だったっす、
今回は本気でいった阿多の殺る気の速さの刃を止めるとは。

「どうしたこの程度か?では、次はこちらからいくぞ。」

文優が変な構えをしたっす。

両足を開き両手は上にあげた変わった構えっす、
前に孟高が言っていた「オーガの構え」とか言う奴っす！！

文優の背中に鬼の顔が浮かんだと思ったら、文優の右拳の一撃が阿多を打ち抜いたっす。

一撃で阿多が吹き飛ばされ、たかが一撃っす、されど一撃っす。

阿多が死んだと思ったくらいの一撃だったっす。

「さあ、二人とも早く復活しろ、まだまだ時間はあるぞ、楽しもうじゃないか」

鬼がいるッす、背中に鬼の顔が浮かんでいたのはだてではない、本物の鬼がいたっす。

今日の自分と阿多は何も悪い事はしていないのに、何でこんな目にあうっす！！！！

ー司ー

ちくしょーーーーー、なんなんだ保さんと嵐さんのあのイチャラブ具合は。

こっちは保さんが嵐さんに待っていて言わなかった為に、

神との会話をガッツリ聞かれて、これはヤバいと肝を冷やしていたというのに。

神と話をして嵐さんの記憶を消す事でなんとかなったが、本当にヤバかったんだぞ、いや嵐さんが俺らをどうにかするとかは無いだろうが。

僕と保さんが話をしている内容は一般に公開できる内容ではないというのに。

嵐さんを眠らせて、その間に記憶を消したは良いが、なんだ、その後のおんぶして一緒に帰った時の二人のいちゃつき具合は。

片方は寝たふりしていて甘えて、保さんはそれに気づいていていちゃついて。

何が「閨だけでなく甘えん坊なんだから嵐さんは。」

キイイイーーーーーーーーーーーー、悔しい！！！！！

袁本初お嬢様化計画でやったキーー悔しいをまさか僕がやるなんて。

僕だって紅さんとイチャイチャしたりしたいよ、って紅さんからの手紙が・・・・。

「司様に早く会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、

会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、
会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい・・
・以下略」

これだけで埋め尽くされた手紙が毎日僕宛に送られて来るんだぞ！
！！！

涼州から洛陽まで手紙送り届けるのにいくらかかると思っているんだ！

いや、値段なんかどうだっていい、怖いんだ、怖すぎるんだ。

紅さん涼州の常識人、一般人とか言われているのに、なんだこの変わりようは、

涼州にいる皆が止めているはずなのに、こんな手紙が毎日来るとか、誰も止められないのか、そんな事があっていいのか、何でこんな恐怖を僕が。

涼州に戻った後僕は無事に生きていられるのだろうか・・・。

運が良くて腎虚？カマキリみたいに食った後に食われるのか？

いや、今の紅さんの場合、僕が性的に食われて、そのあとリアルで食われるとかか。

あかーーーん、僕にはやらないといけない事があるんだ、涼州を、三国志を

「助けてください！！！！！」

世界の中心で愛を叫ぶみたいになっている、って、あれ、オーストラリアなのに世界の中心と勝手に名乗っていいのか？

政治的ならばワシントンD．Cか今ならば北京とかじゃないのか？

とりあえずこの悔しさは、大谷商会の庭で調練していた日と光に、寸止めとかぬるい調練しやがって、もっと激しくやりあえええーーーー。

一百合一

「ふう・・・・・」

涼州にいた時よりは少ないですが、洛陽でのお仕事も色々ありまして忙しいのですが、

本日は久しぶりの休日をいただきまして、朝からのんびりさせてもらっております。

ただ部屋でのんびりしているのも手持無沙汰で飽きてきますわねえ、董孟高様が言う仕事中毒と言う物なのでしょうか私も？

そうですわ、司馬伯達様と司馬仲達様をお茶にお誘いしてみましょう、

？融様から教えていただいた新しく出来たお茶屋さんのお菓子が美味しいという事ですので、

お二人とお茶を楽しみながら交友を深める様にしましょう。

？融様には失礼ですが、あの男っぽい？融様がお茶屋さんに興味があるなんて、

？融様も人の子なんですはね、いや、違いますはね。

「おお俺にはこんな店は似合わない、おおおお俺のおお王子様と一緒に行くんだだだ」

とか恥ずかしがりながら独り言を言って阿蘇阿蘇を読んでいるんでしょうねえ。

ふふふ、可愛らしいですはねえ。

それにしましても、涼州に残っている芍薬さんや牡丹さんが知りましたら、

私だけが洛陽で美味しいお菓子を楽しんでいるなんて知ったらズルイとか言われそうですね。

私や牡丹さんからしましたらあれだけ食べても太らない芍薬さんの方がズルイんですがね。

ふふふ、こんな事をゆっくりのんびりと考えたりするのも楽しいですわね、
でも、考え事は置いておきまして、お二人を誘いに行きましょう。

―桜花―

コンコンコンコン

「はい、おりますがどちらさまでしょうか？」

４回のノックですから、保さんか、司さん、百合さんの誰でしょうかねえ？
保さんと司さんは嵐さんを連れてお出かけになられたから百合さんでしょうね。

「審正南です、司馬伯達様、もし御暇でしたら妹の司馬仲達様もお誘いしまして、
街に新しく出来たお茶屋さんでお菓子とお茶でも一緒にいかがかと思いまして。」

あら、百合さんからお茶のお誘いですか、それは嬉しいですね。
でも、ちょっと惜しかったですねえ、若干合わなかったようで。

「あっ、でも、ごめんなさい、そちらのお店には行けないんですよ。」

その事を百合さんに伝えないといけませんね。

「あら、予定がありましたか、それは申し訳ございませんでした。」

用事があると言えば幼児なんですが、百合さんもなので。

「いえ、つい今さっきなんですが薊さんが部屋に来られまして、天気も良いので皆で東屋で庭でも見ながらお茶にしませんかと誘われまして。」

薊さん、私に梅花ちゃんに百合さん、女性４人でのんびりお茶をするのも良いですねえ。

四半刻後、東屋にて

「たまには太守代理の仕事も無くのんびり皆さんとお茶するのも良いですね。」

「桜花お姉ちゃんがいるなら私は忙しくてもかまわないけどね。」

「梅花ちゃんは本当に私に甘えるんですから。」

「ちょっと違うようなのでは、司馬伯達様。」

あら、百合さんが言うには私と梅花ちゃんは姉妹仲が良いというのとは違うんですかねえ?

「桜花お姉ちゃん、百合さん、薊さん向こう見て。」

「「「まあ」」」

保さんが嵐さんおんぶして帰ってきてますね、何があったんでしょうかねえ？

「嵐さん顔真っ赤にされてますはね、でも満更でもなさそうで。」

薊さんの言うように嵐さん照れて入るが顔がほころんでいますし、嬉しくてしょうがないんでしょうね。

「大好きな人におんぶされながら洛陽の街歩いて帰ってきたから照れているんでしょう。」

確かに、あの状態で洛陽の街を歩くなんて相当恥ずかしいでしょうね。

「桜花お姉ちゃんにしてもらえるならば何処でも私は平気だよ。」

本当にお姉ちゃん子で甘えん坊なんだから梅花ちゃんは。

「とりあえず、今日はもう嵐さんと保さんの部屋には近付かない方がよろしいかと、
明日のお昼に嵐さんご一緒して、何があったのかとか詳しく利かないと駄目ですはね。」

そうですね、誰も馬に蹴られて死にたくはないですからね。

それにしても百合さんも意外と良い性格しているようで、でも、私もか、

明日のお昼御飯の時にこの四人に囲まれて慌てている嵐さんがいるんだろうな。

「あの万年発情バカップルが、チクショーもげちまえ！！」

「こっちはいい人だったがいつのまにか爆弾案件になって、こっちはいつも涼州から届く手紙を読む度に胃が痛くなるのに！！」

今度は裏庭の方から凄い叫び声が何があったんでしょうかねえ・・・。

あっ、皆ニヤニヤしている、これは楽しそうな予感ですし、見に行ってみましょう。

第三十四話、洛陽滞在中な人々の平穏な休日（後書き）

とりあえず涼州の皆は平和ですという感じが書けたか？

とりあえず保め、モゲてしまえ、

あと紅さんの病み具合が今後大丈夫か？

書いている私が不安に思ってます。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております

第三十五話、約束は守ろう（前書き）

今日の話は中途半端かと、って、それはいつもですね、
私の文章表現力や構成力の無さとかでは。

第三十五話、約束は守ろう

―司―

保さんと色々な話をしたいので誰にも聞かれないようにするために、いつものように武器屋からあの部屋に行き神と保さんの三人で今後の事を話す。

「今日は流石に嵐さんを引き連れてはいませんね。」

前回の苦い思い出を話す。

「あれは本当にすまなかった、今日は嵐さんは日と光と調練するように伝えておいたから。」

ならば問題無し、さてさて、今日ものんびりと物騒なお話をしましょう。

「保さん出来るわけ無いんですが、長江あるじゃないですか堰き止めたら面白くないですか？」

いきなりな僕の話の振りに、なんだ？という感じで反応する保さん。

「どうした？急にダム建設の話になってゼネコンにでもなるのか？」

いやまあ、いつものように妄想話ですが。

『ワシが力を貸せば出来るじゃろうが、それは望まないじゃろ。』

本当に追い込まれたら頼むかもしれませんが、さすがにそれは。
三国志の時代、現代関係無くいきなり三峡ダムが出来たなんてまずいですから。

「大したことではないんですが昨晩三国志の世界について考えていたんですが、
赤壁について考えていて三峡ダムを偶然思い出したんですよ。」

保さんが三峡ダムについて思い出そうとしているようで。

「あれって確か水を満杯までためると地球の傾きが若干変わってしまうんじゃなかったっけ？」

たしか理論上は2．５ｃｍだか傾きが進むんでしたっけ？

『人間が地球の動きにまで干渉するようになるのだから、無茶をするもんじゃのう。』

ええ、神話での神の行動ほどでもないが人間も無茶するもんですよ。

「赤壁でダムってことは水責めか？」

保さん良い感しておりますねえ。

「神の力は絶対に頼りませんし、今の時代の建築技術や時間が足りないから無理ですが、

もし長江の上流にダム作れたら赤壁が地獄になるでしょうねえと思って。」

ろくでもない発想をさせたら僕はこの時代一なのかな？

『敵軍が布陣したらダムを決壊させると、流域は壊滅するじゃろうな。』

確実に荊州の一部や呉とかが途方も無い水に襲われ消滅となるでしょうな。

「司君、お前さんは確実に世界三大虐殺者の一人に名前を連ねるな。」

ええ、なるでしょうねえ、歴史上初の虐殺者に。

「って、こんな話をしていても仕方が無いので、今日のお話を。」

とは言いましても今日の話自体はさほど大事ではないんですが。

「さてさて、今日はどんなお話でしょうか、楽しみにしておりますよ。」

保さんの期待を裏切る内容ですいません。

「僕は人を驚かせたり、からかったりするのは好きですが嘘つきになるのは嫌なので、

洛陽にいますし桜花さん攫った馬鹿共にそろそろ天誅を下そうかと

思いまして。」

うそつきはいけません、馬鹿な事を話したりするのは良いですが。

桜花さん誘う時（二十八話）に洛陽の拉致犯を殺すと言っておきましたしねえ。

『袁家と曹家、朝廷至る所で好き勝手嘘八百並べているくせに嘘つきではないと。』

これは異な事を神が。

「司君が嘘つきかどうかは別としてやりましょうか、仲間を守らないといけませんし。」

酷いなあ、何でそんな事言うんでしょうか、僕ほど誠実な人間はいないと思うのですが。

「僕ってそんな信用ありませんかねえ？」

二人とも頷いているよ失礼な。

『ただそのような話ならば此処に来て話さずとも、当人と話をすればいいだけではないのか？』

普通ならばそうでしょうねえ。

「いや簡単なことで、太平要術の書で身元確認は出来ていますし、

とりあえず夜になったら下見に行きますので、それまでの暇つぶしをしにきたんです。」

最も下らない理由でしょうね。

『「はひっ？」』

保さんと神二人があきれている。

「まあ神と話をしにね、たまには雑談も良いでしょと、この前も来たばっかりですが、
此処なら馬鹿話しながら資料作ったりとか好き勝手出来るでしょうし。」

こんな身勝手な理由で神と話する人間は僕だけでしょうね。

「夜になったら現場の下見か、ＯＫＯＫ、それまでは何をするんだい？」

大したことじゃないんですよ、ただ人眼があるとまずいので。

『此処でないとまずい事なんじゃろ。』

いえーーす、神様よう分かってらっしゃる。

「本気で立ち会いを、武器を使って殺し合いです、僕達には超回復がありますから、
首をはねるとか心臓をえぐるとかしない限りは死にませんから、
とはいえ、そんな本気の殺し合いを涼州の皆には見せれないですか

ら。」

普通の人が聞いたら驚くようなとんでもない事を言っていますね私も。

「そりゃそうだ、俺らの秘密を人に見せられるものではないしな、いいねえ本気でやり合おう、最強になるには最強の敵がいないとな、涼州の皆には悪いが、司の本気とは違うからな、やるか。」

嬉しいですよ、本気の保さんと僕とでやりあえるんですから。

さあ、遊びましょう、誰よりも強くなる為に保さんは踏み台になってもらいましょう、
保さんも誰よりも強くなる為僕を踏み台にしようとしているんでしょうねえ。

「神様、此処の場所を夜の洛陽の貧民街にしてもらえますか、
これからやる天誅の訓練を兼ねてやった方がいいでしょうから。」

どうせならば普段出来ない状況でやりあった方が面白いでしょうし。

『そうかそうか、分かった、ではワシは高みの見物をさせてもらおう、
洛陽の街中で争うがいい、武器はお互いの得意な物を用意しよう。』

パチン

神が指を鳴らした瞬間、見慣れた洛陽の街並みになっていた。

一保一

パチン

神が指を鳴らしたと思ったら、右手には方天画戟、肩には重藤弓、それに甲冑とフル装備で洛陽の街に立っていた。

周りには司はいない、私と違う場所に飛ばされたか。

『お前さん方を洛陽の街にランダムで飛ぶようにしたぞ、いろんな戦闘が楽しめるように。
あと普段の得物と鎧も、ちなみに此処でやりあうなら死んでも蘇れるようにしたぞ。』

何それ怖い！！！？？？

「この糞神、完全に殺しあえというのかよ！！！」

殺し合いをするとか言っていたのに、司君、
蘇れなかったらまずいでしょ、二人とも死んじゃったなんてなったら。

『殺しあいすると言っていたのはお前さんじゃろ。』

同じ事考えていたね神も。

「細かいぞ！！」

司君の怒鳴り声が聞こえる、すぐそばにいるようだ、声の方に行っ

てみます。

司君をすぐに発見する。

「いくぞ！！」

方天画戟を構え突っ込む、司は突如現れた私の攻撃を鉄扇でいなし始める。

強い、洛陽の街の中での戦闘になったが司の奴とにかく強い。

元から武では同じ程度の強さだが市街戦になるとこれほど厄介とは。

ある程度の距離まで近づけばこっちの得物は方天画戟、司は鉄扇、本来ならばリーチの違いは圧倒的な違い、こちらが有利なはずなんだが。

司は巧みに戦う場所を狭い路地に誘導してくる、こうなるとリーチの長さが弱点に。

誉め言葉として実にいやらしい、まあ、戦いでは当たり前なんだが。

切り払いとか振り回したくても路地の狭さが、壁が攻撃の邪魔をしている。

もろい壁だから壁ごと吹き飛ばすなんてのも出来るが、

相手は私と力量差なしな司、ならばそんな攻撃をしたら致命的な弱

点が。

壁ごと吹き飛ばす攻撃をするなら大振りになり攻撃は隙だらけになり、

しかも、方天画戟が壁に当たる分速度も威力も鈍くなるのですから。

司にとっては絶好のチャンス、私にとっては大ピンチになってしまう、

いつもより遅い隙だらけな攻撃、懐に飛び込まれたらおしまいですよ。

仕方ないから路地で戦うとなるとどうしても攻撃の手段が突き主体になってしまう、

ならば司にとってを防ぐのは簡単、防御に徹してカウンター狙いで。

ならば、こちらは方天画戟を捨て素手での攻撃に持ち込もうとしたが、

そうなると今度は司が圧倒的に有利な状態になってしまう。

元々、司には身長差で負けていて更にこちらは素手、司は鉄扇とリーチの差が。

私と司の本気の戦いであり寸止めなんてない殺しあい、

武器なんか捨てて正々堂々かかってこいなんてお互い言う訳もなく。

結局初戦はリーチの差に敗れ司の鉄扇の殴打で鼻骨、顎、鎖骨、肋骨、膝、

全身のありとあらゆる骨を砕かれ、何ヵ所内臓が破裂したのだろう

か？

現代でも助かるか分からないような確実な致命傷を負わされました。

見事な完敗、アホみたいな回復能力、あと神の力でこの場では死なないが、

痛みがないわけではなく半端でない痛みに苦しまされましたよ・・・。

神が楽しみたいらしく、一本目が終わるとまた洛陽の別の場所に飛ばされる、

また最初から索敵からスタート、今度は私が有利だった。

およそ１５０ｍ先、闇に紛れ物陰を慎重に動いている司君発見、

慎重に動いているのは分かるが、司君、最初にこちらに気付かれたのは失敗だよ。

司の動きをゆっくり観察する、二本目開始から既に四半刻が経過している。

向こうはこちらがアウトレンジに切り替えたことは認識したようで、

司も遠距離用に元戎を持っているが、ただこちらより射程距離ははるかに短いからな。

だから、こちらは向こうの射程外である１５０ｍを維持し続け、

司に見つからないように気を付けて観察している。

向こうはこちらをまったく認識出来ていない状態ですが、
だが本能で感じているでしょう、自分が既にロックオンされている
ことに。

何となく感じるんでしょうないやな感じを、喉が渇き、背中やわき
の下が汗まみれになり。

さて、こちらは焦らずにゆっくりと息を潜め攻撃のチャンスを待ち
ましょう。

月に雲がかかりはじめそうですね、では、そろそろいきましょうか。

古式通りに半胡坐射で、私の弓は弓だけでなく矢の羽も軸も真っ黒
に塗ってありますから、
街灯など無いこの時代、明かりは月くらいしかないこの闇夜、そし
て月に雲がとなると。

この世界に来てさんざん鍛えた私には１５０m程度の距離なら余裕
で狙った場所に。

弦を引いた時のキリキリという弓のきしむ音で気づかれないか、
そんな事を思ってしまうほど無音の世界、息を整えて。

ヒュッ

放たれた矢の空気を切り裂く音が一瞬だけ耳に残る。

綺麗に吸い込まれるように矢は司の胸に突き刺さった、

後ろの壁にもたれるようにゆっくりと倒れこむ司の体。

多分司が受けた傷は致命傷なんだろうが、鎧を装備している為、油断しないで壁にもたれ掛かって倒れている司にもう一本矢を放つ。

次は鎧では守れない首筋を狙って放つ、矢はまたも吸い込まれるように突き刺さる。

遠目で見ても完全に動かないのが分かったので確認の為近づく、最初が司の心臓を貫き即死だったろう、そして二撃目は喉を貫き確実にトドメをさしている。

本気の戦いであり、殺しあい、いくらこの場では死なないとはいえ、やはり２０年以上の付き合いの友人を射殺すのは気分の良いものではないな。

―神―

実に面白い、この二人はいつ見ていても。

二人の育った環境ならば正義感、倫理観等で躊躇われるような行為も、

二人は呼吸のごとく当たり前のように計画し実行する。

正義や悪などといった感情が他人に比べて乏しいわけではない、世の中を斜めに見すぎではあるが、自分の行いが誇れない事を知っている。

だが、それを恥じることなく当たり前のように行い続ける。

今もそうだ、自分達が強くなるため強力な敵が必要ならばと、
つい先程まで笑いながら話していた友人を、今は全力で殺しあっている。

憎しみがあるわけでもなく、悲しみがあるわけでもなく、
かといって戦闘狂でもない二人が、どちらもむしろ直接的な戦いを嫌っているのに。

だが、今の二人の様子を見ると殺しあいを楽しんでいる。

どちらも人でありながら人とは思えないような思考をしているようじゃ。

「楽しいなあ司君、全力でやりあえるのは」

笑いながら方天画戟で全力で斬りかかっているの、あやつは。

「保さん、容赦無さすぎですよ、なんですか最初の一射目で心臓ですよ、
即死なのに、更に喉笛ってどれだけ僕を殺したいんですか！？」

鉄扇で攻撃を弾き返しながら器用に喋っているのお、
普通ならばこんな状態で喋っていられるような余裕はないんじゃがの普通は。

「一本目のお前に言われたくないよ、なんだあの殴打は、
体中の骨が砕け内臓が破裂したぞ、派手にやってきやがって。」

笑いながら至極楽しそうにいつも此処で馬鹿な会話をしているように、
いつものように話ながらお互いの命の奪いあいをしているのじゃから。

この二人は人間としてなんなのじゃろうな、実に観察対象として面白い。

そんな事を思っていると今回の決着が着いたか。

保の方天画戟が司の腹を貫いたな、決着がついたなと保が油断した瞬間、
司がその隙を見過ごさず喉を咬み千切ったか、司の勝ちか、ただ司も致命傷じゃが。

凄まじいな、腹を貫かれ致命傷を負っているのに諦めずに喉を咬み切る、
司は人の命だけでなく自分の命すらも勝利に必要なら利用する、その執念。

保よりも手段を選ばぬという点では司の方が強かろう、
ただ、技、力、キレ、速度等はわずかながら保の方が上ではあるが。

成長限界突破能力を付与したが二人とも１４歳で既に限界突破するとは、

思考といい武力といいここまで面白い生き物だとは、見ていて飽きんぞ。

―司―

神にそろそろ時間じゃろと言われるまで保さんとやりあったが、保さん強すぎ、強いというか友達に容赦無さすぎですよ。

脛椎折られたり、首をもがれたり、腹貫かれたり、いくらこの場では死んでも平気となっていて全力でいけるとはいえ。

「司君やり過ぎ、えげつないの多すぎ、目を普通に潰してきたり。」

保さんほどではないですよ、まったくもう。

「いやいや、そっちの方がやりすぎでしょう、僕を何回殺しましたか。」

それにしても、笑いながらこんな事を話す僕達は狂っているんでしょうねえ。

さて、この続きはまたいつでも出来るので、まずはゴミ掃除の下調べですね。

今日僕たちがゴミ掃除をしてもいいんですが、長安の時みたいな揉め事はごめんですので、

今日はしっかり下見をしておいて、確実に殺れる時に殺りましょう。

それに拐われた被害者である桜花さん自身が手を下したい、と言うかもしれませんし、
もし僕達が行動を移すにしても念のため奴等を拉致るだけにしないといけませんね。

監視しますか。

それで攫った後は桜花さんから処刑のＯＫサインを貰いましょう、
それで最後は天誅と書いた紙でも銜えさせ洛陽の大通りで晒し首にでも・・・。

―桜花―

涼州から派遣された人達の宿である大谷商会の内部は大騒動です、
保さんと司さんが朝出掛けたまま夜になっても帰ってこないので。

「桜花さんみたいに攫われた？」

「何か揉め事に巻き込まれた？」

皆さん色々可能性を考慮して心配していますが。

二人の実力ならば大抵の問題に巻き込まれても平気でしょう、
むしろ、あの二人が野放しになった方が問題で、二人よりも洛陽が危険なような・・・。

皆が必死になって探し回っていましたが夜中になっても見つからず、今日はもう駄目か、捜索の続きは明日になると思っていたら、玄関から声が。

「「ただいま～！」」

話題の保さんと、司さんの声です、周りの騒動を知らないのかのんびりしたもので。

二人が帰ってきたと気づいて、心配していた薊さん達と玄関へ向かいました。

“何をやっていたんですか！！！！”と、怒ろうと思ったが二人の姿見て唖然としました、
なんで服やら顔やら全身血まみれなんですか、しかも二人共陽気に笑っているんですか！？

ものすごく怖いんですが、その姿が。

「二人とも自分達の姿が異常ってわからないっすか？」

あの色々と残念な光さんが言うとおりです。

どうやら二人の血は怪我をしたという事ではなく返り血のようですが。

そして、此処で気づいたんですが二人の後ろに転がっている人間達が、
引き摺って連れてきたと思われる、血まみれで気絶している人はな

んなんですか！？

「保さん、司さん、その後ろの人達は一体誰なのですか？」

玄関に集まった皆同じことを思っていましたが代表して薊さんが尋ねました。

予想だにしなかった答えを保さんが答えてくれました。

「桜花さん後ろの者達は貴女への約束のお土産です、煮るなり焼くなり好きにしてください、
とりあえず膝を砕いたりしたんですが、その程度でピーピー喧しいから気絶させたんですが。」

保さん、明るく楽しそうに膝を砕いたとかとんでもない事を言ってるんですか！？

って、何で私にそんな怪我人がおみやげになるんですか！？

「だ、だ、だいたい、誰なんですか、私へのお土産といわれたこの可哀想な人達は？」

気になるので詳しく聞きましょう、この私宛のお土産といわれた可哀想な人達は、
一体、私がいつ半殺しにされた男どもを欲しいと言ったのでしょうか？

「桜花さん、覚えていないですか?前に貴女を拐った例のゴロツキ5人ですよ。」

司さんが説明してくれたけど、ちょっと待って!今なんて言いました!?

「「「「えっ!?」」」」

この玄関にいた人間皆が同じように驚いていました。

「前に話をしましたとおり僕と保さんは桜花さんを攫った奴らを探していたんですよ、
それで偶然なんですが、この前手に入った情報でどうやらこいつ等だと分かって、
保さんと5人全員の身柄をおさえられるように朝から見張っていたんです。」

あの時に司さんが「ゴロツキ共は洛陽に着き次第捜索し処刑予定です。」と言っていたけど、
私がいないのによく私を攫った人達って分かったんですね、でも本当に本人なのでしょうか?

もし人違いだったりしたら、顔見ましたがこんな顔していましたが。

「桜花お姉ちゃんを攫った奴らがついに捕まったんだね、こいつら殺してやるー。」

梅花ちゃんやめて、おさえてー、人違いかもしれないんだし。

「桜花さん安心してください、こいつ等が犯人であるのはこいつ等自身が自供しました、
しかも桜花さんだけでなく過去にも色々人攫いをやっていたりと自供を・・・・くくく。」

人違いかも?なんて、私の不安な心中を察してか答えてくれた保さん、
それにしても自供したと笑いながら言っていたが、保さんの笑いが怖い。

「いつでも逮捕できるように朝からずっと行動を見張っていたんですよ今日は、
とはいえ、さすがに夜になったので一旦戻り皆に連絡をしようと思ったんですよ、
そしたら、どうもこいつ等の様子が変でして、新たに事件を起こそうとしていたので、
このままでは罪なき人に更に被害が出ると、今しかないと保さんと身柄拘束をしたんです。」

この人達の新しい被害者が出る事が無くてよかった・・・。

でも、何でこんな無茶を。

「董孟高様や李文優様が幾ら強いとはいえ、しかも事件が起きそうと緊急性があるとはいえ、
二人で暴漢五人組を取り押さえるなんて無茶をしないでください!!」

うん、百合さんが言う通り、二人ともすごく強いけどそんな無茶をするなんて、
もし二人の身に何かあったら私はどうすればいいんですか。

「王子様がそんなことするなよ、そういうのは護衛である俺の仕事なんだから！」

嵐さんも二人の無茶に怒っていました、保さんが帰ってこないのを心配していましたし。

「「今回の件で皆さんにご迷惑をおかけした事深くお詫び申し上げます」」

保さんと司さん二人が揃って謝ってくる。

とりあえず二人が謝った後に、薊さんが玄関口で皆話しているべきではないと。

たしかに、真夜中とはいえ縛られた血まみれの男達連れて来た血まみれの保さん達、
こんな姿を知らない洛陽の人々に見られるといけないですから。

人目につきにくく音が外に漏れないように全員で倉庫に行ったのですが、
そこで保さんが私に聞いてきました。

「桜花さん、今からあなたに酷な質問をします、貴女が当事者だからですが、

もし、答えられないというのならば答えなくてもいいです。」

保さんが聞いてくる事は、この人達の処分をどうするかですね。

「役人に突きだせばこいつ等は人攫いであり死罪は免れません、貴女は被害者ですし、
もし恨みを晴らしたいというのならば貴女が恨みを晴らしてもいいですし。」

そう言って、保さんは方天画戟に手をかけました、
殺したいが自分の手を汚したくないなら代わりにということですね。

「僕としては役人に突きだすのではなく、此方で処刑をすべきかと思いますが、
死体を洛陽の大通りに並べておくんです立て看板と共に見せ物にして、
人攫いである外道共に天罰を下したなどと書いておけば見せしめとしても良いかと。」

さらっととんでもない怖い事を言っている司さん、
私自身恨みはありますし、見せしめの効果も分かります。

でも、やはり役人でも何でもない私達が勝手に私刑をやってはいけないです、
梅花ちゃんは私を攫った奴らだからやってしまえなんて怒っていますが。

「私刑はいけません、恨みはありますが恨みを晴らす為に私達が勝手にやったら、

それでは彼らと同じで私達も犯罪者になりますから。」

私がそういうと薊さんや保さんはホッとした表情をされていました。

「やはり桜花さんはまともですねえ。」

司さん、まともでないのは司さんや保さんですよ・・・。

「桜花さんの言うようにこれから先は役人に任せましょう、私刑はやめましょう。」

何となくだけど、保さんも司さんもホッとしたという感じの表情だった、

あの時も人を切ったりしていたけど根は暴力が嫌いな優しい人達なんだろうな。

「了解しました、では、罪状を書いた竹簡といっしょに警備隊の詰所の前に捨ててきますか、

僕達がやったとか余計なこと喋られないようにする為に喉笛を潰しておきましょう。」

司さん、私刑はやらないと言っているじゃないですか、

さらっと恐ろしい事言わないでください。

根は優しい人だと思ったのに、でも、保さんは。

「アゴ砕くくらいでいいだろ、喉笛はやり過ぎだ。」

アゴ砕くのもやり過ぎです！！！

「どうせならば裸にしてこの寒空の下詰所の前に捨てておくのがよろしいかと。」

ゆ、ゆ、ゆ、百合さんまで何を言っているんですか！？

「こいつ等運ぶの面倒だし、足に縄つけて馬で引き摺って連れてくか？」

嵐さん、それは詰所に着くまでに彼らは死んでしまいます！

「面倒だからこのまま埋めるッす。」

「その上に桜でも植えてやればいいだろ墓石代わりに。」

光さんに日さん、処刑はしないって言ったじゃないですか！！！なんですか生き埋めって一番残酷じゃないですか！

「日、梶井基次郎とは文学的だな！」

保さんなに褒めているんですか、止めてください。

「面倒だから筵をかぶせて火をつけるとかすれば、今後の処理も楽なのに。」

だから司さんの意見は怖すぎます！！！

「裸にするのならば涼州の砂漠地帯に放置するのが良かったんでしょうがねえ。」

薊さんまで、誰も止める人がいないなんて。

「桜花お姉ちゃん、涼州に勤めるようにしたのってもしかしたら間違いだったかもね。」

梅花ちゃん言わないで、私もうすうす感じているの、でも、それは認めたくないの・・・・。

涼州の人達は“優しい”人達ばかりなようです。

第三十五話、約束は守ろう（後書き）

締まりが無く、ただただ長いだけの話になってしまった。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております

第三十六話、一方的敵視に困る日々（前書き）

司君のモデルである友人達と飲んできました。

「足なんか必要ないんですお偉方には分からないんです」
と骨折して松葉杖なもう一人の友人に良い笑顔で言ってました。

相変わらずクレイジードクターでした。

今回は保君達の活動が順調にいきすぎた故の弊害について書いてみました。

第三十六話、一方的敵視に困る日々

一保一

「僕は人に愛されたい！！」

司君の叫び声が広がる、洛陽の臨時執務室

当然ながら一同ポカーーーーン

少したってから、

「司、お母さんは貴方を愛していますよ。」

いや、薊さん、司の発言は多分そういう意味ではないですよ。

「王子様、アイツがまた気持ち悪い事を叫び出したが殴っていいか？」

嵐さん、司君の行動は突飛だが暴力はやめてあげて。

「李文優様は会えない淳于仲簡様への愛を欲しているようで。」

百合さん、それ絶対に違う、連日涼州から送り届けられる紅さんの手紙を見る度、

紅さんの愛が重たいし怖いと怯えているぞ司は。

「文優は元から変だったっすが、遂に狂ったっすか。」
光に馬鹿にされるなんて可哀想過ぎるぞ、司君。

「どうした?愛をくださいなんて、辻仁成にでもなったのか?」
今の世代に分かるのかな?一応私の世代よりもっと上なんですが辻仁成は。

「保さん、僕はラジオで真夜中のサンダーロード、とか言わないですよ、
大体、ＥＣＨＯＥＳなんか分からないでしょ保さん以外の皆さんには。」
司君懐かしい!言ってたねえオールナイトニッポンで言ってた、言ってた。

「辻仁成ではないんだ、僕はてっきり司君が生まれ代わりだと・・・ニヤニヤ。」
意味深な言い方をして、ニヤリと笑う。

「何か含む物があるみたいですが、言いたい事があるならどうぞ。」
司君、今、君は自分で自分の死刑執行命令書のサインをしたようなもんだぞ。

「司君が辻仁成かカヲルかと思ったのは、だってあんなキザな、ほら、司君、紅さんにB「アーーー！保さんあんた馬鹿だろ！何を言っているんだ！！」」

司君が焦っていますねえ、なんで私が知っているんだ！？と、ふふふ、あの下半身が自由な司君があんなこっ恥ずかしい台詞を吐くとは。

「なんで保さんが知っているんだよ、一番知られちゃいけない人に！！」

いえいえ、知られちゃいけないのは今後司君が口説く女性だけですよ。

「王子様、アイツどうしたんだ急に頭抱えて？」

「李文優様に一体何があったのですか？」

「司君のあの慌て方ってその人に何を言ったの？」

皆、司君のあまりの慌て方に相当気になっているようで。

私は独占が嫌いなんです、良い物は共有しないといけません。

「嵐さん、百合さん、桜花さん耳貸してください。・・・ゴニョゴニョ」

秘密の独占はいけません耳打ちしてあげます。

「「「えっ、マジで!?」」」

普段の皆さんと全く違う口調で反応したのが、余程驚いたんでしょうね。

「アイツ凄いな、そんな事言うんだ、俺も王子様に・・・。」

ふふっ、嵐さんが望むならいつでも言ってあげますよ。

「李文優様も普段と違って、キザな事を言われるんですわねえ。」

百合さんが司君を見る目がなんか妙に生暖かい感じになりましたね。

「司君が好きな人が、それが当人にそんな事言われたらねえ。」

桜花さんも生暖かい目線で司を見ながらニヤニヤしていて。

「あんたサラッと人の秘密をばらしやがったな!?」

司君怒っているのかな?もう、短気なんだから、もう。

「いい加減にするっす、文優は馬鹿で仕方無いっすが、
いきなりワケわからんことを言いだしたりするなっす!
孟高や皆もそれで騒ぎ立てるなっす、まじめにやるっす!」

「「「「「光に言われたよ・・・」」」」」

って、最近このパターンがやけに多いので、光に言われて凹むのは無しで。

話を本筋に戻しましょう。

「司が愛が欲しいとかいきなり寝言を抜かしたのはどうした？」

いつも発言が突飛な司君、慣れるとなんでそんな話か感覚で分かりますが、

とはいえ、訳がわからないですね、下半身事情ではないのでしょうが。

「ここにいる涼州の人間に理解してもらえないかもしれませんが、なんか、最近至る所で僕達は目の敵にされていませんか？」

司君の発言に対し皆はウウンと否定を表すように首を横に振っている。

「涼州の秘密を探りに細作が潜り込んできているとかはありますが、他州、宮中、商人からあからさまな敵意をとかはないですわね。」

百合さんはないですか。

「洛陽の街の奴等は涼州の人間と比べて暗いし雰囲気悪いけど、敵意とかはないぞ、こっちを羨ましがっているとかはあっても。」

嵐さんは素直な性格だからか感覚で敵意とか察するの上手いですし間違いないでしょう。

噺の本題と関係無いが、嵐さんが言うように洛陽の雰囲気悪すぎですね、陰鬱というか、

まあ涼州が景気や政治が良すぎるから雰囲気が良いとかなんでしょうが。

「私は元々洛陽の人間ですが特には敵意を感じませんが、梅花ちゃんは何かそういう悪意みたいなの感じた事ある？」

「桜花お姉ちゃんと同じで敵意は感じた事ないなあ、やはり妬みとかかな？」

洛陽の人間である司馬姉妹も感じることはないですか。

「個人的怨恨は？」

「阿多の言う通り文優が恨まれているだけじゃないっすか？」

日や光が言うようにそれもありそうだが違うんだよなあ。

「じゃあ、司の言う事が分かる人間は私くらいだけですか。」

司と私以外は明確な悪意を向けられてはいないようで、ちょっと羨ましい。

「保さんありますよね！こっちは悪い事していないのに嫌味言われたり、

勝手にこっちを敵視して、今すぐ殺すぞ位の目で睨んでくるのが！」

なんなんでしょうねえ？好いてくれとは言わないがそこまで嫌わないでもと。

「失礼な話ですが、気のせいでなくてですか？」

百合さんとかからしたら信じられないんでしょうが。

「いや確実ですね、私ならば宮中であった皇甫嵩に色々言われたり、あとはなんだ曹家に家庭教師で行ったときが酷いんだ襲われたりしますから。」

皇甫嵩に睨まれるとは思いもしなかったですよ、

三国志ではいい人なんですけどねえ知名度は微妙だが。

「僕は宮中に行った際に会う王允とかが敵視してきて、あとは袁家で襲われたり。」

王允なんて美女連環の計しかない三日天下のじじいのくせに。

「「「えっ！？」」」

皆、驚いている、そりゃそうだ家庭教師先で襲いかかられたとかなんて。

「袁家や曹家から来ているんですよ、潜り込んだ細作とかでもイラッとさせられているのに、
袁家と曹家なんか客だから、こっちは細作を捕まえても一応生かしているんですよ、
捕らえている奴等の首切り落としてアイツらの家の前に並べてやろうか。」

まったく、曹家や袁家は何を考えているんでしょうか？

「そんなひどいのか王子様っ！？」

嵐さんがいない一人の時が酷いんですよ。

「でも、どうしてまたそんなことに？」

百合さんが聞いてくるが、たしかに原因はなんなのか気になりますよね。

「保さん、こちらは心当たりが全くないですが、原因究明のため、
どんな状況で襲われたりしたのか思い出しながら考えてみますか。」

司君の言う通り過去の状況から判断してみるしかないでしょう。

「皇甫嵩に言われたのが“何進将軍にどう取り入ったか知らないが、貴様らのような洛陽を腐らす人間の好きにはさせないぞ”とか言ってくるのが。」

酷い言われようですよ、言っている事もわけわからないですし、なんでしょうかこの嫌われ方。

根も葉もないですよ、洛陽を腐らすなんて。

「あと曹家なんかまったく意味がわからないですよ！曹操と夏候姉妹に、
“あの金髪グルグルの部分も頭蓋骨か？デコッパチに鬼太郎もどき、どうなん？”
と尋ねただけですよ、信じられないことに三人がかりで襲ってくるって。」

どんな野蛮人でしょうか、いきなり三人がかりで襲い掛かるなんて。

戦いを挑むにしてもせめて一対一でしょうが、まあ、三人くらい片手でも余裕ですが。

「僕は王允のじいさんに“十常侍と共に宮中を腐らすウジ虫が”と罵倒されたり、
袁家は“昔のおしとやかな姫やまともな文ちゃんを返せ！”と殴りかかってきて。」

司君も苦労しているんだなあ、御苦労様ですよ。

「「逆恨みもなんとかしてほしいですよ、はあっ・・・。」」

ため息までも完璧に司君とハモる。

官位の売買を後押しして、阿片を教えてあげたり、賄賂あげているくらいで、
漢王朝の寿命をほんの少しだけ縮めてあげているだけなのに。

「お、お二人の言っている事がよく分からないのですが。」

あらっ！？頭の良い百合さんらしくもない。

「保さんに司さん、それは逆恨みではなく当然かと。」

あれっ、桜花さんが違うというなんて。

「桜花お姉ちゃんの言うように、当たり前の事を言っているよ。」

あら梅花さんまでもが違うと言ってきますが。

「文優も孟高も馬鹿っす！」

いつも言っているが光にだけは言われたくないダメージがでかすぎる。

「いやいや、僕達が腐らせるとかって酷くないですか？既に腐っているのに、
なんか如何にも僕達が元凶みたいな言われ方するのって癪にさわりません？
お前らが無能だから腐っているんだと、こっちは少しだけ加速させただけで。」

司君の言う通りです、既に終わっている物にトドメを刺しにいくだけで何が悪いと。

死にかけていて治療してどうせ助けられないというのならば、
無駄な延命なんかするよりも早い段階で延命治療なんか止めるべきです。

「だいたい曹操のあの髪はどう見ても骨でしょ、サイの角みたいに。」

まあ、実際のサイの角は毛が硬質化した物で骨ではないんだが。

「夏侯惇は綺麗なオデコだからデコッパチと呼んであげたくらいで、
あとは卵の白身塗って炙ってテカリを出そうとしたり、額に肉と書いただけですし、
妹の夏侯淵に片目隠すのは鬼太郎だよな妖怪レーダーないのか？そ

んな髪型していながら。」

たったこれだけで、いくらガキとはいえ武器構えて三人で襲い掛かるなんて。

皆黙ってしまった、私の苦難を理解してくれたんでしょう。

「袁家も酷いですよね、いくら子供とはいえ殴ってくるんですから、単にねえ、袁本初のお嬢様という才能を開花させてあげただけで、あと文醜さんに博打の楽しさと借金してでも打てと教えた位で。」

元からあった才能の開花のお手伝いで文句って実にあり得ないですね、

０を１００にしたら有罪でしょうが、こっちは1を2した程度で。

あらっ！？桜花さんと梅花さんも気まずそうな顔していますね、

袁本初の才能開花させる案で知恵を貸してくれた事で何を気にやむのかと。

「と、と、董孟高様、李文優様、とりあえずはお気をつけください命狙われる事に。」

百合さんが私達の理不尽な被害に理解示してくれたか、とりあえずという点に引っかかりますが、

あくまでこちらは一方的な被害者なのですから。

「桜花お姉ちゃん、悪意無くこんな事が普通に出来る人がいるんだ

ね。」

「絶対悪とでも言えばいいのかもね梅花ちゃん。」

司馬姉妹言い過ぎです！まるで私達が凄く悪いみたいじゃないですか、
なんですか絶対悪って、正義も悪も見る側の違いで実は同じ物なのに。

「二人は曹家、袁家と戦争を起こす気っすか？」

光、戦争って大袈裟な、だいたいこちらは喧嘩を売られた被害者なのに。

「この二人という這い寄る死には、曹家、袁家ではあまりに無力か。」

日、相変わらず言い方が痛い！なんだ這い寄る死って、
こちらが被害者であり加害者ではないというのにねえ、司君。

とりあえず分かったのは司君も私も逆恨みの八つ当たりに困っていると、
う～ん、どうすればいいんですかねえ、参りましたよ。

曹操と袁紹は史実で反董卓連合を組みましたが、
やはりこちらでも董家に仇なす不倶戴天の敵になるとは滅ぼすしかないな。

第三十六話、一方的敵視に困る日々（後書き）

原作恋姫キャラでこの二人に振り回されないですむキャラはいるのでしょうかねえ？

皆さんのご意見ご感想をお待ちしております

第三十七話、州牧就任の前に（前書き）

今日は二人が洛陽に来た本来の役割に関する事で書いてみました。

相変わらずのご都合主義な話ですが、

今回も皆さんの付き合いのほどよろしくお願いします。

第三十七話、州牧就任の前に

―保―

どうも本日１５歳の誕生日を迎えた保です、しかし、誕生日に仕事をしていますよ。

そういえば前世で最後の誕生日を迎えた時は出張先での仕事でしたね、

その翌日に司君と飲んで事故死して素敵なこの世界へようこそと。

此方の世界でもウェルカムフルーツならぬ、ウェルカムデスなんてならなければいいですが。

それにしても誕生日を迎えたところで、だからなんだ！という思いですよ、

大好きな可愛い月や私の理想の女性のタイプである母上がいるわけでないんですから。

私が女性ならば誕生日を迎えて今何歳かで一喜一憂したりするんでしょうが、

私の股ぐらには立派なうまい棒がありますからねえ年齢など気にしません。

さて、訴えられそうなどうでもいい話をして現実逃避するのはやめ

ましょう、
仕事とは何かといいますと、話は二刻前に戻りますが。

二刻前

私の誕生日を洛陽にいる涼州勢の皆さんに祝ってもらうことになりましたよ、
ちなみに同じ誕生日の司君は十常侍からの呼び出しでただいまお出掛け中。

司君がいない程度ならばまだいいんですよ、誕生日会に問題がありまして。

問題とは、その宴席に何進と皇甫嵩がいるんですが、はい、困りましたよ。

「邪魔だから帰ってよ」と言えない相手なのが、大変厄介です。

大将軍のくせにフットワーク軽いねえ、なんなんだよお前！？
お兄さん心底驚いたよ、とても嬉しくないサプライズが来たね。

相変わらず皇甫嵩のねーちゃんは私を逆恨みしていて目の敵にしてますよ、
まあ、飼い主である何進がいるから表面上は笑顔ですが。

逆恨みはやめて欲しいです、私を“洛陽を腐らす元凶”呼ばわりですよ、
皆が賄賂で役職を買うからそれなら陛下がやれと提案し、賄賂まいて、
あと、いずれ死んでもらうがそれまでは扱いやすいようにと阿片を教えただけで。

私なんかその程度ですよ、皇帝が愚かすぎて漢は既に死に体なんですから、
陸に打ち上げられた鯨と同じであとは時間の問題で死ぬだけなのに。

そんな当たり前の事が分からないで漢に忠誠を誓うって阿呆やね、
腐敗の元凶の皇帝や官宦をではなく此方を恨むってなんて迷惑な。

空気ですか？最低ですよ、見た目笑顔で和やかだけど空気はピリピリで、
また、この何進のオッサン、このピリピリ感に気付かないし。

凄いよ、たぶん赤ん坊だって空気感じて読むというのに。

「今日ワシが来たのはな、おまえさんらに良い知らせがあっての。」

何進のおっさんは空気読まないで話勝手に進めている、しょうがないか。

報告を楽しみにしましょう、私達の裏工作が実った事でしょうが。

大将軍である何進が現れただけでなく、良い知らせだなんて発言、
まあ、皆内心分かってはいるが願いが通じたかと喜び騒がしくなる。

ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・ざわ・・・

うん、何人かは会話ではなく動揺している擬音だよね、カイジだね。

良い話でこのざわざわは逆転しないといけない麻雀でドラ引いたとかテンパった時だろ。

「何進大将軍のお言葉ですよ、皆さんお静かに。」

薊さんの一言で場がシーンと静まり返る

「なあにめでたいことなんじゃから騒がしくていいぞ、
涼州太守董君雅殿を益州牧に任ずる勅旨が出ることが決まった。」

よっしゃ！とりあえずこれで計画が進む、小さくガッツポーズする。

「「「「「ありがとうございます何進大将軍」」」」」

皆が一斉に抱拳礼をし頭を下げる

「近いうちに陛下の遣いの者が正式な通達を持って涼州に向かうぞ、
はっはっ、皆かしこまるでない、さあ董擢殿の誕生日を祝おうぞ。」

畏まらなくていいはありがたいし、報告は嬉しいよ、
ただ、お前さんが私の誕生日会主催者みたいになるなよ、内心突っ込む。

一刻後

「董擢殿、皇甫嵩将軍と三人で静かに話をしたいのだがな。」

はい、仕事（賄賂の受け渡し）の話ですな、貰う側が話をふるなよ。

薊さんが太守代理ですが呼ばれないで呼ばれたのが私だけなのは、
何進と交渉する汚れ仕事は私の仕事で計画者は私と司君ですからね。

とはいえ、賄賂を渡すだけの誰にでも出来る簡単な仕事なんですが。

「いやいや、今回は大変じゃったんだぞ。」

ほいほい、こういう話のふりするということは賄賂の増額要求ね、
まあ、ＯＫＯＫよ、益州手に入ればすぐ元は取れますし、金はまだまだありますから。

「何進大将軍様のお力を持ってしても苦労されたとは、
このご恩に我々は必ず報いさせていただきます。」

ふふ、金はたっぷり払ってあげますよ、ただ、この貸しは高いですよ、
十常侍と潰しあいになるようにしてあげますから、怨返しをね。

「いやな、劉焉が交州を望んだいたくせに益州が良いなんて言い出してな、
しかも、五月蝿い劉焉を洛陽から追い出したい官宦もそれを後押しして、
ちと肝を冷やしたんだ、ただまあ簡単なもので董君雅の五胡対策を見てみろ！
益州の南蛮や五胡の問題を劉焉に出来るか！と一言言ったらおしまいだ。」

前に私が教えた脚本通りにきちんとやってくれたようで。

それにしても、ついさっき今回は大変だった発言したわりには、
たった一言で解決したのかよ！と内心ちょっと突っ込みたかった。

「あと勿論お前らの望んだように涼州牧は馬騰になるようにしておいたぞ、
十常侍の馬鹿共は董家の持つ戦力を分断出来たと今頃小躍りしているだろう、
だが、実際はこれで董家は益州と涼州を支配することになると。」

司君が十常侍に利益あるように見せていますからねえ、
ありがたい事で、これでガッツリと稼がせてもらって今後に備えさせてもらいましょう。

「母である董君雅、義母になる馬騰も喜んでおりましょう。」

本当は義母予定ではないんですが、琅?さんは私に翠ちゃんをと企んでますが、
一応世間的には馬家と縁戚関係を計画していると言っております。

まあ翠ちゃん今は子供ですが可愛いし婚約は私も満更ではないですが、
ただ、将来翠ちゃんが大人になってから決めてもらうようにしないと。

「ワシにはお前さんは実に羨ましいぞ、子供と言っていい若さで知謀に優れ、
可愛い婚約者もいて、武も相当な物と聞いておるぞ、前途洋々で。」

社交辞令にしても少しは嬉しいですね、とはいえ、前途洋々なんて、
これから徹底的に大陸を切り取りに行くんですから険しい道ですよ。

「いえいえ、何をおっしゃいますか私などまだまだでございますよ、
それに私が好き勝手出来るのは何進大将軍がいるおかげですから。」

こういう謙遜嫌いなんですよ、かといって本音で、お前よりは勝っているなんて、
さすがに酒の席の冗談でも言えるわけないですがね。

まあ、此処にはいない司君ならば恐れず言いそうですが。

「だ、大将軍様はまだまだお若く、そのお力は実に優れております！」

ずっと黙っていた皇甫嵩のねーちゃんが急に声をあげる。

はは～ん、なるほど蓼食う虫も好き好きね。

「ありがとう董擢殿、皇甫嵩将軍、ただワシも分かっているんだ、自分が初老を迎えた宮中に居座る無能な輩でしかないことを。」

目の前には大将軍と呼ばれる何進が、ただ普段の豪快なおっさんでなく、
演技でなく疲れた顔を見せていた、いつもよりもはるかに小さく見えた。

「ワシは妹のおかげでこんな地位に就いているが、宮中は魑魅魍魎だらけ、
いつこの地位から下ろされ消されるか怯え小銭を稼ぐだけの小物だよ。」

己を自嘲している中年、これが本当の何進の姿か。

何進は大将軍ではなく肉屋の親父だったら良い人だったろうな、
ただ運良く？悪く？皇后の兄として大将軍の地位に就いてしまったのが。

それにしても何進のおっさん、酒が変な所に入ったんな、
でなければ自分の家族でも無い私や皇甫嵩にこんな話をするなんて。
皇甫嵩は何進の話を聞いて明らかに狼狽しているし。

「董擢殿、ワシはお前さんや董君雅殿をとても気にいっているんだ、
だから、お前さん達にワシは出来る限りの力を貸そうと思っている。
」

何進に賄賂を渡しているとか関係無く涼州が贔屓されているのは分かる、
何進に取り入ろうとする人間はそれこそ山のようにいる、
だが何進に願いを叶えてもらえる人間がどれほどいるか。

「お前さんは益州牧と涼州牧の地位を手に入れるように行動していたが、
それは目先の小銭のためではないのは分かる、もっと先を見ているのだろう。」

ほお、ちょっと感心してしまった、愚鈍ではなく愚鈍を演じていたか、
此方の動きが先を見据えた物だと読んでいたとはね、面白い。

「何進様の考察お見事でございます、ただ、此方は矮小なる者です。
」

話がどう転ぶか分からないので常に謙遜して腹の底は隠していない

と。

「隠さないでいいお前さんがワシを測ったようにワシもお前さんを測ったのだから、
野心あふれる姿、汚職を憎む高潔さもある、目的のためなら手段を選ばないとする覚悟も、
ワシもお前さんほどではないが野望はもっていたからな、同類は分かるぞ。」

何進を馬鹿にしていたがなかなかの人物だったとは、先入観で人を見ていなかったのが痛恨。

それにしてもこのおっさんの口調、過去形か己の能力の限界を知り諦めたのか？

「ワシは宮中に来た時は腐敗を憎み正そうと正義感に燃えていた、信じられないだろうが。」

多分演技ではなく真実なんだろうな、それがいまや腐敗の温床の一人とは実に皮肉な。

「元が庶民であり民を顧みない政治をする王朝への怒りがあった、
宮中を正そうとした、ただ地位はあってもワシは無力だった、
だから金をばら撒き地位を与え敵を味方に引き入れるなどやってきた。」

目的の為ならば手段を選ばずか、だがその手段こそ己が否定していた物、

このおっさんの独白が真実ならば矛盾に苦しんだんだろうな。

「それはワシ自身が若い頃怒り批判していた腐敗だった、
自分は何をしたい、自分は何をしてきた、何度も自問自答したよ。」

手段を選ばずなんて出来る性格でないなら辛いだろう、
私や司みたいになんでもありではないのではな。

ふふっ、私達は面白ければなんだっていいの間違いか。

「だからもう諦めていたんだよ、自分も漢王朝の流れに身を沈め、
蓄財に走り、己の身を守るためだけに没頭するように。」

辛い現実から目を背けたか、まあ凡人には仕方ないだろう敵がでかすぎるのでは。

「だが、常に思ってもいる、国は皇帝で成り立つのではない、国は民で成り立つ、
そんな当たり前な事を皇帝も宦官も貴族も宮中にいる誰も気づかず、
霊帝は政治を顧みず女と金儲けにおぼれ、十常侍や貴族は好き勝手し続ける、
そんな愚か者どもしかいない漢に存在の意味はあるのか？と・・・。」

すごいな、漢王朝否定しやがったよ、そこまでとは、
ポーズだけだと思っていたがどうやら本気のようですな。

「大将軍、そのようなことを申されては！」

皇甫嵩のねーちゃんも流石にまずいと止めに入ったがまあ無駄だな。

「ご安心を、この部屋の周りにネズミは一切おりませんので、
それに私も大将軍も酒に酔って夢を見ているだけで、明日には忘れていますよ。」

一応、平気な事を伝えておきましょう、こんな会話無い事にすれば。

まあ外戚で好き勝手やっている何進が実は王朝を否定しているというのが、
漢王朝に忠誠誓っている人間が聞いてはいけない内容だよな。

「ワシはな民を守ってくれるなら皇帝が誰であろうがかまいやしない、
それがお前さんだろうが五胡だろうが、誰でもいいんだ。」

そこまで覚悟出来ているというならば引き込んでみても面白そうだな。

「何進様・・・」

漢に忠誠を誓っている皇甫嵩には辛いだろうな、
自分の思い人は漢に対し忠誠どころか有害だと否定しているのだから。

「これから世は更に乱れ王朝の者では抑えられないだろう、

ワシはお前さん達ならそんな時代を勝ち抜き民を助ける事が出来ると思っている、
いや、お前さん達ではない、貴殿に民の未来を託してみたいと思ったからだ。」

何進は無能ではないどころか有能だな現実を知り未来が読めているのだから、
面白い、司に話そう、場合によってはこちらに有用な人材としてひっぱろう。

それにしてもそこまで期待されるなんてなんというか尻が。むずがゆいですね

それに正義の味方をするような人間ではないですし、そんな人間じゃないんですがねえ。

もしこれが実は演技であり私をはめる為の罠ならば、それはそれで面白いんですが、
敵として優秀な方が受けて立つ側として面白いから退屈しないで済む。

味方になるならばたっぷりとその力を利用させていただきましょう。

司君楽しくなってきたよ、私達の予想を裏切っているんですよ無能だと思っていた者が、
賢い人間だったよ、私と司が噂やイメージに注意し過ぎて人を見ていなかったなんて。

ならば、これからシナリオを書き換える準備をしましょうか。

まったく最悪の仕事ですよ、仕事が大嫌いなんですから私は、
しかも、こちらが計画していた予定が引っくり返してくれるなんて。

使い潰すはずの人材がまさか役に立つかもとは、
敵には容赦しませんが味方になるなら抱き締めてあげませんとね。

あと、此処に戻ってくる司君の説得をしないといけませんね、
「僕がいない時にそんな楽しそうな事があったなんてズルイ！」
位は怒って言いそうですから。

はあ、本当に仕事が嫌ですよ、しかもこんな面白そうな仕事なんて。
何進のオッサン、こっちに期待するならしっかりと楽しませてあげ
ますよ。

―司―

ピキーーーーーーン

うん、今何か感じた、なんか今保さんに凄く楽しそうな事があった
気が。

今回の僕は外れを引いたな、いや、いつも当たりを引いていないが。

今日は僕と保さんの誕生日会を皆がやってくれるという事なので、
大谷商会の執務室で仕事をしていて夜の宴を楽しみにしていたのに・
・・。

張譲様、趙忠様からお呼びがと言われたら行くしかないですよ。

あー、頭来た、こうなったらあとで神の元行って飯食わせてもらお
う、
目黒の北インド料理屋のカレーを神に出してもらって山のように食
べてやる！

そういえば、目黒のインド料理屋で思い出したなあ、保さんは北イ
ンドではなく、
カレーと言ったら京橋にある某店みたいな南インドのカレーだ！と。

そこに僕の姉が来て、カレーなら四谷タイ料理屋のグリーンカレー
だ！と議論になって、
あの時、保さんは大親友だがカレーに関しては敵となったんだよな
と思って。

結局いさかいが二週間以上続いて、手打ちにしようとなって仲裁役
に保さんの当時の彼女がきて、
本所吾妻橋の高級洋食屋の比内鶏カレーになり食後に明細見て震え
上がったんだ。

カレー一人前五千円でステーキやらワインもボトル頼んでいたから・
・・。

なんか保さんと喧嘩する時ケーキやらカレー、あとは酢豚のパイナップルって、
食べ物に関してばかりでかなり頭の悪い喧嘩しかないのが情けない。
でも、唐揚げにいきなりレモン汁かける奴は許さないと保さんと意見一致していたな、
保さんと僕は本当に三十越えた大人だったのか自分でも不安になってきたよ。

馬鹿な事を考えているうちにつきました張譲の屋敷に、
いつものように用意された部屋に入り張譲と趙忠が来るのを待つ。
此処に来るといつも思うのが宦官になんでなりたいんだろうねえ？
と、
血筋が良くないと太守とか上級職になれないから食うためにとかでしょうが。

よくちょん切る覚悟が出来るよなと、現代みたいに全身麻酔なんて無いのに、
だいたい切るなんてもったいないよな、相手に色々弄らせるのが気持ち良いのに。

これから来る二人は切ったにしてもどれくらいの切断なのかねえ？
玉だけが一般的だが竿も切る完全切断とかなのか？

宦官の歴史を調べると、中には賄賂渡して玉の切除甘くして、
子供を作ったという宦官もいたというのも驚きですが。

うん、僕は何真面目に馬鹿な事を考えていたんでしょうか。

おっ、考え事をしている間に張譲と趙忠がやってきましたね、
とりあえず二人の事は玉無しと玉竿無しと内心呼びましょう、
まあ僕は二人のがどんな風になっているか見た事ないですが。

「張譲様、趙忠様、お忙しい中貴重な時間を割いていただき誠にありがとうございます。」

本当はこっちが呼び出されたから、お前らが言うべきなんだけどね、
まあいいや、口先でへりくだるくらいどうだって。

「回りくどい話は無しでいこう、おめでとう霊帝陛下が馬騰殿を涼州牧に任ずる事を
決められましたぞ、早く伝えるべきだと思いましてね。」

狸に似ている張譲、本日から改め玉無し狸が言ってくる、
人を呼びつけたのは州牧の件がかなったと驚かすのと、金用意してこいよという事か？

僕は玉無し狸の報告してきた内容なんか正直どうでもよく、考え事をしていた、
狸なのに玉が無いなんて信楽焼の狸は立派な物を持っていないといけないのにと。

「ただ途中で難問もあり、官位の売買とはいえ馬騰殿はまだ州牧に

は早いと反対もありまして。」

今度は狐似の趙忠、玉竿無し狐が口を開いていた。

本当は横車なんか無いのだろうが、こちらから更に搾り取りたいんでしょう、
まあ、自分達は搾り取りたくても玉が無いから出ない、それの代償行為か？

下品だねえ、僕も言う事が。

それにしましても、こんなふざけたプロファイリングをしていたら、ＦＢＩプロファイリング捜査官ロバート・Ｋ・レスラーに怒鳴られるか？

そういえばワイドショーとかで一時期テレビによく出ていたな、なんで、ＦＢＩプロファイリング捜査官を出したがっていたかよう分からんが。

まあ、いいやＦＢＩ心理分析官の話はどうだって。

「お二方の御協力に涼州の皆は心底感謝しております、
今宵はお二方のご活躍に見合ったお礼をお持ちしました。」

喜んで受け取ってください、後の三途の川の渡り賃ですから。

「それにしても貴殿は本当に悪い人ですな、董君雅の元で働き、董君雅の息子と刎頸の友と思わせておいて馬騰の為に働くとは。」

なんか時代劇の悪代官みたいな口調で喋るなよ、笑うから。

「面従腹背とはまさにこの事ですな、いや責めているのではないぞ、貴殿のような人間がいるから不当に評価されない馬騰殿の活躍が認められたのだからな。」

評価しないのは賄賂を渡してこないからで、判断はお前さんたちだろ、まったく。

「蝶々は甘い蜜を出す花に寄っていくものですから。」

私を楽しませてくれるのは保さんだけですよ、今のこの世界では。

「貴殿にかかれば名君とか呼ばれる董君雅は蜜の出ない枯れた花ですか、

ならば、いずれは馬騰殿もとなるのですかな・・・くくく。」

何が面白いんでしょうねえ、こいつ等の笑いのセンスが分からん。

まあ、自分の大事な玉を切り落とすような人間のセンスや思考が分かるわけ無いか。

「楽しみにしておりますよ、貴殿の漢王朝への忠誠を。」

漢王朝の中心部にいる自分の懐へ届けられる金の事ですね。

「もちろんでございます。」

もちろんでございますよ、お二人とも嬉々として金を受け取っているが、
先程も言ったがそれが三途の川の渡り賃になるのにねえ、よかったね。

「貴殿の提案通り、州牧制を進める事で洛陽で口やかましく我らを非難する者共は
州牧に任命という名目で地方に飛ばす事が出来るのだし貴殿には感謝しているぞ。」

それで地方に軍閥が出来るという事を分かっていないのがいいねえ、
僕達の場合はそれを望んでいて早く戦乱の時代が来る事を今か今かと待ち遠しくてですよ。

「貴殿の実力は我らは高く買っているぞ、仕事次第ではいずれは三公の地位に据えてもと。」

十常侍や宦官の皆さんに賄賂を届ける仕事の実力ね、
三公ねえ、そんな物いらないのに、まあ、ただでくれるなら貰ってやるよ。

取り合えず、今一番欲しいのは笑いながらお前さん達の首を刎ねられる権力が欲しいよ。

ふう、疲れましたよ、保さんは今頃誕生日会で楽しんでいるんだろうなあ、
はあ、ずるいよなあ、こっちは嫌な仕事しているのに。

それとも保さんは僕みたいに何進の呼び出しを受けて僕みたいに被害を受けていたりして、
まあ、そんなことあるわけないか・・・・。

さてさて、とりあえずこの二人の狐と狸を機嫌良くさせてとっとと帰れるようにしましょう。

第三十七話、州牧就任の前に（後書き）

何進を苦悩するおっさんにしてみました、
こうする事で話がどんどん収拾つかなくなりそうですが。

さてさて、大丈夫なのでしょうか私は。

カレーで大ゲンカとか全て実話です、いやはや情けない

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第三十八話、忘れ物はお弁当？ハンカチ？皇帝の勅命？後任人事？（前書き）

今回は前回の話（第三十七話）直後の話です。

今回の話は前回の何進将軍の真面目な独白とは真逆の、
ふざけた物になっているのでしょうか？

皆さんのご意見、ご感想よろしくお願いします。

第三十八話、忘れ物はお弁当？ハンカチ？皇帝の勅命？後任人事？

―司―

「ずるい、ずるい、ずるい！！！」

僕の怒りの猛抗議ですよ。

「ズルイと言われても司君は張譲、趙忠に呼び出し受けたから仕方ないだろ。」

いや、それは分かっていますが、でも、ずるいですよ。

「でも、保さんは誕生日会で皆に祝ってもらって、それで何進から秘密打ち明けられたり、そんな素敵なイベントが目白押しって、こっちは宦官の駄話に延々と付き合わされて。」

あの会話がどれだけ非生産的だったか知らないから仕方ないなんて言えるんですよ保さんは。

「こっちは貴殿ならば三公に据えても、とか糞みたいな話ばっかりですよ。」

あれほど非生産的な話は無いですよ、要は金よこせばなんだっていうだけで。

馬鹿じゃないかと、だって皇帝が売官をやっているんですから、

阿呆共に必要以上の金なんか渡さないでも皇帝から任命されるんですから。

「三公が糞みたいって、私なんか役人でしたからそこを目指していたのに。」

桜花さんの言う事は分かりますが、金払えば買える地位なんか興味無いです、
それに地位に着くことが目的ではなく地位について何をするかが大事なんですから。

「矜持なんか関係なく貰える物は貰えば良いっす！」

おおい！これ本当に光なのか？馬鹿二号が矜持なんて言葉知っているなんて。

「いいですよ、あんな馬鹿共に世話になるならクーデター起こして皇帝になりますよ。」

ただでもらえるならば貰っても良いですが、ただ、与えられるものではなく、
自分から手に入れないとですよ、変な所で頑固ですから僕は。

「クーデターって何、桜花お姉ちゃん？皇帝になるとかとんでもない発言しているから、
謀反だとかろくでもない意味の言葉なんだと思うけど。」

フランス語で国家に対する一撃ですね、クーデターの本来の意味は。

「コイツが凄いのは皇帝になるって普通に言えるって、俺なら不敬罪が怖くて言えないよ。」

嵐さん、そんなに怖いもんですか？僕からしたら皇帝がなんぼのもんだ！と、
しか言えないですがね、お飾りでしか無いあんな皇帝に何の意味が。

「司君、君がずるいと言う発言から話が明後日の方向にずれたから話を本筋に、
今は朝議の場であり、俺と君の二人の飲み会じゃないんだから。」

確かに言われてみたらその通りですね。

「今回、僕と保さんの二人が中心になって動く事で進めた独立計画ですが、
順調に進みまずは最初の段階である益州、および涼州の州牧の地位を得ました。」

あれ？百合さんとかがなんか引いているような、って、さきほどからか。

「李文優様、独立計画という表現は漢への反意有りとなりますので言葉をお控えください。」

百合さん違うよぉ、反意有りという事ではないんですよ。

「「最初から漢など相手にしていない（だろ！）です！」」

保さんと見事に重なりましたね。

「昨晩じっくりと何進大将軍と話をしましたけども、私も彼と同じですね、
忠誠を誓うのならばあの阿呆な皇帝ではなく民に誓いますよ。」

そうですね民は税をおさめてくれて僕等を食わせてくれるのですから、
王朝などは税を奪うだけでただ存在するだけの邪魔な存在ですから。

「保さんが今さらっととんでもない事を言わなかった、桜花お姉ちゃん?」

「私もとんでもない事を聞いてしまったような気がするな、梅花ちゃん。」

あれ?司馬姉妹は耳が遠いようですねえ、僕にはしっかり聞こえましたが。

「孟高さん、今の発言はどういう事ですか?」

母上とかに詳しく説明してもらえますか保さん。

「今言ったとおりで何進は皇帝に忠誠なんか誓っていません、それに彼は、
うわさされるような暗愚ではなく先を見る目がある等かなり優秀で

す。」

保さんが家臣について更に話を続ける。

「何進は今のままでは漢に先が無い事、王朝が倒れる事をしっかり認識しています、
彼は漢王朝を正そうとしたが無理だったので、そのかわりこちらに夢を託すと。」

夜中に戻ってきた後、保さんが話をしたいと言われてこれを聞いて驚きましたよ、
僕も保さんも噂とかを信じ込み己の目で何進を見極め無かった、痛恨のミスですよ。

まあ、私のミスで誰か死んだとかいうようなわけではないんですが、こんなミスを簡単に犯すようでは戦場で軍師なんか出来ないですよ、自分が情けない。

「そうでしたか、何進大将軍の協力をいただけるのは心強いですね、ただ今は必要なく、私達は益州と涼州を統一し富国強兵策を推し進めるのですね。」

母上の言う通り、・・・ではないですね、州牧で就任する前にやらないといけない事が。

「保さんは何進に、僕は張譲、趙忠に話をして例の物を貰えるように話を。」

州をまとめるのが簡単になる魔法の書類をね。

「文優例の物ってなんすか？もったいぶらないで教えるッす！」

光ではさすがに分からないか。

「見せ場なんだから我慢してやれ。」

日、確かにそうだが、そこは言わないでください。

「霊帝からの勅命です、これを命を早急に出してもらわないと、州牧就任と同時に、
うん、これは金はかかるがやむを得ないので、緊急の出費の申請をしたいと思います。」

これは州牧の地位買った根回しよりも高くつきそうですが、やむをえません。

「保さん皆さんが気になっているようですし何故勅命が必要か話ませんか？」

直前まで明かさないでもいいんでしょうが、教えておいた方が、
次の作戦に移した際に皆に指示を出しやすくなるでしょうから明かしましょう。

「計画しているのが州牧就任と同時に益州の大掃除です、ただこれ

には大きな問題がありまして、
あくまでも太守や県令は漢が任ずるもので私達が罷免できる物ではないのが。」

保さんの言葉に皆が嫌な予感がという感じの顔していますねえ、
皆さんが心配するようなことではないんですがねえ、至極当然なもので。

「だから、太守や県令の罷免という権限を一時的でいいから皇帝陛下の勅命で貰いたいと、
まともな太守達もいますが、調べる限りどうしようもないのも多数いますので。」

まあ、皆さん納得してくれたようで、短期間で制圧するには必要ですから、
使える物は何でも使わないといけませんからねえ。

「そこで州牧就任の祝いだとかいって皆集めて、その場に保さん達が兵を率いて登場、
事前に調べておいたどうしようもない奴等をまとめて処刑・・・、
もとい罷免を。」

オオっと、つい言い間違えてしまいましたよ。

「桜花お姉ちゃん今処刑って言ったよね？」

「処刑と間違い無く言ってから罷免と言い直したね、梅花ちゃん」

あらっ、司馬姉妹が若干震えているような？

気のせいですよ、気のせい、処刑前提なんて考えていませんから。

「司君いくらなんでも本音が漏れ過ぎだよ。」

あらまあ、手遅れでしたか、まあ、いずれ話す事でしたし。

「それでもし宴席に現れない連中がいるなら、僕や日、光が兵を率いて攻めると、
こちらには勅命があるのですから、そういう連中は朝敵という形で処理を。」

あらっ？周りを見ると皆完全に引いている、大げさなんだからなあ。

とりあえず勅命貰ったら長いようで短かった洛陽の滞在期間が終わりますね。

「僕と保さんが動けば勅命はすぐに貰えますし洛陽からの撤退も近いですから、
一か月も無いでしょうし皆さんそれまでの間に洛陽にお別れをしておいてください。」

とはいえ、洛陽で色々あるのは洛陽在住の司馬家の皆さんくらいだけでしょうが。

「司、撤退の話はいいですが後任の大使への引き継ぎもありますからそんなあせらないでも。」

確かにそうですね母さんの言う通りで、それにしても後任は誰になるんでしょうねえ？

「保さん、後任の大使は誰と誰になるんですか？涼州と益州で二人いるわけですから。」

保さんが固まっている、どうしたんだ？

「ごめん、涼州への連絡で、後任をよろしくと言う事を伝えるの忘れていたどうしよう。」

ちょっとまったーー、保さんだいじょうぶなのか、それ？

「「「「「えっ？」」」」」

うん、皆がえっ？というのも当然ですよ

ー保ー

「大事な事を忘れていたな、どうするかなあ・・・。」

私としたことが情けないにも程があります、いやはや。

「でも言われてみたら確かに僕もすかーんと忘れていましたしねえ。

」

司君の言うようにスカーンと忘れていたと言う表現がピッタリですな。

「何でそんな大事な事を忘れているんですか！」

桜花さんの言う通りで、誠に申し訳ございませんとしか言えません。

「司馬伯達さんの言う通りですわよ、一番大事なことなのではないですか！」

桜花さん、百合さんとステレオで怒鳴らないでも、マリアナ海溝より深く反省してます。

「まあ、起きた事は仕方ないんだから、これからどうするかを。」

たしかに梅花さんが言うように大事なのはこれからどうするかで。

「よしっ！梅花さんは僕達のみか「諦めているだけ」・・・そうですか。」

司君が梅花さんに瞬殺されてしまいましたよ。

「孟高や文優の駄目な所は皆知っているっす、周りがもっとしっかりしないとっす。」

光に駄目人間呼ばわりされると本当に来ますよダメージが。

「とはいえ、二人だけの問題ではなく、誰も気づかなかったのが問題だ。」

日の言う通り誰も気づかなかったのが問題なんですよ、なんで知力や政治が８０台とか普通にいて、こんだけいて誰も気づかないんだ。

「「「うっ！」」」

あっ、馬鹿一、二号にセットで正論言われて軍師勢の皆黙っちゃったよ。

あっ、どうも、もうすぐ益州牧になる董君雅の長男、保君です。

今、議論しているのは本国に後任大使を送ってと頼むのをガッツリと忘れていたことで。

大使の件で一番無難なのは薊さんと司、私をそのままでしょうが、ただ、これには問題が、

私達がいないと益州と涼州と別れるから人が育つまでは当分の間人材不足に悩まされるのが。

益州でどれ程優秀な人材がいるかが問題ですねえ。

細作と太平要術の書の下調べだと使えそうな武将で黄忠、厳顔、張

任、法正らがいるが、
とはいいましても、彼らを涼州流政治になれさせるのに時間がかかるでしょうから。

あと、司と私が戻るの遅れると仕官学校、医学校設立が遅れる問題もありますし。

此処で司君がひそひそと耳打ちをしてくる。

「保さん最終手段だ、成都↓あの部屋↓洛陽の移動で、あれならすぐ行けるから、
拠点は益州や涼州に移していても対して時間のロス無く出来るのが。」

駄目です！それ凄く便利ですが明らかに不審でしょう！？
朝洛陽にいて、昼に成都にいるなんてあり得ないでしょうが。

と言いますか、はじめて聞きましたよ、あの部屋経由の移動って！
そんな手段があったならば私達は洛陽駐留しないでよかったじゃないですか。

実際、司君もそれが出来るならば紅さんの件で苦労しなかったのでは？

「保さん、あの部屋経由の移動には実は大事な問題があるんですよ。」

私の心を読んだのか司君が更に耳打ちしてくる。

なんでしょうか?ドラマのフリンジみたいに境界を移動し続けると肉体に損傷が?
いやですよシェイプシフターになって水銀飲むような生活は。

そうでなくても人間離れしたアンデルセン神父並みの回復能力があるのに、
更に人外化が進むなんて真っ平ごめんですよ、いくら私でも。

「安心してくださいフリンジみたいにはなりませんから、ただ、大事な問題です、
経営者の私がいつもいたら従業員が働きつらいでしょ?」

頭痛くなってきたよ、まあなんとなく分かるよ言いたいことは、
支店に本来ならば本社にいる社長や会長来ると息苦しいのは。

まあ中にはそんなの気にしないどころか役員に恐れられる人間もいますが。

私の友人で、ある上場企業に入社が決まり新入社員歓迎会で役員達との食事会になり、
全員酔い潰していって役員達に恐れられた新入社員がいたんですが。

アイツよくクビにならなかったよな、今や若き課長と出世コースにのっているが。

まあ、そんなどうだっていい話は置いておきましょう。

「そんな理由なのかよ！」

とりあえず司君には怒っておきましょう。

「大事でしょうが、社員のやる気をという点では！」

お前さんは例の武器屋の経営者の前に涼州の政治家だろう。

「二人で何をひそひそ話をして盛り上がっているんですか？」

あっ、薊さんに気づかれた、どうするんですか司君？

「すいません、もうすぐ紅さんに会うんだなと思い出しまして、帰国後を想像し軽く現実逃避をしてしまし、それを保さんに怒られてました。」

よくまあ適当に息をつくように嘘が言えるなと、ただ、言い訳には無理がないか？

「今は仕事中ですよ司、ただまあ、母は貴方の無事を祈ります。」

おいーー！薊さんに通じちゃったよ。

「李文優様、命を大切にされてください。」

百合さんは紅さんの何だと思っているんでしょうか？

「絶対に負けられない戦いがあるっす！」

テレ朝の日本代表戦のＣＭみたいな台詞を言うなよ、光！

「王子様、こいつもカマキリみたいに最後は食われる？」

いやいや嵐さん、それは酷いだろう人食部族じゃないですから紅さんは。

あと、カマキリのメスがオスを交尾後に食うのは飼育化で野生ではまずあり得ないし。

「愛故に人は苦しむのか。」

日、なんだろう、思わせぶりな言い方しないでいいよ、痛々しいだけだから。

とりあえず何故か司君の言った適当な嘘を皆理解示しちゃうんだよ、いくらなんでもないだろ、あれは・・・。

しかも、みんな司へのコメントが恋人に会うというような内容でない物ばかりなのが。

確かに最近の紅さんの手紙は鬼気迫る物がありますが、そこまでではないでしょう。

「そんな皆さん大げさな、最近の手紙がちょっと怖いですが大したことは無いですよ。」

あらら?私の発言に対し皆が一斉に首をぶんぶん横に振っている、何でまた?

司君が懐から取り出した竹簡を私に見せてくる、なんでしょうか?

「ヒィィイーー!!!!!!」

まさか私が悲鳴をあげるとは。

ただ一言“会えないのならば”とだけ書いてある。

問題は血だよな、この色は・・・。

こうなったら仕方ない。

おい、紅さんヤバイだろ、なんでこんなことになっているんだよ!?

「今回問題になっている洛陽駐留大使引き継ぎの問題解決の為、

私は李文優軍師だけを先に一時帰郷させることを提案します。」

司君がエッ、と驚いた顔でこちらを見ている。

「「「「「意義無し！」」」」」

よし、皆がのった、これで皆助かる。

「はひっ！？」

司君がなんか固まっている、今がチャンスだ。

「皆、司を逃げられないように縛って！」

「た、た、保さーん、僕は死にたくなーい、死にたくない、助けて！！！」

死にたくないって、司君は何を言っているのでしょうか、ただ愛しい人に会うだけなのに。

「誰かこの男を連れ出せ！」

うん、半ば犯罪者扱いやね、これは流石に可哀想か、言ったの私ですが、

でもまあ、親である薊さんも何も云わなかったし問題無いでしょう。

とりあえず縄で縛られた司君を愛馬挟翼にくくりつけて出発させましたよ。

後日涼州から早馬で届けられた竹簡には、司君が真っ白に燃え尽きていたと報告が。

“幸せは犠牲なしに得ることはできないのか、時代は不幸なしに越えることは出来ないのか”
ジャイアントロボで草間博士の残した遺言が心にしみるね。

司君を失うことで得たこの平和を守り抜いていかないといけないと、私達は洛陽の空の下で心に誓うのだった・・・。

ちなみに、後日司君から届いた手紙には、仕事の報告ではなく、“覚えていろよ”とだけ血で書かれているのだった。

って、大丈夫なのか、大使の後任の件は・・・。

ちなみに、秘匿されていたそうですが紅さんだけでなく母上も私に会えないなら、
と鬼も逃げだしてしまいそうな鬼気迫る状態だったそうで。

第三十八話、忘れ物はお弁当？ハンカチ？皇帝の勅命？後任人事？（後書き）

洛陽編はとりあえずもうすぐ終わりそうです。

ただ今は洛陽へんの終わりよりも、今回の話の直後、
紅さんと死んだ目をしてやつれている司君の話を書きたいのですが。

問題はどう書くかが今の所最大の悩みであります。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

第三十九話、司君は平常運航（前書き）

今日は前回、第三十八話からの続きで、
涼州に向かって急ぐ司君の平常運航姿です。

今日も見事に駄文ですが、皆さんに少しでも喜んでいただけたら幸いです。

第三十九話、司君は平常運航

―司―

前回、保さんに縛られ挟翼に乗せられ涼州に送り帰されましたよ。
何度死ぬかと思いましたよ、普通に乗るのも大変な馬なのに、
私は縛られていてバランスとれない状態で全力で走られるんですから。

舌を噛み切ること四回、落馬すること数知れずですよ・・・・。
そのうち三回は落馬して運悪く脚でパッカーンと蹴っ飛ばされ。
これ死んじゃう奴ですよ、馬に蹴られたバカボンパパみたいなどころじゃないですよ。

挟翼は頭が良いですよ、私が落馬したと分かると私の頭を噛んで持ち上げ、
反動つけて首をグーンと思いっきり振る私は挟翼の背中にドサッと叩きつけられる。

すいません、縛られて手足の自由がきかない私を乗せてくれるのは優しいですよ、

ただ、頭噛まれるの痛いなんてもんじゃないんですが！！

しかも、頭噛んだまま持ち上げられるの半端でなく痛いんですが、インディアンが戦利品で相手の頭皮を剥ぐんじゃないんですから！？どんな拷問ですか。

更に、それで振り回されるって、殺されます、死の原因が愛馬の優しさですよ。

挟翼の噛む力があれば、私を縛った縄くらい簡単に咬み千切れるんですが。

ええ、愛馬の頭の良さに涙が出そうですよ、まったく！

って、鞍からずるずる落ちてしまいそうです、このままではまずいです。

グボォッ

グフッ、落馬して左後ろ足が鳩尾に入った、死んでしま・・・。

挟翼が戻ってきた、痛い、痛い、助けて頭を噛まないで！！

これがあとどれくらい続くんだ・・・。

函谷関にいた役人さんが縄切ってくれなかったら死んでましたよ、
繰り返しで。

役人さん達最初僕のこと気づかなかったって巨大馬の背中にずた袋
が乗っていたって。

気絶していた僕が「助けてくれ」と魘されなかったら気付かれなか
ったって、
函谷関の役人さん優しかったよ、あまりに僕の見た目が惨めだった
から。

僕は偉いんですよ！今の身なりは酷いですが涼州の軍師で！十常侍
と知り合いで！
神からの依頼を受けて外史を守ろうと頑張る守護者なんですよ！

うん、多分今その発言をしたら関所の人間が無礼者と斬りかかって
くるな、
いや、馬に蹴られ頭を強く打ったか？と心配されて、より優しい目
でみられる・・・。

うがぁああ～～、なんでなんで僕ばかりこんな辛い目にあうんだ。
それもこれも保さんのせいだあああああああ！！！！！！

なんか気分が陰々滅滅としてきましたよ、何でこんなに僕は不幸なんでしょうか？

はあ、落ち込んでいても仕方が無いのでとりあえず仕事ですし、涼州まで最低限の休憩で挟翼でとばして行きましょう、急がないと。

あらっ？涼州への道を急いでいるとそんな僕の進路を防ぐように三人組がいますね。

なんかこっちに話しかけてきますね。

「ようニーチャン、立派・・・・・・・・・・。」

バカラッバカラッバカラッ

なんか言っているみたいですがなんなんでしょうねえ？
こっちは飛ばしているんですから聞けるわけないじゃないですか。

それに今急いでいるんですから見知らぬ人間の相手なんか出来ません。

まあ僕の勘違いでただ単に「おはよう」とか挨拶したいだけなのかも？
念のため振り向いて確認してみましょう。

あらっ？振り返ってみると男達が必死の顔して追いかけていますね。

何でしょうか、はっ、まさか僕の正体が見破られたのか？

僕が伝説の放浪貼り絵画家で彼ら三人は「清せんせーーーーい」とこれはいけません、山下清なのにランニングシャツ姿で無いなんて知られたら。

まあ、本当の山下清はランニング姿で放浪なんかせず、画家は御洒落でないといけないとベレー帽姿だったようで。

って、ちょっと待った、僕はいつから　山下清になったのでしょうか？

違いますね、という事はあれは全く違う用件の人でしょうがなんでしょうか？

観察をしてみましょう、よく三里位追っ掛けていますよ、中国の一理は５００ｍで日本よりは短いとはいえ良く走ること。

人相が悪い、見た目が汚い、うん、賊だね、ついでに手に武器持っているし。

判断基準がおかしい？いや、まあ、人は見た目が大半ですから。

どうやら彼らは僕に難癖をつけようとしてみたいですね、面白い、保さんやら挟翼によってたまりにたまったこのストレスを発散させ

てやる。

いや、間違え、賊なんて不埒な輩は正義の力で成敗してやる！！！！

挟翼を立ち止まらさせて待っている、彼らの叫び声が聞こえる。

「待てーー！！！！」

「待っちやがれーーーー！！！！」

「止まってくださーーい！」

賊の癖になんか丁寧な奴がいるぞ、引き離してマラソンさせすぎたか？

僕は優しいのできちん止まって待ってあげましたよ。

「待ちやがれ・・・ゼーゼー。」

肩で息していますねえ、可哀想ですねえ。

「あばよ、とっつあーん！」

ハイヨー、挟翼イケー！

本当は「ハイヨーシルバー」といきたいが、今の子供には分からな

いですね。

これでまた後ろの馬鹿共と距離が離れたらまた立ち止まってと。

「待てーー！！」

「待ちやがれーーーー！」

追っ掛けて来るなら、台詞が違うだろ、待ちやがれではないだろ、そこは「まてーールパーーーーン！」か「ルパーーーン逮捕する――！」だろ。

空気の読めない奴らだ、だから賊なんかに身を落とすんだよ。

ピタリと立ち止まって、待って近づいてきたら、またも。

「あばよ、とっつあーん！」

ハイヨー、イケー挟翼！

さあ、彼らは何回まで耐えられるか実験してみましょう。

彼らが諦めそうになったら修造と化して諦めるなよと励ましましょう。

「諦めんなよ！諦めんなよ、お前！！どうしてそこでやめるんだ、そこで！！もう少し頑張ってみろよ！」

よし、彼らも元気に追っ掛けて来るでしょう。

一刻後

「もっと熱くなれよ・・・！！熱い血燃やしてけよ・・・！！！人間熱くなったときがホントの自分に出会えるんだ！」

あらっ？修造になっての応援しているが動きませんねえ、１５回目になると倒れてピクリとも動かないですね、大丈夫でしょうか、死んだ？

近寄ってみましょう。

あっ、生きています、生きています。

「おね・・・まっ・・・」

「アニキな・・・っしなん・・・。」

「もう動・・・・・・。」

何を言っているのか全く分からないですね、困ったことに。

とりあえず確認しましょう。

「お前達は賊か？」

「そ・・う・・・・だっ。」

たった三文字そうだと答えるのに、なんだこの長さは。

これじゃあスリランカの首都なんか言わせたら何年かかってしまうやら。

とりあえず彼ら賊という人間失格な存在になってしまった人には説教です。

「撃っていいのは撃たれる覚悟があるものだけだ、未来の偉い人は言う、
お前さん達、人から脅しとるからには脅し取られる覚悟があるということだな。」

コードギアスでルルーシュが言った名言を使わせてもらいましょう。

「アニキ、未来の偉い人って意味が分からないぞ。」

デブがルルーシュの名言を分からないなんて。

大体アニキって何だ兄弟じゃないだろ、ワセリン塗ってテカテカでないし。

「お前が馬鹿だから分からないだけだ、コードギアスを見て勉強し直せ糞盗賊が。」

僕がとりあえず何の事か教えてあげました、なんて優しい僕。

「なんだと・・・」

いまだに息が上がったままだからか倒れたままで立ち上がれない名も無き盗賊達、

見た目からヒゲ、チビ、デブとでも呼びますか、サヨウナラそんな三人。

とりあえず暴れられたら嫌なんで倒れている三人に対して、

一人ずつマウントポジションからの滅多打ちを、逃げられなくしてやりました。

「ぐふっ。」

「こ、こ、殺さないで・・・。」

「許してください」

なんでこんな事言うんでしょうかねえ？

「馬鹿野郎、これお前ら人間にもなれない屑共への愛の鞭だ、我慢しやがれ！！！」

僕ってちょっと残酷だな、でも、賊を殺さないなんて優しいなあ、多分、優しさがほとんどですよ、優しさ５０％なバファリン越えですよ。

「安心しろ、僕は大陸一の優しさを誇る人間だから・・・ニヤリ。」

ついつい邪悪な笑みを浮かべてしまいますね、賊共が脅えているようで。

「「「ヒィー！」」」

男が悲鳴をあげるな情けない、悲鳴をあげていいのは、病んできている彼女から血染めの手紙を送りつけられた時だけです。

本当にどうしよう？涼州に戻って紅さんに会った瞬間に「貴方を殺して私も死ぬ」なんて言われて刺身包丁で肝臓をエグられたりしたらどうしよう。

うん、現実逃避はいけない、まずは賊退治をしよう、僕は正義の味

方だから。

「なに殺しはしないよ、君達の荷物と服は全部押収して燃やして、それで君達は縄で縛って蜂の巣がある木にぶら下げ最後に蜂の巣を壊すと。」

アナフィラキシーショック起こさない限りは死なないですし、優しいなあ僕。

「鬼！悪魔！」

「人でなし！」

「お願いしますなんでもするから許してください！」

おいおい、賊だろ、なんで賊がそんな情けない事を言っているんだ。

もし現代だったら夜のジャングルで全身に蜜を塗って投光器の光を当てるよ！？

全身に虫がたかって体中を食いついたりする結構な拷問を計画しましたよ。

それかダークナイトのジョーカーみたいに殺しあいさせて、生き残った人間だけを許してあげるとかしましたよ。

なんて酷い話でしょうか、僕の溢れんばかりの優しさを理解されないなんて。

「お前さん等、僕は優しいんだぞ「うそつけ！」まあ、否定する前に話を聞け、
本来ならば此処から一番近い長安まで連れて行き役人に引き渡す、そうなったらお前さん達賊はどうなるか分かるだろ？」
優しく諭してあげないといけませんね。

「殺される」

「斬首」

「処刑される」

三人ともよく分かっているじゃないですか。

「それに僕は急いでいる、そうなると君たちを長安まで連れていく時間が、
仕方ないから足を縄で縛って長安まで肉が裂け骨がむき出しになろうが引き摺るしかない。」

「「「斬首より酷い！」」」

いい年した大人が三人もいながら情けない、怯えすぎです！

確か、此処からならば長安の街まであと三十里ていどのきょりですから。

ちょっと紅葉おろしの親戚になるだけくらいで。

「だから僕は優しいから選択肢を増やしてあげたんですよ、
長安まで三十里程君達を引き摺って運良く生きていたら斬首されるか？
裸で木にぶら下げられ蜂に刺されるだけか？どちらでもいいように。」

どうです、僕の優しさがよく分かるでしょう。

「いや、見逃してくれたら・・・。」

「許してください。」

「殺されない代わりに死よりも辛い拷問なんて。」

何を言っているんでしょうか、彼等は？何処が拷問ですか単なる罰ですよ、
私のストレス解消という正義の実行を見逃して無かったことにしろとは。

「本当は勇午のパキスタン編であった奴をやりたかったんだぞ、
お前さん等を上半身裸にして灼熱の太陽で熱せられた岩に縛り付けられて背中を焼かれて、
しかも、お前さん達の耳に蜜をぬっておくから耳からアリが入り最後は脳を食われて死ぬと。」

「悪魔がいる、人の姿をした悪魔がいる！！！」

はあ、なんか人の事を無茶苦茶言ってますね話がこのままでは進みません、
しょうがない、僕の正義を賊共に実行しましょう。

「ウギャァァアアー！！」

「痛い、痛い、助けて蜂が、蜂が・・・。」

「いっそ殺してくれー！」

おおっ、三人とも涙流して僕に感謝しているみたいですね。

よし、良いことを沢山したし、早く涼州に向かいましょう。

じゃあ、最後に皆に別れの挨拶をしましょう。

「まったく僕は忙しいんですよ、急いでいる途中だというのに、
文句があるなら家まで来いや！喧嘩ならいつでも買ってやるからな！
僕は洛陽の曹操だ！逃げも隠れもしないからいつでもかかってこいや！！」

よし、これでよしと、優しいなあ、うん、僕って実に優しい。

曹操なんか何もしていないのに賊退治をしただけでなく、賊をただ処刑するのではなく改心の余地を与えるなんて、名声上がりますよ。

賊も殺されないで済んだと曹操の情け深さに感謝するでしょう。

こういう人の見ていないところで頑張るのを縁の下の力持ちというんだな。

急いで涼州に向かわないと、紅さんに会いたいようで会いたくない、そういう点では急いで向かいたくないという点も、はあ、大変ですよ。

後日、全身蜂に刺され死に掛けた裸の三人が見付かり、鬼より怖い拷問魔曹操という呼び名が囁かれるようになったとか。

第三十九話、司君は平常運航（後書き）

洛陽編はもうすぐ終わると言いましたが、
司君の暴走させたりで終わるのでしょうか？

益州編に無事入るのでしょうか、この話は。

皆さんのご意見ご感想お待ちしております。

第四十話、ヘッドハンティングの旅に行ってみよう（前書き）

今回は笑いが少ないです。

新たに恋姫キャラを出す話にしてみました。

第四十話、ヘッドハンティングの旅に行ってみよう

―保―

「暇です、実に暇です！司君が帰ってくるまで暇です！！」

叫び出したくなるくらい暇なんです。

「暇なのは分かりますがわざわざ叫ばないでもよろしいのではないでしょうか？」

百合さん言っている事は分かりますが、暇で仕方が無いんです。

「王子様近場に旅行でも行く？でも、そんなこと無理か。」

嵐さんナイス！！そうだ！暇なうちに休暇をもらいましょう、軽く旅に出ましょう。

「とはいえ此処一カ月休みなく働いてましたし、休まれてはいかがでしょうか？」

桜花さんに言われて気づいたが、確かに休みないですねえ、まあ朝から晩まで仕事漬けというわけではないから対して辛くないんですが。

よし、休みを貰って司君から聞いたあの部屋を使って移動して旅行しましょう、

人材確保の旅、第一段として誰かに会いに行ってみましょう。

誰にあったら面白いか？史実で董卓とやりあった人間が面白いか？

そうなると孫堅か。

「じゃあ、すいません皆さん、明日、明後日と二日間お休みをいただきます。」

皆にお休みをいただくことをわびておきましょう。

「謝らなくていいっす、孟高は休み無しで頑張っていたっす。」

光ありがとう、でも、そんなに私が真面目に仕事しているわけではないんだけどね。

「休める時に休むは将の仕事。」

日に言われたが、確かに休め休め言っている私が休んでないのも問題だな。

「保さん久しぶりの休暇を楽しんでください」

薊さんにも休暇の後押しされましたし、問題無いですね。

「嵐さん、二日間ほど護衛の任を解きます、ちょっと色々やりたい事があるので。」

嵐さんに着いてこられるとちょっとまずいので、仕方ないですが。

「えっ！！？？」

あらっ、まあ、常に横にいてくれとあの日閨で言ったのは私ですからねえ。

「ごめんなさい、でも、ほんの二日間ですし、まあ今晩は一緒にいますので。」

ごまかす為に、今日の夜は嵐さんを甘やかしましょう。

「王子様がそういうならば、分かったよ。」

嵐さん本当にごめんなさい、いずれ話しますが、まだ今は早いので。

では夜になるまでの間に司君の部屋に保管されている太平要術の書で居場所等確認しましょう。

「孫堅、孫堅、孫堅のデータは何処かいなと。」

パラパラ

太平要術の書をめくってみると、あったあった、孫堅のデータが。

居場所は会稽で県丞をしていると、まだ建業とかではなく、太守になる前ですね。

それにしましても、孫堅の個人データも見れるので見てみましたが、なんですか、このパワプロみたいなふざけた表示形式は。

統率９５武力９２知力７０政治７１魅力９３

数値が反則的な高さをしていますねえ、是非欲しい武将です。
特筆すべき特徴はと“ウォーモンガー”“気分屋”“特攻癖”“野生の感”“飲酒〇”
色々な能力が多数ありますね。

特攻癖とウォーモンガーは怖いですねえ、暴走が有り得そうで、
とはいえ、これほどの能力は見事としかいいようがないです。

自分の能力は見ない方がいいでしょうから司君のを見てみましょう。

パラパラパラ、パタン

太平要術の書を閉じましたよ、見なかった事にしよう。

数値の欄が全てお花やら髑髏の絵になっている、バグっているのか？限界突破しているからか？

あと何だ？“嘘つき”“トラブルメーカー”“暴君”“倫理観×”“ドS”って危険なのは、
暴君はあかんだろ、いくらなんでも、出世させてもナンバー2までにしないと怖い。

“天才経営者”“威圧感”とか良い点もあるな、“性豪”はまあなんと言えばよいか。

とりあえず明日から二日間ほど会稽に行ってみましょう、

じゃあまずはその準備の為に宮中に行って来てと。
それが終わったら今晩は嵐さんと二人で夕食を共にしたりしますか。

―黄蓋―

会稽城の錬兵場

「黄蓋将軍、孫堅様がお呼びのようです。」

訓練中の兵に声を掛けられ振り返ってみると愉快そうな顔した堅殿が立っている。

「祭、今日も頑張っているはねー、今、時間良いかしら?」

いつもならこんな事聞いてこないで、話を勝手に進めて行くのに。

「どうしましたのじゃ堅殿、わざわざ錬兵場まで来ないでも。」

いつもの堅殿ならば練兵などめんどくさーいとか言って練兵場など近づかないのじゃが。

「面白い手紙が来たんだけど、祭が興味持ちそうだなと思ってね。」

こういう言い方をしているが明らかに堅殿自信が興味あるのを立場があるから、
儂のせいにしようとしているんじゃろうな。

「どんな手紙が来たんじゃ堅殿？」

堅殿はよほど興味があるんじゃろうな、ニコニコしながら懐に抱えていた竹簡を渡してくる。

「さっき皇甫嵩将軍の紹介状を持った涼州太守代理洛陽駐在武官っていう人が来てね、
その人が持ってきた竹簡を見たら驚いてね。」

なんで涼州の太守代理が会稽の堅殿に手紙を送ってくるんじゃ？
それにしても中を読んでみたが、なんじゃこの手紙は。

“美味しいお酒と食事を楽しみながら色々とお話をしませんか？”

なんじゃろうか、この砕けた文章の漠然とした手紙は？

書いてある場所は会稽の高級料理店での食事の誘いとは。

五胡対策に優れ経済が発展している涼州が一体堅殿に何の用なのじゃ？

「何のためか分からないし、身元の確認も取れないし、堅殿断るべきじゃろ。」

明らかに堅殿が不満そうな顔している、こういう時の堅殿には言っても聞かんじゃろうな。

「えーー、祭、折角面白そうな事が近付いてきたのに、祭は行かないのー!?」

堅殿の発言に違和感を感じるのじゃが。

「堅殿、もしかして最初から行く気で儂が同行するか聞きにきたんじゃろうか?」

「だから祭に聞いたんじゃないの、祭は行かないの?って。」

やっぱりか堅殿、儂も堅殿もそんな胡散臭い人間に会う暇なんか無いはずじゃろ。

「そんな暇なんかないじゃろ堅殿にはやる事があるじゃろ。」

「ぶーぶー美味しいお酒って書いてあるし、祭も一緒に飲みに行こうよー。」

はあ、堅殿は会稽の県丞と要職にいると理解しておらんのじゃろうか?

はあっ、諦めて夜に堅殿に着きあうしかないんじゃろうな。

一保一

二人で来るという事を聞いたので、会稽で一番高い料理店の個室を用意して待つことに。

どうやら来たようですね、店員に案内されて美女二人組が部屋に入ってきましたよ。

「孫堅文台様、本日はお忙しい中時間を割いて頂きありがとうございました、
また、事前の約束も無い急なお誘いという非礼を深くお詫びさせていただきます、
申し遅れました、私、涼州太守代理で洛陽駐留大使館の董擢孟高ともうします。」

思い立ったが吉日とは言いますが、私もやる事が無茶と言いますか司君並みに強引な手段を取るんですから、常識人と自称しているが無理ですねこれでは。

とりあえず急な呼び出しのお詫びをしましょう。

「あらいいわよ、面白そうだったし、それに皇甫嵩将軍の紹介状を持ってこられたんだし、
洛陽からわざわざお酒の誘いに此処まで来るなんて物好きなのね。」

怒っているようではないですね、怒るではなく何があるのか楽しみで仕方無いんだろう。

「失礼じゃが太守代理とかいっている割にはやけに若いようじゃがお主は。」

孫堅さんのお供でやってきた銀髪の女性に歳の事聞かれましたか、まあ、私や司君が特殊で絶対にあり得ない事ですからねえ。

「ええ、この間１５歳になったばかりです、とは言いましても、ここ数年ずっと母である涼州太守董君雅の元で政にかかわっておりますもので。」

「「えっ！！１５歳（じゃと！？）なの！？」」

お二人とも相当驚かれているようで、うん、新鮮な反応だね、今や涼州では当たり前の事ですからねえ、でもそれがどれだけ異常なことか。

「す、凄い、若いのに優秀なのね。」

孫堅さんはまだ驚きがおさまっていないようで。

「いえいえ、若輩者が涼州の諸先輩方を必死で真似しているだけです。」

とりあえずは謙遜しておきましょう。

「謙遜しなくていいわよ、それよりも私を知っているみたいだけど名乗らないとね、
私が孫堅、字は文台、堅苦しいのは嫌いだからこの口調で話させてもらうわね。」

どうやら、私の年齢の驚きから取り戻したようですね。

それにしても軽い口調が軽いとかでなく全体的雰囲気からして軽い、

これがあの江東の虎か。

なんでしょうかそこはかとなく感じてしまうのが、
私や司と同じタイプ、かなりフリーダムな要素を持つ人間の匂いがする。

いやまあ、私や司君の二人みたいに生きていて面白ければ、
この世はどうなってもいいなんてフリーダムさはないでしょうが。

ちなみに事前に調べた資料だと２８歳、ただ、見た目は二十歳くらいか、
地面に着くのでは?は大袈裟にしても腰より下まで伸びた桃色のストレート。

臙脂色の胸元がバックリと開いた、深ーいスリットの入ったチャイナドレス、
日に焼けた褐色の肌を惜しげもなく晒して、そして素敵な巨乳が。

巨乳フェチではございませんが、これは大変ご立派な人類の宝でございます。

これで今現在は孫策と孫権の二人の子持ちだとは参りましたとしか言えない、
歴史だと孫尚香とか、あと何人か子供がいたようだが。

「ほら、祭も名乗りなさいよ。」

一緒に来た方は祭さんか、真名であるから気をつけないと、いった

い誰なのだろうか？

銀髪ロン毛を後ろで束ねた爆乳のお姉さん、軍師ではなく武人らしいが一体誰だ、
孫堅に付き従っている武人となるとだれだろうか？

年齢は孫堅さんよりも年下で２５歳くらいかな？

とりあえず言えるのは孫堅殿に続いてこれまた眼福としか言えないおっぱいが、
おっぱい星人ではございませんが、ありがとうございましたとお礼を言いたくなります。

「黄蓋じゃ、字は公覆じゃ。」

ほほお、苦肉の策のあの老将黄蓋がこんなに若い魅力的な女性だとは、
この時代でこの若さなら赤壁の頃は史実だと爺さんだが美熟女になってそうだな。

苦肉の策で美女が棒打ちにされると、ヤバイちょっとそそる物があるね。

「黄蓋殿ですか御高名はかねがね伺っております、兵卒や民に慕われる名将と。」

三国志での評価ですが、孫堅さんよりも威厳とか真面目さがあるな、
まあ孫堅さんが自由すぎるだけで、孫堅さんみたいな人が上の方が

いいんでしょうが。

ただ、孫堅さんが上だと、黄蓋さんとか皆振り回されていそうだが。

「あら良かったじゃない祭、兵卒や民にも慕われる名将だなんて。」

孫堅さんがニヤニヤしながら黄蓋さんを見ている、
面白いおもちゃを見つけたという感じで、私や司君がたまに見せる
邪悪な笑みですね。

「堅殿、客人の前でからかうでない、儂が名将ってお主もそんなも
ちあげるんじゃない。」

黄蓋さん凄い照れようで、冷静にしていたが慌てている所が可愛ら
しいなあ。

「いやいや、御謙遜を洛陽で話題ですから孫堅殿、黄蓋殿お二方の
実力は。」

三国志で相当活躍された名将であるのは間違いないですし。

「だからお主もからかうでない！！」

あら、怒られちゃいましたよ、可愛いなあ、美人が照れて怒る姿っ
て。

「ふふ、祭も照れちゃって、って、立ち話もなんだし座ってお酒を
たのしみましょ？」

あら、もっと黄蓋さんをいじってみたかったんですが、孫堅殿に言われたように座りましょう。

「これ、堅殿、なんで堅殿が勝手に席に着いたり話を進めておるんじゃ？」

たしかにまあそうですねえ、とはいえ大して気にはしていませんが。

「ぶーぶー、祭ったら堅いんだから貴方もそんなの気にしないでしょ！？」

いやいや、確かに気にはしませんが、私にいきなり振られても困るのですが。

まあ、お気楽に答えてみましょうか。

「孫堅様お気遣いありがとうございます、私も気楽に出来るのでありがたいのですが、
ただ、私がよくてもいつものように話をしてしまったら黄蓋様に睨まれてしまいますよ。」

なんだかんだ言いながらも気楽にいきますよという感じで答えてみましょう。

「ぶーぶー、貴方も口調が堅いわよ、もっと家で話をするみたいに話して。」

ぶーぶーって、三十歳近い子持ちの口調じゃないよ。

「今、なんか歳の事かな？なんか失礼な事思わなかった？」

こええーー、一瞬だがかなりの強烈な殺気飛ばしてきたぞ、
流石野生の感を持っている人間だけあって鋭いなあ。

「いえいえ、そのような事は何も。」

ちょっとビビったし、否定しておきましょう。

「堅殿、客人に殺気飛ばして怯えさせてどうする。」

さすがに黄蓋さんが止めてくれましたよ、あの殺気は普通の人間ならチビりますよ。

「あら祭、この人これくらいの殺気なんてなんともないでしょ、
おとなしい振りしているけどこの人の武は相当やるわよ。」

ふうう、江東の虎には隠し事は一切できませんねえ、
実力を分からないようにかなりだらけさせているんですが。

とはいえ、いらぬ揉め事を起こしたくないから隠していたんですが。

「堅殿、そうなのか？」

黄蓋さんには分かり辛いようで、まあ、孫堅さんの持つ野生の感が
半端で無いんでしょうが。

「いえいえ、私の武など名将と呼ばれるお二人とは比べ物にはなりませんよ。」

うん、これはまずいですね、孫堅殿の発言で私を警戒されてしまいましたよ。

「・・・・・。」

孫堅さんがこっちをじーっと見ている、隠し事は通じないですね。

「ふう、まいりましたねえ、要らぬ警戒をされないように隠していたんですが。」

しょうがない正直にばらしましょうか。

「単なる童かと思ったら、相当人を食った御仁の様じゃのうお主は。」

孫堅さんはニコニコしているが、黄蓋さんは相当此方を警戒しているようで。

「当初の予定がだいぶ変わってしまいましたし、仕方ないですね、では、回りくどいのもなんですし、本日の理由の説明しますね。」

ストレートに話をしましょう、隠し事をしてももう手遅れですし、今回は粉をかけに来た程度ですが。

「あら、それは悪い事をしたわね、でも、本題があるなら早く教えてほしいわね。」

正直に話をしましょう、この二人を何とか手に入れたいですし。

「私の君主である涼州太守である董君雅が今度益州の州牧に着く事になり、
その際益州内の統治で協力してくれる、郡太守候補を探しておりまして。」

今回の目的を話してみましょう、まあ江東の虎が益州にもし来てくれたならば、
呼び名が何になるんでしょうねえ、蜀の猛虎とかになるんでしょうか？

「凄くうれしいお誘いね、私なんかが太守だなんて、でも涼州太守の董君雅様が
益州牧なんて話聞いたことないし、太守なんてあなたが勝手に決められないでしょ。」

孫堅殿の口調、目付きが変わりましたね、江東の虎と呼ばれる姿を見れましたよ。

フフフ、なるほどなるほど、これは虎と呼ばれるだけはありますよ。
喋っている内容は普通ですがこちらを明らかに疑った目で見ておりますねえ。

「話があり得ないくらいおいしい話じゃな、太守代理如きがどうにかできる物ではあるまい。」

孫堅さんや黄蓋さんの言う事が最もですね、単なるガキがこんな話持ってきて、
しかも、それを聞いて信じる人間がいたらその人間はどれだけ脳味噌がお花畑でしょうか。

「フフフ、まあ、当たり前でしょうねえ、信じてもらわなくても結構ですが、
私ども涼州勢には色々と洛陽に伝手がありまして。」

今の私は不敵な笑みをしているんでしょうねえ。

司君に内緒でこんな事やっているんですから、また司君に文句を言われそうですが。

「お主急に口調が変わるとはの、それにしても、お主がいう伝手というのは、
紹介状の主である皇甫嵩将軍か、将軍が幾ら偉くてもそんな事は無理じゃろ。」

黄蓋さん甘いですよ、そんなわけないじゃないですか。

パサッ

懐から取り出した書類を二人の前に投げる、失礼にも程があるでしょうが、
今のお二人は大して気にはしないでしょうが。

「何かしらこれは？って、祭、これ見て。」

私の出した書類をみて孫堅殿が目を丸くしている、
さすがに私がこんな物を持っているとは思いもしなかったでしょう。

「堅殿どうしたんじゃ、そんな反応をして。」

黄蓋さんもこれを読んだら驚かれるでしょうねえ。

「「・・・・・・・・・。」」

完全に黙ってしまいましたね。

「お分かりいただけましたでしょうか、特別な伝手があると言ったのが。」

前に司君と話をしていた書類を見せたんですから。

母上が益州牧になる際に益州の太守や県令の罷免、そして代理職任命許可
という権限の一時的移乗なんてあり得ない凄まじい勅命なんですから。

「堅殿、儂は初めて見るんじゃが、これは本物の勅命じゃろうか？」

黄蓋さんの動揺の仕方は半端じゃないですね。

「祭、私だって直接見るのははじめてよ、こんな書簡を見るなんて。」

先程までの孫堅さんとは全く違う反応なのが面白いですねえ。

普通ではこんな書類を太守息子が、いや、三公クラスでも手に入るでしょうかねえ?
昨日宮中に行った際に何進大将軍に頼んで用意してもらった特別な書類ですし。

「お二人にはなかなか信じてもらえないでしょうがこれは正真正銘の本物ですよ、
まあ、皇帝陛下の勅命を懐に入れて普通に持ち歩いているなんて信じられないでしょうが。」

二人に見せた書簡を懐におさめて話を続けましょうか。

「まあ、お二人には色々気になる事もあるでしょうし、とりあえず此処は酒家ですので、
私がお誘いさせていただきましたしお酒と食事を楽しみましょう、
孫堅殿、黄蓋殿。」

さあ夜はまだまだ始まったばかりですよ。

第四十話、ヘッドハンティングの旅に行ってみよう（後書き）

新しく恋姫キャラを出したいのでご都合主義ですが一気に話を進めてみました。

孫策達を出すかはまだ悩み中でございますが、
ちなみにまだ孫尚香は産まれていないという設定にしてみました。

とりあえず孫堅はまんま雪蓮という感じにしてみました。

皆さんのご意見、ご感想お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5697x/

恋姫世界で二人旅

2011年11月22日02時01分発行